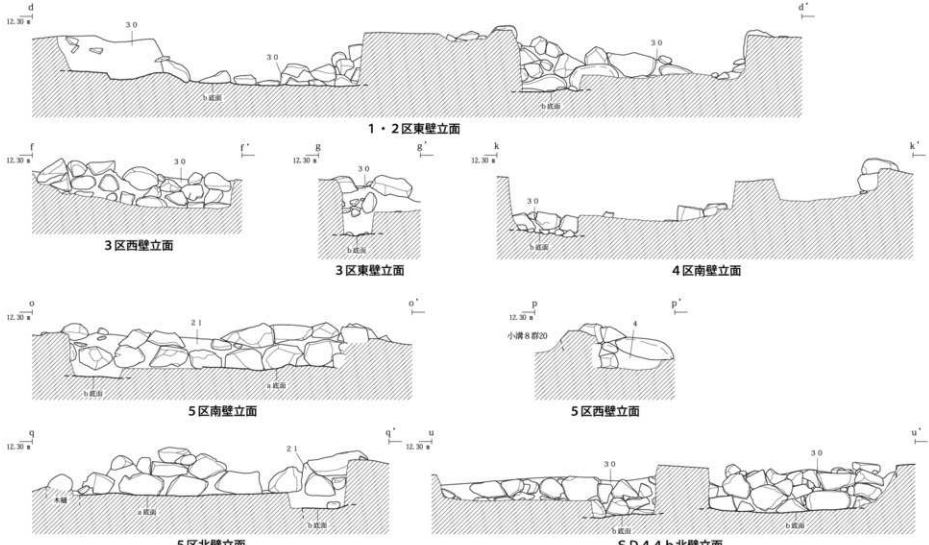
第73図　４４号溝跡（３）

れた張出部西辺の溝底面には石敷きが見られないことから、改修に伴う木樋の埋設においては、あらためて礫を敷く必要性は無かったと推測される。これにより建物西側は溝が暗渠状となることで平坦地となったことがうかがえる。

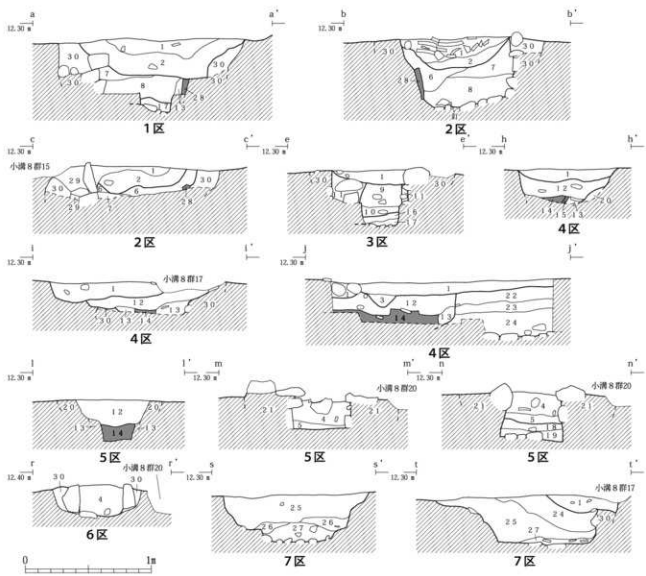
木樋は１－３区にかけて後に抜き取られており、これに対し４－５区では腐食していたが、樋は残された状態であった。この部分からみた木樋幅は0.2－0.3m程度で、木樋痕跡を掘り込んだ５区では、木樋の高さは0.12mで、上面中央が凹んでおり、木樋自体が潰れ変形している可能性がある。木樋は南北部分では東壁際に寄り、東西部分ではほぼ中央に配置されており、南端部では脇に大型の礫を沿わせることで固定が図られている。また４区では木樋痕跡の縁に沿って鉄釘が複数出土しており、木樋は釘を使用し板を組み合わせたものであることがわかる。底面標高をみると、１区の抜取痕底面で11.67－11.70m、３区が11.74m、５区の木樋痕跡底面は11.77mであり、構築段階の溝同様に南側が高いことで、内部の排水は北側に流れたと推測される。さらに４区では木樋を繋いだ継手痕跡を確認した。木樋痕跡は３区から４区への溝の折れに沿い、西側に直角に曲げられており、接続部より東にもＴ字型に30cm程度張り出すことから、この部分では東西の樋自体が継手となり、向きを変えていたと考えられる。

改修により新たに造られた５区の東西部分では、木樋が改修により埋設されることは無く、南北両壁面には主に径10－50cmの角礫による石組みが２段以上の40cm程度が残存している。底面にはブロック土を敷いており、東側に続く南辺溝跡と同様の構造を見せるが、底面に角礫などによる敷石はみられない。この部分は改修によるものであることから、当初から開口した溝ではなく、木樋の埋設を想定した上での簡易な構造であったとみられる。底面上の堆積土は２層に分かれ、下位の19層は５区東端では構築時の石敷きを覆うことから、これは貼り底のようなもの



第74図　44号溝跡（4）

遺　構	層 位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD44a'	4	10YR4/4　褐色	シルト	径20cm以内の角礫を含む	堆積土
SD44a	21	2.5Y4/4　オリーブ褐色	シルト	径1cm以内のにぶい黄褐色・径1cm以内の明黄褐色シルトブロックを含む	掘り方埋土
SD44b	30	10YR4/4　褐色	シルト	径3cm以内の黄褐色・にぶい黄褐色シルトブロックを含む 上面に径5～30cm以内の円・角礫による石敷きあり	掘り方埋土



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD44（廃城後）	1	10YR4/4　褐色	シルト	径20cm以内の円・角礫を含む	堆積土
	2	10YR4/4　褐色	シルト	径5cm以内のにぶい黄褐色・褐色・暗褐色・オリーブ褐色シルトブロックを含む	
	3	10YR4/4　褐色	シルト	径3cm以内の円礫を含む	
SD44a'	4	10YR4/4　褐色	シルト	径20cm以内の角礫を含む	堆積土
	5	2.5Y4/3　オリーブ褐色	シルト	径1cm以内の炭化物を微量含む	礎抜取痕跡
	6	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	オリーブ褐色砂質シルトブロック・にぶい黄橙色粘土質シルトブロックを含む	
	7	2.5Y4/6　オリーブ褐色	粘土質シルト	径1cm以内の炭化物を微量含む	
	8	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質シルト	径3cm以内の黄褐色シルトブロック、径1cm以内の炭化物を微量含む	
	9	2.5Y4/2　暗灰黄色	シルト	径20cm以内の円礫を含む	
	10	2.5Y4/2　暗灰黄色	粘土質シルト	径1cm以内の黄褐色シルトブロックを含む	
SD44a	11	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径20cm以内の円・角礫を含む	上面理設土
	12	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径1cm以内の暗褐色シルトブロック、径20cm以内の円礫を含む	
	13	2.5Y4/2　暗灰黄色	粘土質シルト	径5cm以内のオリーブ褐色シルトブロックを含む	側面理設土
	14	2.5Y4/2　暗灰黄色	シルト	径5cm以内の円礫、炭化物を含む	木礎痕跡
	15	2.5Y4/2　暗灰黄色	粘土質シルト	径3cm以内の円礫を少量含む	
	16	2.5Y4/3　オリーブ褐色	シルト		下面理設土
	17	2.5Y4/4　オリーブ褐色	粘土質シルト	径5cm以内の円礫を含む	
	18	10YR5/6　黄褐色	シルト	オリーブ褐色シルトブロックを含む	貼り底
	19	10YR4/4　褐色	シルト	径1cm以内の黄褐色シルトブロックを含む	
	20	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト	径1cm以内の黄褐色シルトブロックを含む	掘り方埋土
	21	2.5Y4/4　オリーブ褐色	シルト	径1cm以内のにぶい黄褐色・径1cm以内の明黄褐色シルトブロックを含む	
SD44b	22	10YR4/4　褐色	シルト	径10cm以内の黄褐色シルトブロックを含む	埋戻し土
	23	2.5Y4/4　オリーブ褐色	シルト	径1cm以内の炭化物を微量含む	
	24	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径1cm以内の炭化物を微量含む	
	25	10YR2/3　黒褐色	シルト	褐色・暗褐色シルトブロックを含む	側石抜取痕跡
	26	10YR4/4　褐色	シルト	暗褐色シルトブロックを少量含む	
	27	2.5Y5/3　オリーブ褐色	砂質シルト	褐色シルトブロック、径1cm以内の炭化物を微量含む	堆積土
	28	10YR4/2　灰黄褐色	砂質シルト	径1cm以内の炭化物を微量含む	側板痕跡
	29	10YR4/4　褐色	シルト	径3cm以内の褐色粘土質シルトブロックを含む	掘り方埋土
	30	10YR4/4　褐色	シルト	径3cm以内の黄褐色・にぶい黄褐色シルトブロックを含む 上面に径5～30cm以内の円・角礫による石敷きあり	

第75図　４４号溝跡（５）

と考えられる。掘り方幅は1.20m、溝幅は0.34m程度である。深さは0.21ー0.24m、底面標高は11.86ー11.9mであり、5区西端の木樋痕跡底面の11.77mの底面より高くなっている。また5区の分岐部より東側の6区との間では19層は確認できず、構築段階の溝をそのまま使用していたと考えられる。

4区と5区の間については埋設した木樋が抜き取られず、また改修当初から石組が構築されなかったとみられる部分である。5区での一部の掘込みから、木樋下部に石敷きは認められず、埋土上に直置きされたとみられる。同じく改修により構築された5区東西部分に石組みが見られることは、南辺側の溝は全体を通し暗渠とはされず、建物の西側のみが暗渠とされたと考えられ、5区南辺部分の溝底面にみられる埋土は樋に水を流すための嵩上げ作業と理解できる。またこの部分に使用された側石は、7区などを埋める際に抜取った石材と推測される。

木樋は何らかの理由により後に抜取られるが、1区の木樋抜取痕底面の深さは0.46ー0.49m、標高は11.67ー11.70mであり、北側で接続するSD6の嵩上げした改修後の底面標高11.86mよりも低い。これは南側の5区よりも高いことから、SD6のa段階とSD44のa段階には時期差が存在する可能性がある。また1・2区では木樋を抜取った後に4ー6層により埋め戻されており、廃城後に新たな溝を造るまでの間に何らかの改変があった可能性がある。このことから廃城後の溝構築に伴う削平により断定はできないが、SD44a 段階と廃城後の段階の間に、SD6aに対応するSD44a´段階が想定される。

廃城後に構築された溝は、これまでの溝位置を踏襲した主屋西・南辺と4区で断片的に確認している。溝跡の構造は他の同期の溝跡同様に壁材を伴わない素掘りによるもので、西壁側の掘り方埋土を掘り込むことで木板の上部を壊し、また一部で東壁側石組みの上部を抜き取ることで幅広の溝跡となっている。断面形状は上半部が大きく開き、底面はほぼ平坦である。溝幅は0.54ー1.42mで、深さは0.07ー0.32m、底面標高は1区が11.86m、2区が11.93m、3区が12.0m、4区が11.95ー12.04mで、以前の溝同様に南側が高くなり、北側への水流が想定される。当初は以前の溝部分全体を改修したと推定されるが、掘込みが浅かった部分は後世の削平により失われたものと考えられる。

出土遺物　出土遺物の大半は廃城後の溝跡堆積土からのものであるほか、中には構築段階の底面石敷き上や礎間からの出土もある。遺物は軒丸瓦（F11・13）、丸瓦（F27）、平瓦（G30ー32）、刻印平瓦、熨斗瓦（H21ー24）、輪違い（H48ー52）、面戸瓦、丸瓦か輪違い、桟瓦、土師器、陶器（I18）、土師質土器の皿（X23・24）、焼塩壺、鉄釘（N145・180・184・189・190・195・199・208・209・211・221ー223・229・232）、その他の鉄製品（N253）、土製品（P2）、木片が出土している。P2は取瓶か坩場とみられる土製品で、1区の木樋抜取痕跡の底面付近から出土している。入隅部にある構築段階の溝底面やその埋め戻し土からは、丸瓦、平瓦、熨斗瓦（H20）、輪違い、丸瓦か輪違い、土師器、陶器（I15・16）、土師質土器の皿、鉄釘、その他鉄製品（N253）が出土している。瓦の重量比は、SD44全体では平瓦45%、次いで熨斗瓦27%、丸瓦16%であり、このうち入隅部のみでは熨斗瓦60%、丸瓦20%、平瓦18%となり、全体とは傾向が異なっている。

[その他の施設]

SB7に伴うその他の施設としては、建物南側張出部の東壁際に桶状遺構を確認している。

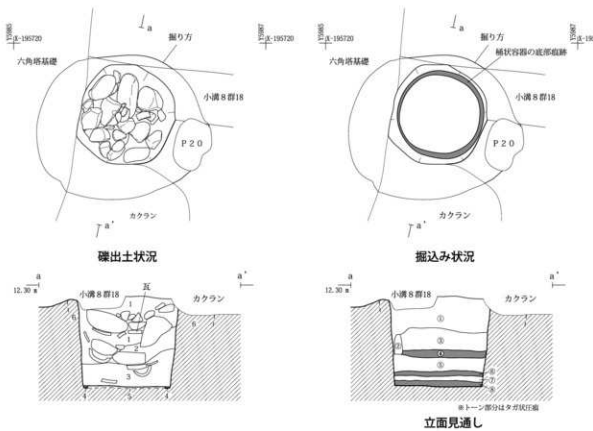
桶状遺構

礎石跡38と40の間の建物内部に位置し、遺構の掘り方埋土とその内部に堆積土を確認した。桶を埋設するための掘り方は東西にやや長い楕円形で、長径1.36m、短径1.14m、桶底面までの深さは0.91mである。掘り方の東側は建物東辺の柱筋の外側に出た形となっている。内部に木製の桶本体は腐食し残存せず、掘り方の内側には本来なら桶の外側に入れた埋土が厚くみられる。桶は掘り方の北側に寄った位置に設置され、平面形は円形で、検出面での径は0.82m、底面付近での径は0.69mであり、下部の径が小さくなっている。後世に流入した内部の堆積土には径10ー40cmの礫や瓦片が多量に含まれており、その量から遺構廃絶の際に投棄されたものと考えられる。掘り方埋土は最上層を除き、漏水防止のためとみられる粘性のあるシルト土が入れられている。埋土壁面には幅4ー6cmの細い暗

褐色粘土質シルトブロック土が上下に３条併行して巡っており、これは桶を締めた「タガ」の痕跡とみられる。また底面の周縁には桶底部の圧痕がリング状となって確認された。

桶状遺構の東側には1号樋跡が位置し、北側の池に導水していることから、途中この遺構への導水の可能性も考えたが、桶状遺構の東側にはそれに関連するプラン等は確認できなかった。１号樋跡からの導水の可能性も否定できないが、この遺構は建物内部に水を溜めるための施設と考えられる。

遺物は軒丸瓦（Ｆ17）、丸瓦（Ｆ32－36）、平瓦（G34）、熨斗瓦（H41・148）、輪違い（H77－80）、丸瓦か輪違い、鉄釘（N324・325・338・343）、その他の鉄製品（N326）が出土しており、中でも底部近くには完形の丸瓦や熨斗瓦がまとまって廃棄されており、建物解体時の状況を見せるものと思われる。



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
桶状遺構	1	10YR4/4　褐色	シルト	径30cm以内の礫を含む	埋積土
	2	10YR3/3　暗褐色	シルト	径30cm以内の礫を含む	
	3	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	径1cm以内の炭化物を微量含む	
	4	10YR2/3　黒褐色	シルト		掘り方埋土
	5	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	径1cm以内の炭化物を微量含む	
	6	10YR4/4　褐色	シルト	径2cm以内の礫を含む	
桶状遺構立面見通し	①	10YR4/4　褐色	シルト	径2cm以内の礫を含む	掘り方埋土
	②	10YR4/4　褐色	シルト	径5cm以内の黄褐色粘土質シルトブロックを多量含む	埋積土
	③	10YR6/4　にぶい黄橙色	粘土質シルト	にぶい黄褐色・暗褐色粘土質シルトブロックを含む	掘り方埋土
	④	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	径1cm以内の炭化物を微量含む	タガ状圧痕
	⑤	10YR6/4　にぶい黄橙色	粘土質シルト	にぶい黄褐色・暗褐色粘土質シルトブロックを含む	掘り方埋土
	⑥	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	径1cm以内の炭化物を微量含む	タガ状圧痕
	⑦	10YR6/4　にぶい黄橙色	粘土質シルト	にぶい黄褐色・暗褐色粘土質シルトブロックを含む	掘り方埋土
	⑧	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	径1cm以内の炭化物を微量含む	タガ状圧痕

第76図　桶状遺構

８号礎石建物跡

［位置と規模］

調査区の南西部で確認した礎石建物跡とみられ、ＳＢ２の東側、ＳＢ７の南側、ＳＢ９の西側に位置し、大型の建物跡に囲まれている。建物南端については調査区外へ延びている可能性がある。

検出した礎石跡は南北方向の２列の柱列からなり、これのみからみた建物形状は南北に長い建物で、規模は東西2.48m（６尺５寸の約1.26間分＝２間半の２つ割）、南北11.88m（６間分）である。建物の南北方向はＮ－11°－Ｅである。この建物の礎石跡は本来小規模なものとみられ、加えて六角塔基礎等により既に失われているものが多い可能性がある。

［配　置］

建物西辺の柱列は西側のＳＢ２から1間半、東辺の柱列は東側のＳＢ９から8.28m（３間＋1.26間分）の距離にある。東西の柱筋はＳＢ２・９の主たる柱筋とは合わず、半間分違えている。

建物の柱間は、南北６間が全て６尺５寸となるのに対し、東西は６尺５寸の２間半を２つ割りした寸法に近いものとなっている。このような柱間は第５次調査において、ＳＢ３の部屋部分の東西柱間にみられ、また今回はＳＢ９内部の柱間にも確認している。この寸法は建物内の縁通りや廂下部分では見られないものであり、このことからＳＢ８は東西１間のものでは無く、本来は東側へ１間分かそれ以上広がり、東西規模が２間半で２間となる建物か、それ以上の規模をもった建物である可能性がある。これにより東辺の南北柱筋はＳＢ７と並ぶものとなるが、残念ながら想定される部分には同じく南北方向に走る六角塔基礎が入り、おそらくはこれにより礎石跡列が失われている可能性が高い。

［礎石跡］

礎石跡は13基確認している。礎石跡の掘り方規模は径0.34－0.67mで、平均は0.51mと他の礎石建物跡よりも明らかに小規模である。礎石跡は掘り方や根固めを構築したようなものは少なく、中には礎石を抜取った後に土が流入したような、本来の埋土等を伴わないようなものもある。礎石跡８・13のように残存状況がよいものがある一方、礎石跡１・４は堆積土が単層で瓦片が混じり、礎石の抜き取りに際し、全体的に壊されているようなものもある。

周辺は他の建物以上に上部を大きく削平されている状況では無いことから、建物の礎石跡は本来、規模が小さく、内部に根固石等をあまり入れない簡易な構造であったと推定される。

礎石跡１

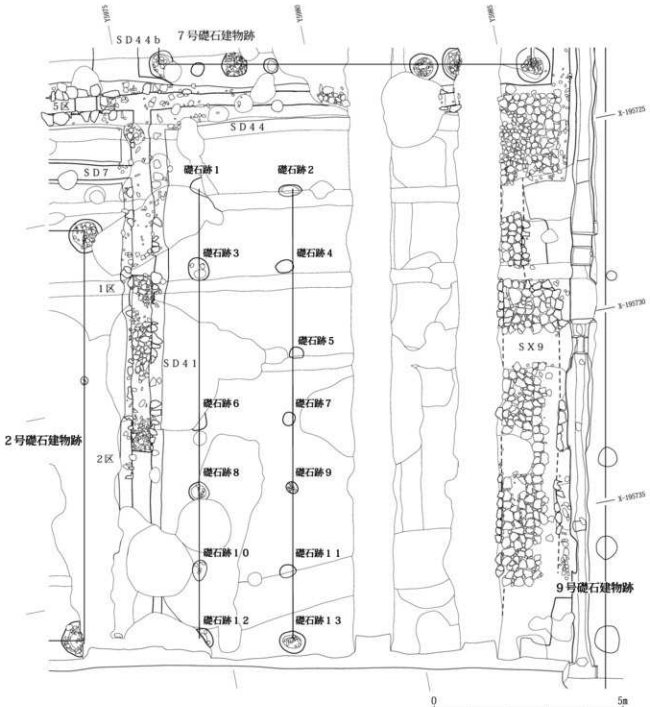
建物北西隅に位置するとみられる礎石跡である。ＳＫ246で東側、小溝群８－21と撹乱で南側を壊されており、掘り方形状は不明である。残存する掘り方規模は長径0.46m、短径0.40mである。堆積土は径20cm以内の円礫を少量含む砂質シルトであるが、層中には瓦片も含まれることから抜取痕とみられる。根固め、掘り方埋土は確認できなかった。

礎石跡２

建物内部か東辺の礎石跡とみられ、小溝群８－21で南側を壊されており、掘り方形状は不明である。残存する掘り方規模は長径0.61m、短径0.30mである。掘り方の内側に長径0.48m、短径0.19mの抜取痕とみられる半円形に残存するプランを検出した。堆積土は径５cm以内の円礫を少量含む砂質シルトが入り、瓦片も含まれている。掘り方埋土とみられるものは黄褐色シルトブロックを多量に含み、厚さは0.02－0.07mで、円礫は含まれないが根固めの可能性もある。

礎石跡３

建物西辺の礎石跡とみられ、撹乱で中央を壊されている。掘り方形状は楕円形で、残存規模は長径0.62m、短径0.54m、深さ0.08mである。抜取痕は確認できなかった。堆積土中には径20cm以内の円礫を数個入れており、根固め



第77図　８号礎石建物跡

の可能性がある。円礫の中には平坦面を上側にして置いた径20cmの大型のものもある。根固めと掘り方埋土の区別が不明瞭のため、堆積土全体を根固めとした。

礎石跡４

建物内部か東辺の礎石跡とみられる。堆積土に多くの瓦片を含むことから当初はピットと考え、掘込み調査を行ったが、ＳＢ８の礎石跡とした。プラン形状は不整楕円形で、残存規模は長径0.48m、短径0.34mで、深さ0.12mである。壁面は外に開き、底面は平坦である。堆積土にはブロック土のほか、瓦片を含むことから抜取り穴とみられる

が、根固め、掘り方埋土は確認できなかった。

遺物は平瓦、熨斗瓦が出土している。

礎石跡５

建物内部か東辺の礎石跡とみられ、小溝群８－23で南側を壊されており、掘り方形状は半円形に残存する。残存する掘り方規模は長径0.37m、短径0.29mである。検出段階ではわずかに円礫を確認しているのみで、抜取痕、根固めは確認できなかった。掘り方埋土とみられるものは暗褐色シルトブロックを含み、周辺のⅣ層に比べ暗色のブロック土が多い。

礎石跡６

建物西辺の礎石跡とみられ、撹乱で北西側を壊されて、掘り方形状は不明である。残存する掘り方規模は長径0.55m、短径0.22mである。検出段階ではわずかに円礫を確認しているのみで、抜取痕、根固めは確認できなかった。掘り方埋土とみられるものはブロック土を含み、径20cm以内の円礫を少量詰めているが、これは突き込まれた根固石の可能性もある。

礎石跡７

建物内部か東辺の礎石跡とみられ、掘り方形状は楕円形で、残存規模は長径0.35m、短径0.31mである。検出段階ではわずかに円礫を確認しているのみで、抜取痕、根固めは確認できなかった。掘り方埋土とみられるものはブロック土を含み、径20cm以内の円礫を少量詰めているが、これは突き込まれた根固石の可能性もある。

礎石跡８

建物西辺の礎石跡とみられ、撹乱で南側と東側を壊されている。掘り方形状は円形か楕円形とみられ、残存規模は長径0.54m、短径0.46mである。根固め形状は不整円形で、残存規模は径0.40mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは径10cm以内の円礫を詰め、根固石は根固め下部にまばらに詰めており、検出面ではほとんど確認できない。根固め上部は後世に掘りこまれている可能性がある。掘り方埋土は黄褐色シルトブロックを多量に含み、厚さは0.05－0.08mである。

礎石跡９

建物内部か東辺の礎石跡とみられ、掘り方形状は楕円形で、残存規模は長径0.34m、短径0.28mである。抜取痕と明確な掘り方埋土は確認できず、掘り方内の堆積土は径10cm以内の円礫を多く詰めており、根固めとみられる。根固石は掘り方中央近くに密集している。

礎石跡10

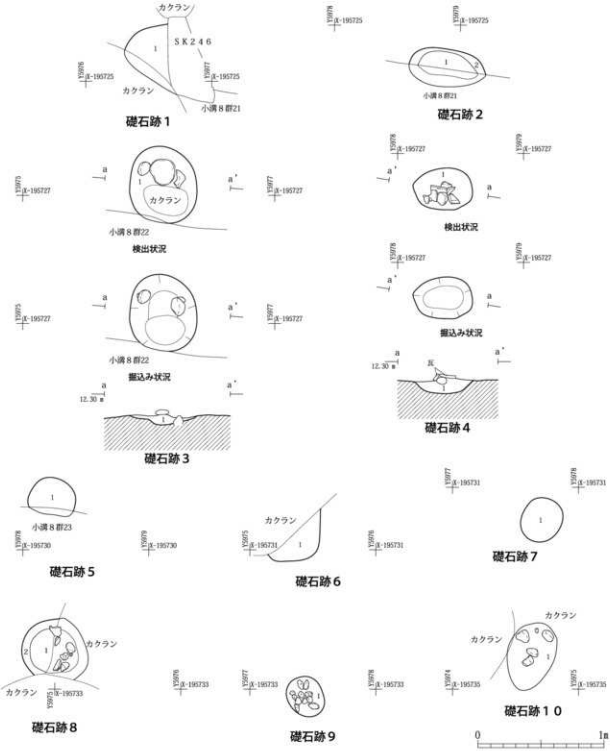
建物西辺の礎石跡とみられ、撹乱で上面を削平されている。掘り方形状は不整楕円形で、残存規模は長径0.55m、短径0.37mである。抜取痕と明確な根固めは確認できなかった。掘り方埋土とみられる層はブロック土を含み、径10cm以内の円礫を少量詰めており、根固めの最下部が僅かに残存している可能性もある。

礎石跡11

建物内部か東辺の礎石跡とみられ、ＳＤ56で南側を壊されており、掘り方形状は半円形に残存する。残存する掘り方規模は長径0.44m、短径0.33mである。抜取痕、根固めは確認できなかった。掘り方埋土は多量の黄褐色シルトブロックを含み、周辺のⅣ層に比べ明色である。

礎石跡12

建物西辺の礎石跡とみられ、撹乱で西側を壊されており、掘り方形状は半円形に残存する。残存する掘り方規模は長径0.59m、短径0.23mである。根固め形状も半円形に残存しており、残存規模は長径0.30m、短径0.10mである。抜取痕は確認できなかった。根固めはブロック土で、根固石とみられる円礫は確認できなかったが、分層されることにより根固めとした。掘り方埋土は黄褐色シルトブロックと径10cm以内の円礫を少量含み、厚さは0.12－0.16m



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
磁石跡1	1	10YR4/6　褐色	砂質シルト	径20cm以内の円礫を少量含む	掘取痕？
磁石跡2	1	10YR4/6　褐色	砂質シルト	径5cm以内の円礫を少量含む	掘取痕？
	2	2.5Y4/3　オリーブ褐色	砂質シルト	径1cm以内の黄褐色シルトブロックを多量含む	掘り方埋土
磁石跡3	1	10YR4/4　褐色	シルト	暗褐色シルトブロックを含む 径1cm以内の炭化物を微量含む	根固め？
磁石跡4	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径1cm以内の黄褐色・暗褐色シルトブロックを含む	掘取痕？
磁石跡5	1	10YR4/4　褐色	シルト	径3cm以内の暗褐色シルトブロック、径10cm以内の円礫を微量含む	掘り方埋土
磁石跡6	1	10YR4/4　褐色	シルト	径5cm以内の黄褐色・暗褐色シルトブロック、径20cm以内の円礫を少量含む	掘り方埋土？
磁石跡7	1	10YR4/4　褐色	シルト	径1cm以内の黄褐色・暗褐色シルトブロック、径20cm以内の円礫を少量含む	掘り方埋土
磁石跡8	1	10YR4/6　褐色	砂質シルト	径10cm以内の円礫を含む	根固め
	2	10YR3/4　暗褐色	シルト	径5cm以内の黄褐色シルトブロックを多量含む	掘り方埋土
磁石跡9	1	10YR4/6　褐色	砂質シルト	径10cm以内の円礫を多量含む	根固め？
磁石跡10	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径1cm以内の黄褐色・暗褐色シルトブロックを多量、径10cm以内の円礫を少量含む	掘り方埋土？

第78図　８号磁石建物跡　磁石跡（１）

遺　構	層　位	土　色	土　性	特　徴	備　考
礎石跡11	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径1cm以内の黄褐色シルトブロックを多量、径10cm以内の円礫を微量含む	掘り方埋土
礎石跡12	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径1cm以内の暗褐色シルトブロックを含む	根固め
	2	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径1cm以内の黄褐色シルトブロック、径10cm以内の円礫を少量含む	掘り方埋土
礎石跡13	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径1cm以内の黄褐色・暗褐色シルトブロック、径10cm以内の円礫を多量含む	根固め
	2	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径1cm以内の黄褐色・暗褐色シルトブロックを多量含む	掘り方埋土

第79図　8号礎石建物跡　礎石跡（2）

である。

礎石跡13

建物内部が東辺の礎石跡とみられ、建物内では最も規模が大きく、残存が良好とみられるものである。掘り方形状は楕円形で、長径0.67m、短径0.56mである。根固め形状も楕円形で、残存規模は長径0.49m、短径0.35mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは径10cm以内の円礫を多量に詰め、根固石は北側で多くみられることで南側は抜き取られている可能性もある。根固石は一部掘り方埋土に突き込まれている。掘り方埋土は黄褐色、暗褐色シルトブロックを多量含み、厚さは0.07ー0.14mである。

［溝　跡］

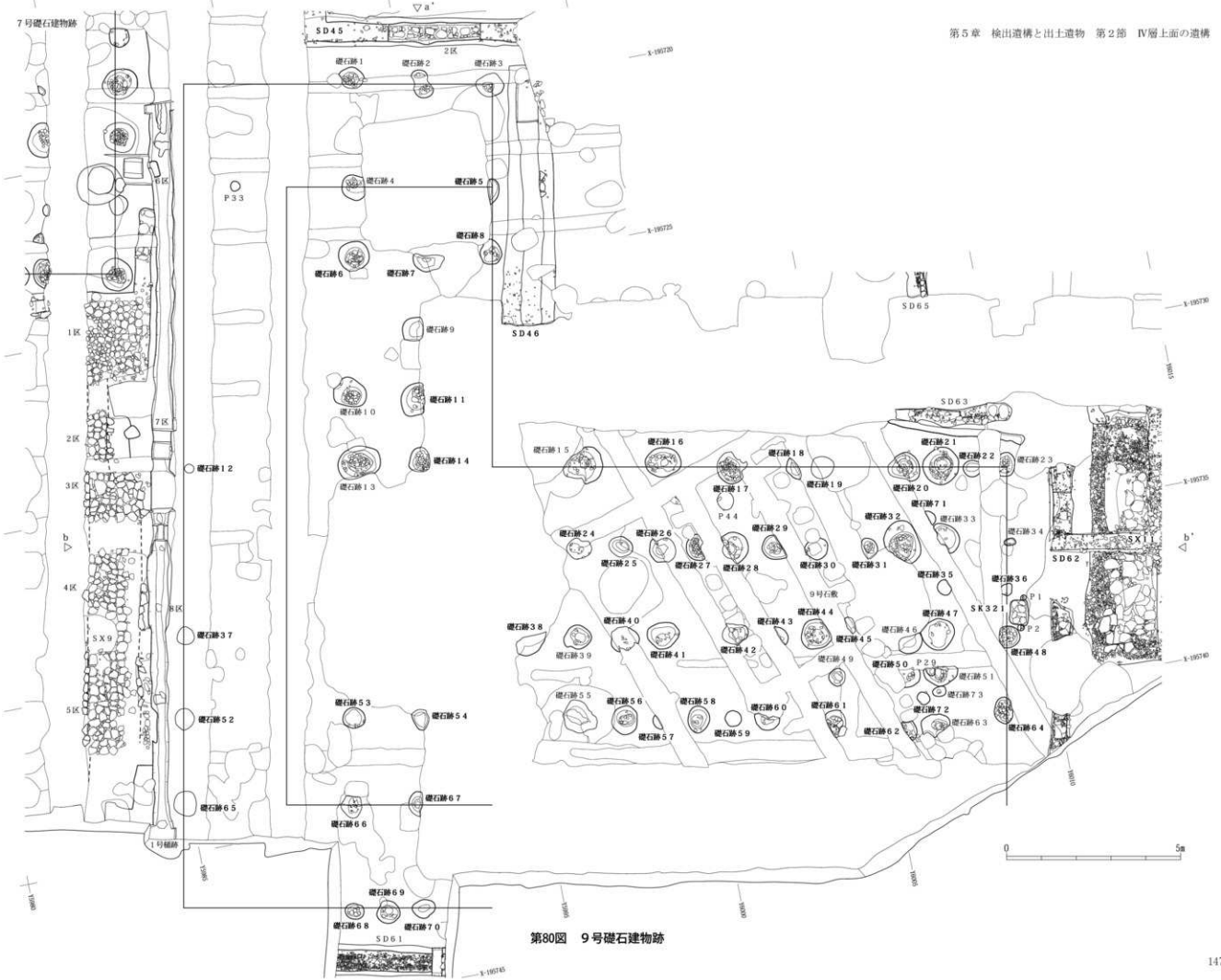
ＳＢ８は西辺側にＳＤ41、北辺側にＳＤ44が配置されている。これらは同時にＳＢ２とＳＢ７の周辺溝となるものである。各側柱列と溝跡との距離は、西側南北柱列からＳＤ41までは1.4ー1.6m（４尺６寸ー５尺３寸程度）あり、ＳＢ２までの距離が約３mであることから、溝はほぼ中間に位置している。また北端の礎石跡１と２からＳＤ44までは2.3ー2.4m（７尺６寸ー７尺９寸程度）であるが、本建物跡の礎石跡は小規模なことから残存が悪く、これら礎石跡の北側にも礎石跡が存在した可能性もある。西側についてはＳＢ６と７の間に配置される溝が１条の例もあることから、ＳＢ２と８はＳＤ41を共有していたことも考えられるが、ＳＢ８自体の構造や性格が不明なため、詳細は不明である。また想定される建物の東側柱列とＳＸ９は3.1m程度離れることになり、現時点でＳＸ９をＳＢ８の東辺に位置する溝とすることはできないが、建物の東側への拡大が想定され、直接の関係を有する施設同士の可能性も否定できない。

９号礎石建物跡

［位置と規模］

調査区の南部中央にある礎石建物跡で、ＳＢ７・８の東側、ＳＢ６・10・11の南側に位置するが、現時点では東側に建物跡は確認していない。また当初、建物の南側部分が未確認であったことから、建物範囲確認のため、調査区南壁部分を東西3.7m、南北3.2mの範囲で一部拡張したところ、建物南辺の東西側柱列とその南側に並行して雨落ち溝跡を確認した。

検出した礎石跡からみた建物形状は、主屋となる東西棟建物跡とその北西側に南北棟とみられる張出部が取り付く鉤形である。建物規模は全体で東西23.63m（６尺５寸の12間分）、南北23.63m（12間分）である。このうち主屋部は東西23.63m、南北12.80m（６間半分）で、張出部は東西8.87m（４間半分）、南北10.83m（５間半分）となり、



第80図　９号礎石建物跡

これが一つの建物の場合、これまでの調査で確認した礎石建物跡の中で最大規模となる。建物の南北方向はN－11°－Eである。建物の規模はあくまでも確認した礎石跡から想定される主たる部分のものであり、周囲を別の建物に取り囲まれる状況から、この建物に接続する渡り廊下や小規模な部屋等の付属建物が取り付く可能性が高い。

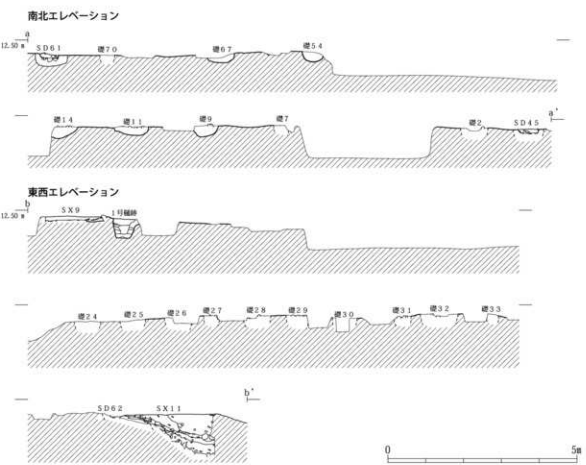
また第５次調査では西側にほぼ並びを同じくするＳＢ２の南側に石敷遺構が展開するのを確認している。今回、ＳＢ９南辺溝の南側に石敷遺構は確認できなかったが、溝内に堆積した小円礫の状況から、建物南側には同様の石敷遺構が広がり、建物範囲を区画していたことが推察される。

［配　置］

周囲の建物との位置関係をみると、建物西辺とＳＢ７東辺とは僅かに１間の距離にあり、非常に近接している。またＳＢ８とはその東側への延びが不明瞭だが、双方の間には幅をもったＳＸ９が配置されることから、建物同士はあまり近接するものではないとみられる。北辺についてはＳＢ11北辺の並びと一致している。南辺はＳＢ２より１間半分南側へ張出しており、西側のＳＢ２とＳＢ３にみられる一直線の並びは続いていない。

建物以外との位置関係をみると、ＳＢ９の西側には敷石遺構のＳＸ９、張出部北側には池とみられるＳＸ10、東側には方形の石組み池とみられるＳＸ11が立地している。このようにＳＢ９は周囲に水を湛え、或いは流す複数の施設に囲まれており、これが建物の性格を考える上での一つの特徴と考えられる。

建物の各柱間は基本的に他の建物同様６尺５寸を基本としている。張出部北辺と主屋南辺では側柱列とその１列内側の礎石列との柱間が６尺５寸の１間半幅と広くなっており、この部分はＳＢ２やＳＢ３にもみられた縁通りであったことが推定される。また西辺については六角塔基礎底面に辛うじて南北の側柱列を確認したが、おそらくは



第81図　９号礎石建物跡　エレベーション

その1間半内側にも南北に並ぶ柱列が存在していたものが、六角塔基礎により完全に失われ、本来なら建物西辺にも幅1間半の縁通りが配置されていたと考えられる。このことから張出部北西部に位置するP33は縁通り部分の幅1間半を2つ割りした位置に配置されたものが唯一残った束柱か、あるいは戸などに関わる柱とみられる。さらに主屋東辺は南北の側柱列とその1列内側との柱間が1間と狭くなっている。このさらに西側の柱間との距離は半間であり、この場所は建物最奥側として特殊な施設の存在が想定されることから、建物東辺についても幅が狭い南北の縁通りが配置されていたと考えられる。このように幅が1間半や1間の縁通りを建物周囲に配置することはSB2やSB3と全く共通しており、縁通りに囲まれた建物内部には座敷等の部屋が配置されていたことが想定される。

縁通りの内側での柱配置をみると、主屋部と張出部とでは東西・南北双方の柱間寸法に大きな違いがみられる。張出部の柱間は東西・南北共に6尺5寸を1間とする単純な配置となっており、寸法上はSB2やSB6との類似性が認められる。これに対し主屋部で特徴的なのは、南辺の縁通り幅を除く主屋全体の5間ある南北柱間を4つ割りすることで、柱間を各8尺1寸程に4分割し、この結果、南北の柱間を張出部に比べ、多小広く配置していることである。この配置は主屋部分全体を通してみられる配置である。これらの礎石跡には柱以外に多くの束柱が含まれるとみられるが、主屋部の規模から考慮すると、南北5間幅は10m近くもあり、その幅をもって単独の部屋を構成することは難しいと判断されることから、おそらくは東辺の礎石跡48と西辺の礎石跡37をつなぐ主屋部の中心線を境に北側と南側を分け棟割りすることで、2列の部屋の並びが想定される。これにより東辺の礎石跡34から24の並びと、礎石跡63から西辺の52の並びについては、南北に分かれた各部屋列の中心を東西に通る束柱を主とした礎石跡群と推定される。

さらに主屋内部の南北2列の部屋列は、礎石跡の東西の柱間の違いから各々が幾つかの部屋に分割される。南側の部屋列をみると、礎石跡46と41、62と57の間の各柱間が6尺5寸で1間ないしは半間となるのに対し、その西側の礎石跡41と38、57と55の各柱間は2間半を4つ割りした柱間となっている。後者は礎石跡38の西側が撹乱により大きく失われているが、おそらくは礎石跡38の約4尺西側にこの部屋の西側を区画する南北ラインが想定される。このことから主屋部南列に配置された部屋の規模は、東側が東西幅3間半（22.7尺）、中央が東西幅2間半、西側が東西幅3間であり、それぞれの部屋の南北奥行は2間半であることが推定される。一方北側の部屋列をみると、礎石跡20と17の間の各柱間が2間半を4つ割りした柱間であるのに対し、その西側の礎石跡17と16の間は1間ないし半間となっている。またこのさらに西側は南側の部屋の並びと同じくしている。このことから主屋部北列に配置された部屋の規模は、東側が東西幅2間半、その西側が1間、さらに西側が2間半となり、東側2間半と1間幅の2部屋を合わせた部分が南列の東側1部屋の並びに相当することが考えられる。また北列最西側の部屋も南列と同幅の部屋となり、並びを同じくしているものとみられる。

主屋部東端の配置をみると、礎石跡50と51は礎石跡47と63、46と62の中間位置にはなく、礎石跡46と47が通る中心線から南へ半間の3尺2寸の距離にあると推定される。また北側の礎石跡33も礎石跡21と47の中間にはなく、北辺から6尺5寸の距離にあるとみられる。これら南北に通る2列のライン間については、SB2同様に建物最奥側に位置することで何かしらの施設が備え付けられていたことが想定されることから、これらに伴う特殊な配置を示すものと考えられる。また礎石跡71ー73や礎石跡17・18・45についても現時点では何を意図した配置なのかは不明で、他に礎石跡9の1間西側は撹乱が及ばない位置にも関わらず、礎石跡は確認できないこともまた建物の構造上の理由によるものと理解される。

張出部の縁通りを除いた内部は東西3間、南北4間の規模があり、主屋内部で想定した各部屋の規模を上回る大きさとなるが、これについては各柱間の違いが認められないのに加え、この部分の性格が不明瞭なことから、本来どのような部屋割りが行われていたかは不明である。

［礎石跡］

礎石跡は73基確認しており、この地区全体が撹乱による削平が多いわりには確認数が多い。これは構造的に本来柱数が多い建物であったと理解できる。礎石跡の規模は径0.26ー1.28mで、平均0.74mである。礎石跡は径に大きく差があるが、これは特に主屋東側で多数の束柱を確認したことが大きな理由とみられる。

ＳＢ９で抜取痕を確認した礎石跡は73基中24基あり、加えて根固石が少量、または残存しないものもあることから、礎石跡の残存状況は他の建物と比較して悪いといえる。根固石が多く残存する礎石跡は建物北側に多い傾向がうかがえるが、北西の張出部北辺の検出標高が12.15ー12.17mなのに対し、南辺では12.09ー12.13mで、後世の撹乱や削平が南側でより顕著であり、ここに構造上の違いは無かったとみられる。

今回の調査ではこれまでの建物跡には確認できなかった礎石とみられる円礫が設置されているのを唯一確認した。礎石跡22は主屋部北辺で、さらに東辺から半間の位置にあり、径が0.47mと礎石跡としては小型のものである。南側の建物内部にはこれと並ぶ礎石跡は確認できないことから、この場所は建物東側の縁通りに伴う束柱の可能性が高い。西側の礎石跡21は大型で部屋部分の隅柱とみられるが、削平により礎石は残存していない。これに対し礎石跡22は僅か半間東に位置するにもかかわらず礎石が原位置を保っていることを考慮すると、この東辺縁通り部分については座敷部分より基礎位置が低かった可能性を示すものであり、後世に盛土されるなどして削平を免れたことが考えられる。

礎石跡１

張出部北辺の礎石跡である。小溝群８ー17より古く、撹乱で西側を壊されており、掘り方形状は不明である。残存する掘り方規模は長径0.65m、短径0.61mである。根固め形状は円形か楕円形とみられ、残存規模は長径0.44m、短径0.39mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは径20cm以内の円礫を詰め、根固石は径５ー15cmの円礫が多いのに対し、径３cm以内の小円礫は少なく、中央にやや密集している。根固石は一部掘り方埋土に突き込まれている。掘り方埋土はにぶい黄褐色、灰黄褐色シルトブロックを含む黄褐色シルトを含み、厚さは0.12ー0.16mである。

礎石跡２

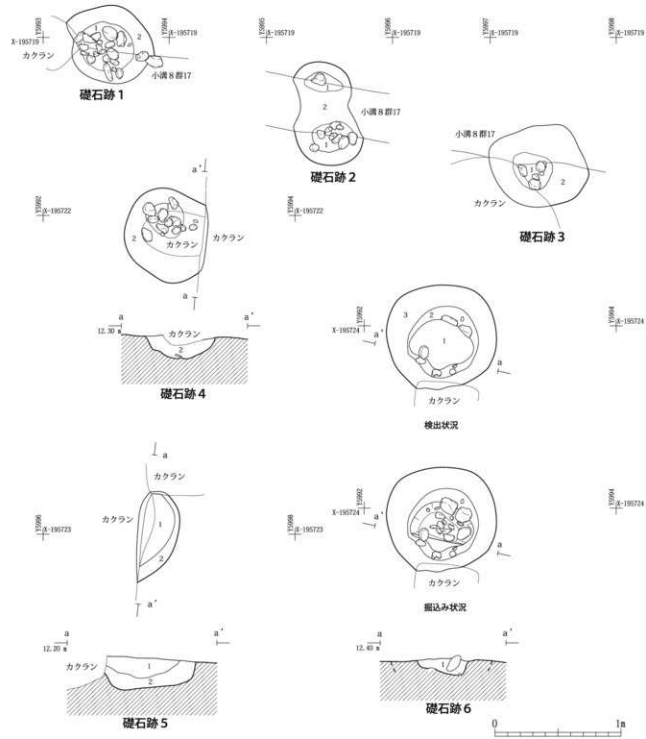
張出部北辺の礎石跡である。小溝群８ー17が中央部を壊しており、掘り方形状は楕円形とみられる。残存する掘り方規模は長径0.82m、短径0.51mである。根固め形状も楕円形の可能性があり、残存規模は長径0.64m、短径0.34mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは２か所に分かれるが、両方とも径20cm以内の円礫を詰め、根固石は径５ー15cmの円礫を詰め、径３cm以内の小円礫は含まれていない。隣接する礎石跡１や３と比較して根固め径が大きいが、浅いものである。掘り方埋土は灰黄褐色シルトブロックを含み一部が縞状となっており、厚さは0.06ー0.13mである。

礎石跡３

張出部北東隅の礎石跡である。小溝群８ー17より古く、撹乱で南西側を壊され、掘り方形状は不明である。残存する掘り方規模は長径0.70m、短径0.62mである。根固め形状も不明で、残存規模は長径0.32m、短径0.26mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは径10cm以内の円礫を詰め、根固石は少量で中央に密集しており、横切る小溝群の底面では確認できず浅いものである。掘り方埋土は褐色、灰黄褐色シルトブロックを含み一部が縞状となっており、厚さは0.15ー0.28mである。

礎石跡４

張出部内部の礎石跡である。撹乱で東側と中央を壊され、掘り方形状は不整円形とみられる。残存する掘り方規模は径0.75m、深さ0.18m以上である。根固め形状は隅丸三角形で、残存規模は径0.29mである。撹乱壁面の観察では、掘り方壁面は外に開き、底面は中央が深くなっている。抜取痕は確認できなかった。根固めは掘り方北西側に偏っ



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
礎石跡1	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径20cm以内の円礫を多量含む	粗固め
	2	10YR5/6　黄褐色	シルト	径5cm以内のにぶい黄褐色・灰黄褐色シルトブロックを多量含む	掘り方埋土
礎石跡2	1	10YR4/4　褐色	シルト	径20cm以内の円礫を多量含む	粗固め
	2	10YR5/6　黄褐色	シルト	径10cm以内の灰黄褐色シルトブロックが一部縞状となる	掘り方埋土
礎石跡3	1	2.5Y4/4　オリーブ褐色	シルト	径10cm以内の円礫を少量含む	粗固め
	2	10YR5/6　黄褐色	砂質シルト	径20cm以内の褐色・灰黄褐色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡4	1	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質シルト	径20cm以内の円礫を含む	粗固め
	2	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質シルト	径20cm以内の暗褐色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡5	1	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質シルト	暗褐色シルトブロックが縞状となる	粗固め&掘り方埋土
	2	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質シルト	暗褐色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡6	1	10YR4/4　褐色	シルト	径1cmのにぶい黄褐色シルトブロックを含む	後取痕
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径20cm以内の円礫を多量含む	粗固め
	3	10YR4/4　褐色	シルト	径1cm以内のにぶい黄褐色・暗褐色シルトブロックを含む	掘り方埋土

第82図　9号礎石建物跡　礎石跡（1）

て残存しており、根固石は径５ー15cmの円礫が多いが少量である。掘り方埋土は暗褐色シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.10ー0.35mである。また根固めの残存状況から掘り方埋土中で確認した円礫は突き込まれた根固石と考えられる。

礎石跡５

張出部東辺の礎石跡である。撹乱で西側を壊されており、掘り方形状は不明である。残存する掘り方規模は長径0.72m、短径0.33m、深さ0.26m以上である。根固め形状も不明であるが、残存規模は長径0.59m、短径0.24m、厚さ0.16m以上である。撹乱壁面の確認では掘り方壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦であるがやや北に傾いている。抜取痕は確認できなかった。根固めとした層ではブロック土が縞状となり、根固石は確認できなかった。掘り方埋土は暗褐色シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.04ー0.12mである。根固めとした部分については、掘り方埋土の一部の可能性もある。

礎石跡６

張出部内部の礎石跡で、掘込み調査を行っている。第８次と第９次調査区の境にあり、２回に分けて調査を行った。撹乱で南側を壊されており、掘り方形状は円形で、残存規模は径0.88mである。根固め形状は不整円形で、残存規模は径0.58mである。根固めの中央で径0.49m、深さ0.14mの抜取痕とみられる不整形プランを検出した。堆積土はⅢ層類似層である。根固めは径20cm以内の円礫を多量に詰め、中央が窪み、根固石は径５ー15cmの円礫が多く、径３cm以内の少量の小円礫と共に詰めている。また根固石は東側に多く、西側は抜き取られている可能性もある。掘り方埋土はにぶい黄褐色、暗褐色シルトブロックを含み、厚さは0.10ー0.23mである。

礎石跡７

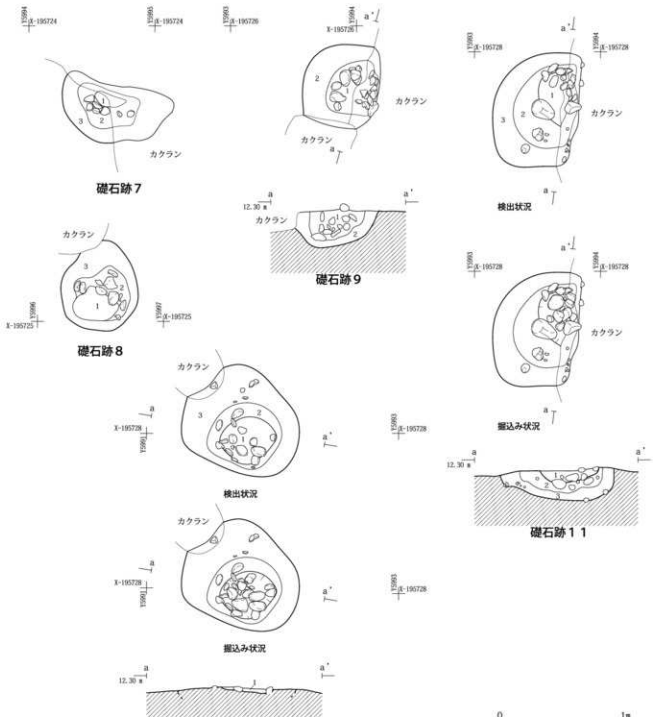
張出部内部の礎石跡で、第８次と第９次調査区の境にあるが、撹乱で北側を壊されており第８次側では確認できなかった。掘り方形状は半円形に残存し、残存する掘り方規模は長径0.88m、短径0.46mである。根固め形状も半円形に残存しており、残存規模は長径0.50m、短径0.31mである。根固め中央に長径0.24m、短径0.10mの抜取痕とみられる半円形プランを検出した。堆積土はⅢ層類似層である。根固めは径10cm以内の円礫を詰め、根固石は抜取痕の周囲に沿って詰めている。掘り方埋土はにぶい黄褐色砂質シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.10ー0.14mである。

礎石跡８

張出部東辺の礎石跡で、第８次と第９次調査区の境にあり、２回に分けて調査を行った。撹乱で北西側の一部を壊されており、掘り方形状は不整楕円形である。残存する掘り方規模は長径0.71m、短径は0.62mである。根固め形状は不整形で、残存規模は径0.46mである。南側に長径0.36m、短径0.27mの抜取痕とみられる不整楕円形のプランを検出した。堆積土はⅢ層類似層である。根固めは径20cm以内の円礫を詰め、根固石は北側にまばらに詰めている。掘り方埋土は褐色、灰黄褐色シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.04ー0.20mである。根固めは掘り方の南側に寄っており、北側が広くなっている。

礎石跡９

張出部内部の礎石跡である。撹乱で東側と南側を壊され、掘り方形状は不明である。残存する掘り方規模は長径0.66m、短径0.61m、深さ0.29mである。根固め形状も不明であるが、残存規模は長径0.49m、短径0.45m、厚さ0.23mである。撹乱壁面の観察では、掘り方壁面は急角度で立ち上がり、底面は南側に傾いている。根固めは径10cm以内の円礫を厚く詰め、根固石は底面部分と側上部に確認した。根固め中央は礫が少ない状況から、抜取痕が残存する可能性もある。掘り方埋土はにぶい黄褐色砂質シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.10ー0.21mである。



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
礎石跡7	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	暗褐色砂質シルトブロックを少量含む	抜取痕
	2	10YR6/4　黄橙色	砂質シルト	径1cm以内のにぶい黄褐色砂質シルトブロックを少量、径10cm以内の円礫を含む	根固め
	3	10YR4/4　褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色砂質シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡8	1	10YR4/4　褐色	シルト		抜取痕
	2	10YR4/4　褐色	シルト	径5cm以内の褐色・灰黄褐色シルトブロック、径20cm以内の円礫を含む	根固め
	3	10YR5/6　黄褐色	シルト	褐色・灰黄褐色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡9	1	10YR4/4　褐色	シルト	径10cm以内の円礫を含む	根固め
	2	10YR4/4　褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色砂質シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡10	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径1cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロックを少量含む	抜取痕
	2	10YR6/4　にぶい黄橙色	砂質土	径1cm以内の暗褐色砂質シルトブロックを少量、径20cm以内の円礫を多量含む	根固め
	3	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質シルト	暗褐色砂質シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡11	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	暗褐色砂質シルトブロックを少量含む	抜取痕
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径5cm以内の暗褐色砂質シルトブロックを少量、径20cm以内の円礫を含む	根固め
	3	10YR4/4　褐色	砂質シルト	暗褐色砂質シルトブロックが縞状となり、径5cm以内の円礫を少量含む	掘り方埋土

第83図　９号礎石建物跡　礎石跡（２）

礎石跡10

張出部内部の礎石跡で、掘込み調査を行っている。撹乱で北西側を壊されており、掘り方形状は不整楕円形である。残存する掘り方規模は長径0.96m、短径0.80mである。根固め形状は不整円形で、残存規模は径0.60mである。根固めの中央で径0.45m、深さ0.04mの抜取痕とみられる不整楕円形のプランを検出した。堆積土はⅢ層類似層である。根固めは径20cm以内の円礫を多量詰め、中央が窪んでおり、根固石は径10ー15cmの円礫が窪みに密集している。掘り方埋土は暗褐色砂質シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.04ー0.30mである。根固めはやや南東側に寄っている。

礎石跡11

張出部内部の礎石跡で、掘込み調査を行っている。撹乱で東側を壊され、掘り方形状は不明である。残存規模は長径0.90m、短径0.68m、深さ0.27mである。根固め形状は半円形に残存し、残存規模は長径0.65m、短径0.50m、厚さ0.21mである。撹乱壁面の観察では、掘り方壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は北にやや傾いている。根固めの北寄りで径0.46m、深さ0.13mの抜取痕とみられる不整形のプランを検出した。堆積土はⅢ層類似層である。根固めは径20cm以内の円礫を詰め、根固石は密で北側に多い。掘り方埋土は暗褐色砂質シルトブロックと径５cm以内の円礫を少量含み縞状となっており、厚さは0.08ー0.23mである。

礎石跡12

主屋北西隅にあたる位置の礎石跡である。六角塔基礎で上面を完全に削平され、ピット状に僅かに残存している。残存する掘り方形状は円形で、残存規模は径0.26mである。残存が悪く抜取痕や根固めは全く確認できなかった。掘り方埋土はにぶい黄橙色、暗褐色シルトブロックを含み縞状となっており、円礫は含まれていない。

礎石跡13

主屋内部の礎石跡で、ＳＢ９内では大型の礎石跡である。掘込み調査を行っている。撹乱で南側と北側を壊されているが、掘り方形状は楕円形とみられる。残存する掘り方規模は長径1.23m、短径0.87mである。根固め形状も不整楕円形とみられ、残存規模は長径0.98m、短径0.78mである。中央で長径0.71m、短径0.55m、深さ0.10mの抜取痕とみられる不整楕円形のプランを検出した。堆積土には径10cm以内の円礫を含むⅢ層類似層が入り、瓦片を含んでいる。根固めは径20cm以内の円礫を多量に詰め、中央が窪んでいる。根固石は窪みに集中し、壁面にはまばらに詰める程度であり、側面の根固石が崩れ、底面に留まった可能性もある。掘り方埋土は暗褐色砂質シルトブロックと径１cmの円礫を僅かに含み縞状となっており、厚さは0.08ー0.18mである。

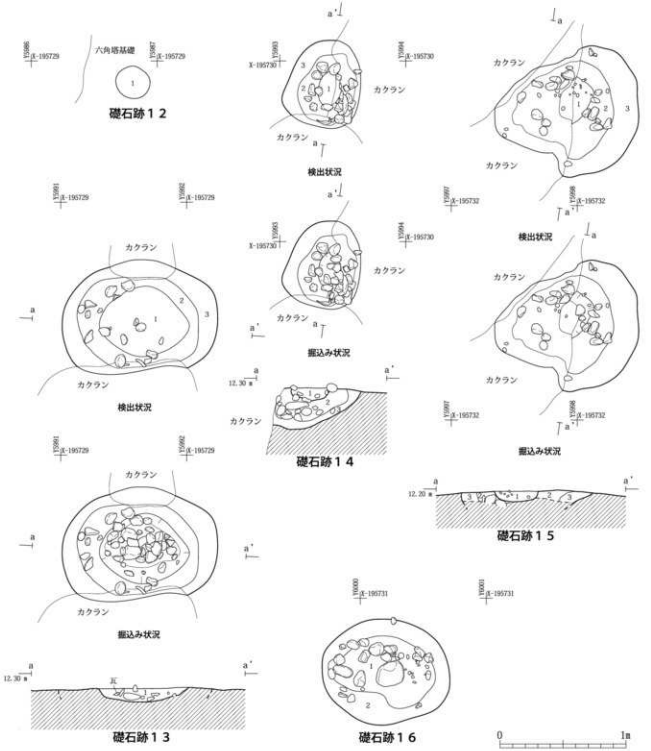
遺物は抜取痕から輪違いが出土している。

礎石跡14

主屋内部の礎石跡で、掘込み調査を行っている。撹乱で東側と南側を壊され、掘り方形状は不明である。残存する掘り方規模は長径0.70m、短径0.60m、深さ0.31mである。根固め形状も不明であるが、残存規模は長径0.58m、短径0.44m、厚さ0.25mである。撹乱壁面の観察では、掘り方壁面は緩やかに立ち上がり、底面は南側が深くなっている。中央で長径0.28m、短径0.18m、深さ0.10mの抜取痕とみられる半円形に残存するプランを検出した。堆積土はⅢ層類似層である。根固めは径20cm以内の円礫を厚く詰め、根固石は径10cm程度のものが多く、全体に密に詰めている。掘り方埋土は暗褐色砂質シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.10ー0.13mである。

礎石跡15

主屋北辺の礎石跡で、ＳＢ９内では大型のものである。掘込み調査を行っている。撹乱で西側を壊されている。掘り方形状は不明であるが、残存規模は長径1.15m、短径1.01mである。根固め形状も不明であるが、残存規模は長径0.80m、短径0.77mである。中央で長径0.37m、短径0.24m、深さ0.08mの抜取痕とみられる不整形に残存するプランを検出した。堆積土は径５cm以内の円礫を少量含むⅢ層類似層が入っている。根固めは径10cm以内の円礫を詰め、



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
礎石跡12	1	10YR4/4　褐色	シルト	径5cm以内のにぶい黄褐色・暗褐色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡13	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径10cm以内の円礫を含む	版築版
	2	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質シルト	径3cm以内の暗褐色砂質シルトブロックを多量、径20cm以内の円礫を微量含む	根固め
	3	10YR6/4　にぶい黄橙色	砂質シルト	暗褐色砂質シルトブロックが縞状となり、径1cm以内の円礫を微量含む	掘り方埋土
礎石跡14	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト		版築版
	2	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	径1cm以内のにぶい黄褐色砂質シルトブロックを少量、径20cm以内の円礫を含む	根固め
	3	10YR6/3　にぶい黄橙色	砂質シルト	暗褐色砂質シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡15	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径5cm以内の円礫を含む	版築版
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径5cm以内のにぶい黄橙色シルトブロック、径10cm以内の円礫を含む	根固め
	3	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	灰白色砂質土が縞状となる	掘り方埋土
礎石跡16	1	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	径20cm以内の円礫を多量含む	根固め
	2	10YR4/3　にぶい黄橙色	砂質シルト	径5cm以内の暗褐色シルトブロック、径5cm以内の円礫を含む	掘り方埋土

第84図　９号礎石建物跡　礎石跡（３）

中央が窪んでおり、根固石は径５－10cmの円礫が多く、全体にまばらに詰めている。根固石は中央部分ではあまり確認できず、抜き取られている可能性もある。掘り方埋土は灰白色砂質土ブロックを含み縞状となっており、厚さは0.12－0.22mである。

礎石跡16

主屋北辺の礎石跡である。掘り方形状は楕円形で、残存規模は長径1.03m、短径0.85mである。根固め形状は不整形で、残存規模は長径0.85m、短径0.56mである。抜取痕は確認できなった。根固めは径20cm以内の円礫を詰め、根固石は径10－15cmの円礫が多く、径３cm以内の小円礫が少量あり、中央には径20cmの大型の円礫を１石が平坦面を上側にして置かれている。根固石は一部掘り方埋土に突き込まれている。掘り方埋土は暗褐色シルトブロックと径５cm以内の円礫を少量含み、厚さは0.05－0.24mである。

礎石跡17

主屋北辺の礎石跡で、掘込み調査を行っている。撹乱で北側と東側を壊され、掘り方形状は不明である。残存する掘り方規模は長径0.91m、短径0.88mであり、大型の礎石跡と思われる。根固め形状も不明であるが、残存規模は長径0.70m、短径0.57mである。撹乱壁面の観察では、根固めは厚く、掘り方壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。南側に長径0.43m、短径0.37m、深さ0.23mの抜取痕とみられる不整形のプランを検出した。堆積土はⅢ層類似層である。根固めは径10cm以内の円礫を多く詰め、中央が窪んでおり、根固石は径５－10cmの円礫が多く、径３cm以内の小円礫も少量含まれる。また根固石は中央に密集し、側面はまばらであり、側面側の根固石が崩れ、底面に溜まった可能性もある。掘り方埋土は暗褐色シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.05－0.10mである。

礎石跡18

主屋北辺の礎石跡である。撹乱で東側を壊されており、掘り方形状は不明である。残存する掘り方規模は長径0.68m、短径0.35mである。根固め形状も不明であるが、残存規模は長径0.39m、短径0.20mである。抜取痕は確認できなかった。根固めはブロック土を詰め、根固石は確認できなかった。掘り方埋土はにぶい黄褐色、灰黄褐色シルトブロックを含み、厚さは0.08－0.12mである。東側の礎石跡19は撹乱底面に掘り方埋土が残存するが、礎石跡18には残存せず、本来掘り方が浅いものとみられる。

礎石跡19

主屋北辺の礎石跡で、ＳＫ308と撹乱で上面全体を削平されている。掘り方形状は円形で、残存規模は径0.68mである。抜取痕や根固めは確認できなかった。掘り方埋土は暗褐色シルトブロックを含み縞状となっており、円礫は含まれていない。

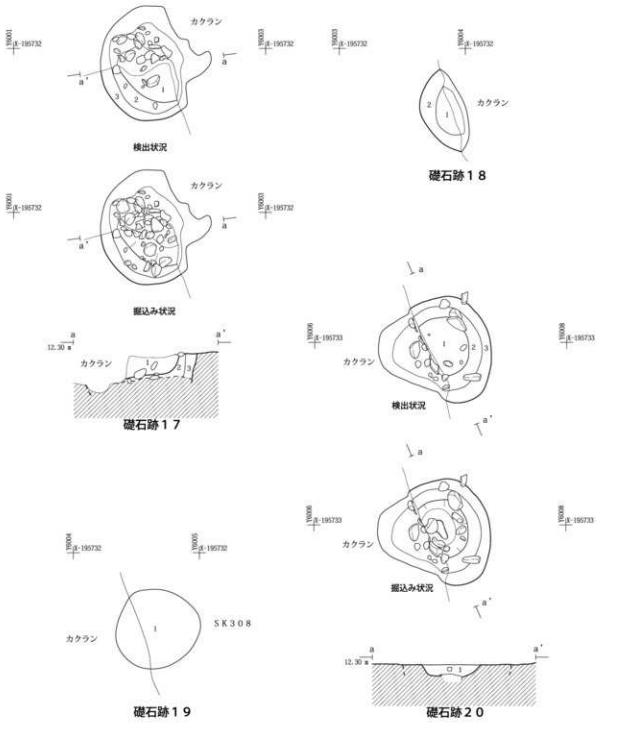
礎石跡20

主屋北辺の礎石跡で、掘込み調査を行っている。撹乱で南西側を壊されている。掘り方形状は隅丸三角形で、残存規模は長径0.88m、短径0.84mである。根固め形状は不整円形で、残存規模は径0.71mである。撹乱壁面の観察では、根固めは厚く、掘り方壁面は外に開いている。中央で径0.47m、深さ0.09mの抜取痕とみられる半円形のプランを検出した。堆積土は褐色砂質シルトブロックを少量含むⅢ層類似層である。根固めは径20cm以内の円礫を詰め、根固石は径５－15cmの円礫が多く、ほぼ全体にまばらに詰めている。掘り方埋土は褐色シルトブロックと径５cm程度の円礫を含み縞状となっており、厚さは0.07－0.12mである。

遺物は抜取痕から熨斗瓦が出土している。

礎石跡21

主屋北辺の礎石跡で、大型のものである。掘込み調査を行っている。掘り方形状は不整円形で、残存規模は径1.07mである。根固め形状は不整楕円形で、残存規模は長径0.72m、短径0.66mである。中央で径0.46m、深さ0.05mの抜取



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
礎石跡17	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト		撹取痕
	2	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	径10cm以内の円礫を多量含む	根固め
	3	10YR4/4　褐色	砂質シルト	暗褐色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡18	1	10YR6/4　にぶい黄橙色	砂質シルト	径1cm以内の暗褐色砂質シルトブロックを少量含む	根固め
	2	10YR5/6　黄褐色	シルト	径5cm以内のにぶい黄褐色・灰黄褐色シルトブロックを含む	掘り方埋土
礎石跡19	1	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質シルト	暗褐色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡20	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径3cm以内の褐色砂質シルトブロックを少量含む	撹取痕
	2	10YR4/4　褐色	シルト	径20cm以内の円礫、砂粒を含む	根固め
	3	10YR6/6　明黄褐色	シルト	褐色シルトブロックが縞状となり、径5cm以内の円礫を微量含む	掘り方埋土

第85図　９号礎石建物跡　礎石跡（４）

痕とみられる不整円形のプランを検出した。堆積土はブロック土と円礫を含むⅢ層類似層である。根固めは径10cm以内の円礫を多量に詰め、中央が窪んでいる。根固石は掘り方埋土に沿って詰められ、中央にはまばらであり、根固石が抜き取られている可能性がある。掘り方埋土は暗褐色シルトブロックと径10cm以内の円礫を少量含み縞状となっており、厚さは0.11－0.20mである。

礎石跡22

主屋北辺にある礎石跡である。ＳＤ76で東側を壊されている。掘り方形状は円形とみられ、残存規模は径0.47mで小型なものである。掘り方埋土は灰黄褐色シルトブロックを含んでいる。またプラン上面で平坦面を上側にして設置された礎石とみられる楕円形の円礫を確認した。礎石の可能性のある石材を確認したのはこれ一つのみである。礎石の大きさは長径35cm、短径23cm、厚さ12cmで、上面標高は12.36mである。礎石の長軸方向は主屋北辺と合わせて置かれている。礎石跡には根固石と考えられる円礫は確認できなかった。ＳＢ９の礎石跡の検出標高は平均12.17m、最高は12.27mであり、礎石より0.1－0.2mほど低い。このことから礎石の位置する建物東端部分の当初の標高は建物内部よりも低くなっており、このことが理由で後世の耕作の撹拌を受けなかった可能性が高い。

礎石跡23

主屋北東隅にある礎石跡で、ＳＤ76で西側を壊されている。掘り方形状は楕円形とみられ、残存規模は長径0.68m、短径0.43mである。根固め形状は不整楕円形とみられ、残存規模は長径0.48m、短径0.36mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは径20cm以内の円礫を多量に詰め、根固石は径５－15cmの円礫が多く、径３cm以内の小円礫を少量含み、中央に密に詰めている。掘り方埋土は暗褐色シルトブロックを含み、厚さは0.06－0.10mである。

礎石跡24

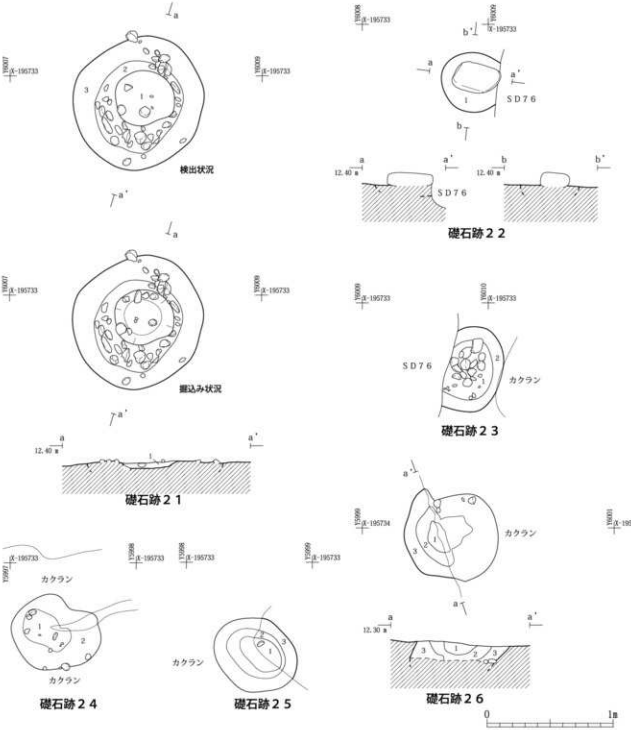
主屋内部にある礎石跡で、撹乱で上面を壊されている。掘り方形状は不明で、残存規模は長径0.72m、短径0.60mである。根固め形状も不明であるが、残存規模は長径0.40m、短径0.24mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは径５cm以内の円礫をわずかに詰めている。掘り方埋土は暗褐色シルトブロックを主体とし円礫を僅かに含み、厚さは0.05－0.24mである。

礎石跡25

主屋内部の礎石跡で、撹乱で西側の大半を壊されている。掘り方形状は楕円形で、残存規模は長径0.70m、短径0.58mである。堆積土は３層に分かれ、２層の範囲は長径0.49m、短径0.36mで、１層の範囲は長径0.38m、短径0.24mである。１層の堆積土はブロック土であり、他の礎石跡の抜取痕とは異なることから抜取痕と断定はできない。２層もブロック土であり、根固石は確認できず、根固めかは不明である。検出標高は極端に低くはないことから、根固石が残存していない可能性もある。３層は暗褐色シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.08－0.13mである。１－３層は全てブロック土で、円礫は殆ど含まれない。これらについては掘り方埋土の単位の違いの可能性もある。

礎石跡26

主屋内部の礎石跡である。撹乱で北東側を壊されている。掘り方形状は円形か楕円形とみられ、残存規模は径0.74mである。堆積土は３層に分かれ、２層の範囲は長径0.50m、短径0.43mで、１層の範囲は長径0.26m、短径0.14m、深さ0.10mである。撹乱壁面の観察では、掘り方壁面は南側がやや内傾し、北側が外へ開いている。１層はブロック土で、抜取痕と断定することはできなかった。２層もまたブロック土であり、根固石は確認できなかった。検出標高は極端に低くはないことから、根固石が残存しない可能性もある。３層の掘り方埋土は暗褐色シルトブロックと径５cm以内の円礫を僅かに含み縞状となっており、厚さは0.08－0.14mである。１－３層は全てブロック土で、円礫は３層に僅かに含まれるのみである。これらについては掘り方埋土の単位の違いの可能性もある。



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
礎石跡21	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径3cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロックを少量、径5cm以内の円礫を微量含む	抜取痕
	2	10YR6/4　にぶい黄橙色	砂質シルト	径1cm以内の暗褐色砂質シルトブロックを少量、径10cm以内の円礫を多量含む	根固め
	3	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質シルト	暗褐色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡22	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径5cm以内の灰黄褐色シルトブロックを含む	掘り方埋土
礎石跡23	1	10YR4/4　褐色	シルト	径1cm以内の暗褐色砂質シルトブロックを少量、径20cm以内の円礫を多量含む	根固め
	2	10YR4/4　褐色	砂質シルト	暗褐色シルトブロックを含む	掘り方埋土
礎石跡24	1	10YR4/4　褐色	シルト	径5cm以内の円礫、砂粒を含む	根固め
	2	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質シルト	暗褐色シルトブロックを含む	掘り方埋土
礎石跡25	1	10YR6/3　にぶい黄橙色	シルト	黒褐色砂質シルトブロック、砂粒を含む	抜取痕？
	2	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	径1cm以内のにぶい黄褐色砂質シルトブロックを少量含む	根固めか掘り方埋土
	3	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	暗褐色シルトブロックが縞状となり、径5cm以内の円礫を微量含む	掘り方埋土
礎石跡26	1	10YR5/1　褐灰色	シルト	径3cm以内のにぶい黄橙色シルトブロックを微量含む	根固めか掘り方埋土
	3	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	暗褐色シルトブロックが縞状となり、径5cm以内の円礫を微量含む	掘り方埋土

第86図　９号礎石建物跡　礎石跡（５）

礎石跡27

主屋内部の礎石跡である。撹乱で東側と北側を壊され、掘り方形状は半円形に残存する。残存する掘り方規模は長径0.75m、短径0.42m、深さ0.31mである。根固め形状は半円形に残存し、残存規模は長径0.57m、短径0.30m、厚さ0.20mである。撹乱壁面の観察では、掘り方壁面は外へ開き、底面は中央が深くなっている。抜取痕は確認できなかった。根固めは径10cm以内の円礫を詰め、根固石は径５－10cmの円礫が多く、径３cm以内の小円礫は少なく、根固め下部まで密に厚く詰めている。掘り方埋土は少量のにぶい黄橙色シルトブロックを含み、厚さは0.07－0.09mである。

礎石跡28

主屋内部の礎石跡で、掘込み調査を行っている。P44で北側の一部、撹乱で南西側を壊され、掘り方形状は半円形に残存する。残存する掘り方規模は長径0.88m、短径0.76mである。根固め形状は不整楕円形とみられ、残存規模は長径0.65m、短径0.49mである。撹乱壁面の観察では、掘り方壁面は急角度で外に開いている。根固めの中央で長径0.40m、短径0.25m、深さ0.09mの抜取痕とみられる不整形に残存するプランを検出した。堆積土にはⅢ層類似層が入っている。根固めは径20cm以内の円礫を詰め、根固石は少量を全体にまばらに詰めている。掘り方自体が深いことから、根固石を深くまで詰めていない可能性もある。掘り方埋土には褐色シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.12－0.19mである。

礎石跡29

主屋内部の礎石跡で、撹乱で東側を壊され、掘り方形状は楕円形とみられる。残存する掘り方規模は長径0.70m、短径0.58m、深さは0.24mである。堆積土は３層に分かれ、２層の範囲は長径0.61m、短径は0.48m、深さ0.13mである。１層は長径0.39m、短径0.3mの不整楕円形で、径10cm以内の円礫を含むシルトである。２層はブロック土で、わずかに円礫を含むのみである。３層の掘り方埋土は暗褐色シルトブロックを含んでいる。根固石と思われる円礫は１層中に多く、２層にはほとんど含まれないため、１層が根固めの可能性がある。また２層は掘り方埋土内での違いの可能性もある。

礎石跡30

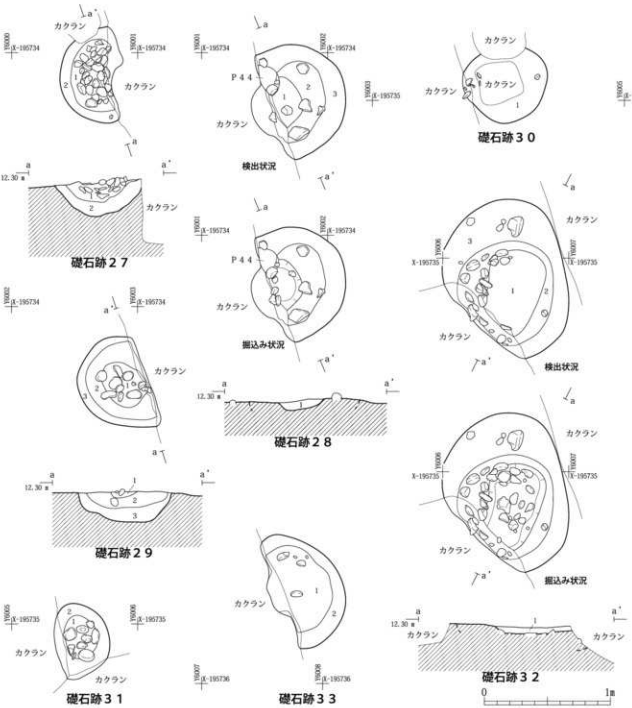
主屋内部の礎石跡で、撹乱で中央部と東側と南側を壊されており、掘り方形状は不整円形である。残存する掘り方規模は径0.68mである。抜取痕や根固めは確認できなかった。掘り方埋土は暗褐色シルトブロックと径５cm以内の円礫を僅かに含んでいる。

礎石跡31

主屋内部の礎石跡である。撹乱で西側と南側を壊され、掘り方形状は不明である。残存する掘り方規模は長径0.57m、短径0.43mである。根固め形状は楕円形で、残存規模は長径0.34m、短径0.25mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは径20cm以内の円礫を詰め、根固石は径５－15cmの円礫の平坦面を上側に向けて詰めている。掘り方埋土は暗褐色シルトブロックを含み、厚さは0.08－0.12mである。

礎石跡32

主屋内部の礎石跡で、掘込み調査を行っている。建物内では最大規模の礎石跡である。撹乱で南西側を壊され、掘り方形状は不整楕円形である。残存する掘り方規模は長径1.28m、短径0.96mである。根固め形状は不整円形で径0.79mである。根固め中央で残存する長径0.62m、短径0.46m、深さ0.05mの抜取痕とみられる不整楕円形のプランを検出した。堆積土にはⅢ層類似層が入り、瓦片を含んでいる。根固めは径10cm以内の円礫を詰め、中央が窪んでおり、根固石は掘り方埋土に沿って詰められ、西側に多い。根固石は窪み底面や東側はまばらであり、根固石が抜き取られている可能性もある。掘り方埋土にはにぶい黄橙色シルトと褐色砂質シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.09－0.33mである。



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
礎石跡27	1	10YR4/4　褐色	シルト	径5cm以内のにぶい黄橙色シルトブロックを微量、径10cm以内の円礫を密に含む	粗固め
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径5cm以内のにぶい黄橙色シルトブロックを少量含む	掘り方埋土
礎石跡28	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト		抜取痕
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径10cm以内の暗褐色シルトブロック、円礫を微量含む	粗固め
	3	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	褐色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
	4	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	径10cm以内の円礫を含む	粗固め
礎石跡29	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径5cm以内の暗褐色シルトブロックを少量含む	掘り方埋土？
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径5cm以内の暗褐色シルトブロックを含む	掘り方埋土
礎石跡30	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径5cm以内の暗褐色シルトブロック、径5cm以内の円礫を微量含む	掘り方埋土
礎石跡31	1	10YR4/4　褐色	シルト	径3cm以内のにぶい黄橙色シルトブロックを微量、径20cm以内の円礫を含む	粗固め
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径5cm以内の暗褐色シルトブロックを含む	掘り方埋土
礎石跡32	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径5cm以内のにぶい黄褐色砂質シルトブロックを少量含む	抜取痕
	2	10YR5/4　にぶい黄橙色	砂質シルト	径3cm以内のにぶい黄褐色シルトブロックを少量、径10cm以内の円礫を含む	粗固め
	3	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	にぶい黄橙色シルト・褐色砂質シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡33	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径10cm以内の暗褐色シルトブロック、径10cm以内の円礫を微量含む	粗固め
	2	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	にぶい黄橙色シルト・褐色砂質シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土

第87図　9号礎石建物跡　礎石跡（6）

遺物は抜取痕から平瓦、熨斗瓦が出土している。

礎石跡33

主屋内部の礎石跡である。撹乱で南西側を壊され、掘り方形状は半円形に残存する。残存する掘り方規模は長径0.92m、短径0.58mである。根固め形状も半円形に残存し、残存規模は長径0.70m、短径0.51mである。撹乱壁面の観察では、掘り方壁面は大きく開き、底面中央は深くなっている。抜取痕は確認できなかった。根固めは径10cm以内の円礫を詰め、根固石は全体にまばらに詰めている。掘り方埋土はにぶい黄橙色シルトと褐色砂質シルトブロックを含み、縞状となっており、厚さは0.05－0.12mである。

礎石跡34

主屋東辺の小規模な礎石跡である。撹乱で南側を壊されており、掘り方形状は不整楕円形で、残存規模は長径0.32m、短径0.20mである。根固め形状も不整楕円形で、残存規模は長径0.27m、短径0.16mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは径５cm以内の円礫を少量詰め、掘り方埋土に比べブロック土の径が小さく、明色である。掘り方埋土はにぶい黄橙色シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.02mである。

礎石跡35

主屋内部の礎石跡である。撹乱で北東側を壊されている。掘り方形状は楕円形とみられ、残存規模は長径0.45m、短径0.37mである。検出標高は周辺の礎石跡と比べて極端に低いものではないが、抜取痕や根固めは確認できなかった。掘り方埋土はにぶい黄橙色シルト、褐色砂質シルトブロックを含み縞状となっている。

礎石跡36

主屋東辺の小規模な礎石跡である。ＳＤ76で西側を壊されており、掘り方形状は不整形で、残存規模は長径0.36m、短径0.33mである。抜取痕や根固めは確認できなかった。掘り方埋土はにぶい黄橙色シルトブロックを含み縞状となっており、根固石とみられる円礫はほとんど含まれていない。礎石跡35とは東西に並ぶが、礎石跡35より西側では同じ並びの礎石跡は確認できない。

礎石跡37

主屋西辺の礎石跡である。六角塔基礎により上面全体を削平されている。掘り方形状は不整円形で、残存規模は径0.51mである。残存が悪く、抜取痕や根固めは確認できなかった。掘り方埋土はにぶい黄褐色、暗褐色シルトブロックを含み縞状となっており、円礫は含まれない。

礎石跡38

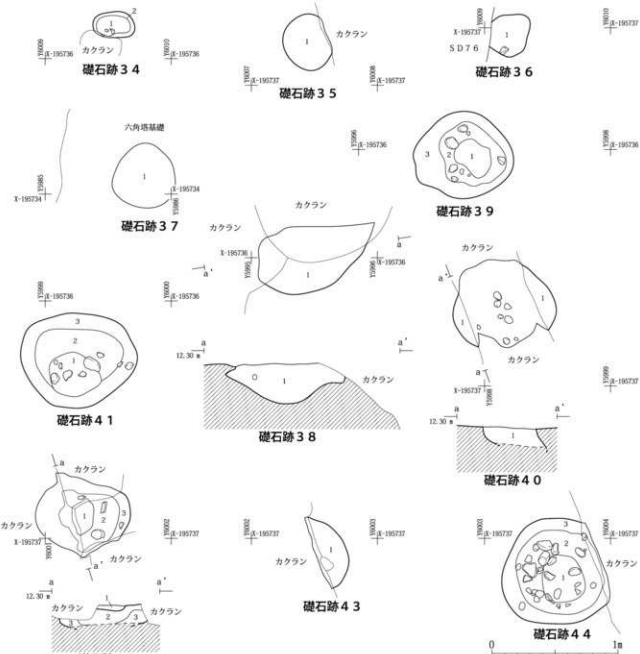
主屋内部の礎石跡である。撹乱で西側と北側の大半を壊されており、掘り方形状は不明である。残存する掘り方規模は長径1.03m、短径0.54m、深さ0.31mであり、大型の礎石跡であったとみられる。抜取痕や根固めは確認できなかった。掘り方埋土はにぶい黄橙色砂質シルトブロックを含み一部縞状となっており、根固石とみられる円礫をほとんど含まないことから、底面近くが残存していると考えられる。東側で抜取痕や根固めを確認した礎石跡39とほぼ同じ標高で検出したが、礎石跡38は根固めが浅い可能性がある。

礎石跡39

主屋内部の礎石跡である。掘り方形状は不整形で、残存規模は長径0.78m、短径0.68mである。根固め形状も不整形で、長径0.52m、短径0.47mである。中央で長径0.31m、短径0.23mの抜取痕とみられる不整楕円形のプランを検出した。堆積土はⅢ層類似層である。根固めは径10cm以内の円礫を少量詰め、根固石は全体にまばらに詰めている。掘り方埋土は径５cm以内のにぶい黄橙色シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.05－0.23mである。

礎石跡40

主屋内部の礎石跡である。撹乱で中央部を壊されており、掘り方形状は円形か楕円形とみられる。残存する掘り方規模は長径0.82m、短径0.70mである。抜取痕や根固めは確認できなかった。根固石とみられる円礫が中央部の撹



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
礎石跡34	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径3cm以内のにぶい黄橙色シルトブロックを微量、径5cm以内の円礫を少量含む	根固め
	2	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	にぶい黄橙色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡35	1	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	にぶい黄橙色シルト・褐色砂質シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡36	1	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	にぶい黄橙色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡37	1	10YR5/6　黄褐色	シルト	径20cm以内のにぶい黄褐色・暗褐色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡38	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	にぶい黄橙色砂質シルトブロックが一部縞状となる	掘り方埋土
礎石跡39	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト		抜取痕
	2	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径5cm以内の暗褐色シルトブロックを少量、径10cm以内の円礫を微量含む	根固め
	3	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径5cm以内のにぶい黄橙色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡40	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	にぶい黄褐色シルトブロックが縞状となり、砂粒を含む	掘り方埋土
礎石跡41	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径3cm以内の暗褐色砂質シルトブロックを少量、径10cm以内の円礫を含む	抜取痕
	2	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径5cm以内の暗褐色シルトブロックを少量、径20cm以内の円礫を微量含む	根固め
	3	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径5cm以内の暗褐色シルトブロックを含む	掘り方埋土
礎石跡42	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	暗褐色砂質シルトブロックを少量含む	抜取痕
	2	10YR4/4　褐色	シルト	径1cm以内のにぶい黄褐色砂質シルトブロックを少量、径10cm以内の円礫を含む	根固め
	3	10YR3/3　暗褐色	シルト	にぶい黄橙色シルト・褐色砂質シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡43	1	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	にぶい黄橙色シルト・褐色砂質シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡44	1	10YR4/4　褐色	シルト	径1cm以内のにぶい黄褐色砂質シルトブロックを少量、径10cm以内の円礫を含む	抜取痕
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径3cm以内の褐色砂質シルトブロックを少量、径20cm以内の円礫を含む	根固め
	3	10YR6/3　にぶい黄橙色	シルト	褐色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土

第88図　9号礎石建物跡　礎石跡（7）

乱底面に僅かに残存することから、わりと深い位置まで根固石を詰めていたとみられる。掘り方埋土はにぶい黄褐色シルトブロックを含み縞状となっている。

礎石跡41

主屋内部の礎石跡である。掘り方形状は不整楕円形で、残存規模は長径0.93m、短径0.75mである。根固め形状は隅丸三角形に近く、残存規模は長径0.70m、短径0.53mである。南側で長径0.42m、短径0.35mの抜取痕とみられる不整楕円形のプランを検出した。堆積土はⅢ層類似層である。根固めは径20cm以内の円礫を詰め、円礫は根固めよりも抜取痕に多くみられる。根固めとしたものは掘り方の単位の違いによるものの可能性もある。掘り方埋土は暗褐色シルトブロックを含み、円礫を僅かに含み、厚さは0.08－0.12mである。

礎石跡42

主屋内部の礎石跡である。撹乱で西側、南側、北側を壊されており、掘り方形状は不明である。残存する掘り方規模は長径0.75m、短径0.65mである。根固め形状も不明で、残存規模は長径0.51m、短径0.48mである。中央で長径0.24m、短径0.18mの抜取痕とみられる不整形のプランを検出した。堆積土はⅢ層類似層である。根固めは径10cm以内の円礫を少量詰めている。検出標高は周辺に比べ極端に低くはないが、根固石はほとんど確認できないことから、根固め部分が浅く根固石が残存しないか、あるいは本来根固め石が少ない可能性もある。掘り方埋土にはにぶい黄橙色シルトと褐色砂質シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.06－0.08mである。

礎石跡43

主屋内部の礎石跡である。撹乱で南西側を壊され、掘り方形状は半円形に残存する。残存する掘り方規模は長径0.60m、短径0.24mである。抜取痕や根固めは確認できなかった。掘り方埋土にはにぶい黄橙色シルトと褐色砂質シルトブロックを含み縞状となっている。撹乱壁面の観察から、掘り方は西側の礎石跡42に比べ浅いとみられる。

礎石跡44

主屋内部の礎石跡である。撹乱で北東側を壊されている。掘り方形状は円形とみられる。残存する掘り方規模は径0.88mである。根固め形状も円形で、残存規模は径0.71mである。根固めの中央で長径0.39m、短径0.34mの抜取痕とみられる不整楕円形のプランを検出した。堆積土はⅢ層類似層である。根固めは径20cm以内の円礫を少量詰め、根固石は北西側に密集している。掘り方埋土は褐色シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.06－0.14mである。

礎石跡45

主屋内部の礎石跡である。撹乱で東側と西側を壊され、掘り方形状は不明である。残存する掘り方規模は長径0.49m、短径0.24mである。中央部が残存しているとみられるが、抜取痕や根固めは確認できなかった。掘り方埋土は褐色シルトブロックを含み縞状となっている。配置は周囲の柱筋とは合っておらず、どのように組み合うのかは不明である。

礎石跡46

主屋内部の礎石跡である。撹乱で北側と中央を壊されており、掘り方形状は半円形に残存する。残存する掘り方規模は長径0.75m、短径0.50m、深さ0.20mである。抜取痕や根固めは確認できなかった。掘り方埋土はにぶい黄褐色砂質シルトブロックを含み縞状となっており、円礫を僅かに含んでいる。

礎石跡47

主屋内部の礎石跡である。撹乱で北西側を壊されている。掘り方形状は不整円形とみられ、残存規模は径0.92mである。根固め形状は不整形で、残存規模は長径0.74m、短径0.56mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは径10cm以内の円礫を少量詰めており、掘り方埋土はにぶい黄橙色シルト、褐色砂質シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.07－0.25mである。

礎石跡48

主屋東辺の礎石跡である。ＳＤ76で西側を壊されているが、掘り方形状は円形とみられる。残存する掘り方規模は径0.61mである。根固め形状は円形とみられ、残存規模は径0.54mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは径20cm以内の円礫を多量詰め、根固石は径５－15cmの円礫が多く、径３cm以内の小円礫を僅かに含み、中央に密集して詰めている。掘り方埋土はにぶい黄橙色シルトと褐色砂質シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.08mである。

礎石跡49

主屋内部の小型の礎石跡である。撹乱で東側を壊されている。掘り方形状は円形で、残存規模は径0.51mである。根固め形状は不整形で、残存規模は長径0.35m、短径0.32mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは中央に平坦面を上側に向け置かれた径30cmの大型の円礫が１石あるのみである。掘り方埋土は暗褐色シルトブロックを含み、円礫を僅かに含み、厚さは0.05－0.13mである。

礎石跡50

主屋内部の礎石跡である。ＳＤ76より古く、撹乱で西側を壊され、掘り方形状は不明である。残存する掘り方規模は長径0.58m、短径0.50mである。根固め形状も不明であるが、残存規模は長径0.44m、短径0.38mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは径10cm以内の円礫を詰め、根固石は南東側に多い。掘り方埋土はにぶい黄橙色シルトと褐色砂質シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.12－0.17mである。北側に位置する礎石跡46と南側の62の中間には位置せず、礎石跡46とは半間離れた位置にある。

礎石跡51

主屋内部の礎石跡で、掘込み調査を行っている。Ｐ29、ＳＤ76より古く、掘り方形状は半円形に残存する。残存する掘り方規模は長径0.99m、短径0.55mである。根固め形状は不整形で、残存規模は長径0.44m、短径0.38mである。根固め中央で長径0.30m、短径0.27m、深さ0.08mの抜取痕とみられる不整形に残存するプランを検出した。堆積土はⅢ層類似層である。根固めは径５cm以内の円礫を詰め、根固石は東側に多く、Ｐ29が掘り込まれている西側ではほとんど確認できないことから、後に抜き取られている可能性もある。掘り方埋土は灰黄褐色シルトブロックと砂粒を含み縞状となっており、厚さは0.11－0.28mである。位置は礎石跡50同様に、北側の礎石跡47から半間離れた位置にある。

礎石跡52

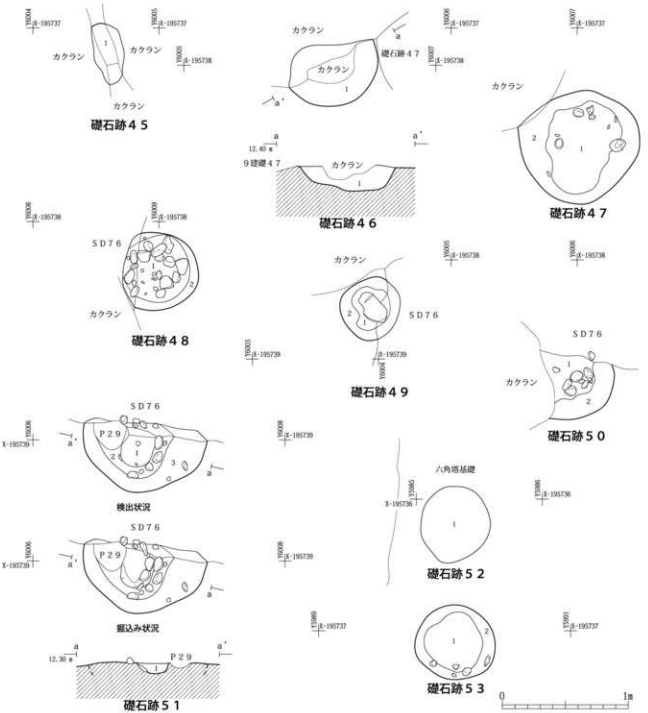
主屋西辺の礎石跡である。六角塔基礎により上面全体を削平されている。掘り方形状は楕円形で、残存規模は長径0.61m、短径0.55mである。抜取痕や根固めは確認できなかった。掘り方埋土はにぶい黄褐色、暗褐色シルトブロックを含み縞状となっており、円礫を僅かに含んでいる。

礎石跡53

主屋内部の礎石跡である。掘り方形状は円形で、残存規模は径0.64mである。根固め形状は不整形で、残存規模は径0.44mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは径10cm以内の円礫を少量詰めている。掘り方埋土は灰黄褐色シルトブロックと径５cm以内の円礫を少量含み縞状となっており、厚さは0.05－0.10mである。円礫は根固めよりも掘り方埋土に多く含まれている。

礎石跡54

主屋内部の礎石跡である。撹乱で東側と北側を壊され、掘り方形状は不明である。残存する掘り方規模は長径0.60m、短径0.44m、深さ0.24mである。根固め形状も不明であり、残存規模は長径0.45m、短径0.36m、厚さ0.16mである。根固めはブロック土が主体で、根固石は確認できなかった。根固め中央には径１cm以内の円礫を含む砂質土を詰めており、この部分に抜取痕が残存している可能性もある。掘り方埋土は径３cm以内の黒褐色シルトブロック



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
礎石跡45	1	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	褐色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡46	1	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色砂質シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡47	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径3cm以内の褐色砂質シルトブロックを少量、径10cm以内の円礫を少量含む	根固め
	2	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	にぶい黄橙色シルト・褐色砂質シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡48	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	径20cm以内の円礫を多量含む	根固め
	2	10YR3/3　暗褐色	シルト	にぶい黄橙色シルト・褐色砂質シルトブロックが縞状となり、径20cm以内の円礫を多量含む	掘り方埋土
礎石跡49	1	10YR4/4　褐色	シルト	径3cm以内のにぶい黄褐色砂質シルトブロック、径30cm以内の円礫含む	根固め
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径5cm以内の暗褐色シルトブロックを含む	掘り方埋土
礎石跡50	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径3cm以内の褐色砂質シルトブロックを少量、径10cm以内の円礫、砂粒を含む	根固め？
	2	10YR3/3　暗褐色	シルト	にぶい黄橙色シルト・褐色砂質シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡51	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径1cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロックを少量含む	後取痕
	2	10YR6/3　にぶい黄橙色	シルト	径5cm以内の灰黄褐色シルトブロック、径5cm以内の円礫を含む	根固め
	3	10YR6/3　にぶい黄橙色	シルト	灰黄褐色シルトブロックが縞状となり、砂粒を含む	掘り方埋土
礎石跡52	1	10YR5/6　黄褐色	シルト	径20cm以内のにぶい黄褐色・暗褐色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡53	1	10YR4/4　褐色	シルト	径3cm以内のにぶい黄橙色シルトブロック、径10cm以内の円礫を少量含む	根固め
	2	10YR6/3　にぶい黄橙色	シルト	灰黄褐色シルトブロックが縞状となり、径5cm以内の円礫を少量、砂粒含む	掘り方埋土

第89図　９号礎石建物跡　礎石跡（８）

を含み、厚さは0.04－0.09mである。

礎石跡55

主屋内部の礎石跡である。周囲を撹乱に壊され、掘り方形状は不明である。残存する掘り方規模は長径1.01m、短径0.87mであり、大型の礎石跡と考えられる。根固め形状も不明であるが、残存規模は長径0.64m、短径0.32mである。抜取痕は確認できなかった。根固めはブロック土が主体で、根固石とみられる円礫を僅かに確認した程度である。掘り方埋土はにぶい黄橙色シルトと褐色砂質シルトブロック、円礫と砂粒を僅かに含み縞状となっている。

礎石跡56

主屋内部の礎石跡で、掘込み調査を行っている。撹乱で西側を壊され、掘り方形状は不整楕円形で、残存規模は長径0.84m、短径0.73mである。根固め形状は楕円形で、残存規模は長径0.54m、短径0.46mである。中央で長径0.43m、短径0.27m、深さ0.05mの抜取痕とみられる不整楕円形のプランを検出した。堆積土はⅢ層類似層である。根固めは径20cm以内の円礫を少量詰め、中央が窪んでいる。根固石は検出段階ではほとんど確認できず、掘込みにより窪み底面で僅かに確認したのみであり、抜き取られている可能性もある。掘り方埋土にはにぶい黄橙色シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.05－0.24mである。

礎石跡57

主屋内部の礎石跡である。撹乱で東側を壊され、掘り方形状は半円形に残存する。残存する掘り方規模は長径0.44m、短径0.18m、深さ0.12mである。抜取痕や根固めは確認できなかった。掘り方埋土はにぶい黄褐色シルトブロックと砂粒を含み縞状となっている。

礎石跡58

主屋内部の礎石跡である。掘り方形状は楕円形で、残存規模は長径0.77m、短径0.62mである。堆積土は３層に分かれ、２層の範囲は長径0.52m、短径0.45mで、１層の範囲は径0.33mである。１層は径５cm以内の円礫を少量含むブロック土で、円礫は含まれるが、抜取痕か根固めかは断定できない。また２層もブロック土が主体であるが、円礫は含まれないことから掘り方埋土の単位の可能性もある。掘り方埋土はにぶい黄橙色シルトと褐色砂質シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.06－0.11mである。

礎石跡59

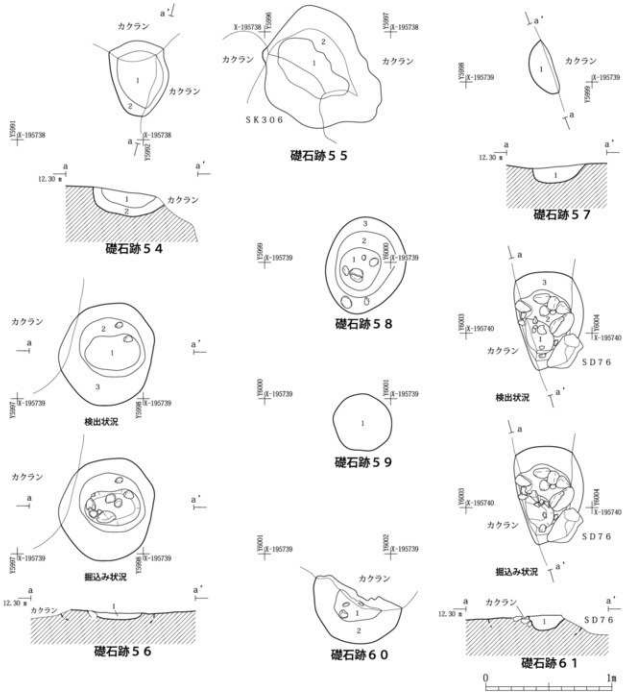
主屋内部の礎石跡である。掘り方形状は円形で、残存規模は径0.47mである。抜取痕や根固めは確認できなかった。掘り方埋土は径５cm以内の灰黄褐色、暗褐色シルトブロックを少量と砂粒を含み、円礫が僅かに含まれる。西側の礎石跡58や東側の60とほぼ同じ高さで検出しているにもかかわらず、これらと比較して小規模である。

礎石跡60

主屋内部の礎石跡である。撹乱で北側を壊され、掘り方形状は半円形に残存する。残存する掘り方規模は長径0.73m、短径0.41mである。根固めも半円形に残存しており、残存規模は長径0.36m、短径0.18mである。抜取痕は確認できなかった。根固めはブロック土が主体で、根固石は少量を確認したのみである。掘り方埋土は褐色砂質シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.14－0.21mである。

礎石跡61

主屋内部の礎石跡で、掘込み調査を行っている。ＳＤ76で東側、ＳＤ77で南側、撹乱で西側を壊されており、掘り方形状は不明である。残存する掘り方規模は長径0.76m、短径0.53mである。根固め形状も不明で、残存規模は長径0.56m、短径0.42mである。南側で長径0.28m、短径0.20m、深さ0.12mの抜取痕とみられる不整形に残存するプランを検出した。堆積土は径５cm以内の円礫を少量含むⅢ層類似層である。根固めは径20cm以内の円礫を多く詰め、南側が窪んでおり、根固石は径５－15cmの円礫が多く、径３cmの小円礫を僅かに含んでいる。掘り方埋土は暗褐色シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.14－0.18mである。



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
礎石跡54	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径5cm以内の黄褐色砂質シルトブロックを含む	根固め
	2	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径3cm以内の暗褐色シルトブロックを含む	掘り方埋土
礎石跡55	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径5cm以内の暗褐色シルトブロックを少量含む	根固め
	2	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	にぶい黄橙色シルト・褐色砂質シルトブロックが縞状となり、砂粒を含む	掘り方埋土
礎石跡56	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト		抜取痕
	2	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質シルト	径5cm以内のにぶい黄橙色シルトブロックを微量含む	根固め
	3	10YR6/3　にぶい黄橙色	シルト	にぶい黄橙色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡57	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	にぶい黄橙色シルトブロックが縞状となり、砂粒を含む	掘り方埋土
礎石跡58	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径5cm以内のにぶい黄橙色シルトブロックを微量、径5cm以内の円礫を含む	抜取痕？
	2	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径3cm以内のにぶい黄橙色シルトブロック、砂粒を含む	根固め？
	3	10YR6/3　にぶい黄橙色	シルト	にぶい黄橙色シルト・褐色砂質シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡59	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径5cm以内の炭黄褐色・暗褐色シルトブロックを少量、砂粒を含む	掘り方埋土
礎石跡60	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径1cm以内の暗褐色シルトブロックを少量、径5cm以内の円礫を含む	根固め
	2	10YR6/3　にぶい黄橙色	シルト	褐色砂質シルトブロックが縞状となり、砂粒を含む	掘り方埋土
礎石跡61	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径5cm以内の円礫を微量含む	抜取痕
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径3cm以内の褐色シルトブロック、径20cm以内の円礫を微量含む	根固め
	3	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	暗褐色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土

第90図　９号礎石建物跡　礎石跡（９）

礎石跡62

主屋内部の礎石跡である。撹乱で南西側を壊され、掘り方形状は半円形に残存する。残存する掘り方規模は長径0.61m、短径0.34mである。根固め形状も半円形に残存し、残存規模は長径0.54m、短径0.26mである。根固めは径10cm以内の円礫を詰め、根固石はまばらであるが、下部には通常根固石としては使用しない角礫を含んでおり、抜取痕の可能性もある。掘り方埋土は暗褐色シルトブロックと砂粒を含み縞状となっており、厚さは0.03－0.08mである。

礎石跡63

主屋内部の礎石跡である。P58より古く、撹乱で南側を壊されており、掘り方形状は不明である。残存する掘り方規模は長径0.86m、短径0.61mである。根固め形状は楕円形で、残存規模は長径0.45m、短径0.30mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは東側にあり、径20cm以内の円礫を詰めている。根固石は径5－15cmの円礫が多く、径3cm以内の小円礫や瓦片を含み、撹乱を受けている可能性がある。掘り方埋土は暗褐色シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.08－0.29mである。他の礎石跡に比べ、規模のわりには根固め範囲が狭く、反対に掘り方埋土の範囲が広いものである。

遺物は根固めから平瓦、丸瓦か輪違いが出土している。

礎石跡64

主屋東辺の礎石跡である。西側の東西の柱筋にはのらず、北側の礎石跡48から1間離れた位置にある。撹乱で東側を壊されており、掘り方形状は楕円形に残存する。残存する掘り方規模は長径0.76m、短径0.52mである。根固め形状は不整楕円形で、残存規模は長径0.62m、短径0.44mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは径10cm以内の円礫を多量詰め、根固石は密集しており、径5－10cmの円礫が多く、径3cm以内の小円礫も少量含んでいる。根固石は中央部に密集しており、一部掘り方埋土に突き込まれている。掘り方埋土はにぶい黄橙色シルトブロックを含み、厚さは0.10mである。

礎石跡65

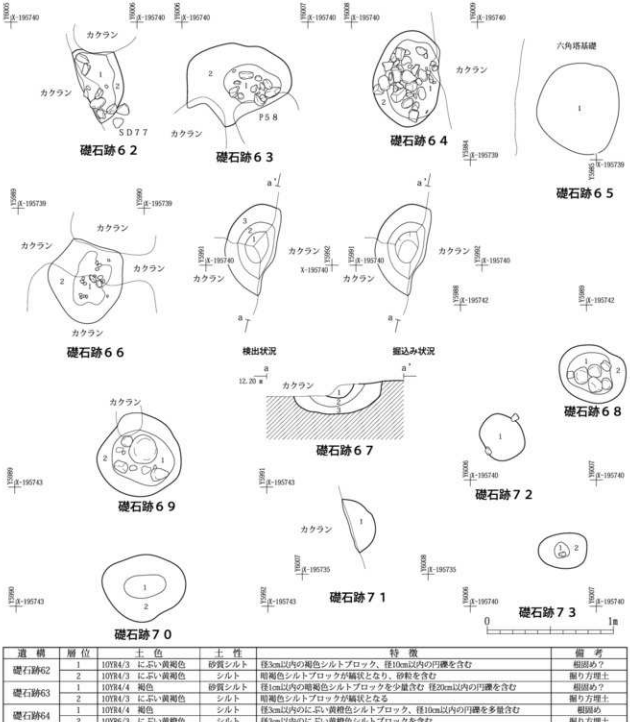
主屋西辺の礎石跡である。六角塔基礎により上面全体を削平されている。掘り方形状は不整楕円形で、残存規模は長径0.72m、短径0.65mである。抜取痕や根固めは確認できなかった。掘り方埋土はにぶい黄褐色、暗褐色シルトブロックを含み縞状となっている。

礎石跡66

主屋内部の礎石跡である。撹乱で上面全体を削平され、掘り方形状は不整形である。残存する掘り方規模は長径0.62m、短径0.60mである。根固め形状は不整形で、残存規模は長径0.43m、短径0.26mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは径5cm以内の円礫をまばらに詰めている。掘り方埋土は暗褐色シルトブロックと円礫を僅かに含み縞状となっており、厚さは0.09－0.22mである。北側の浅い撹乱底面ではこの掘り方埋土は確認できず、掘り方自体は浅いものとみられる。

礎石跡67

主屋内部の礎石跡で、掘込み調査を行っている。撹乱で東側を壊され、掘り方形状は半円形に残存する。残存する掘り方規模は長径0.70m、短径0.40m、深さ0.26mである。堆積土は3層に分かれ、2層の残存範囲は長径0.44m、短径0.28m、厚さ0.20mである。1層の残存範囲は長径0.26m、短径0.18m、厚さ0.13mである。1層は径1cm以内の円礫を含む固く締まった層で、抜取痕と断定できない。2層はにぶい黄橙色砂質シルトブロックを含み縞状となっている。3層の掘り方埋土はにぶい黄褐色シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.08－0.14mである。1－3層は全て固くしまった土層で、根固石とみられる円礫は確認できなかったことから、掘り方埋土の一単位の可能性もある。



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
礎石跡62	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径3cm以内の褐色シルトブロック、径10cm以内の円礫を含む	根固め？
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	暗褐色シルトブロックが縞状となり、砂粒を含む	掘り方埋土
礎石跡63	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径1cm以内の暗褐色シルトブロックを少量含む 径20cm以内の円礫を含む	根固め？
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	暗褐色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡64	1	10YR4/4　褐色	シルト	径3cm以内のにぶい黄橙色シルトブロック、径10cm以内の円礫を多量含む	根固め
	2	10YR6/3　にぶい黄橙色	シルト	径3cm以内のにぶい黄橙色シルトブロックを含む	掘り方埋土
礎石跡65	1	10YR5/6　黄褐色	シルト	径20cm以内のにぶい黄褐色・暗褐色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡66	1	10YR4/4　褐色	シルト	にぶい黄橙色シルトブロック、径5cm以内の円礫を含む	根固め
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	暗褐色シルトブロックが縞状となり、砂粒を含む	掘り方埋土
礎石跡67	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径1cm以内の円礫を含む	抜取痕
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	にぶい黄橙色砂質シルトブロックが縞状となる	根固めか掘り方埋土
	3	10YR5/3　暗褐色	シルト	にぶい黄褐色シルトブロックが縞状となり、砂粒を含む	掘り方埋土
礎石跡68	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径3cm以内の褐色砂質シルトブロックを少量、径20cm以内の円礫を含む	根固め
	2	10YR6/3　にぶい黄橙色	シルト	灰黄褐色シルトブロックが縞状となり、砂粒を含む	掘り方埋土
礎石跡69	1	10YR4/4　褐色	シルト	径1cm以内の暗褐色シルトブロック、径20cm以内の円礫を含む	根固め
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径1cm以内の暗褐色シルトブロックを少量含む	掘り方埋土
礎石跡70	1	10YR4/4　褐色	シルト	にぶい黄橙色砂質シルトブロックを含む	根固め？
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径5cm以内の暗褐色シルトブロックを含む	掘り方埋土
礎石跡71	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径5cm以内の暗褐色シルトブロックを含む	掘り方埋土
礎石跡72	1	10YR4/4　褐色	シルト	にぶい黄橙色砂質シルトブロックを含む	掘り方埋土
礎石跡73	1	10YR6/4　にぶい黄橙色	砂質土	径5cm以内の円礫、砂粒含む	根固め
	2	10YR4/4　褐色	シルト	にぶい黄橙色砂質シルトブロックを含む	掘り方埋土

第91図　９号礎石建物跡　礎石跡（１０）

礎石跡68

主屋南辺の礎石跡である。掘り方形状は楕円形で、残存規模は長径0.54m、短径0.44mである。根固め形状は不整形で、残存規模は長径0.38m、短径0.31mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは径の揃った径20cm以内の円礫を数個詰め、根固石は中央に密集している。掘り方埋土は灰黄褐色シルトブロックと砂粒含み縞状となっており、厚さは0.04－0.12mである。

礎石跡69

主屋南辺の礎石跡である。掘り方形状は不整円形で、残存規模は径0.64mである。根固め形状は楕円形で、残存規模は長径0.50m、短径0.39mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは径20cm以内の円礫を少量詰め、根固石は径５－15cmの円礫が多い中、１石のみ径20cmの大型の円礫の平坦面を上側にして置いている。掘り方埋土は暗褐色シルトブロックを少量含み、厚さは0.05－0.14mである。

礎石跡70

主屋南辺の礎石跡である。掘り方形状は不整楕円形で、残存規模は長径0.66m、短径0.54mである。根固め形状は楕円形で、残存規模は長径0.33m、短径0.18mである。抜取痕は確認できなかった。根固めはブロック土のみで、根固石とみられる円礫は確認できなかった。掘り方埋土は暗褐色シルトブロック、円礫を僅かに含み、厚さは0.15－0.19mである。

礎石跡71

主屋内部の礎石跡である。掘り方規模は小規模であり、礎石跡33の北西側に隣接し、柱筋が通らない位置にあるが、堆積土が縞状となる掘り方埋土特有のブロック土であることから礎石跡とした。撹乱で南西側を壊されており、掘り方形状は半円形に残存する。残存する掘り方規模は長径0.44m、短径0.20mである。抜取痕や根固めは共に確認できなかった。掘り方埋土は暗褐色シルトブロックを含む。

礎石跡72

主屋内部の礎石跡である。掘り方規模は小規模であり、礎石跡50の南東側にあり、柱筋通らない位置にあるが、堆積土が縞状となることから礎石跡とした。残存する掘り方形状は不整楕円形で、残存規模は長径0.37m、短径0.32mである。抜取痕や根固めは共に確認できなかった。掘り方埋土はにぶい黄橙色砂質シルトブロックを含む。

礎石跡73

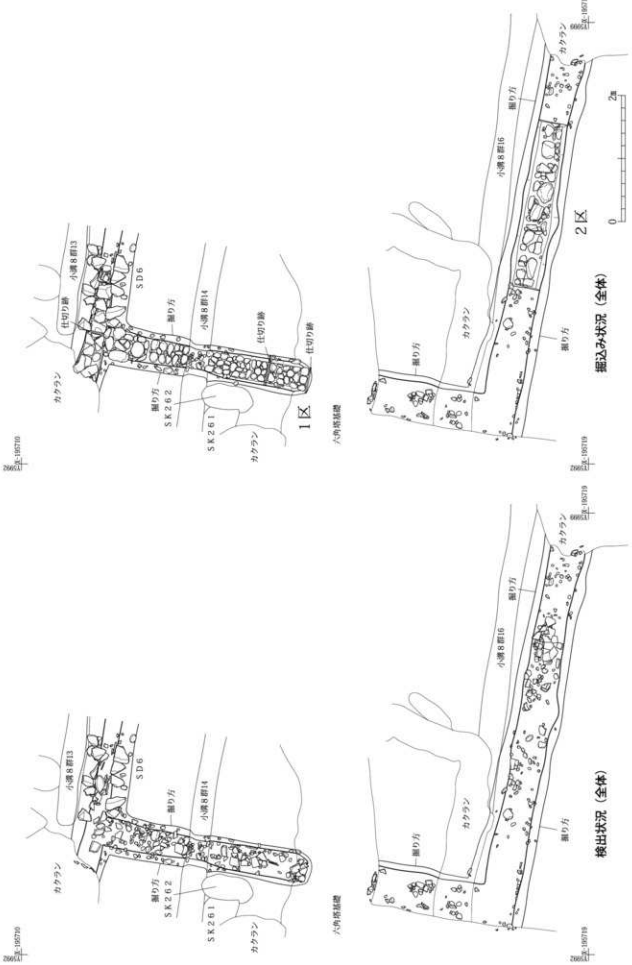
主屋内部の礎石跡である。規模は小規模であり、礎石跡51の南側に隣接している。堆積土が縞状となることから礎石跡とした。掘り方形状は不整楕円形で、残存規模は長径0.38m、短径は0.28mである。根固めは不整円形で、残存規模は径0.12mと非常に小さなものである。抜取痕は確認できなかった。根固めは径５cmの円礫を詰めている。掘り方埋土はにぶい黄橙色砂質シルトブロックを含み、厚さは0.06－0.15mである。

［溝　跡］

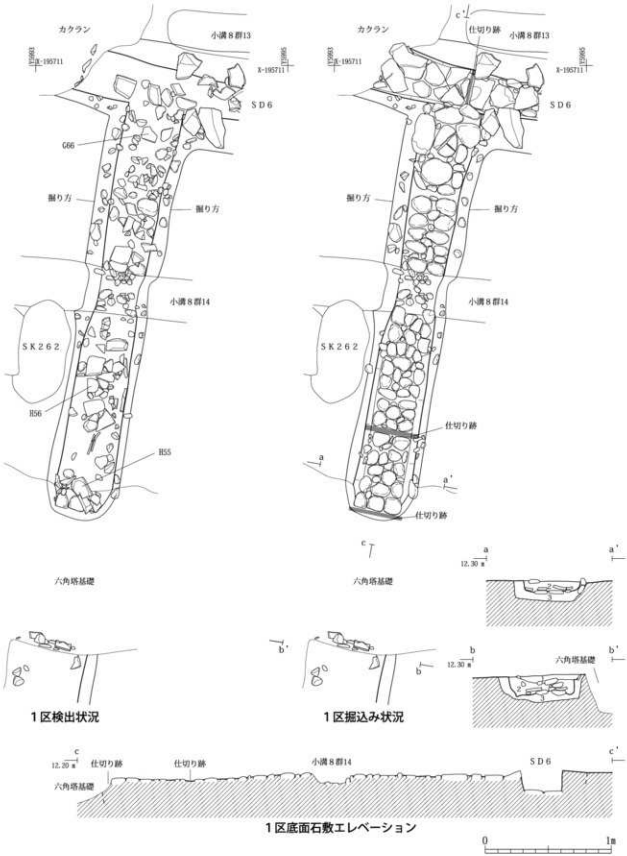
ＳＢ９は主屋南辺にＳＤ61、主屋東辺にＳＤ62、主屋北辺にＳＤ63、張出部北辺にＳＤ45、張出部東辺にＳＤ46を配置しており、これらの溝跡は建物の各側柱列に並行し、基本的には雨落ち溝と考えられる。しかしながら建物周囲は後世の撹乱が多く、溝跡は断片的に僅かを確認したのみであり、さらにＳＤ61については建物規模の確認のため、調査区南側を一部拡張した際にその一部を確認したのみである。また建物西辺側に位置するＳＸ９もこの建物の雨落ち溝を兼ねていた遺構と推定され、建物西辺の柱列とＳＸ９の南側敷石部中央までは２m（６尺６寸程度）、北側敷石部の溝状部分中央までは2.5m（８尺３寸程度）である。

45号溝跡

位置と配置　ＳＤ45は建物張出部北辺を中心とした溝跡である。ＳＢ９はその北側で廊下等により他建物との接続が想定されることから、溝跡は建物北辺の東側に配置される東西溝跡とその西端より北へ延び、ＳＤ６に接続す


1区
2区
掘込み状況（全体）
検出状況（全体）
小溝８群13
小溝８群14
小溝８群16
SD6
SK262
SK261
カクラン
掘り方
仕切り跡
六角塔基礎
0
2m

第92図　４５号溝跡（１）

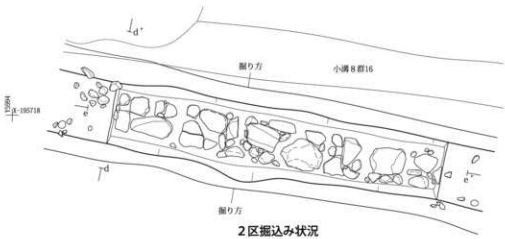


遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD45	1	10YR4/4　褐色	シルト		堆積土
	2	10YR4/4　褐色	シルト	径20cm以内の円礫を含む	
	3	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	径3cm以内の黄褐色シルトブロック・褐色シルトブロックを含む 上面に径30cm以内の円礫による敷石あり	掘り方埋土

第93図　４５号溝跡（２）

２区検出状況

２区上面礫検出状況



２区掘込み状況

２区底面石敷エレベーション

0　1m

遺　構	層　位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD45	2	10YR4/4　褐色	シルト	径20cm以内の円礫を含む	堆積土
	3	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	径3cm以内の黄褐色シルトブロック・褐色シルトブロックを含む 上面に径30cm以内の円礫による敷石あり	掘り方埋土

第94図　４５号溝跡（３）

る南北溝跡に分けている。これにより溝跡北東側に池跡とみられるＳＸ10が配置されている。東西溝の東端は撹乱で壊されており、張出部東辺溝のＳＤ46が北側でＳＤ45との接続が確認できなかったことから、そのまま東へ延び、ＳＤ64と繋がる可能性もある。張出部北辺と東西溝との距離は1.5m（５尺程度）である。

構造と規模　確認長は南北溝が5.8m、東西溝が5.9mで、全体で11.7mである。掘込みは南北溝の北半部と東西溝の中央の２か所で行った。

南北溝部分では、壁面に礎や木板等の構築材やその痕跡は確認できなかったが、角礫を立てるほどの掘り方幅も無く、底面石敷きと壁面との境には細く帯状に通る部分があり、ここに木板を立てていた可能性もある。壁面部分の掘り方埋土には径５－15cmの円礫が意図的に並べて埋め込まれた可能性があり、特に東壁北側では0.2－0.25mのほぼ等間隔で確認した。これらの円礫は壁に立てられた木板を固定するためのものともみられる。堆積土は廃城後に流入したとみられるⅢ層類似層で、瓦片が多数混入していた。底面は一定の厚さに敷かれた掘り方埋土上に径10－25cmの扁平な円礫を敷き詰めた敷石と呼べるものである。敷石はＳＤ６との接続部から南側に0.7mあたりまでは径25cm程度の大型円礫を使用し、溝方向に沿い２ないし３列に敷かれ、円礫間には径10cm以内の小円礫を丁寧に間詰めしている。それより南側は径20cm以内のやや小振りな円礫を３ないし４列敷き詰めている。１区南側の底面敷石中には中型の円礫３石の並びを揃えることで、溝方向と直交するように空けた幅0.04mの隙間を確認しており、またその0.65m南側の１区南端においても、３石が横に並ぶことで礎の南縁が揃う部分を確認した。これらの隙間には木板を差し立てることで、水流や量を調整した枡状となる施設が存在した可能性があり、ＳＤ６との接続部分で確認した同様の構造と相まって機能し、それはまた東側に配置されたＳＸ10へ水を供給するなどの関係が推測されるものである。

東西溝部分では、壁面は南北溝同様に構築材や痕跡は確認できず、壁際の隙間らしきものも明瞭ではなかった。底面は径15－35cmの角礫や円礫を平坦面を上に向け敷き並べており、基本的に大型礫を一列に並べた周囲の礫間に小円礫が間詰めされているが、隙間が目立つ敷石となっており、１区と比較して造りは丁寧ではない。敷石上には径10cm程度の小円礫がまばらにのっていたが、底面上に敷いたものとみられる一方、流入したものの可能性もある。

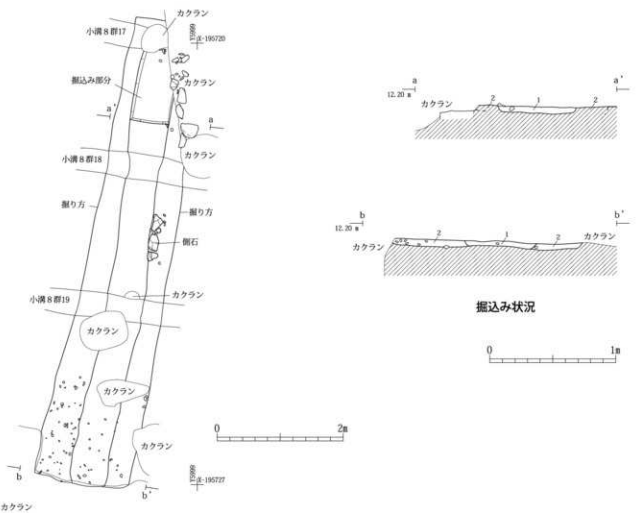
溝跡の断面形状は壁面は急角度で立ち上がり、底面は平坦である。掘り方幅は0.53－0.97mで、堆積土の幅からみた溝幅は0.36－0.61mである。深さは0.07－0.12mで全体に残存状況は悪く、底面標高は南北溝北端が12.09m、東西溝が12.02mで、僅かではあるが南側が低くなっている。また接続部でのＳＤ６の底面標高は11.93mで、ＳＤ45側が0.16mも高く、構造上の段差が造られている。

出土遺物　丸瓦（Ｆ28－30）、軒平瓦（Ｇ13）、平瓦（Ｇ33）、刻印平瓦、熨斗瓦（H25･26）、刻印熨斗瓦、輪違い（H53－57・174・175）、面戸瓦（H97）、丸瓦か輪違い、土師質土器の皿（Ｘ26）、焼塩壷（Ｘ27）、鉄釘（Ｎ272）、その他鉄製品が出土している。

46号溝跡

位置と配置　ＳＤ46は建物張出部東辺の溝跡である。北端ではＳＤ45との距離が0.6mと近接するが接続しておらず、北端部は止まることから、溝跡は東側へ屈曲している可能性もある。南半部は撹乱で壊されている。張出部東辺と溝跡との距離は1.1－1.25m（３尺６寸－４尺１寸程度）である。

構造と規模　残存長は7.5mで、堆積土は２層を確認したが、双方とも掘り方埋土とみられ、底面や壁面は既に失われている。壁面側の掘り方埋土幅は0.2－0.6mと広く、東壁では径15－25cmの大型の角礫が３石程度、平坦面を内側に揃え残存しており、本来は角礫による石組みの構造と考えられる。側石の底面は確認面より下がることから、側石設置の際は溝底面を多少掘り下げたことがうかがえる。掘り方幅は1.34－1.55mで、推定される溝幅は0.5－0.64mで、石組みを伴う構造ではあるが、掘り方幅がかなり広いものとなっており、その理由は不明である。底面が失われているが、残存面の標高は12.07mである。



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD46	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	灰黄褐色シルトブロックを含む　径1cmの円礫を少量含む	掘り方埋土
	2	10YR5/6　黄褐色	砂質シルト	径3cm以内の円礫を多量含む	

第95図　４６号溝跡

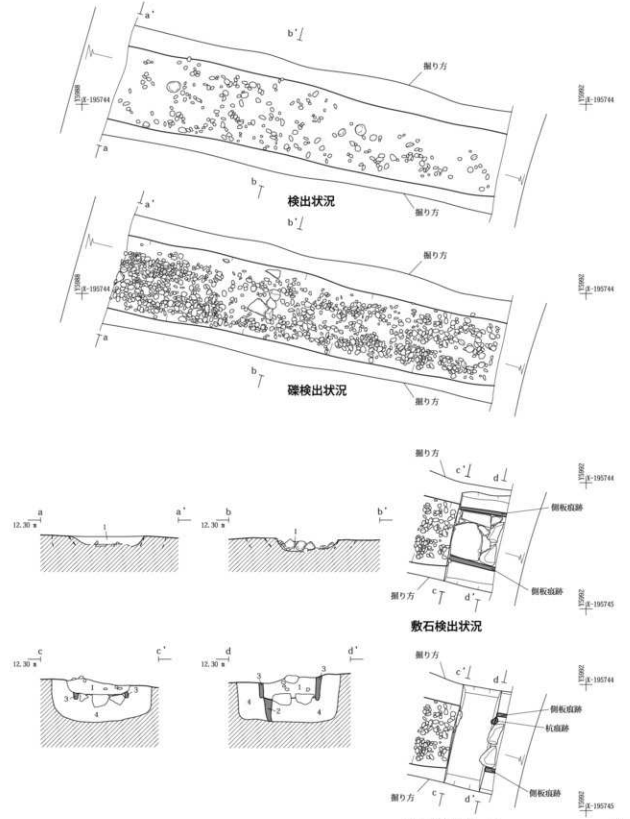
出土遺物　掘り方埋土中から遺物は出土していない。

61号溝跡

位置と配置　ＳＤ61は建物南辺の溝跡であり、拡張区で確認したため、他の溝跡との接続関係等は不明であるが、建物南辺に沿い東西に長く延びる溝跡とみられる。南辺と溝跡との距離は1.5ー1.6m（５尺ー５尺３寸程度）である。

構造と規模　確認長は3.1mで、構築段階と廃城後に改修された可能性のある状態の２段階を確認した。掘込みは確認部分全体の堆積土を掘削した後、掘り方埋土の一部を掘り込んだ。

構築段階の溝は、掘り方埋土の壁面際に厚さ２ー４cmの板痕跡を平面的に確認したことから、木板を立て並べ、掘り方との隙間にブロック土を詰めた構造と考えられる。底面には径10ー30cmの角礫を平坦面を上に向けて敷設した敷石である。底面を確認した部分が狭いため明らかではないが、角礫は大小のものを２列程度に並べたもので、礫間に小型礫を間詰めした丁寧な造りである。底面の角礫の一部を外して掘り方底面の確認を行ったところ、北壁側の木板痕跡の内側で径６cmの杭痕跡を確認した。この位置は敷石の隙間であり、杭は壁板を内側から押さえるために礫間に打ち込まれたものと考えられる。調査区東壁部分での杭痕跡の残存する長さは20cm程度である。また上



遺　構	層　位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD61	1	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト	径5cm以内の円礫を多量、径1cm以内の炭化物を含む	堆積土
	2	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト		杭痕跡
	3	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径1cm以内の炭化物を含む	側板痕跡
	4	10YR7/6　明黄褐色	砂質シルト	径5cm以内のにぶい黄褐色砂質土ブロックを多量含む 上面に径30cm以内の角礫による敷石あり	掘り方埋土

第96図　６１号溝跡

面が平坦面となる敷石の角礫は薄い板状ではなく、下面が角錐状に尖るものであり、この部分での掘り方埋土の厚さが18cmと厚いことから、厚めの敷石を設置するための構造と考えられる。溝跡の掘り方幅は0.79－0.9mで一定し、敷石幅は0.38mであり、溝幅はこれに近いと考えられる。深さは0.13mの残存で、底面標高は12.03mで北側のＳＤ46と大差無い。

構築段階の底面敷石上の堆積土中で、南壁側から底面にかけて多量の小円礫が石敷き状となるのを確認した。円礫は特に南壁側に多く、底面中央にはまばらに見られる程度であるが、廃城後に改修された溝の一構造である可能性もある。礫は径１－５cmの小円礫で、建物周囲のＳＤ63・64・65にも構築段階の溝底面に同様のものが敷かれているが、この溝跡内では敷石上には確認できなかった。またこの面の一部では径10cmの角礫や円礫が平坦面を東側に向けて南北に並べられるように数石置かれていた。溝跡は構築段階の木板を抜取り、ほぼ同位置に掘り直したもので、はじめに礫を全く含まない土を埋め、その上部に小礫を敷いたものとみられる。掘り方幅は0.79－0.9m、溝幅は0.5－0.6mである。石敷きの底面標高は12.06－12.11mである。

ただし、このように廃城後に改修したとみられる溝中に石敷きを行うものは他には確認できない。西側に位置するＳＢ２の南辺溝ＳＤ９の南側には建物群を取り巻く石敷遺構が広範囲に展開しており、それはＳＢ９の南側にも広がっている可能性もある。溝内の石敷き状のものは南側に多いことからも、このような石敷遺構の礫が廃城後に流入した可能性も否定できないが、その場合、溝は構築された後は改修されなかったこととなる。

出土遺物　遺物は平瓦、熨斗瓦、鉄釘（N543－545）が出土している。

62号溝跡

位置と配置　ＳＤ62は建物主屋部東辺の溝跡である。溝跡の北端は撹乱で壊されており、南側は調査区外へと続いている。また中央はＳＸ11の廃城後の掘込みにより壊されている。主屋東辺と溝跡との距離は1.5－1.7m（５尺－５尺６寸程度）である。溝は北端でＳＤ63と接続するとみられ、また東側にはＳＸ11の掘り方が近接しており、この池と接続することも想定される。

構造と規模　残存長は8.4mで、掘込みは北端部で行っているが、後世の削平が著しく、堆積土が残存せず、底面も削平されており、溝構造は構築段階の１時期のみの確認である。

壁面はほとんど残存せず、残存する底面には径20－40cmの角礫を平坦面を上に向けて敷設している。掘り方埋土の底面部分の厚さは0.02－0.12mと礫の大きさのわりに薄く、北端部の断面観察では角礫による敷石は板状の薄いものである。大型の敷石間の間詰石は失われており、隙間には径５cm以内の小円礫が入っている。これらは当初、敷石上に敷かれていた可能性もあるが、敷石下にも同様の小円礫を敷いた構造がみられたことから、敷石が外され、下部の礫が露出している可能性もある。掘り方幅は0.55－0.72mで、敷石幅は0.3－0.4mほどであり、溝幅はこれよりやや広いと考えられる。溝跡の深さは不明で、底面標高は12.02－12.05mである。

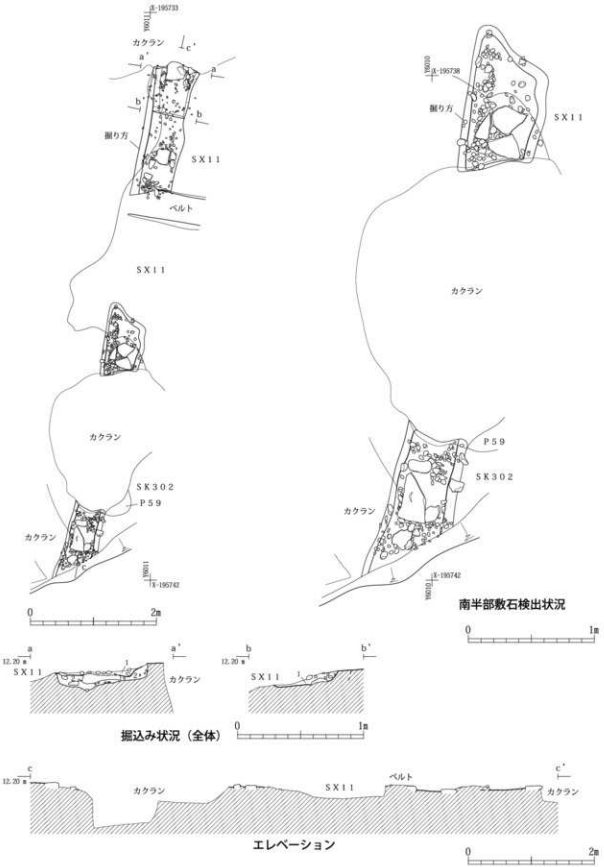
出土遺物　遺物は平瓦、熨斗瓦が出土している。

63号溝跡

位置と配置　ＳＤ63は建物主屋部北辺の溝跡である。撹乱で上面および北側を壊され、さらに廃城後の溝跡であるＳＤ76や75と重複しており残存状況は極めて悪い。主屋北辺と溝跡との距離は1.4m（４尺６寸程度）と推測される。溝の西側は主屋部北辺に沿い、西側に延びてＳＤ46と接続し、東側はＳＤ62と接続するとみられる。また北側に位置する南北方向のＳＤ65がＴ字で接続するとみられる。

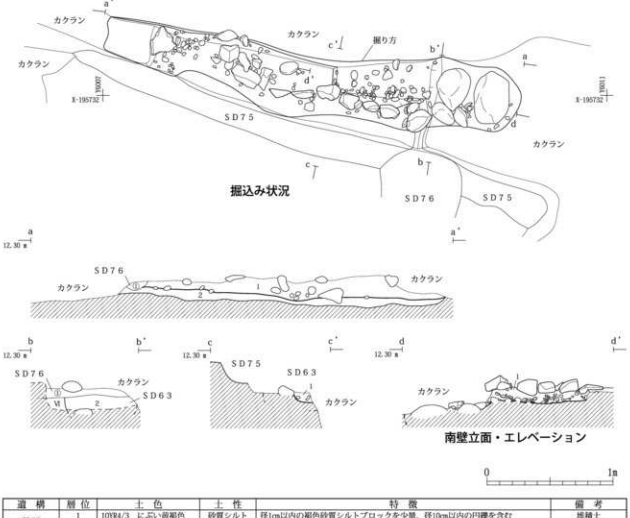
構造と規模　残存長は3.3mである。掘込みは僅かに残存する堆積土部分で行った。

壁面には径15－20cmの角礫が１段以上残存している。底面は東端部が１段低く下がっており、そこには径20cmと45cmの大型円礫が埋め込まれ、西側の高い部分には径10cm以内の円礫をまばらに確認し、さらに西側の底面にも円礫がまばらに確認できる。底面は壁面の礫の下端よりも0.05－0.07m低く、現時点では途中改修の痕跡は確認でき



遺　構	層 位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD62	1	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径5cm以内の円礫を多量含む	堆積土
	2	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径3cm以内の褐灰色砂質シルトブロック、径5cm以内の円礫を含む 径40cm以内の角礫による敷石あり	掘り方埋土

第97図　６２号溝跡



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD63	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径1cm以内の褐色砂質シルトブロックを少量、径10cm以内の円礫を含む	堆積土
	2	10YR4/4　褐色	シルト	黒褐色砂質土ブロックを微量含む 径50cm以内の円礫によるとり敷あり	掘り方埋土
SD76	①	10YR4/4　褐色	シルト	径40cm以内の円礫を含む（SD76の１層）	堆積土

第98図　６３号溝跡

ないが、西側の底面は改修に伴い礫をさらったことにより低くなった可能性もある。また東端部では大型礫のさらに東側に溝跡の続きを確認できなかったことから、溝はこの位置で止まるか或いは西側同様に浅くなることも考えられ、この深い部分は何かしらの機能を持った部分といえる。上部や北側を撹乱で壊され溝幅は不明であるが、深さは西側が0.31m、東端部が0.37mで、底面標高は西側が11.87ー11.9m、東端部が11.79ー11.84mであり、東辺のＳＤ62等と比べ、溝全体が深い構造となっている。

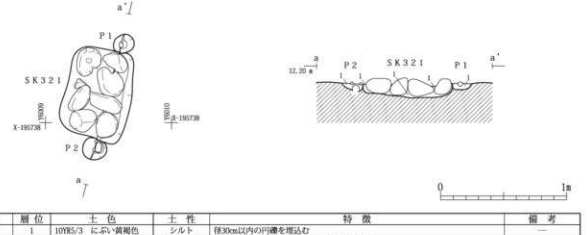
出土遺物　遺物は平瓦、鬼瓦（H196）が出土している。

［その他の施設］

建物跡周辺にはＳＸ９ー11の池状の遺構が配置され、西辺側には１号樋跡が埋設されるが、建物自体の構造に関わる遺構としては以下のものがある。

321号土坑

礎石跡36と48の中間東側にある土坑で、規模は長辺0.71m、短辺0.53m、形状は隅丸長方形である。長軸方向は建物に並行しており、内部には東西２列に径20ー30cmの円礫が７石埋設されている。土坑東半部において円礫を残し掘りこんだところ、深さは0.08mと浅く、円礫下には別に変った構造はみられなかった。このことから円礫は土坑底面に敷かれたもので、堆積土としたものは間詰め的なものか後の流入土とみられる。また東側の南北円礫列の南



遺　構	層 位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SK321	1	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	径30cm以内の円礫を埋込む	—
P1	1	10YR6/2　灰黄褐色	砂質シルト	径5cm以内の円礫、径1cm以内の炭化物を含む	—
P2	1	10YR6/2　灰黄褐色	砂質シルト	径10cm以内の円礫、径1cm以内の炭化物を含む	—

第99図　３２１号土坑

側と北側の土坑外には径15～20cm、深さ0.05m程度の浅いピットを２基確認しており、この土坑に付属する遺構と判断される。土坑は建物東辺と雨落ち溝間の底下か縁下に位置しており、建物に出入りする階段や台の基礎、さらに手水鉢等を設置した基礎などの可能性もあるが、詳細は不明である。

ピット33（第８次調査分）

ＳＢ９礎石跡４の西側にある径0.3m、深さ0.07mのピットである。堆積土は２層に分かれ、１層がブロック土で、２層がシルトである。ＳＢ９の西辺から1.5m程度の距離にあり、この位置は礎石跡４と東西の柱筋を同じくしている。この位置は建物西辺に配置されたとみられる幅１間半の縁通りの中央にあることから、縁通り部分の束柱か戸に関わる柱となる小規模な礎石跡とみられる。

10号礎石建物跡

[位置と規模]

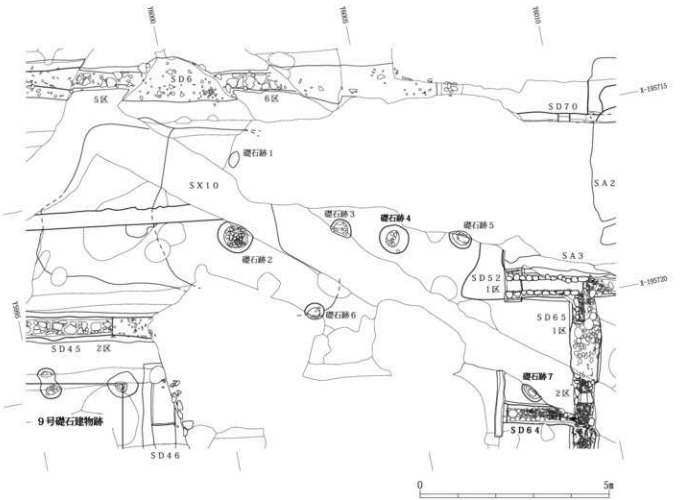
調査区の中央で検出した礎石建物跡で、ＳＢ６の南東側、ＳＢ７の東側、ＳＢ９の北側、ＳＢ11の北西側に位置している。またＳＢ10はＳＸ10を埋め戻し、その上部に建てられており、周囲の建物とは建築時期が異なっている。

検出した礎石跡が少数であることから、礎石跡からみた建物形状は不明と言わざるを得ない。しかし他の建物跡内部に溝が殆ど配置されないことから、建物範囲は北側のＳＤ６、西側のＳＤ45、東側のＳＤ52に囲まれた内側に収まり、南側もＳＤ64の北側と推定される小規模な建物と考えられる。またＳＢ10とＳＤ52は同じく遺構の変遷が確認される施設であり、建物東側については溝の屈曲に沿った建物形状であったと推定されるが、ここに位置する礎石跡７は東側に隣接するＳＢ11の一部である可能性もある。

西端に位置する礎石跡１・２と西側のＳＤ45との間には４間程度の距離がある。建物の礎石跡は全体に小規模で浅い構造であり、既に失われているものもあることを考慮すると、建物はさらに西側へ延びていた可能性が高い。これらのことから建物規模は礎石跡１から７までの南北5.91m（６尺５寸の３間分）、東西7.88m（４間分）であるが、東西規模についてはさらに西側に３間か３間半程度広がる可能性もある。建物方向は他の建物跡同様に南北方向はＮ－11°－Ｅである。

[配　置]

建物は北端の礎石跡１が北側に位置するＳＢ６南辺と２間の距離にあり、間にはＳＤ６が位置し、溝中心までの



第100図　１０号礎石建物跡

距離は６尺５寸と幅がある。この距離はＳＢ６南辺からも同じであり、他の建物の側柱と溝との距離と比較して幅の広いものである。その他の周囲建物との距離についてはＳＢ10の規模が定かでないことから不明である。柱間は礎石跡３を除き、ほぼ６尺５寸を１間として配置されているが、礎石跡３は礎石跡４と２の間の２間を三つ割した位置にあり、何かしら建物の特徴を示しているとみられる。

［礎石跡］

礎石跡は７基確認している。礎石跡の掘り方規模は径0.50～0.93mで、平均0.69mである。ＳＸ10を埋め戻した上部に構築されたことから、埋め戻しの関係で他よりも掘り方埋土の砂質が強くなっている。

礎石跡２と６の検出標高が12.34mと12.36mであるのに対し、礎石跡３・４・５は12.26m、12.28m、12.24mと、後世の削平により低くなっている。このことと各々の規模を考え合わせると、本来礎石跡３・４・５は２と同様の規模を持ち、反対に礎石跡６は小型であった可能性もある。

礎石跡１

建物北辺の礎石跡とみられ、撹乱の壁面で確認した。撹乱で大半を壊されており、抜取痕、根固めは確認できず、掘り方埋土しか残存していない。掘り方形状は不明であり、残存規模は長径0.44m、短径0.24mである。掘り方埋土は黒褐色シルトブロックを含み縞状となっている。

礎石跡2

六角塔基礎で北東側を壊され、掘り方形状は楕円形とみられる。残存する掘り方規模は長径0.93m、短径0.71mである。根固め形状は不整円形とみられ、径0.65mである。撹乱壁面の観察では、掘り方壁面は外に開き、底面中央が深くなっている。根固めの南東部で長径0.44m、短径0.36m、深さ0.14mの抜取痕とみられる不整楕円形のプランを検出した。堆積土はⅢ層類似層である。根固めは径20cm以内の円礫を多量に詰め、南東側が窪んでいる。根固石は径10ー15cmの円礫が多く、径5cm以内の円礫も少量含まれ、窪みに密集して詰めている。掘り方埋土は褐色、黒褐色粘土質シルトブロックを含み、厚さは0.09ー0.18mである。

礎石跡3

六角塔基礎に南西側を壊されており、掘り方形状は半円形に残存する。残存する掘り方規模は長径0.58m、短径0.40m、深さ0.15mである。根固め形状も半円形に残存し、残存規模は長径0.40m、短径0.29m、厚さ0.08mである。六角塔基礎の壁面観察では、掘り方壁面はやや急角度で立ち上がり、底面中央が深くなっている。抜取痕は確認できなかった。根固めは径20cm以内の円礫を詰め、根固石は大型の径10ー20cmの円礫を全体にまばらに詰めている。根固め石は一部掘り方埋土に突き込まれている。掘り方埋土は黄褐色、黒褐色シルトブロックを含み、厚さは0.07ー0.10mである。

礎石跡4

掘り方形状は楕円形で、残存規模は長径0.80m、短径0.72mである。根固め形状は楕円形で、残存規模は長径0.43m、短径0.34mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは径20cm以内の円礫を詰め、根固石は中央に多くみられる。掘り方埋土は黄褐色、黒褐色シルトブロックを多量に含み、厚さは0.14ー0.25mである。他の礎石跡に比べ根固めが狭く、反対に掘り方幅が広いものである。

礎石跡5

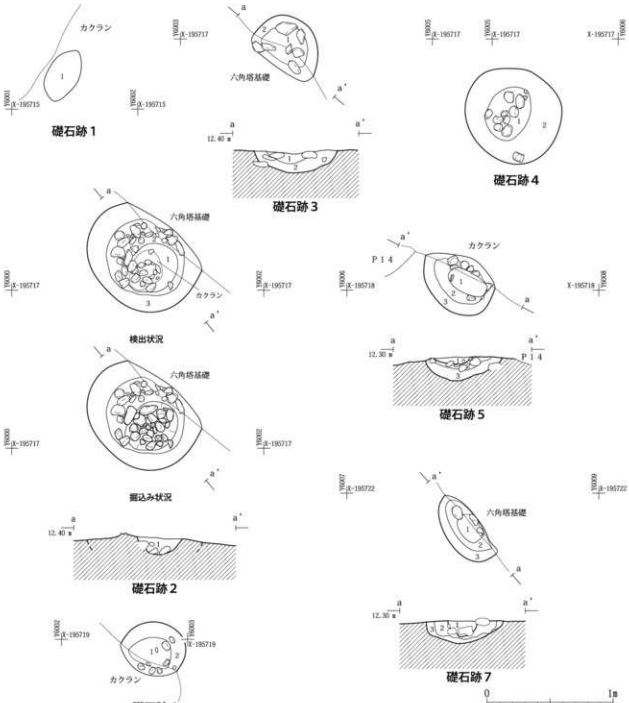
撹乱で北側を壊されており、掘り方形状は半円形に残存する。残存する掘り方規模は長径0.62m、短径0.45m、深さ0.19mである。根固め形状も半円形に残存し、残存規模は長径0.46m、短径0.29m、厚さは0.10mである。撹乱壁面の観察では、掘り方壁面は外へ開き、底面中央が深くなっている。中央で長径0.22m、短径0.16m、深さ0.06mの抜取痕とみられる半円形に残存するプランを検出した。堆積土には黄褐色砂質シルトのほか、瓦片を含んでいる。根固めは径10cm以内の円礫を多量に詰め、根固石は下部に多くみられ、一部掘り方埋土に突き込まれている。掘り方埋土は黄褐色、黒褐色シルトブロックを含み、厚さは0.04ー0.10mである。

礎石跡6

撹乱で南西側を壊され、掘り方形状は半円形に残存する。残存する掘り方規模は長径0.50m、短径0.42mである。根固め形状も半円形に残存し、残存規模は長径0.34m、短径0.24mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは径10cm以内の円礫を詰め、根固石は一部掘り方埋土に突き込まれている。掘り方埋土は暗褐色シルトブロックを多量含み、径10cm以内の少量の円礫を根固めの境近くに詰めており、厚さは0.07ー0.12mである。

礎石跡7

建物南東隅に位置すると推定される礎石跡である。撹乱で北東側を壊されており、掘り方形状は円形か楕円形とみられる。残存する掘り方規模は長径0.62m、短径0.29m、深さ0.18mである。根固め形状も円形か楕円形とみられ、残存規模は長径0.51m、短径0.21m、厚さは0.14mである。六角塔基礎壁面の観察では、掘り方壁面は急角度で立ち上がり、底面は中央が深くなっている。中央に長径0.22m、短径0.16mの抜取痕とみられる半円形に残存するプランを確認した。堆積土はブロック土を含むⅢ層類似層である。根固めはブロック土が主体で、径20cm以内の円礫を少量入れており、根固石は一部掘り方埋土に突き込まれている。掘り方埋土は暗褐色シルト、灰白色砂質土ブロックを含み縞状となっており、厚さは0.05ー0.08mである。



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
礎石跡1	1	10YR5/6　黄褐色	砂質シルト	径5cm以内の黒褐色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡2	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径5cm以内の円礫を含む	抜取痕
	2	10YR5/6　黄褐色	砂質土	径20cm以内の円礫を多量含む	根固め
	3	10YR5/6　黄褐色	砂質土	径5cm以内の褐色・黒褐色粘土質シルトブロックを含む	掘り方埋土
礎石跡3	1	10YR5/6　黄褐色	砂質シルト	径20cm以内の円礫を含む	根固め
	2	10YR4/6　褐色	砂質シルト	黄褐色・黒褐色シルトブロックを含む	掘り方埋土
礎石跡4	1	10YR5/6　黄褐色	砂質シルト	径20cm以内の円礫を含む	根固め
	2	10YR4/6　褐色	砂質シルト	径10cm以内の黄褐色・黒褐色シルトブロックを多量含む	掘り方埋土
礎石跡5	1	10YR5/6　黄褐色	砂質シルト		抜取痕
	2	10YR5/6　黄褐色	砂質シルト	径10cm以内の円礫を多量含む	根固め
	3	10YR4/6　褐色	砂質シルト	黄褐色・黒褐色シルトブロックを含む	掘り方埋土
礎石跡6	1	10YR5/6　黄褐色	砂質シルト	径10cm以内の円礫を含む	根固め
	2	10YR4/6　褐色	砂質土	径10cm以内の暗褐色シルトブロックを多量、径10cm以内の円礫を含む	掘り方埋土
礎石跡7	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径5cm以内の暗褐色シルトブロックを微量含む	抜取痕
	2	10YR6/3　にぶい黄橙色	シルト	径20cm以内の円礫を含む	根固め
	3	10YR6/3　にぶい黄橙色	砂質シルト	径3cm以内の少量の暗褐色シルト・灰白色砂質土ブロックが縞状となる	掘り方埋土

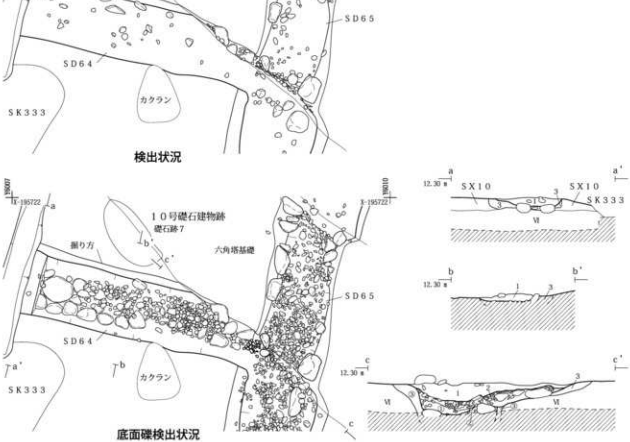
第101図　１０号礎石建物跡　礎石跡

［溝　跡］

ＳＢ10は北側をＳＤ６と52、東側をＳＤ52と65、南側をＳＤ64に囲まれており、特に東側はＳＢ11との境が不明瞭であり、加えて溝跡が狭い範囲で屈曲することから、建物との位置関係が判然としない地区である。確認した礎石跡と各溝跡との距離は、礎石跡1とＳＤ６が２m、礎石跡５とＳＤ52が0.7mである。北側のＳＤ６はＳＢ６との中間位置にあり、またＳＤ46もＳＢ９との中間位置に配置された可能性もある。

64号溝跡

位置と配置　ＳＢ10礎石跡７の南側にほぼ隣接し、東端はＳＢ11西辺溝跡のＳＤ65に接続している。西端は大規



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD64（廃城後）	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径3cm以内の黒褐色粘質土・明黄褐色砂質・褐色砂質シルトブロック、径10cm以内の円礫、径1cm以内の炭化物を含む（SD65の1層と共通）	堆積土
SD64a	2	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径3cm以内のにぶい黄橙色シルトブロック、径10cm以内の円礫を密に径1cm以内の炭化物を含む　径30cm以内の円礫による石敷あり（SD65の4層と共通）	堆積土
	3	10YR5/2　灰黄褐色	シルト	径5cm以内のにぶい黄褐色・にぶい黄橙色シルトブロック、径5cm以内の円礫を微量砂粒を含む　上面に径30cm以内の円礫による石敷あり	掘り方埋土
SD65b	①	10YR6/3　にぶい黄橙色	シルト	径1cm以内のにぶい黄橙色シルトブロック、径10cm以内の円礫を含む（SD65の6層）	埋戻し土
	②	10YR6/3　にぶい黄橙色	シルト	径1cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロック、径5cm以内の円礫を含む（SD65の7層）	石敷層
	③	10YR5/2　灰黄褐色	砂質シルト	径3cm以内のにぶい黄褐色・にぶい黄橙色シルトブロック、径30cm以内の円礫、砂粒を含む（SD65の8層）	掘り方埋土

第102図　６４号溝跡

模な撹乱で壊され不明であるが、同じ撹乱西側にはＳＤ45と46の２条が配置され、いずれかとつながると考えられる。

構造と規模　残存長は0.87mである。堆積土がＳＤ65の１層と連続しており、ＳＤ64もまた廃城後に改修されたと考えられる。ほぼ全体を掘り込んでおり、加えて西端、中央部、ＳＤ65との接続部の３か所で断面観察を行った。

溝構造は掘り方内部にブロック土を詰めているが、壁面の残存が悪いためか、構築材等は確認できなかった。掘り方幅が狭いため、角礫による石組みではないとみられる。底面には径10－30cmの大型の円礫が平坦面を上にして敷設されており、ＳＤ65との接続部近くでは径３cm以内の小円礫が上に敷かれているが、石敷きはＳＤ65の改修後の溝跡に伴う石敷きと面的に連続しており、ＳＤ64は他の溝跡の構築段階より遅れた時期に造られた溝と考えられる。掘り方幅は0.52－0.57m で、廃城後の溝に南壁側を壊されているため、溝幅は不明瞭であるが、底面の石敷き幅は0.32－0.34mあり、これに近い幅と推定される。深さは0.06m、底面標高は12.1－12.13mである。

廃城後の溝跡は当初の溝底面の石敷き部分まで掘り込んでおり、新たな溝底面はかつての構造をほぼ利用している。掘り方幅は0.52－0.57mで、溝幅はかつての底面石敷き幅より広く、0.48－0.52mで、深さ等は構築当初と同じである。

出土遺物　遺物は平瓦、土師器、須恵器が出土している。

11号礎石建物跡

[位置と規模]

調査区の中央で確認した礎石建物跡で、ＳＢ９の北東側、ＳＢ10の南東側、ＳＡ２・３の南側に位置している。

検出した礎石跡が少数なことから、本来の建物形状は不明であるが、残存する礎石跡からみた建物範囲は、東西が11.8m（６尺５寸の６間分）かそれ以上、南北が3.9m（２間分）かそれ以上の東西に長い建物跡と考えられる。また建物北辺に位置するＳＤ52が建物北西側で北へ鉤型に折れることから、建物も溝に沿って北側へ張出し、ＳＢ10と繋がる可能性がある。建物南側は撹乱で大きく壊されており、礎石跡は確認できないが、東側のＳＤ66が南端で僅かに西側へ屈曲する様子を見せており、建物の南北幅は本来２間の狭いものである一方、最大でさらに２間程度南側へ広がる可能性もある。建物方向は他の建物跡同様、南北方向はＮ－11°－Ｅである。

[配　置]

建物は現状で確認される礎石跡１・７・10による南北列とＳＢ９東辺の柱筋が揃っている。建物の全体形状は不明であるが、北辺と東辺については概ね建物の側柱列とみることができる。礎石跡の柱間は６尺５寸を基準とした１間ないし半間が認められるが、検出面の削平が著しく、失われた礎石跡も多いとみられ、本来の柱配置は不明である。

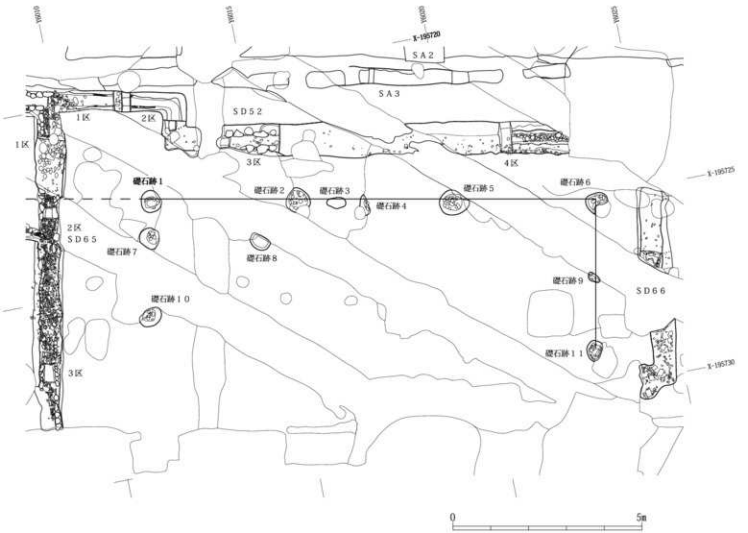
[礎石跡]

礎石跡は11基を確認している。礎石跡の掘り方規模は径0.47－0.79mで、平均0.58mである。

根固めは礎石跡１・11のように径３cm以内の小円礫と砂質土と共に詰めているものや、礎石跡２・８のように全体に根固石を充填するもの、礎石跡５・７・10のように根固石が中央に密集するものがある。掘り方埋土は11基の中６基が縞状に変化している。

礎石跡１

建物北西側の礎石跡で、撹乱で東側を壊されている。掘り方形状は円形とみられ、残存規模は径0.58mである。根固め形状は不整形で、長径0.40m、短径0.32mである。中央で長径0.28m、短径0.2mの抜取痕とみられる楕円形のプランを検出した。堆積土はⅢ層類似層である。根固めは径10cm以内の円礫を詰め、根固石は少量確認したのみである。中央部に礎石の抜取痕を検出していることから、本来根固石をあまり入れない礎石跡の可能性がある。掘り



第103図　１１号礎石建物跡

方埋土はにぶい黄橙色シルト、褐色砂質シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.07ー0.17mである。

礎石跡２

建物北辺に位置するとみられる礎石跡で、撹乱で西側、六角塔基礎で南側を壊されており、掘り方形状は円形か楕円形とみられる。残存する掘り方規模は径0.62mである。根固め形状は楕円形とみられ、残存規模は長径0.50m、短径0.45mである。根固めの堆積土はⅢ層類似層で、全体に円礫をまばらに詰めている。掘り方埋土は灰黄褐色シルトで、厚さは0.04ー0.12mである。

礎石跡３

建物北辺に位置するとみられる礎石跡である。掘り方形状は不整楕円形で、残存規模は長径0.51m、短径0.29mである。抜取痕、根固め共に確認できなかった。掘り方埋土は灰白色砂質シルトブロックを含み縞状となっており、根固石は確認できない。西側の礎石跡２、東側の礎石跡４とほぼ同じ高さで確認したが、残存状況が悪いことから、本来これらに比べて浅いものとみられる。

礎石跡４

建物北辺に位置するとみられる礎石跡である。撹乱で南西側と東側を壊され、掘り方形状は不明である。残存する掘り方規模は長径0.50m、短径0.22m、深さ0.14mである。根固め形状も不明であるが、残存規模は長径0.30m、短

径0.09m、厚さ0.12mである。撹乱壁面の観察では、掘り方壁面は外に開き、底面は平坦である。根固めは径10cm以内の円礫を詰めているが、根固石は下部に少量確認したのみで、根固めの上部は抜取痕の可能性もある。掘り方埋土は灰白色砂質土ブロックを含み、厚さは0.11－0.14mである。

礎石跡5

建物北辺に位置するとみられる礎石跡で、六角塔基礎で北東側を壊されている。掘り方形状は楕円形とみられ、残存規模は長径0.79m、短径0.76mである。根固め形状は不整楕円形で、残存規模は長径0.48m、短径0.43mである。根固めは径20cm以内の建物内ではやや大きめの円礫を詰め、根固石は径が揃っており、径10－15cmのものが西側に密集している。掘り方埋土はにぶい黄橙色シルトブロックを含み、厚さは0.09－0.20mである。

礎石跡6

建物北東隅に位置するとみられる礎石跡である。P25で南東側を壊されており、掘り方形状は不明である。残存する掘り方規模は長径0.58m、短径0.46mである。根固め形状も不明で、残存規模は長径0.48m、短径0.28mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは径20cm以内の円礫を詰め、根固石は検出面で少量確認したが密集せず、全体にまばらに詰めている。根固め石は一部掘り方埋土に突き込まれている。掘り方埋土はにぶい黄橙色シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.03－0.06mと薄いものである。

礎石跡7

建物西側の礎石跡である。撹乱で東側、六角塔基礎で南西側を壊され、掘り方形状は円形とみられ、残存規模は径0.47mである。根固め形状は不整円形とみられ、残存規模は径0.36mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは径10cm以内の円礫を詰め、根固石は東側の撹乱部分では確認できず、浅い位置に詰められているとみられる。掘り方埋土はにぶい黄橙色シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.19mである。

礎石跡8

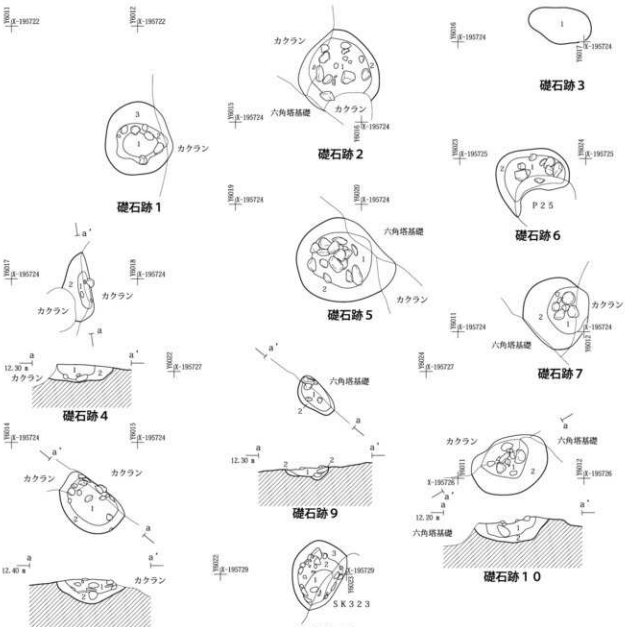
建物内部の礎石跡である。六角塔基礎で北側を壊され、掘り方形状は半円形に残存する。残存する掘り方規模は長径0.54m、短径0.34m、深さ0.19mである。根固め形状も半円形に残存し、残存する長径は0.40m、短径0.27m、厚さ0.11mである。撹乱壁面の観察では、掘り方壁面は外に開き、底面は中央が深くなっている。抜取痕は確認できなかった。根固めは径10cm以内の円礫を詰め、根固石は径5－10cmの円礫が多いが密集せず、全体にまばらに詰めている。根固石は一部掘り方埋土に突き込まれている。掘り方埋土はにぶい黄橙色シルトブロックを含み、厚さは0.06mと薄いものである。

礎石跡9

建物東辺に位置するとみられる礎石跡である。六角塔基礎で北東側を壊され、掘り方形状は半円形に残存する。残存する掘り方規模は長径0.36m、短径0.21m、深さ0.10mである。根固め形状も半円形に残存し、残存規模は長径0.29m、短径0.16m、厚さ0.07mである。撹乱壁面の観察では、掘り方壁面は外へ開き、底面中央が浅く、壁面側が深くなっている。抜取痕は確認できなかった。根固めは掘り方底面まで詰め、根固石は径10cmの円礫を全体にまばらに詰め、一部掘り方埋土に突き込まれている。掘り方埋土は明黄褐色砂質シルトブロックを少量含み、厚さは0.02－0.04mと薄いものである。

礎石跡10

建物西側の礎石跡である。撹乱で北西側を壊され、掘り方形状は半円形に残存する。残存規模は長径0.62m、短径0.44m、深さ0.18mである。根固め形状も半円形に残存し、残存する長径0.38m、短径0.31m、厚さ0.14mである。撹乱壁面の観察では、掘り方壁面は外側に開き、底面は中央が深くなっている。抜取痕は確認できなかった。根固めは径10cm以内の円礫を詰め、根固石は上部中央に多量詰めている。掘り方埋土はにぶい黄橙色シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.10－0.16mである。



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
礎石跡1	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径1cm以内の暗褐色シルトブロックを少量、砂粒を含む	撹取痕
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径3cm以内の暗褐色シルトブロックを少量、径10cm以内の円礫を含む	根固め
	3	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	にぶい黄橙色シルト・褐色砂質シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡2	1	10YR4/4　褐色	シルト	径3cm以内のにぶい黄橙色シルトブロック、径10cm以内の円礫を含む	根固め？
	2	10YR4/2　灰黄褐色	シルト		掘り方埋土
礎石跡3	1	10YR4/4　褐色	シルト	灰白色砂質シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡4	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径3cm以内の暗褐色シルトブロック、径10cm以内の円礫を少量含む	根固め？
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	灰白色砂質土ブロックを微量含む	掘り方埋土
礎石跡5	1	10YR4/4　褐色	シルト	径3cm以内のにぶい黄橙色シルトブロック、径20cm以内の円礫を含む	根固め
	2	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	径1cm以内のにぶい黄橙色シルトブロックを少量含む	掘り方埋土
礎石跡6	1	10YR4/4　褐色	シルト	径3cm以内のにぶい黄橙色シルトブロック、径20cm以内の円礫を含む	根固め
	2	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	径3cm以内のにぶい黄橙色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡7	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径3cm以内の暗褐色シルトブロックを少量、径10cm以内の円礫を含む	根固め
	2	10YR4/4　褐色	シルト	径3cm以内のにぶい黄橙色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡8	1	10YR4/4　褐色	砂質土	径10cm以内の円礫を多量含む	根固め
	2	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	径3cm以内のにぶい黄橙色シルトブロックを含む	掘り方埋土
礎石跡9	1	10YR6/3　にぶい黄橙色	シルト	褐色シルトブロック、径10cm以内の円礫を含む	根固め
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径3cm以内の明黄褐色砂質シルトブロックを少量含む	掘り方埋土
礎石跡10	1	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径10cm以内の円礫を含む	根固め
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	にぶい黄橙色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡11	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径1cm以内のにぶい黄橙色シルトブロックを少量、径5cm以内の円礫を含む	撹取痕
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質土	径1cm以内の褐色シルトブロックを少量、径10cm以内の円礫を含む	根固め
	3	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	にぶい黄橙色シルト・褐色砂質シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土

第104図　１１号礎石建物跡　礎石跡

礎石跡11

建物南東隅に位置する可能性のある礎石跡である。撹乱で南東側を壊され、掘り方形状は半円形に残存する。残存規模は長径0.54m、短径0.40mである。根固め形状は不整形で、残存規模は長径0.40m、短径0.30mである。根固めの南側で径0.31mの抜取痕とみられる半円形に残存するプランを確認した。堆積土は径５cm以内の円礫を含むⅢ層類似層である。根固めは径10cm以内の円礫を詰め、根固石は密集せず、径３cm以内の小円礫と砂質土と共に詰めている。根固石は一部掘り方埋土に突き込まれている。掘り方埋土はにぶい黄橙色シルトと褐色砂質シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.03－0.10mである。

［溝　跡］

ＳＢ11は北辺にＳＤ52、西辺にＳＤ65、東辺にＳＤ66を配置している。南辺については建物範囲が不明瞭であると共に溝跡は確認できなかったが、ＳＤ66の南端が西側に僅かに屈曲している状況がみられることから、この位置に東西方向の溝が存在した可能性が高い。この地区ではⅣ層面の削平が著しく、溝跡は失われたものとみられる。またＳＤ52やＳＤ66が建物外側に配置された主に雨落ち溝と推定されるのに対し、西辺のＳＤ65については、ＳＢ10との配置関係から建物が溝の上部を跨ぐ位置にあった可能性もある。

52号溝跡

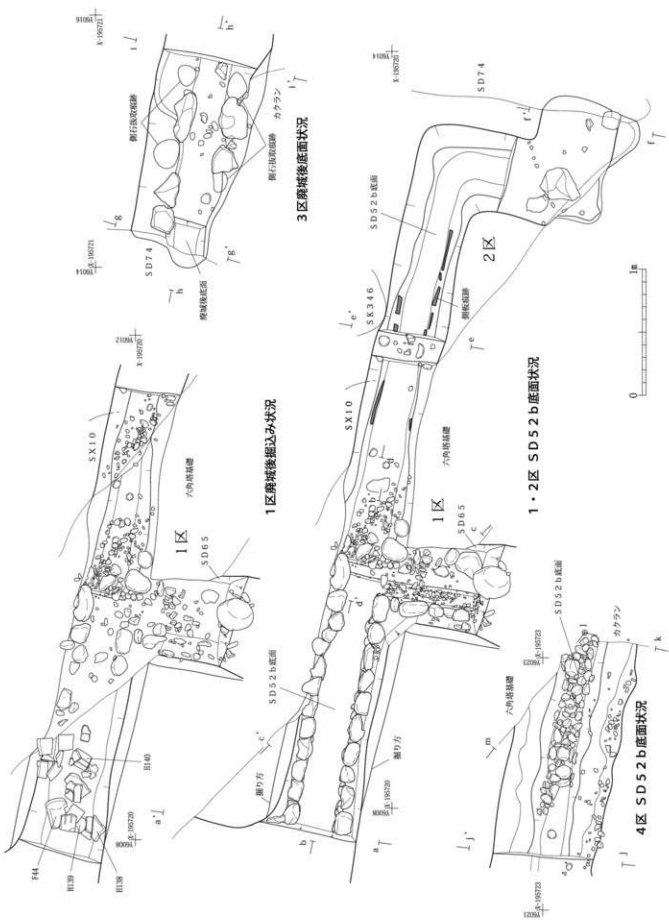
位置と配置　ＳＢ10の東辺側から続くＳＢ11北辺の溝跡で、ＳＸ10を埋め戻した上に構築されている。両端は撹乱で壊されており、他の溝跡との接続関係は不明瞭であるが、西端は北に延びＳＤ６やＳＤ43、もしくはＳＤ70に接続し、東端は東辺のＳＤ66に繋がるとみられる。建物北辺から溝跡までの距離は、西側の幅広くなる部分で2.6m（８尺６寸程度）、東側で1.6m（５尺３寸程度）であり、西側では建物が北側へ張り出すことが想定される。

構造と規模　ＳＤ52は３か所で鉤型に屈曲しており、残存長は西端の南北辺が1.1m、西側の東西辺が5.45m、中央の南北辺が0.75m、東半部の東西辺が10.1mで計17.4mである。ＳＤ52は構造の変化や溝位置のずれ等から、ほぼ同位置において構築段階の溝やその改修、さらに廃城後の改修を確認しており、他の多くの溝跡同様に、構築段階（ＳＤ52b）、改修段階（ＳＤ52a）、廃城後段階の３段階がある。掘込みは西側からＳＤ65との接続部周辺を１区、中央の屈曲部分を中心とした２区、この屈曲部の東側を３区、東端を４区として行った。

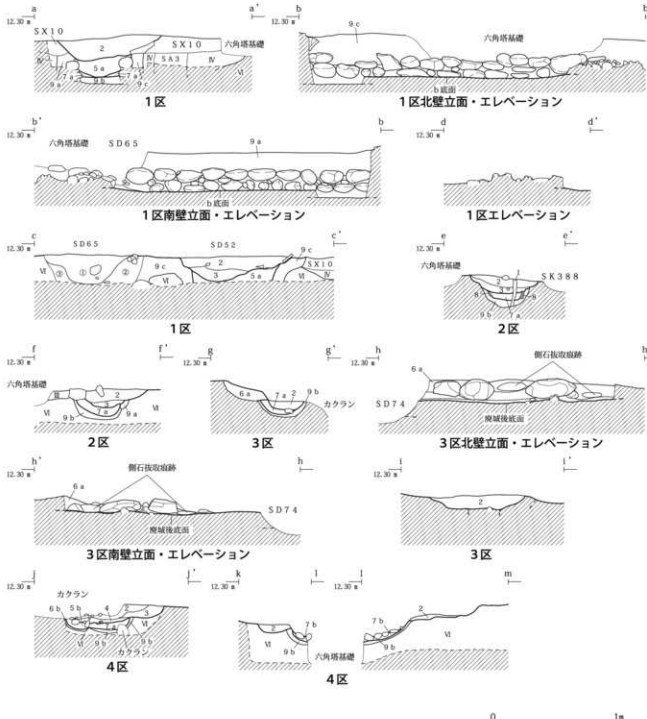
構築段階の溝跡は、ＳＤ65との接続部より西側の１区の壁面は上部を廃城後段階の溝に壊されており不明であるが、下部には径15－30cmの円礫を２段に積んだ石積みが残存し、１段目と２段目の隙間には径５－10cmの小型の円礫を詰めている。円礫は両段とも横目地が通る丁寧に詰まれたもので、このような円礫による整った構造は他にあまりみられない。石積みはＳＤ65との接続部では１段となっており、この壁面構造はそのまま東側へは続かず、接続するＳＤ65に続いている。溝跡底面には厚さ0.05mの薄い粘質シルトが掘り方埋土として敷かれるが、ＳＤ65の底面には玉砂利状の円礫が敷かれている。溝の断面形状は壁面が側石により直立し、底面は平坦になることで方形となる。掘り方幅は0.72－0.74m、残存する石積みからみた溝幅は0.31mである。また深さは0.31mで、底面標高は１区の西端で11.82m、ＳＤ65との接続部で11.84mであり、形状の整った規格性の高い溝といえる。壁面上半が壊されて入るが、上段の側石上面がほぼ一直線に揃う状況は、当初この壁面上半に木板等の別な材を用いた壁が構築されていたことを推測させるものとなっている。西端の屈曲部より北側においてこれと同様の構造が続くかは未掘のため不明である。

１区のＳＤ65との接続部東側から３区での壁面は、構造が全く異なっており、壁際に厚さ２－４cm程度の木板を立て、底面には粘質シルトの掘り方埋土を敷いている。３区では底面までの掘削を行っておらず、板痕跡は確認できなかった。底面はほぼ平坦である。２区の廃城後の溝の屈曲部掘り方の形状をみると、隅部分はあまり角張らないが、底面部分の状況から構築段階の溝の屈曲部はほぼ直角に屈曲していたとみられる。掘り方幅は0.50－0.62mで、側板痕跡間からみた溝幅は0.20－0.28mあり、西側の石積み部分とほぼ同様である。深さは0.18－0.22mで、底面標

第105図　５２号溝跡（1）

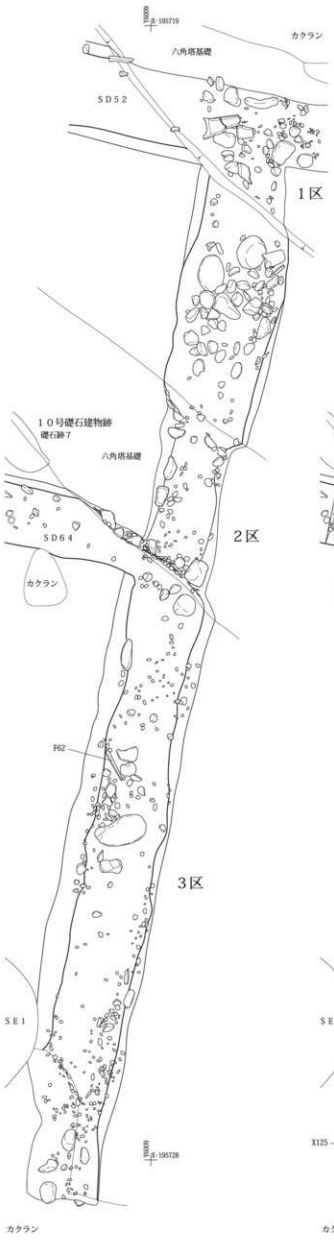


第106図　５２号溝跡（２）



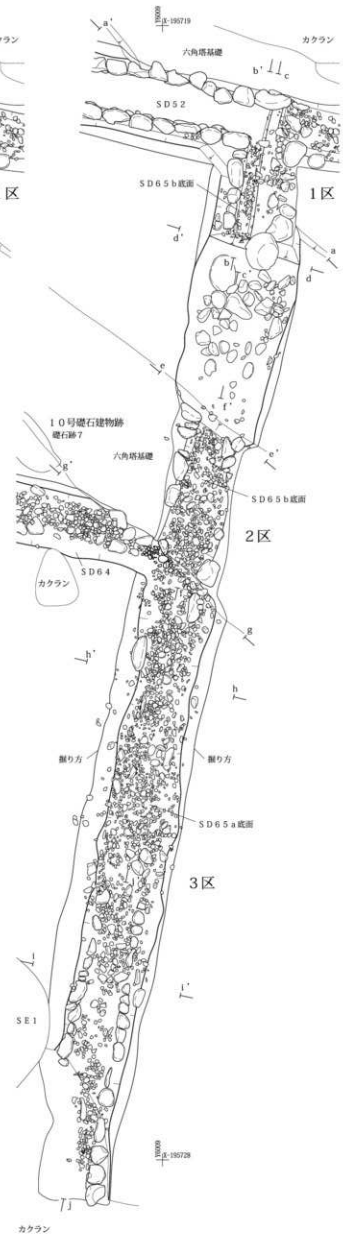
遺　構	層　位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD52（廃城後）	1	10YR6/4　にぶい黄橙色	砂質シルト		堆積土
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径5mm以内の明黄褐色・灰黄褐砂質シルトブロック、径10mm以内の円礫、径1mm以内の炭化物を含む	
	3	10YR6/4　にぶい黄橙色	砂質シルト	径1cm以内の浅黄橙色・灰黄褐色・褐色砂質シルトブロックを少量、径1cm以内の炭化物を含む	
	4	10YR7/3　にぶい黄橙色	砂質シルト	径1cm以内のにぶい黄橙砂質ブロックを少量、径5cm以内の円礫、径1cm以内の炭化物を含む	
SD52a	5a	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	径1cm以内のにぶい黄橙色・明黄褐色砂質シルトブロックを少量、径1cm以内の炭化物を含む	堆積土
	5b	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径10cm以内の円礫・角礫、径1cm以内の炭化物を含む	
	6a	10YR6/4　にぶい黄橙色	シルト	径50cm以内の角礫、径1cm以内の炭化物を含む	掘り方埋土
	6b	10YR6/4　にぶい黄橙色	粘土質シルト	径1cm以内の黄褐色砂質土ブロックを含む	
SD52b	7a	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径5cm以内の浅黄橙色砂質土ブロックを少量、径10cm以内の円礫、径1cm以内の炭化物を含む	堆積土
	7b	10YR4/2　灰黄褐色	砂質シルト	径20cm以内の円礫を密に、径1cm以内の炭化物を含む	
	8	10YR6/4　にぶい黄橙色	砂質シルト		側板痕跡
	9a	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径1cmのにぶい黄橙色砂質シルトブロックを少量含む	掘り方埋土
	9b	10YR6/2　灰白色火山灰色	粘土質シルト	径3cm以内のにぶい黄褐色砂質土ブロックを少量含む	
	9c	10YR5/2　灰黄褐色	シルト	径3cm以内の明黄褐色・にぶい黄褐色・褐灰色砂質シルトブロックを含む 径30cm以内の円礫を含む	

第107図　５２号溝跡（３）



検出状況

SD65a底面状況



SD65a・b底面状況

0　1m

第108図　65号溝跡（1）

高は１区で11.87m、２区屈曲部で11.83ー11.85m、３区で11.86mである。

東端部の４区では、溝底面と壁面に厚さ２cm程度の粘土質シルトを入れ、掘り方埋土上には径20cm以内の円礫を密に詰めた上、東端から西へ1.5mの範囲で円礫が敷かれている。底面に円礫を確認したのはこの部分のみであり、これ以外に円礫が敷かれていたかは不明である。底面は平坦で壁面は急角度で立ち上がる形状である。掘り方幅は0.79ー0.85mで、溝幅は0.3mである。深さは0.18m、４区の底面標高は円礫上で11.89mである。

溝の改修は３か所で確認しており、また堆積土の掘り直しを１か所で確認した。

ＳＤ65との接続部より西側では、壁面や底面は構築段階の構造を踏襲するが、溝底面に構築段階の堆積土が一部残存することで溝の掘り直しを確認した。

接続部より東側の壁面は六角塔基礎で壊され、掘り方埋土を確認したが壁の構築材は確認できなかった。底面には径15ー20cmの円礫が幾つかみられ、間に径５ー10cmの円礫や径３cm以内の小円礫を敷き、構築段階の底面より0.06m程度高くし、東側へ水が流れない構造としている。２区ではこの段階の溝構造は確認できず、廃城後に溝を改修した際に壊されたとみられる。壁面や底面は基本的には構築段階のものを踏襲しているとみられる。この地区での底面標高は11.92mである。

３区を含む中央屈曲部より東側でＳＢ11に近接する溝跡の壁には、径20ー30cmの角礫が１段程度残存している。掘り方は構築段階のものと連続せず、その上部に多少位置を変えて造られている。このような側石の範囲は、西側の溝堆土中に角礫が含まれる中央屈曲部から、東側は４区まで続くとみられる。底面は廃城後の溝底面が側石下端よりも低く掘り直されており、その状況や深さは不明である。掘り方幅は0.86mで、南北の側石間は0.21mと、構築段階の溝幅よりやや狭い。

東端部では厚さ２cm程度の粘土質シルトによる掘り方埋土が底面と壁面に敷かれる以外、構築材は確認できない。掘り方プランは溝跡の中央が構築段階より南側に寄っており、また東側が狭くなり、東端ではほとんど残存していない。残存状況が悪く断面形状は不明である。掘り方幅は0.79ー0.85mで、溝幅は0.18mである。深さは0.2mで、底面標高は11.93mである。

廃城後に改修した溝は、西端では改修したＳＸ10を埋め戻した土を新たに掘削し、若林城期の溝の掘り方を壊すことで掘り方幅が広がっている。溝跡の断面形状は、壁面は途中で急角度となり、東端部では壁面から底面に段を持ち、底面はほぼ平坦である。また東端部では堆積土２層が３・４層を掘り込むような状況がうかがえることから、この段階でも途中で掘り直された可能性がある。掘り方幅は幅0.5ー0.84mで、溝幅は0.53ー0.82cm程度と推定される。深さは0.11ー0.24mで、底面標高は１区で11.95ー12.0m、２区で11.86m、３区で11.90ー12.0m、４区で11.98mと、多少の凹凸があるがほぼ水平である。

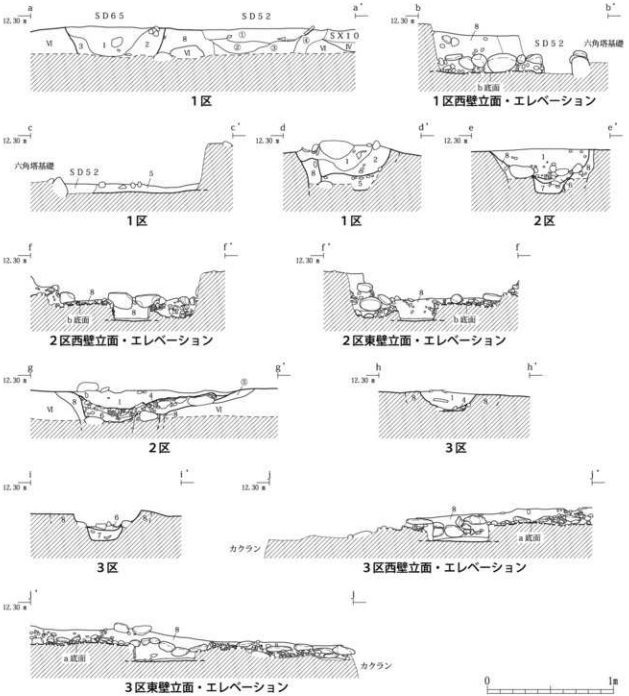
出土遺物　遺物は軒丸瓦（Ｆ44・45）、丸瓦（Ｆ61）、平瓦、刻印平瓦、熨斗瓦（H137・138・140）、刻印熨斗瓦（H139）、丸瓦か輪違い、土師質土器の皿、鉄釘（N535・536・540・541）が出土している。

65号溝跡

位置と配置　ＳＢ11の西辺近くにあるとみられる溝跡で、ＳＸ10を埋め戻した土を掘込み構築している。北端はＳＤ52に接続し、南端は撹乱で壊れており不明であるが、ＳＢ９主屋北辺のＳＤ63に接続するとみられる。また西側からＳＤ64が接続している。礎石跡１・７・10の南北列と溝跡までの距離は2.7m（８尺９寸程度）である。

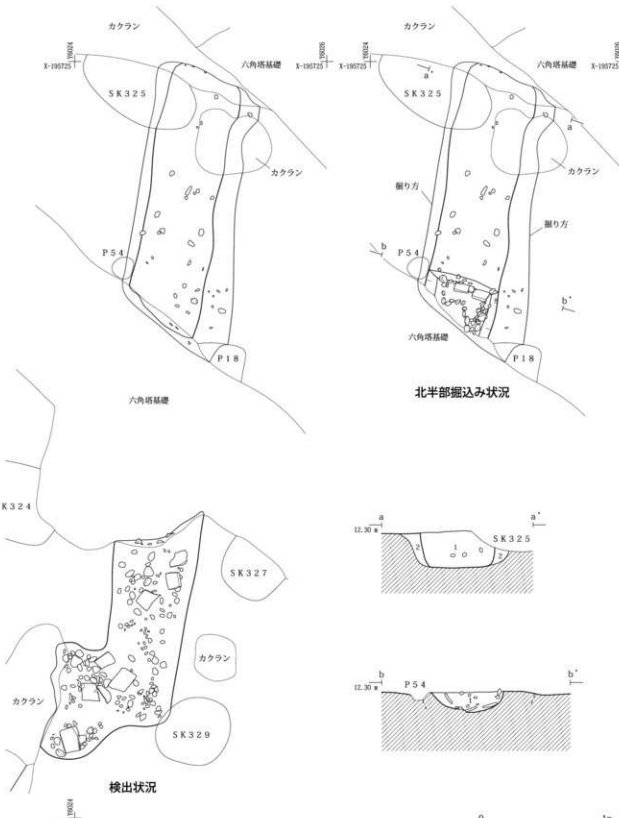
構造と規模　残存長は8.4mである。断面観察から溝跡は構築段階、改修段階、廃城後段階があることが分かった。掘込みは北端のＳＤ52との接続部、ＳＤ64との接続部、南半部の３か所で行った。

構築段階の壁面は底面壁際に径10ー25cmの大型の円礫を２段以上積む構造とみられ、この構造は北側のＳＤ52から続くもので、溝は北端でＳＤ52に接続する形をとるが、本来鉤型に曲がる配置であったことがわかる。また北側のＳＢ６東辺のＳＤ43にも同様の構造がみられる事から、途中撹乱で分断されるが、これらは連続する一連の溝跡



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD65（廃城後）	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径3cm以内の黒褐色粘質土・明黄褐色・褐色砂質シルトブロック、径10cm以内の円礫、径1cm以内の炭化物を含む（SD64の1層と共通）	埋積土
	2	10YR6/3　にぶい黄橙色	シルト	径10cm以内の灰黄褐色砂質シルトブロック、径10cm以内の円礫を含む	
	3	10YR6/3　にぶい黄橙色	シルト	径5cm以内の褐色砂質シルトブロックを少量、径5cm以内の円礫を含む	
SD65a	4	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径3cm以内のにぶい黄橙色シルトブロック、径10cm以内の円礫を密に、径1cm以内の炭化物を含む（径30cm以内の円礫による石敷あり（SD64の2層と共通）	石敷層
SD65b	5	10YR5/2　灰黄褐色	砂質シルト	径10cm以内のにぶい黄褐色・灰黄褐色砂質シルトブロック、径10cm以内の円礫、砂粒を含む	堆積土
	6	10YR6/3　にぶい黄橙色	シルト	径1cm以内のにぶい黄橙色シルトブロック、径10cm以内の円礫を含む	埋戻し土
	7	10YR6/3　にぶい黄橙色	シルト	径1cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロック、径5cm以内の円礫を含む	石敷層
	8	10YR5/2　灰黄褐色	砂質シルト	径5cm以内のにぶい黄褐色・にぶい黄橙色シルトブロック、径30cm以内の円礫、砂粒を含む	掘り方埋土
SD52（廃城後）	①	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径5cm以内の明黄褐色・灰黄褐色砂質シルトブロック、径10cm以内の円礫、径1cm以内の炭化物を含む（SD52の2層）	堆積土
	②	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト	径1cm以内の褐黄褐色・灰黄褐色・褐色砂質シルトブロックを少量、径1cm以内の炭化物を含む（SD52の3層）	
SD52a	③	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	径1cm以内のにぶい褐色・黒褐色砂質シルトブロックを少量、径1cm以内の炭化物を含む（SD52の5層）	堆積土
SD52b	④	10YR5/2　灰黄褐色	シルト	径3cm以内の明黄褐色・にぶい黄褐色・褐灰色砂質シルトブロックを含む（径30cm以内の円礫を含む（SD52の9c層）	掘り方埋土
SD64a	⑤	10YR5/2　灰黄褐色	シルト	径5cm以内のにぶい黄褐色・にぶい黄橙色シルトブロック、径5cm以内の円礫を微量砂粒を含む　上面に径30cm以内の円礫による石敷あり（SD64の3層）	掘り方埋土

第109図　６５号溝跡（２）



遺　構	層　位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD66	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径5cm以内の褐灰色砂質シルト・にぶい黄橙色シルトブロック、径20cm以内の円礫を含む	堆積土
	2	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径3cm以内のにぶい黄褐色シルトブロックを少量含む	掘り方埋土

第110図　６６号溝跡

の可能性もある。ただしＳＤ43・52と異なり、ＳＤ65の底面には径５cm以内の円礫を敷き、特に径３cm以内の小円礫が多くみられる。２区では１区と異なり壁面の大型円礫は底面より５－10cm程度も高位置に設置されており、壁面の円礫下の壁面から底面まで径５cm以内の円礫を中心とした石敷きとなっている。底面は平坦である。掘り方幅は0.74－0.84mで、溝幅とみられる側石間の距離は0.25－0.32mである。深さは0.15－0.35mで、底面標高は１区が11.87m、２区が11.81－11.89m、３区が11.92－11.94mとなり、北側が僅かに低くなっている。

改修後の溝跡は、構築段階の側石や底面の礫、さらに僅かに確認した礫を全く含まない堆積土上部に、主に径３cm以内の小円礫を多量に敷くことで、かつての溝構造が全く見えないものとなっている。この段階の溝跡は南側では構築段階のものと構造が明確に分かれるが、１区では石敷きが確認できず、溝構造自体が確認できなかった。溝の断面形状は壁面が開き、底面中央が深くなっている。３区での掘り方幅は0.75－0.82mで、溝幅が0.43－0.61mとなり、構築段階よりも広く、深さは0.15mで、底面標高は11.99－12.03mである。

廃城後の溝跡はかつての２時期の掘り方埋土を掘り込んでおり、構築材は確認できなかった。１・２区での底面は改修段階の溝と共有している。掘り方幅は0.74－0.84m、溝幅は0.44－0.84mである。深さは0.14－0.24mで、底面標高は１区が11.98m、２区が11.96－12.04m、３区が11.99－12.03mである。

出土遺物　遺物は丸瓦（Ｆ62）、平瓦、熨斗瓦、土師器、土師質土器の皿（Ｘ125）、鉄釘（Ｎ556）が出土している。

66号溝跡

位置と配置　ＳＢ11の東辺に位置する溝跡で、南端は西へ折れ曲がるとみられる。北端は撹乱で壊され不明であるが、北辺溝のＳＤ52と接続すると考えられ、さらに北へ延びＳＤ71と接続する可能性もある。

構造と規模　残存長は南北方向が５mで、西側に0.4m程度張出している。掘込みを１か所、撹乱での壁面観察を１か所で行なったところ、１時期のみの溝跡の堆積土と掘り方埋土を確認した。

溝跡の構造は北半部では掘り方埋土を確認したが、南半部では確認できず、おそらくは同様の構造が続いているとみられる。堆積土中には径10cm以内の円礫と瓦片が多量混入している。全体で構築材等は確認できなかったが、掘込み部分では底面に径10cm以内の円礫がまばらに敷かれ、また削平が著しい南半部の検出面でも同様の円礫を確認していることから、底面にはこれらの円礫を敷いた構造とみられる。さらに北端部では底面部分に掘り方埋土は確認できず、堆積土が深く、この部分では後に掘り直されている可能性がある。また廃城後の溝跡が存在し削平により失われた可能性もある。掘込み部分での断面形状は東壁側は急角度で立ち上がり、西壁側は大きく開き、底面中央はやや窪んでいる。北端では壁面はほぼ直立し、底面は平坦である。掘り方幅は0.58－0.89mで、溝幅は0.52－0.60mである。深さは0.29mで、底面標高は11.96－12.07mである。

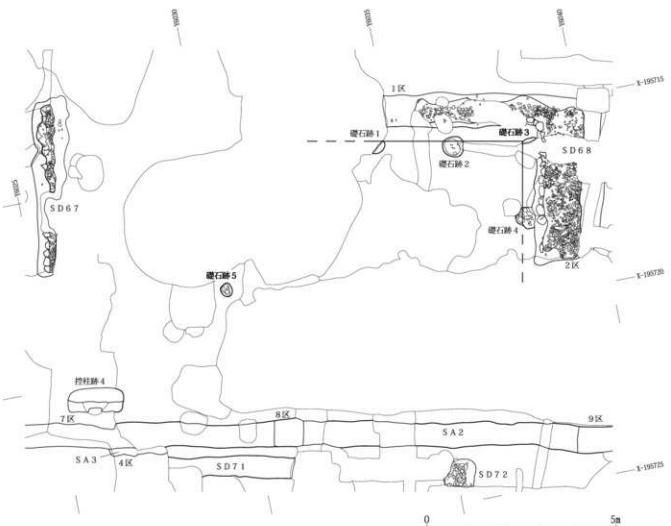
出土遺物　遺物は平瓦、熨斗瓦が出土している。

12号礎石建物跡

［位置と規模］

調査区の北東側で確認した礎石建物跡で、ＳＢ11の北東側、ＳＢ13の南東側に位置する。またＳＢ12は城内の北東部を区画するＳＡ２より北東内側に位置している。

検出した礎石跡が少ないため、建物形状は不明であるが、周辺の溝跡等から推定すると、西側はＳＤ67、北および東側はＳＤ68に囲まれた範囲に展開するものとみられ、これらの溝跡が建物周囲を巡る雨落ち溝と推定される。また南側にはＳＡ２が配置されることから、建物はこれより南側へは延びないと考えられる。これらからＳＢ12の規模は東西7.9m（６尺５寸の４間分）－11.8m（６間分）、南北3.9m（２間分）－5.9m（３間分）程度の建物跡と考えられる。建物方向は他の建物跡同様に南北方向はＮ－11°－Ｅである。



第111図　１２号礎石建物跡

［配　置］

北辺とみられる礎石跡１・２の東西列は、その西側でＳＤ70に囲まれると推定される建物北辺と柱筋を同じくしているものとみられる。礎石跡の柱間は６尺５寸の１間を基準とするとみられる。

［礎石跡］

礎石跡は５基確認している。礎石跡の掘り方規模は径0.36～0.60mで、平均0.51mである。

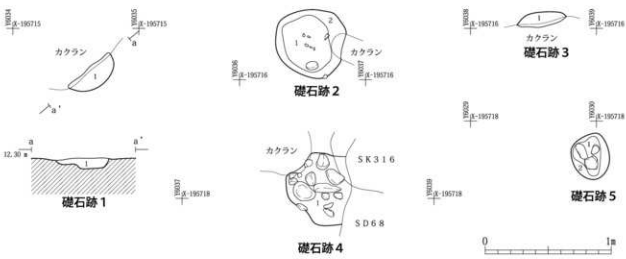
礎石跡には抜取痕が確認できず、調査区西側の礎石建物跡と比べ、上面の削平により残存状況が悪いと考えられる。礎石跡４は東辺のＳＤ68掘り方により東端部を壊されており、礎石跡の後に溝を造ったことがわかる。

礎石跡１

建物北辺に位置するとみられる礎石跡である。撹乱で北西側を壊され、掘り方形状は半円形に残存する。残存する掘り方規模は長径0.42m、短径0.17m、深さ0.08mである。撹乱壁面の観察では、掘り方底面には段差がみられる。抜取痕や根固めは確認できなかった。掘り方埋土は暗褐色シルトブロックを含み、周りのⅣ層よりも暗色である。

礎石跡２

建物北辺に位置するとみられる礎石跡である。撹乱で東側を壊されている。掘り方形状は不整円形で、残存規模は径0.58mである。根固め形状は不整楕円形で、残存規模は長径0.44m、短径0.37mである。抜取痕は確認できなかった。根固めはブロック土が主体で、円礫を僅かに確認したのみである。掘り方埋土は暗褐色シルトブロックを含



遺　構	層 位	土　色	土　性	特　徴	備　考
礎石跡1	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径10cm以内の暗褐色シルトブロック、径1cm以内の炭化物を含む	掘り方埋土
礎石跡2	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径1cm以内のにぶい黄褐色砂質シルトブロック、径10cm以内の円礫を少量含む	根固め
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径3cm以内の暗褐色シルトブロックを含む	掘り方埋土
礎石跡3	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	暗褐色シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡4	1	10YR4/4　褐色	シルト	にぶい黄橙色シルトブロックが縞状となり、径20cm以内の円礫を多量含む	根固め
礎石跡5	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径1cm以内のにぶい黄褐色砂質シルトブロックを少量、径20cm以内の円礫を含む	根固め
	2	10YR4/4　褐色	シルト		掘り方埋土

第112図　１２号礎石建物跡　礎石跡

み、厚さは0.04ー0.15mである。

礎石跡３

建物北東隅に位置するとみられる礎石跡である。撹乱で南側を壊され、掘り方形状は不明である。残存する掘り方規模は長径0.40m、短径0.12mである。撹乱壁面の観察では、掘り方壁面は外に開き、底面は平坦である。抜取痕や根固めは確認できなかった。掘り方埋土は暗褐色シルトブロックを含み縞状となっている。

礎石跡４

建物東辺に位置するとみられる礎石跡で、ＳＫ316で北東側、ＳＤ68で東側、撹乱で北西側を壊され、掘り方形状は不明である。遺構の重複関係としては、礎石跡４が最も古く、次いでＳＤ68、ＳＫ316となっている。但しＳＤ68は礎石跡の掘り方との重複であり、同時に機能した遺構と考えられる。残存する掘り方規模は長径0.60m、短径0.51mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは径10ー20cmの大型の円礫を中央部に多量詰めている。また根固めの堆積土中のブロック土が縞状となっている。掘り方内の堆積土中にも全体に円礫を含むことから、根固めと掘り方埋土の分別が不明瞭であり根固めとした。

礎石跡５

建物内側か南側の礎石跡である。掘り方形状は楕円形で、残存規模は長径0.36m、短径0.30mである。他の礎石跡に比べ小規模であるが、これは他より検出面が0.1m程度低いことによるとみられる。根固め形状は不整形で、残存規模は長径0.31m、短径0.22mである。抜取痕は確認できなかった。根固石は径５ー15cmの円礫を３個のみ確認し、底面近くの残存とみられる。掘り方埋土はブロック土が僅かに含まれるのみで、厚さは0.02ー0.07mである。

［溝　跡］

ＳＢ12は建物の全体規模が不明であり、おそらくは北辺から東辺側に配置されていたＳＤ68と西辺側に配置されていたＳＤ67を確認した。建物南側はＳＡ２により遮蔽される形となり、建物南側に配置されたであろう東西溝はここにある大規模な撹乱等により失われたとみられる。

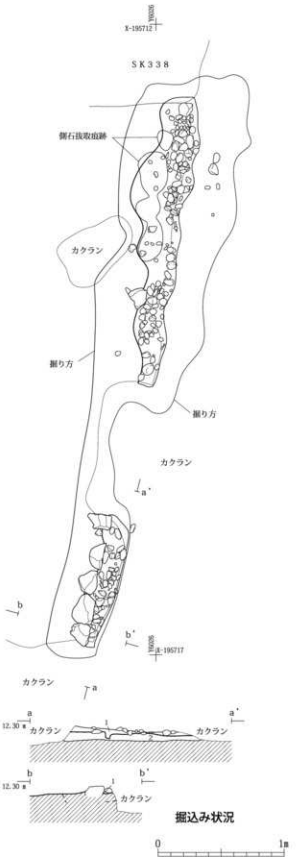
67号溝跡

位置と配置　北側と南側は撹乱に壊されており、他の溝跡との接続関係は不明であるが、北側はＳＤ60に接続する可能性があるのに対し、東側のＳＤ68が接続する状況はみられない。

構造と規模　残存長は4.6mで、溝跡は東壁側が撹乱により失われている。堆積土の一部を掘り込んだところ、一時期の溝跡の堆積土と掘り方埋土に分層された。

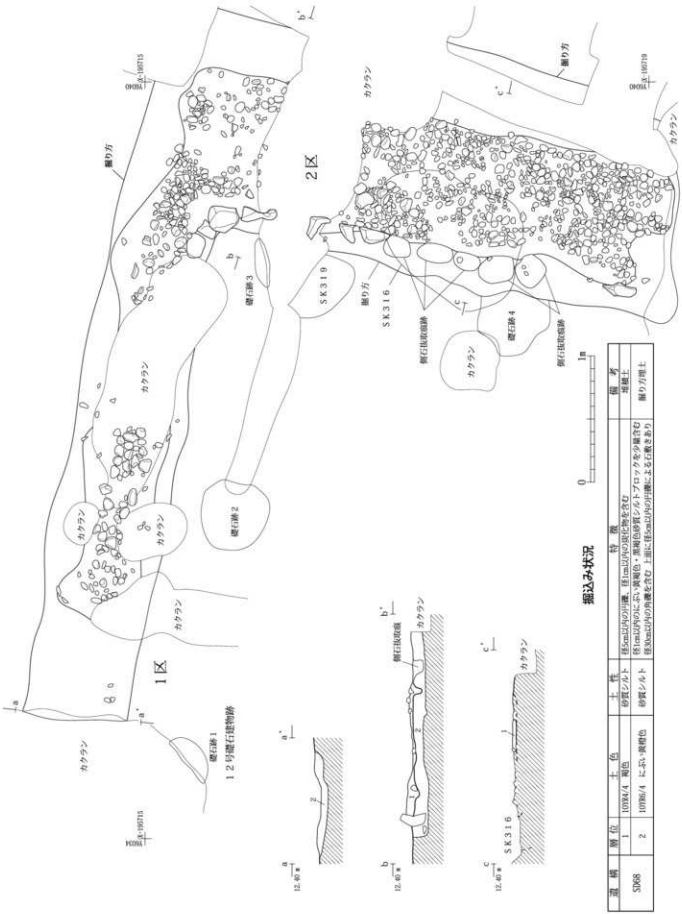
溝跡は構築段階のものとみられ、構造は掘り方にブロック土を詰め、壁面に径20－30cmの角礫を１段以上組んだもので、底面には径10cm以内の円礫を敷いている。西壁側でも側石の確認できなかった北半部には側石の抜取痕を連続して数石分確認したことから、当初の構造は角礫による石組み壁であったとみられる。側石は南側が残存する状況からみて、廃城後の耕作により抜取られたものとみられる。検出状況では既に底面の円礫が露出していたことから壁面は失われ、深さは不明であるが、石敷きの標高は12.25mである。

出土遺物　遺物は出土していない。



遺構	層位	土色	土性	特徴	備考
SD67	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径10cm以内の円礫を多量含む	堆積土
	2	10YR6/4　にぶい黄橙色	砂質シルト	径1cm以内の黒褐色砂質シルトブロックを微量含む 上面に径10cm以内の円礫による石敷きあり	掘り方埋土

第113図　６７号溝跡


1区
2区
カクラン
礎石跡1
12号礎石建物跡
礎石跡2
礎石跡3
礎石跡4
SK319
SK316
掘り方
1m
0
掘込み状況
遺構
層位
土色
土性
特徴
備考
SD68
1
10YR4/4 褐色
砂質シルト
径5cmは以内の円礫、径1cmは以内の礫を含む
径1cmは以内のにぶい黄褐色・黒褐色砂質シルトブロックを少量含む
径30cmは以内の角礫を含む 上部に径5cmは以内の円礫による石敷きあり
堆積土
掘り方埋土
2
10YR6/4 にぶい黄褐色
砂質シルト

第114図　６８号溝跡

68号溝跡

位置と配置　東端と南端を撹乱で壊されており、他の溝跡との接続関係は不明である。南北辺の掘り方が建物礎石跡４の一部と重複しているが、これは双方の基礎部分の重複であり、同時に機能していたと考えられる。各側柱列と溝跡との距離は、建物北辺と東西辺までが0.8－0.9m（２尺６寸－３尺程度）、東辺と南北辺までが1.2m（４尺程度）と両方とも近く、特に東辺側は近接している。

構造と規模　残存長は東西辺が4.7m、南北辺が3.9mである。南北辺側の堆積土を掘り込んだところ、溝跡は一時期のみの堆積土と掘り方埋土に分層され、構築段階の溝跡とみられる。

周辺を含めた削平が著しく、壁面や堆積土はほとんど残存しないが、南北辺の西壁側で径20－30cmの大型の角礫による側石が列状に埋設され、またその南側の並びで５石分の抜取痕跡を確認した。南北辺の壁面部の掘り方埋土の厚さは0.43－0.63mと厚いことから、東壁側にも石壁が組まれていたとみられるが、全く残存せず、抜取痕跡も確認できなかった。これに対し東西辺の掘り方の厚さは0.20－0.36m程度と狭くなっているが、おそらくは同様の石組みがあったと推定される。底面は径20cm以内のやや大きめの円礫を敷いた石敷きで、角礫による敷石状のものではない。南北辺の溝跡については他と比較し溝幅が極端に広いことから、その機能は雨落ち溝に止まらず、何かしら別な目的をもって構築された施設の可能性がある。東西辺の掘り方幅は0.82－0.94m、南北辺は1.54－1.74mで、石敷き幅も東西辺が0.3－0.35m、南北辺が0.94－1.06mであり、実際の溝幅はこれに近いものと考えられる。ほとんどが底面部分の確認のため、深さは不明で、底面標高は東西辺で12.24－12.28m、南北辺で12.22mであり、ほぼ平坦である。

出土遺物　遺物は平瓦、熨斗瓦、土師器等が出土している。

13号礎石建物跡

[位置と規模]

調査区の中央北壁際で確認した礎石建物跡であり、ＳＢ６の東側に位置する。またＳＢ13はＳＢ12同様に城内の北東側を区画するＳＡ２の北東側に位置しているものとみられる。

検出した礎石跡が少なく、また建物は調査区外に続くとみられることから建物形状は不明である。礎石跡と建物周囲を巡るとみられる溝跡との位置関係から推定すると、礎石跡１は建物西辺の側柱、礎石跡３・４は南辺の側柱列の可能性があるが、建物の推定範囲内にＳＤ69が存在することなどから、ＳＢ13は複数棟の建物に分かれる可能性もある。建物規模は１棟の場合、東西9.9m（６尺５寸の５間分）かそれ以上、南北5.9m（３間分）かそれ以上の建物跡と考えられる。建物方向は他の建物跡同様に南北方向はＮ－11°－Ｅである。

建物跡南辺のＳＤ60の南側には城内を大きく区画するＳＡ２の南北辺部分が止まっている。建物周辺にはこの塀跡の北側への延長はみられないことから、建物は塀跡により区画された北東地区に位置するが、建物自体が両地区を分ける仕切りとなっていたと考えられ、同時に西側のＳＢ６からの出入りが行われた建物と推定される。

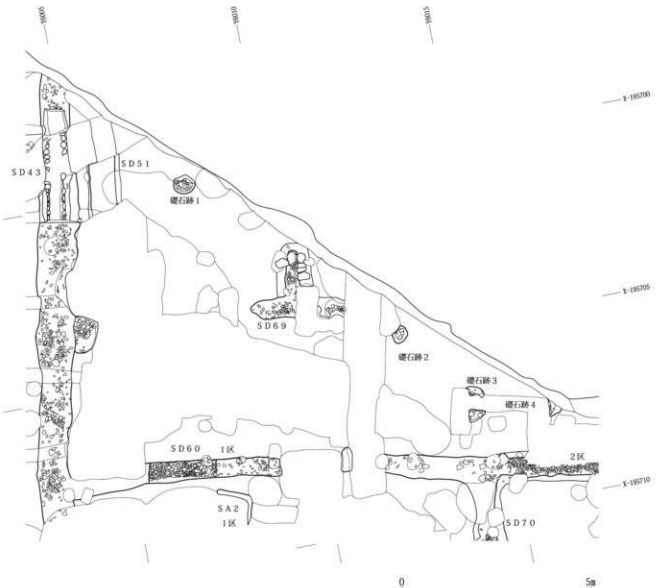
[配　置]

建物は最西端の礎石跡１と西側のＳＢ６東辺とは5.35m（６尺５寸の2.72間分）離れた位置にある。礎石跡の柱間はほぼ６尺５寸の１間と推定される。

[礎石跡]

礎石跡は４基確認している。礎石跡の規模は径0.47－0.95mで、平均0.66mである。

礎石跡の残存状況はいずれも撹乱に壊されて他の建物跡よりも悪い。規模は礎石跡３のように径が１m近くあるものもある。また礎石跡には明確な抜取痕は確認できず、根固めと掘り方埋土からなる。根固石はどの礎石跡からも確認され、礎石跡１の根固石が径５－10cmの円礫主体で、量が多く密集しているのに対し、礎石跡２－４は径



第115図　１３号礎石建物跡

15cm程度のやや大型の円礫が主体で、少量をまばらに詰めている。礎石跡１と礎石跡２ー４はＳＤ69を挟んだ西側と東側に位置している。

礎石跡１

検出した礎石跡の中で最も西側に位置するものである。撹乱で上面を壊され、掘り方形状は円形とみられる。残存する掘り方規模は径0.57mである。根固め形状も円形とみられ、残存規模は径0.46mである。根固めは径20cm以内の礫を多量詰め、根固石は径５ー10cmの円礫が多く、中央に密集している。根固め中の礫には角礫も含まれており、抜取痕が残存している可能性もある。掘り方内の堆積土はにぶい黄橙色砂質シルトブロックを含み、厚さは0.03ー0.06mである。掘り方埋土と根固めとの土の違いは殆ど無く、礫の有無で分けた。遺物は根固めから土師質土器の皿（X124）が出土した。

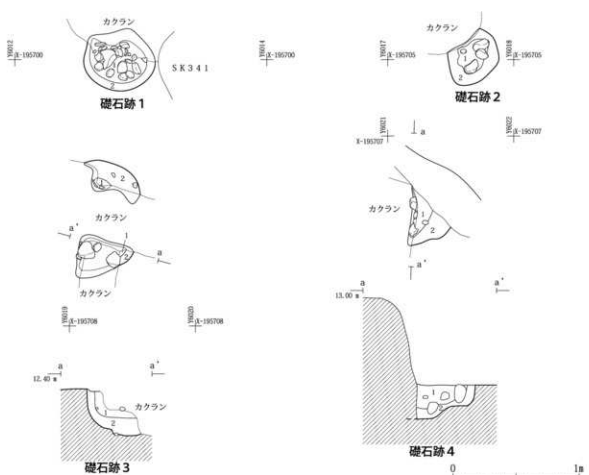
礎石跡２

ＳＤ69の東側にある礎石跡である。撹乱で北西側を壊され、掘り方形状は不整形である。残存する掘り方規模は

長径0.47m、短径0.38mである。根固めも不整形で、残存規模は長径0.30m、短径0.22mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは径20cm以内の円礫を詰め、根固石は少量で径15cmの円礫が大半であり、中央へ平坦面を向けて詰めている。掘り方埋土はにぶい黄橙色砂質シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.04－0.12mである。

礎石跡３

ＳＤ60から北側へ６尺５寸程度離れた建物南辺に位置するとみられる礎石跡である。撹乱で西側と中央部を壊され、掘り方形状は不明である。残存する掘り方規模は長径0.95m、短径0.45m、深さ0.37mで、礎石跡の中では規模のあるものである。根固め形状も不明であるが、残存規模は長径0.74m、短径0.34m、厚さ0.23mである。撹乱壁面の観察では、掘り方壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面には段差があり、中央が１段下がっている。抜取痕は確認できなかった。根固めはブロック土を多く詰め、根固石は径20cmの少量の円礫を深い位置にも詰めている。掘り方埋土はにぶい黄橙色砂質シルトブロックを少量含み、厚さは0.04－0.16mである。



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
礎石跡1	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径1cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロック、径20cm以内の円・角礫を多量含む	根固め
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径1cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロックを含む	掘り方埋土
礎石跡2	1	10YR4/4　褐色	シルト	径3cm以内の黒褐色砂質シルトブロックを少量、径20cm以内の円礫を含む	根固め
	2	10YR4/4　褐色	シルト	径5cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土
礎石跡3	1	10YR4/4　褐色	シルト	径3cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロックを少量、径20cm以内の円礫を含む	根固め
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径5cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロックを少量含む	掘り方埋土
礎石跡4	1	10YR4/4　褐色	シルト	径3cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロックを少量、径20cm以内の円礫を含む	根固め
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径3cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロックを少量含む	掘り方埋土

第116図　１３号礎石建物跡　礎石跡

礎石跡４

ＳＤ60から北へ６尺５寸程度離れた建物南辺に位置するとみられる礎石跡である。撹乱で西側を壊され、北は調査区外へ続いている。掘り方形状は不明であるが、残存規模は長径0.48m、短径0.32m、深さ0.26mである。根固め形状も不明であるが、残存規模は長径0.42m、短径0.16m、厚さ0.18mである。撹乱壁面の観察では、掘り方壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面には段差があり、中央が１段下がっている。抜取痕は確認できなかった。根固めはブロック土を多量詰め、根固石は径10ー20cmの円礫を少量詰めている。根固石は一部掘り方埋土に突き込まれている。掘り方埋土はにぶい黄橙色砂質シルトブロックを少量含み、厚さは0.06ー0.18mである。

［溝　跡］

溝跡は西辺側でＳＤ51、南辺側でＳＤ60を確認し、またこれらに囲まれた内側には丁字形に残存するＳＤ69を確認した。ＳＤ60は東西に長く通る溝跡であり、この東側では別建物の南辺を兼ねている可能性もある。

51号溝跡

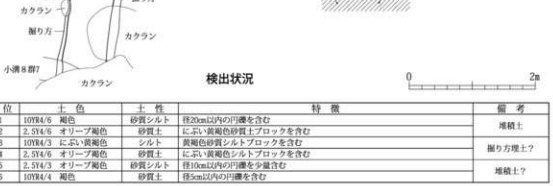
位置と配置　北端は調査区外へ続き、南側は撹乱で壊されており、ＳＤ69やＳＤ60との接続関係は不明である。礎石跡１と溝跡の距離は2.1m（６尺９寸程度）である。

構造と規模　残存長は2.9mである。堆積土は廃城後の溝跡に伴う１ー４層と、構築段階の５・６層の２つに大きく分かれる。ＳＤ51は掘込みを行っておらず、断面観察は六角塔基礎壁面で行なった。

構築段階の溝内部には掘り方埋土はみられず、壁面は中位が膨らみ、側面が崩落したとみられ、当初の壁面や底面構造は明らかでない。溝幅は0.74mで、底面まで掘削しておらず深さは不明であるが、確認した深さは0.44m以上、底面標高は11.74m以下である。

廃城後の溝跡は、平面プランで両側に幅0.06ー0.15mの掘り方埋土プランを確認し、断面観察でも壁面側にブロック土を貼ったのを確認したが、底面には人為的な埋土はみられない。壁面の掘り方埋土より底面が低位置にあるため、廃城後の溝跡は二時期あり、途中で改修したものとみられる。溝跡の壁面はほぼ直立し、底面はほぼ平坦である。掘り方幅は0.86mで、溝幅は0.68mある。深さは0.22mで、底面標高は11.96mである。

出土遺物　掘削を行っておらず、遺物は確認できなかった。

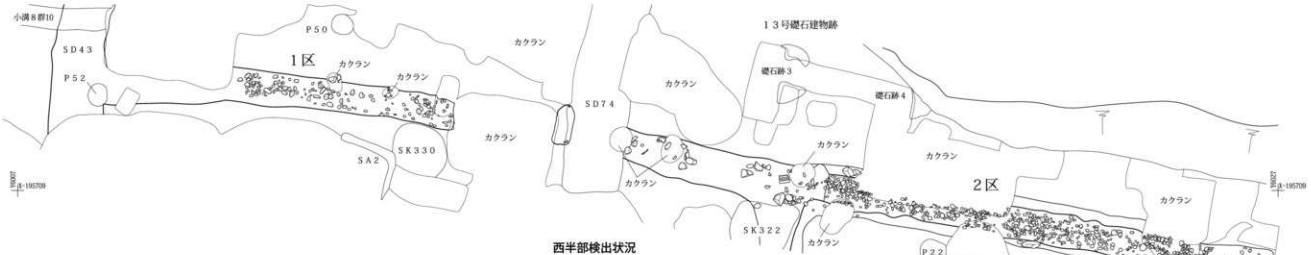


遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD51（廃城後）	1	10YR4/6　褐色	砂質シルト	径20cm以内の円礫を含む	堆積土
	2	2.5Y4/6　オリーブ褐色	砂質土	にぶい黄褐色砂質土ブロックを含む	
	3	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	黄褐色砂質シルトブロックを含む	掘り方埋土？
	4	2.5Y4/6　オリーブ褐色	砂質土	にぶい黄褐色シルトブロックを含む	
SD51	5	2.5Y4/3　オリーブ褐色	砂質シルト	径10cm以内の円礫を少量含む	堆積土？
	6	10YR4/4　褐色	砂質土	径5cm以内の円礫を含む	

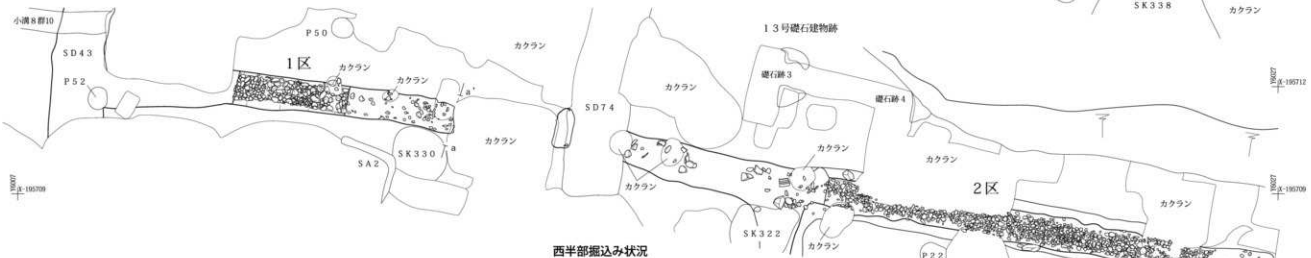
第117図　５１号溝跡

60号溝跡

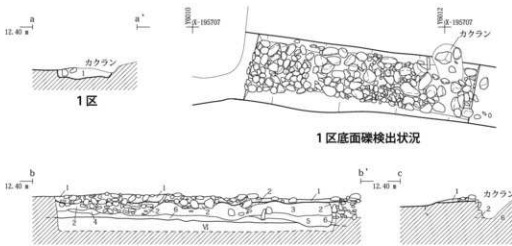
位置と配置　西側はＳＢ６東辺溝のＳＤ43に接続し、東側は長く延び、調査区外へと続いている。ＳＤ51が北側か

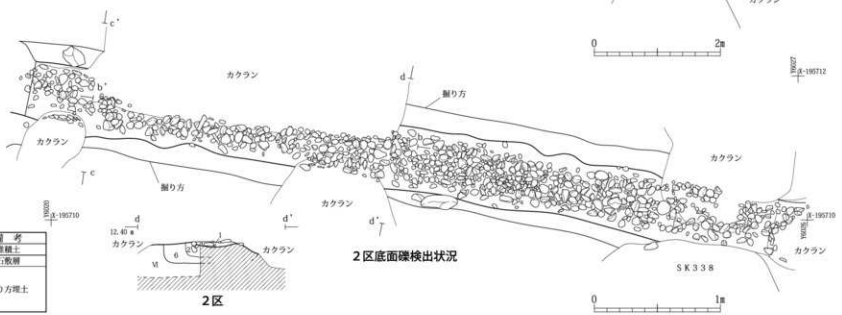


西半部検出状況



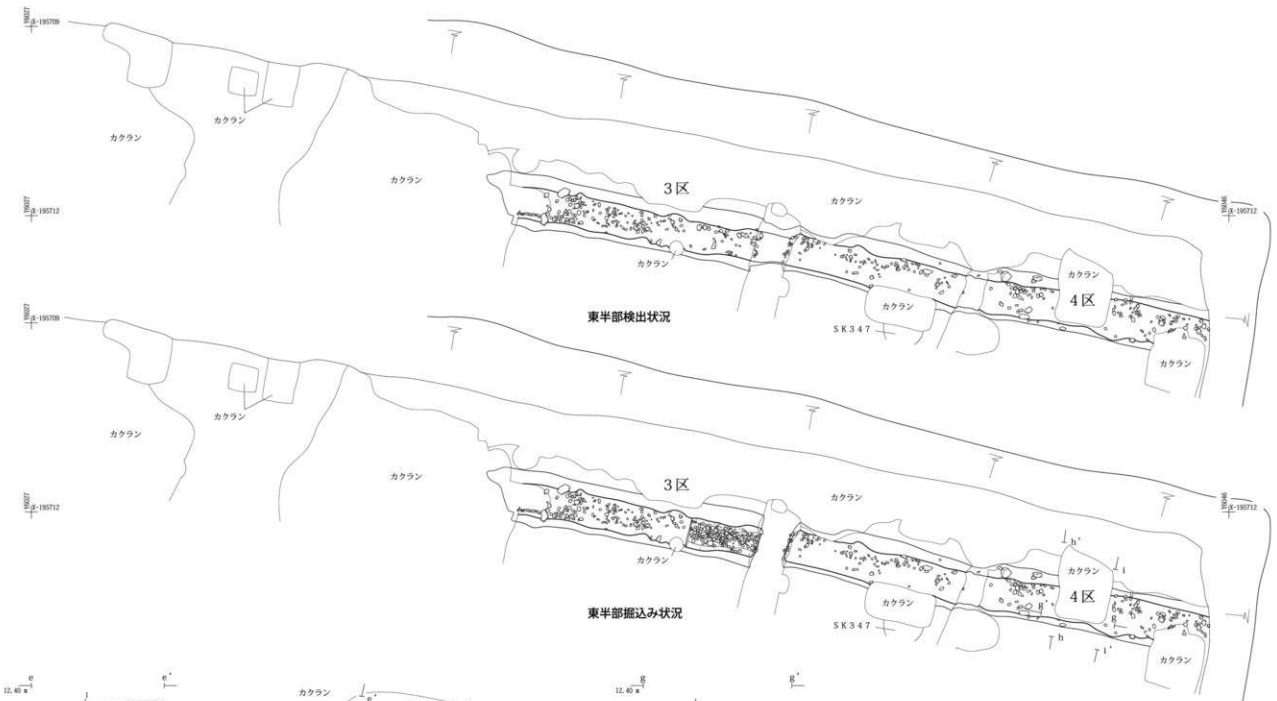
西半部掘込み状況

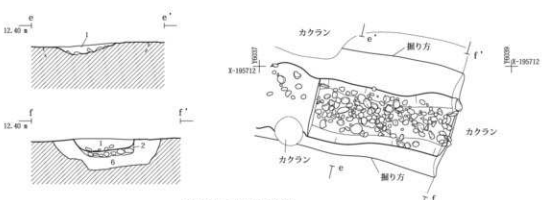




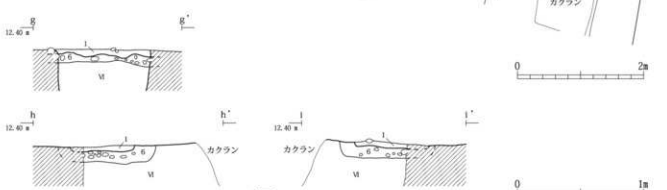
遺構	層位	土色	土性	特徴	備考
SD60	1	10YR6/3 にぶい黄橙色	シルト	径10cm以内の円礫を含む	堆積土
	2	10YR6/3 にぶい黄橙色	シルト	径5cm以内の炭黄褐色砂質シルトブロックを含む、径10cm以内の円礫を多量含む	石敷層
	3	10YR6/2 灰黄褐色	砂質シルト	径5cm以内の円礫を微量含む	掘り方埋土
	4	10YR6/2 灰黄褐色	砂質シルト		
	5	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト		
	6	10YR7/2 にぶい黄橙色	シルト	径5cm以内の灰白色粘土質シルト・灰黄褐色砂質シルトブロック、径10cm以内の円礫を含む	

第118図　６０号溝跡（１）





3区底面礫検出状況



4区

遺　構	層　位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD60	1	10YR6/3　にぶい黄橙色	シルト	径10cm以内の円礫を含む	堆積土
	2	10YR6/3　にぶい黄橙色	シルト	径5cm以内の炭黄褐色砂質シルトブロックを含む、径10cm以内の円礫を多量含む	石敷層
	6	10YR7/2　にぶい黄橙色	シルト	径5cm以内の灰白色粘土質シルト・炭黄褐色砂質シルトブロック、径10cm以内の円礫を含む	掘り方埋土

第119図　６０号溝跡（２）

ら接続するかは不明であり、また中ほどで南側からＳＤ70が接続している。礎石跡３と４による南辺礎石列と溝跡との距離は1.8m（５尺９寸程度）である。またＳＢ６のＳＤ43とは近接しており、溝の中間距離で1.29m、掘り方プランの間は0.25mである。

構造と規模　確認長は37.9mである。掘込み調査を３か所、断面観察を１か所で行ったところ、構築段階の溝跡構造のみを確認した。

掘り方の壁面、底面側にはブロック土による埋土を入れ、壁面は掘り方埋土幅が広めであるが、構築材やその抜取痕跡は確認できなかった。接続するＳＤ70は壁面に角礫を組む構造であり、この接続部より東側の壁面には１石のみであるが径30cmの大型円礫が埋め込まれており、礫を組んだ可能性もある。また溝跡の幅が狭まる西端近くでは平面的に掘り方埋土幅が狭く、底面石敷きの南北両側の端が比較的揃っており、ここでは木板等を壁材として立てている可能性もある。底面には全体に径20cm以内の円礫を敷き詰めており、ＳＤ70との接続部より東側では円礫の厚さは0.05ー0.08mと薄いが、２区部分では0.15m程度に厚く詰めた暗渠状となり、構造上の違いがうかがえる。また１区では小円礫とやや大きめの円礫をブロックごとに分けて敷いた可能性もある。

壁面がわりと残存している東半部の溝跡は壁面が急角度で立ち上がり、底面は平坦である。掘り方幅は0.48ー0.96m、石敷き幅は0.3ー0.4m程度で、溝幅はこれに近いと考えられる。深さは0.04ー0.10mで、底面標高は１区が11.99ー12.03m、２区から東側が12.19ー12.23mとなり、西側が低くなっている。西端で接続するＳＤ43の底面標高が11.81mと0.2m程度低いことから、水はＳＤ43側へ流れた可能性がある。

出土遺物　遺物は丸瓦、平瓦、熨斗瓦、土師器（Ｃ７）、陶器（Ｉ115）、土師質土器、鉄釘が出土している。

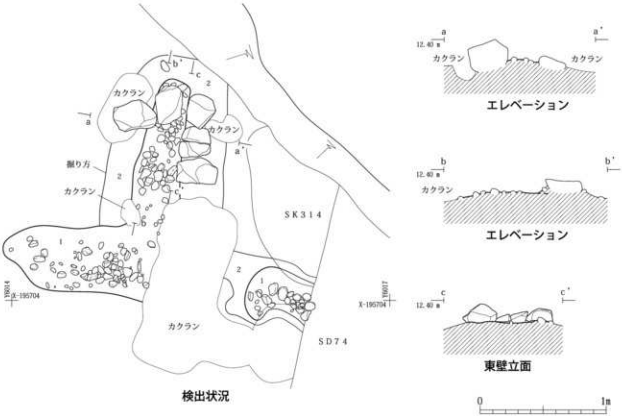
69号溝跡

位置と配置　ＳＢ13と想定する範囲内にＴ字形に残存する溝跡である。

構造と規模　残存長は東西辺が2.48m、南北辺が1.44mである。石組みの状況から構築段階の溝とみられ、堆積土と掘り方埋土に分けられる。

壁面は東西辺がほとんど残存しないが、南北辺には径20ー35cmの大型の角礫が１段残存することで石組み構造とみられる。角礫は短辺で平坦面を溝内側に向けて組まれ、北端には礫が１石みられるが、これは石敷き上にあり元位置を保っていないとみられ、南北辺の溝が北側へ延びていたかは不明である。底面には径10cm以内の円礫を敷いており、掘り方幅は北辺が0.94mなのに対し東西辺が0.53mと狭く、当初南北辺のような石組みは組まれなかったものとみられる。ただし底面石敷き幅は全体で0.3ー0.4m程度で、溝幅はこれに近いと考えられる。底面標高は東西辺が12.12ー12.16m、南北辺が12.22ー12.24mと、南北辺の方が明らかに高くなっているが、現状で接続部分に段差はみられない。南側のＳＤ60の1区底面標高は11.99ー12.03mであることから、ＳＤ69はＳＤ60よりも浅い溝跡とみられる。

出土遺物　遺物は出土していない。



遺　構	層　位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD69	1	10YR6/3　にぶい黄褐色	シルト	径10cm以内の円礫を多量に含む	堆積土
	2	10YR7/2　にぶい黄橙色	砂質シルト	径5cm以内の炭(白色粘土質シルト・炭黄褐色砂質シルトブロックを含む 径40cm以内の角礫を含む	掘り方埋土

第120図　６９号溝跡

礎石跡

礎石跡にはこれまで確認した13棟の建物跡を構成するもの以外にも、単独で存在するものを確認している。今回の調査では周辺の遺構残存状況の悪さから、１基のみの確認であったが、周囲に配置された溝跡との位置関係からみて、本来は小規模な建物や廊下に伴うものと推定される。またこのように大型建物以外の施設を構成していた礎石跡で失われたものは相当数に上るものと考えられる。

礎石跡１

ＳＢ11の東辺に位置するＳＤ66の東側にあり、ＳＢ11礎石跡11の東側2.5間のところに位置する。掘り方形状は不整円形で、残存規模は径0.54mである。根固め形状は不整形で、残存規模は長径0.41m、短径0.34mである。抜取痕は確認できなかった。根固めは径10cm以内の礫を多量詰め、根固石は密集せず、全体にまばらに詰めている。掘

遺　構	層　位	土　色	土　性	特　徴	備　考
礎石跡1	1	10YR4/4　褐色	シルト	径3cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロックを少量、径10cm以内の円礫、砂粒を含む	根固め
	2	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	にぶい黄橙色シルト・褐色砂質シルトブロックが縞状となる	掘り方埋土

第121図　礎石跡１

り方内の堆積土はにぶい黄橙色シルト、褐色砂質シルトブロックを含み縞状となっており、厚さは0.02ー0.16mである。

その他の礎石建物跡

単独で確認した礎石跡１のある地区はＳＡ４により東側の地区と遮蔽され、ＳＤ72があることでＳＢ11との間には一定の空間が存在している。この地区は削平により多くの礎石跡が失われたとみられるが、残存状況からみて、本来あった礎石跡は小型のものと推測され、当初この地区にはＳＢ10ー12のような小型の単独建物かもしくは廊下等の施設が存在した可能性が高く、それは南側へ展開する可能性もある。さらにＳＡ５はＳＡ４から分岐した形で配置され、あたかも控柱的な配置を見せるが、これにより仕切られた南北の空間もまた上記建物と関連した施設が存在した可能性を示すものといえる。

またＳＤ70の配置の在り方はその内側に何らかの建物の存在を示すものであり、溝跡に囲まれた空間が狭く、かつ溝跡の屈曲が多いことから、ここでも小型の施設の存在が想定される。この施設については区画施設であるＳＡ３がＳＡ２に改修された時点で建てられた可能性が高く、したがって城造営当初からの建物ではなかったと推測される。またこの建物は塀を境として性格が異なるとみられる両空間の主要建物の間に介在する施設の可能性がある。

（２）溝跡

今回の調査では礎石建物跡の周囲や近接して配置されない溝跡を７条確認している。これらの溝跡は建物に付随する周囲の溝跡に接続するもののほか、中には鉤型に屈曲するものや単独で確認したものもあるが、特に後者については、確認できなかった建物に沿って配置された溝跡と考えられる。

47号溝跡

位置と配置　Y42、X40グリッドで検出した南北方向の溝跡で、ＳＢ６の北東側に位置する。南端は六角塔基礎で壊されているが、ＳＢ６北辺溝のＳＤ36に接続するとみられ、北端は調査区外へ続いている。

構造と規模　確認長は0.8mである。構築段階の溝跡とみられる。

壁面側の掘り方埋土はほとんど残存せず、最大で径30cmの角礫による側石が１段で４石程度東西両壁に組まれているのを確認したが、控えが短く全体に小型の石材によるものである。底面は径10cm以内の円礫を敷いた石敷きである。掘り方幅は0.56ー0.6mで、東西壁石間の距離は0.26mあり、溝幅はこれに近いと考えられる。検出段階で側石や底面礫が露出していたため、深さは不明であるが、石敷き上面の標高は12.24ー12.26mである。南側で接続するとみられるＳＤ36の底面標高は12.06m程度であり、接続した場合、ＳＤ47側が高く段差が存在した可能性もあるが、平面プランの観察では両者の間に隙間がみられる。

出土遺物　遺物は出土していない。

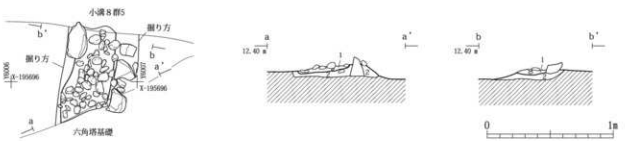
48号溝跡

位置と配置　Y35、X42グリッドで検出した東西方向の溝跡で、ＳＢ２の張出部とＳＢ７の張出部との間に位置する。南北にずれて２条の溝跡を確認しており、途中で改修されたものとみられる。北側の構築段階とみられる溝跡は東側でＳＢ７の入隅部に構築段階に造られたＳＤ44に接続し、西側に新たに造られた改修段階のＳＤ44に中央部を壊されている。南側の改修された溝跡は構築段階の溝の南壁を壊して造られている。東側では改修段階のＳＤ44に接続している。西側は調査区外へ延びるが、第５次調査ではＳＢ２張出部東辺のＳＤ７に東側から接続する１条の溝跡を確認している。これは北側の構築段階の溝跡の延長位置にあたるが、おそらくは南側の新しい溝跡も途中で北側へ屈曲させ、これに合流させたものとみられる。

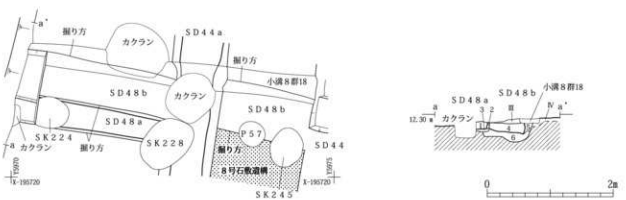
構造と規模　掘込みは調査区西壁際で行った。

構築段階の溝跡の確認長は4.62mである。壁面と底面にブロック土による掘り方埋土を入れた溝跡であるが、南側が壊されている。壁構築材等や抜取痕跡は全く確認できず、底面に石敷き等も確認できなかった。溝幅のみならず掘り方幅も狭いことから、これらの構築材が当初から組まれていたかは不明である。掘り方埋土内側の壁面は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦である。溝跡はＳＤ44と共に埋め戻されており、以後新たなＳＤ44を構築すると共にＳＤ48も南側に改修されている。掘り方幅は0.8m以上、溝幅は0.55m以上とみられる。深さは0.13mで、底面標高は12.03mである。

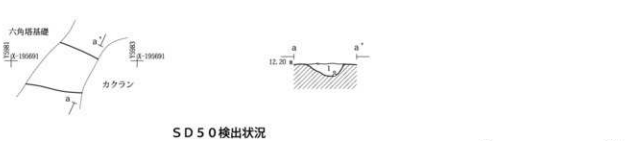
改修後の溝跡の確認長は2.96mである。壁面と底面には同様にブロック土を入れているが、壁構築材等や抜取痕跡、



ＳＤ47検出状況



ＳＤ48掘込み状況



ＳＤ50検出状況

遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD47	1	10YR5/6　黄褐色	砂質シルト	径10cm以内の円礫による石敷きあり	堆積土
	2	10YR4/6　褐色	シルト		掘り方埋土
SD48a	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト		堆積土
	2	10YR3/4　暗褐色	シルト	径1cm以内の炭化物を微量含む	掘り方埋土
	3	10YR5/6　黄褐色	シルト	褐色シルトブロックを含む	
SD48b	4	10YR4/4　褐色	シルト		埋戻し土
	5	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	黒褐色シルトブロックを含む	掘り方埋土
	6	2.5Y4/4　オリーブ褐色	シルト	径1cm以内の黄褐色シルトブロックを含む	
SD50	1	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	径5cm以内の円礫を含む	堆積土

第122図　47・48・50号溝跡

底面石敷き等は確認できなかった。壁面は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦である。東端で接続する改修されたＳＤ44は溝内に木樋を埋設した構造であり、開口する溝との接続がどのようになっていたか問題となるが、ＳＤ44がさらに改修され開口したＳＤ44a´段階となることから、ＳＤ48の改修はＳＤ44の当初の改修時点には構築されていなかった可能性がある。掘り方幅は0.44－0.47mで、溝幅も0.34－0.40mと狭く、深さは0.11m、底面標高は12.07mである。

出土遺物　遺物は出土していない。

50号溝跡

位置と配置　Y37、X39グリッドで確認した東西方向の溝跡で、ＳＢ１とＳＢ６の間に位置する。西端は六角塔基礎、東端は撹乱に壊されているが、溝西端はＳＤ40、東端はＳＤ42に接続するとみられる。

構造と規模　残存長は0.67mである。掘込みは行わず撹乱の壁で断面を観察したところ、砂質シルトの堆積土を１層のみ確認した。

壁面や底面には掘り方埋土や構築材、石敷きは確認できず、素掘りの溝跡である。若林城期の溝跡の大半は掘り方埋土を伴い、木板や礎等の構築材を組んだものであるが、ＳＤ50が接続する部分のＳＤ40やＳＤ５はこれらが確認できない現状では素掘り状のものであり、これらがＳＢ１の北東部分にまとまっている。溝跡の壁面は南壁側が大きく開き、北壁側は急角度で立ち上がり、底面は狭く中央が深くなっている。溝幅は0.60－0.76m、深さは0.2mで、底面標高は11.89mである。当初からの構造が素掘りかは不明である。

出土遺物　遺物は出土していない。

57号溝跡

位置と配置　Y35、X42、43グリッドで確認した南北方向の溝跡で、ＳＢ７の西側に位置する。溝の東壁側のみの確認であり、北端はＳＤ６に壊され、南端は西側へ僅かに曲がっていくことで調査区外へ続いている。

構造と規模　確認長は6.97mである。溝跡の中ほどで一部掘込みを行ったところ、堆積土は３層に分かれ、ブロック土を含み、２層中には瓦片を含んでいる。

壁面はやや急角度で立ち上がり、掘り方埋土や構築材の痕跡は確認できなかった。廃城後に掘られた溝の可能性もあるが、ＳＤ44と平行関係にあり、また堆積土下半部より瓦が出土しない状況からこの時期の溝跡とした。

出土遺物　遺物は鉄釘が出土している。

掘込み状況

遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD57	1	10YR4/4　褐色	シルト	砂粒を含む	堆積土
	2	10YR4/4　褐色	シルト	径10cm以内の黄褐色・暗褐色シルトブロックを含む	
	3	10YR3/4　褐色	シルト	径3cm以内の黄褐色・暗褐色シルトブロックを含む	

第123図　５７号溝跡

70号溝跡

位置と配置　Y42－45、X42－44グリッドで確認した溝跡で、ＳＢ12の西側、ＳＢ13の南側に位置し、また溝跡の大半部分がＳＡ２の北東側に配置されている。溝跡は数か所で屈曲し、何かを囲むような形状となり、第４次調査で一部を確認している。北端はＳＤ60に接続し、西端はＳＡ２と交差しながらさらに西側へ延び、ＳＢ６を囲むＳＤ６とＳＤ43が接続するとみられる隅に至っている。ＳＤ67との距離は1.6m程度で、ＳＤ60と並行する溝跡との距離も1.6m程度である。またＳＡ２と平行位置にある南辺東部との距離は2.2mであるが、間にはＳＡ２に伴う控柱跡が近接している。

溝跡の配置状況から、この溝跡に囲まれた内部には東西方向が西側をＳＡ２で区画した10.9m、南北が5.3－7.8mの空間が存在している。溝跡の屈曲はその内部に配置された建物の形状を反映したものと判断されることから、溝の内側には何らかの建物が存在していたと推定される。

構造と規模　ＳＤ70の長さは、ＳＤ60との接続部南側の南北辺が2.15m、北側の東西辺が4.45m、ＳＤ67と並行する南北辺が5.7m、東側の東西辺が2.65m、西側の東西辺が10.2mで、途中に短い屈曲部を伴っており、全体の長さは25.45mである。掘込みは２か所で行い、また撹乱壁面での断面観察を２か所で行ったところ、構築段階の溝跡構造のみを確認した。

北東側の壁面部分には径10－45cmの角礫が一部列状に残存しており、石組みであったことがわかる。撹乱や重複遺構を掘り下げた部分でその抜取痕跡を確認しており、側石の一部が残される状況からみて、側石は廃城後の耕作によりほとんどが抜取られたことが判明した。側石は主に短軸側を控えとし、列状に立て並べられ、底面掘り方埋土の内部に埋設したような状況もみられた。底面には径10cm以内の円礫が敷かれ、円礫が帯状に密集している部分の幅は0.2m程度である。石組みは溝跡南辺側では残存状況が悪く、石敷きの礫がわずかに確認できるのみで、壁面構造は不明である。全体からみた掘り方幅は0.83－0.95mで、とくに東辺側の掘り方埋土部分の幅が広くなっている。東西の側石間の距離が0.26m、石敷き幅が0.2m程度であり、溝幅はこれに近いと考えられる。深さは不明であるが、底面標高は12.26－12.34mである。

４区では溝跡がＳＡ２の掘り方埋土の上部を壊し造られている。この地区での溝跡の構造は不明瞭であるが、双方の重複関係は遺構の変遷を示すものではなく、周辺遺構の重複状況から、ＳＡ３に代わりＳＡ２を構築した際、塀本体の下部を潜る形で同時にＳＤ70が造られ、それは同時にＳＤ70により囲まれた内部の建物も建設されたことを示唆するものといえる。

出土遺物　遺物は丸瓦、平瓦、銅製品（N557）が出土している。

71号溝跡

位置と配置　Y46、X45グリッドで確認した東西方向の溝跡で、ＳＡ２の東西辺の南側に0.25－0.31m離れて並行している。東端と西端は撹乱に壊され、他の溝跡との接続関係は不明であるが、東側に延びＳＤ72と接続し、また西端はＳＢ11北辺のＳＤ52、東辺のＳＤ66と接続する可能性が高い。この溝跡については残存が悪く浅いもので、ＳＡ２に近接し過ぎるため、塀跡にかかわる溝跡の可能性も考えたが、この部分のみでの確認のため、詳細は不明である。

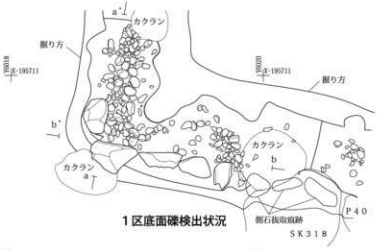
構造と規模　確認長は3.34mである。堆積土は他の溝跡よりも砂質でしまりがあり、僅かではあるが径10cmほどの円礫を確認した。

検出状況や撹乱の壁面では、壁面や底面に掘り方埋土や構築材の痕跡は確認できず、溝幅は0.48－0.57mである。現況は底面部分の掘り方埋土が残存する状況とみられ、深さや底面標高は不明である。

出土遺物　遺物は出土していない。

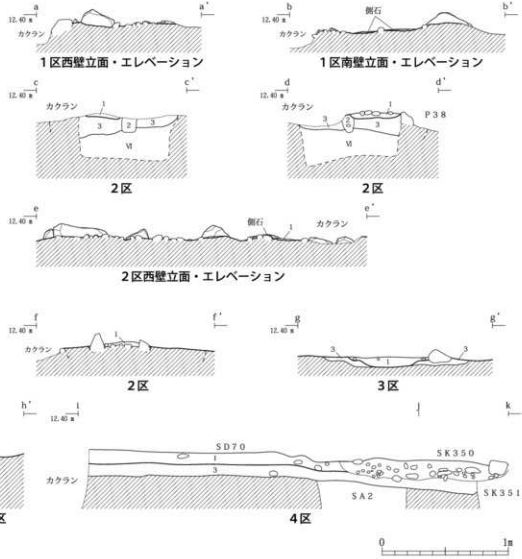
底面礫検出状況（全体）

第124図　70号溝跡（1）



1区底面礫検出状況

2区底面礫検出状況



1区西壁立面・エレベーション

1区南壁立面・エレベーション

2区

2区

2区西壁立面・エレベーション

2区

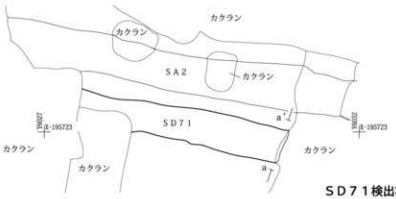
3区

4区

4区

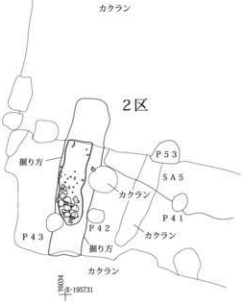
遺構	層位	土色	土性	特徴	備考
SD70	1	10YR6/3 にぶい黄橙色	シルト	径10cm以内の円礫を含む	堆積土
	2	10YR6/2 灰黄褐色	シルト		側石抜取痕跡
	3	10YR7/3 にぶい黄橙色	シルト	径3cm以内の明黄褐色砂質シルトブロックを少量、径50cm以内の角礫を含む 上面に径10cm以内の円礫による石敷きあり	掘り方埋土

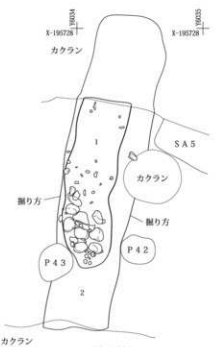
第125図 70号溝跡（2）



SD71検出状況

1区検出状況





2区検出状況

SD72検出状況

遺　構	層　位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD71	1	10YR4/1　褐灰色	砂質土	褐色砂質ブロック、径3cm以内の円礫、砂粒、炭化物を含む	堆積土
SD72	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径10cm以内の円礫、径1cm以内の炭化物を含む	堆積土
	2	10YR6/4　にぶい黄橙色	砂質シルト	径1cm以内のにぶい黄褐色・黒褐色砂質シルトブロックを少量含む 上面に径20cm以内の円礫による石敷きあり	掘り方埋土

第126図　７１・７２号溝跡

72号溝跡

位置と配置　Y47、48、X45－47グリッドで確認した南北方向の溝跡で、北端はＳＡ２東西辺から南側に0.32m離れたところで止まり、南端は撹乱に壊されているが、北端は西側に折れＳＤ71に続き、南側はさらに延びるとみられる。またＳＡ５の西端がＳＤ72の東側直前で止まっており、相互に関係をもった配置といえる。

構造と規模　確認長は6.62mである。平面プランのみでの観察から、堆積土と掘り方埋土に分かれる。壁面は残存せず、撹乱壁面でも掘り方埋土や構築材の痕跡は確認できなかった。底面には径20cm以内のやや大きめの円礫を敷き詰めた敷石状となっており、外側には礫を含まない部分がみられることから、敷石周辺には掘り埋土が存在するとみられる。掘り方幅は0.51－0.64m、敷石幅は0.32－0.38mで、溝幅はこれに近いと考えられる。深さは不明であるが、底面標高は12.16－12.17mである。

出土遺物　遺物は出土していない。

（３）塀跡

塀跡は調査区の東部において合計４基確認した。これらは全て塀の基礎構造である掘り方とその内部に柱痕跡を確認したものであり、それぞれの構造や連続性、接続関係、重複関係から、ＳＡ２・４・５の３基の塀跡群とこれらに先行する古いＳＡ３に分けられる。ただしこれら４基の塀跡については、周辺に配置される建物跡との関係から全て若林城期の施設とみられ、両者はその中での造り替えの結果と考えられる。

２号塀跡

配置と規模　Y43－49、X42－46で確認したＬ字形に曲がる塀跡で、隅部分が途切れるが、一連の施設とみられる。掘り方の長さは南側に位置する東西辺が33.3m、西側に位置する南北辺が10.4mである。方向は東西辺がＮ－79°－W、南北辺がＮ－11°－Ｅである。塀跡はＳＢ６の東側に位置し、また東西辺が南側のＳＢ11と北側のＳＢ13・12の間に配置されることで両建物を南北に区画している。南北辺の北端はＳＢ13の南辺溝ＳＤ60の南側で止まることで、塀は建物に接続するような配置だったと推定される。東端は調査区外へと延びており、東端部近くの南側には南北方向のＳＡ２が配置され、その掘り方北端がＳＡ２と直角に接続している。

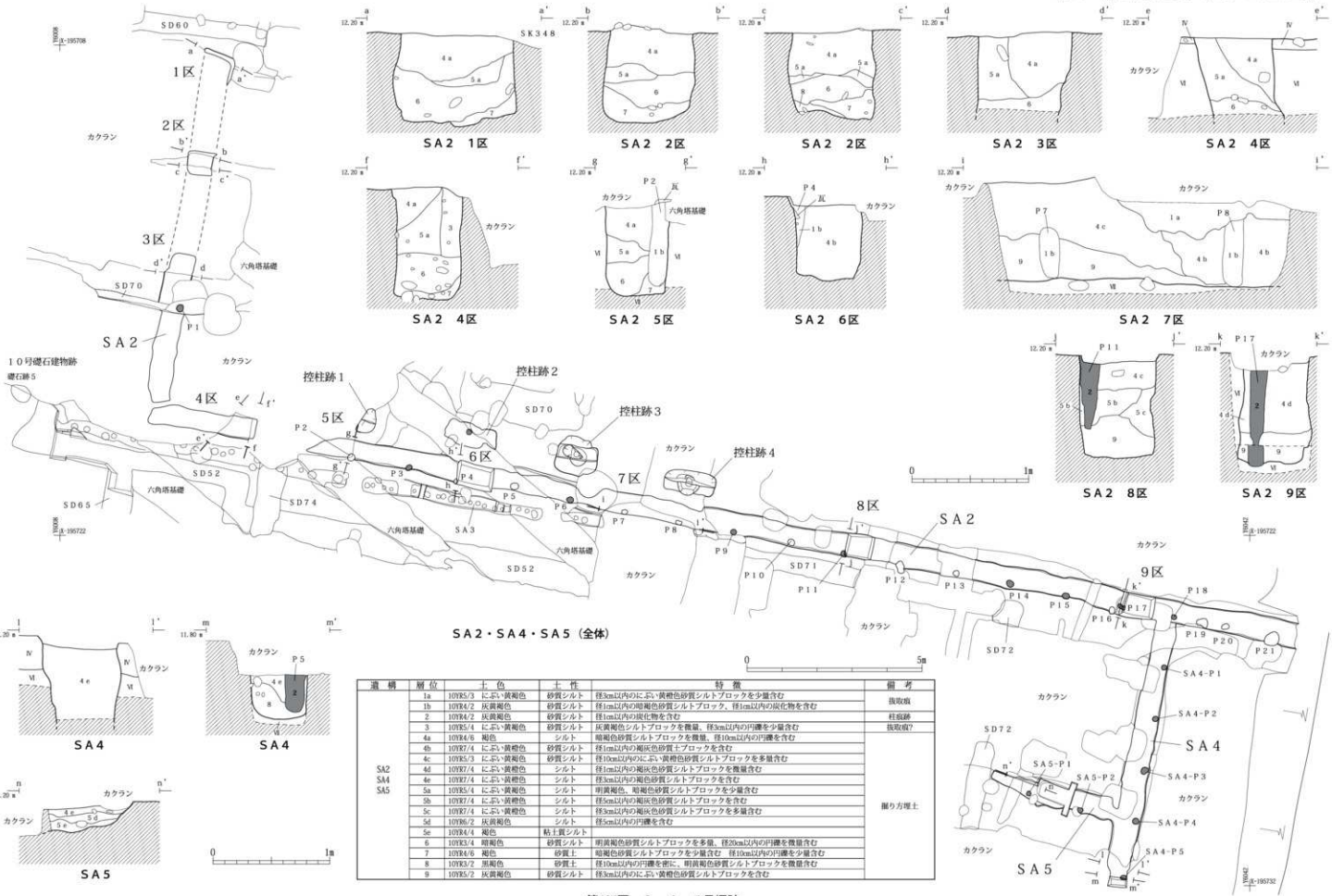
他遺構との重複関係は東西辺の西側部分がＳＡ３と並行し、一部で重複しＳＡ３を壊している。また南北辺の南側ではこれと直交してＳＤ70が横切るように配置されているが、これは塀の構造上、同時に存在したものとみられる。

塀跡の掘込みは南北辺の北端部と柱痕跡部分の４か所の他、撹乱壁面を利用し行い、南北辺部分には北から１－３区、東西辺部分には西から４－９区の調査区を設定した。このうち２区と３区で確認した場所は、第４次調査において溝跡と確認したものである。また５－９区は柱痕跡を半割する形で設定した。

構　造　南北辺の残存が悪いため、東西辺を中心にみた掘り方幅は0.52－0.8mで、深さは0.72－0.96mである。掘り方底面の標高は、屈曲部東側の４・５区が最も深く、４区で11.06mとなり、若林城期の他のどの遺構よりも深く掘り込まれている。掘り方の断面形は長方形で、壁面は一部オーバーハングするがほぼ垂直で、底面は平坦に掘られている。底面や壁面には掘削に伴う工具痕跡等は確認できない。南北辺と東西辺が接続する隅部分の掘り方が一部途切れているが、これについては掘り方自体が別個のものか、或いはつながっていたものかは不明である。

堆積土は柱痕跡と埋め戻し土である掘り方埋土に分かれる他、一部で柱の抜取痕跡を確認した。掘り方埋土はほとんどの場所で複数層に分かれるが、一部では分層できない。基本的にはⅣ層同様、旧表土Ⅴ層とⅥ層やⅦ層の地盤掘削土による混合土であることから、シルト土と砂質土によるブロックが主体で、層下部には砂礫が多い含む傾向がある。基礎部分が同じく溝状となる樋跡に見られるような特殊な土や版築状の堆積土状況はみられない。

掘り方埋め土上に南北辺で１基、東西辺で20基の小ピットを確認した。これらの形状は円形で、径は0.1－0.45m



遺　構	層　位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SA2 SA4 SA5	1a	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径5cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロックを少量含む	抜取痕
	1b	10YR4/2　灰黄褐色	砂質シルト	径1cm以内の暗褐色砂質シルトブロック、径1cm以内の炭化物を含む	
	2	10YR4/2　灰黄褐色	砂質シルト	径1cm以内の炭化物を含む	柱痕跡
	3	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質シルト	灰黄褐色シルトブロックを微量、径3cm以内の円礫を少量含む	抜取痕?
	4a	10YR4/6　褐色	シルト	暗褐色砂質シルトブロックを微量、径10cm以内の円礫を含む	掘り方埋土
	4b	10YR7/4　にぶい黄橙色	砂質シルト	径1cm以内の褐灰色砂質土ブロックを含む	
	4c	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径10cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロックを多量含む	
	4d	10YR7/4　にぶい黄橙色	シルト	径1cm以内の褐灰色砂質シルトブロックを微量含む	
	4e	10YR7/4　にぶい黄橙色	シルト	径3cm以内の褐色砂質シルトブロックを含む	
	5a	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト	明黄褐色、暗褐色砂質シルトブロックを少量含む	
	5b	10YR7/4　にぶい黄橙色	シルト	径5cm以内の褐灰色砂質シルトブロックを含む	
	5c	10YR7/4　にぶい黄橙色	シルト	径3cm以内の褐灰色砂質シルトブロックを多量含む	
	5d	10YR6/2　灰黄褐色	シルト	径5cm以内の円礫を含む	
	5e	10YR4/4　褐色	粘土質シルト		
	6	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	明黄褐色砂質シルトブロックを多量、径20cm以内の円礫を微量含む	
	7	10YR4/6　褐色	砂質土	暗褐色砂質シルトブロックを少量含む　径10cm以内の円礫を少量含む	
	8	10YR3/2　黒褐色	砂質土	径10cm以内の円礫を密に、明黄褐色砂質シルトブロックを微量含む	
	9	10YR5/2　灰黄褐色	砂質シルト	径3cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロックを含む	

第127図　２・４・５号塀跡

と差があるが、径0.2m程度のものがほとんどである。ピットは一定間隔で配置され、ほとんどのものが掘り方中央ではなく南壁際に配置されている。これらのピットは柱が原位置を保ったまま腐食したものである柱痕跡と、柱を抜き取った後に形成された穴である抜取痕跡の２種類に分けられることを確認した。柱痕跡とみられるものは９区で確認し、これらは柱部分が掘り方埋土に比べてシルト質で、基本的にブロック土を含まない均質なもので、一部に炭化物を含んでいる状況は他の場所でも平面的に多く確認した。８区Ｐ11の径は0.2m、残存長は0.63mで、柱下端は掘り方底面まで達していない。９区Ｐ17は径0.14m、長さ0.96mで、柱下端は掘り方底面に達し、底面がわずかに沈み込んでいる。またＰ17は柱が垂直ではなく、頭が掘り方方向と同じ西側にやや傾き埋設されている。さらにその位置は他の柱痕跡と異なり掘り方中央寄りにあるが、その南西側の掘り方南壁際にはＰ16があり、並びからみてＰ17は不規則な位置にある。

柱の抜取痕跡は掘り込んだ５・６・７区で確認した。抜取穴には基本的に抜き取った直後に流入した掘り方埋土がみられ、柱痕跡とは異なりブロック土が目立っている。また塀構築の際には混入することの無い瓦が見られることが特徴である。５区Ｐ２は径0.2mのほぼ円径で、深さが0.72mあり、抜取痕跡は掘り方南壁に密着し直立するが、掘り方底面まで達していない。抜取痕跡の形状としては同一の幅を保っており、残存部分に限っては柱を抜き取る際にあまり揺り動かさず、上方へ引き抜いたと推察される。６区Ｐ４は径0.16mと小さく、深さは0.44mと浅いもので、掘り方の半分程度の深さで止まり、下端は尖っている。断面でこれに接するような柱痕跡は残存していない。７区Ｐ７・８は掘乱で大きく壊され北側がわずかに残存している状況である。抜取痕跡と推定される柱状の部分の径は両者とも残存が0.18m程で一定し、下端は塀跡確認面から0.81mと0.89mの深さで掘り方底面に達している。Ｐ８側の掘り方上半部には、柱を抜き取るにあたり掘削した深さ0.52m程の抜取穴がみられ、その穴の上面で柱状の抜取痕跡はみられない。この事からＰ８については他とは異なり、柱を残したまま周囲を深く掘削した後に柱を上方へ引き抜いたものと推定される。Ｐ７についてはＰ８同様の掘削の抜取痕跡は確認できない。また４区の掘り方北壁断面において、幅0.18m、深さ0.58mの縦長の層（３層）を確認した。ＳＡ２東西辺の柱痕跡や柱抜取痕跡については掘り方南壁側でのみ確認しているが、層の形状や堆積関係から考えると柱の抜取痕跡の可能性もある。

以上のことから、塀を構成する柱には、後に地下埋設部分が残されたものと、柱全体が抜き取られたものがあることが判明した。建物同様に塀の部材もまた城外へ持ち出されたことも十分に考えられることから、前者は塀自体が自然に朽ち果てた結果ではなく、塀を解体する際、柱を根元で切ることで地上部分を再利用したものとみられる。これに対し後者は大掛かりな掘削をせず柱を埋設部分諸共に抜いたとみられ、何れも廃城に伴い解体・撤出したものと推定される。このように全ての柱を同様に処置しなかった理由には、柱の根元などの状態等が関係した可能性がある。

柱の配置　ピットから想定される柱位置をみると、主要部分である東西辺では基本的に南壁際に配置されており、また南北辺ではＰ１のみの確認であったが、東壁際にある。また東西辺の中には壁面に食い込んでいる状態のものもある。本来なら柱は掘り方中央に配置されるものが多いが、掘り方の堆積土の状況をみると、特に埋土を版築状にするなど、入念に埋め戻したものとは言えず、このことから柱は直立した掘り方壁面に沿わせて立てることで安定性を確保し、強度をもたせたものと考えられる。

柱の間隔をみると、東西辺については0.75ー1.65mであるが、一定の並びから外れるものを除外すると1.60m程度となり、若林城期建物における１間が６尺５寸の基準よりも短く、塀の柱間は概ね５尺３寸程度と考えられる。南北辺については残存が著しく悪く、柱間は不明であるが、おそらくは東西辺と同間隔とみられ、これにより東西辺ではＰ２より西側にさらに３間、南北辺ではＰ１より南側にさらに１間の位置まで柱が配置されていたものとみられる。またこの柱配置から外れるものとしてＰ16、Ｐ19、Ｐ21があり、特にＰ15とＰ18の間については、並びではＰ16、間隔はＰ17が適切な配置状況をみせている。

控柱跡　ＳＡ２東西辺の北側に形状が隅丸長方形の土坑状プランが塀跡に並行して東西に４基並んでいるのを確認した。各プランのほぼ中央には柱痕跡がみられ、これに対応してＳＡ２側には柱痕跡が配置されている。これらのことから、土坑状のプランは塀の東西辺に沿ってその北側に配置された控柱跡と考えられる。控柱跡の柱間は3.15ー3.30mで、ＳＡ２での柱間２間分となり、控柱は１間おきに配置されていたとみられる。これらの東側の続きについては大規模な撹乱のため不明であるが、控柱跡４の２間分東側の位置では撹乱が浅いにも関わらず控柱のプランが確認できず、控柱は本来この位置には存在しなかった可能性もあるが、詳細は不明である。また控柱跡１の西側にはかつて１基存在していた可能性がある。南北辺に伴う控柱跡については、塀の柱位置との関係から東側に存在した可能性が高い。

控柱跡１

Y44、X44で確認し、東側が撹乱の壁面に残存していた。形状は他同様に隅丸長方形とみられる。断面観察の結果、掘り方埋土はブロック土で、壁面は直立せず底面は残存していない。柱痕跡は確認できなかったが、配置に加え、壁面形状が控柱跡４に類似し、堆積土が埋め戻し土であるため控柱跡とした。ＳＡ２のＰ２と組む控柱跡と考えられる。

控柱跡２

Y43・44、X44で確認した。南西部を六角塔基礎で壊されており、残存規模は長軸が1.47m、短軸が0.67mで、形状は隅丸長方形である。長軸方向は概ねＳＡ２の東西辺と平行である。掘削は行っていないため掘り方の深さや断面形は不明であるが、掘り方埋土はブロック土で、中央に径0.15mのやや暗色の柱痕跡を確認した。柱痕跡はＳＡ２のＰ４の北側に位置し、これと組み、両者は1.45m、４尺８寸ほどの間隔がある。

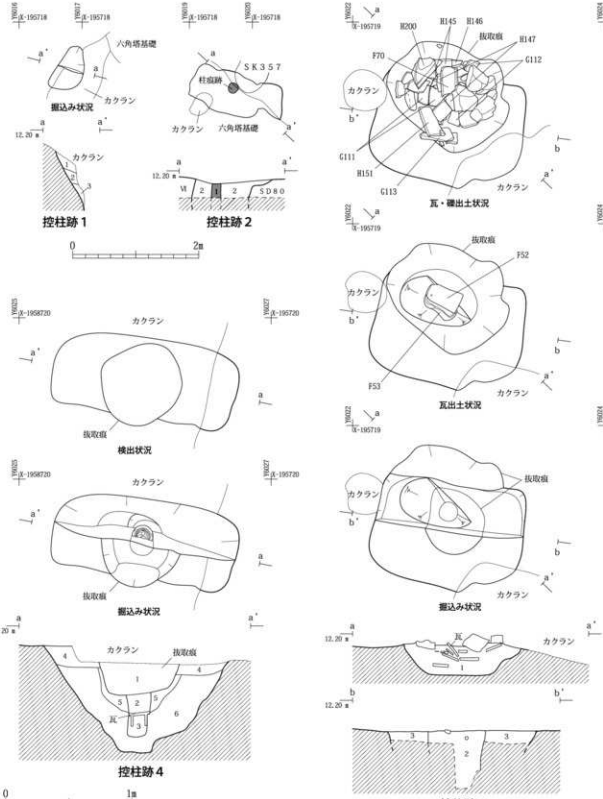
控柱跡３

Y45、X44・45で確認した。規模は長軸1.18m、短軸0.86mで、形状は隅丸長方形である。長軸方向は概ねＳＡ２の東西辺と平行である。掘削は途中までしか行っていないため深さや断面形は不明であるが、堆積土はブロック土で一時的な埋め戻し土とみられる。確認当初、遺構北側に角礫や瓦片を多量含む楕円形のプランを検出し、これを土坑として掘削したが、その底面から柱痕跡を確認したことにより控柱跡とし、土坑状プランは柱の抜取穴であることが判明した。瓦や角礫は柱の抜取穴に廃棄したものとみられ、角礫は溝の石組み石材とみられる。柱痕跡は径0.15mで、掘り方中央よりやや北側でＳＡ２のＰ６の北側に位置し、これと組み、両者は1.35m、４尺５寸ほどの間隔がある。

控柱跡４

Y46、X45で確認した。規模は長軸が1.47m、短軸が0.63mで、形状は隅丸長方形である。長軸方向は概ねＳＡ２の東西辺と平行である。北半部を掘削し、抜取痕跡を確認した時点で終了した。掘り方壁面は45°程度の角度で大きく開き、底面は狭く、柱痕跡の下部が底面より窪んでいる。掘り方の深さは0.85mで、底面標高は11.20mである。確認時に中央部に径0.68mの不整円形のブロック土が入るプランを確認し、これを撹乱として掘削したが、後の断面観察から柱の抜取痕跡であることがわかった。抜取痕跡は径0.2m、確認面からの深さは0.72mで、内部には尻部を欠いた軒丸瓦が瓦当面を上に向け入っていたが、抜取り直後に何らかの目的で故意に入れた可能性がある。柱痕跡はＳＡ２のＰ８の北側に位置し、これと組み、両者は1.2m、４尺ほどの間隔がある。控柱跡４の南側のＳＡ２の７区での底面標高は11.18ー11.26mで、両者はほぼ同じ深さである。

出土遺物　塀本体の掘り方埋土から丸瓦、平瓦、熨斗瓦、土師器が出土した。ピットからは21基中８基から瓦片の出土があり、ＳＡ２のＰ５から軒丸瓦（Ｆ51）を取り上げた。これらは全て柱抜取痕跡からのもので、軒瓦などの大きな破片が目立つことから、瓦は後に流入したもの以外に、故意に入れられた可能性もある。また控柱跡３の柱抜取痕からは軒丸瓦（Ｆ52・53）、丸瓦（Ｆ70）、熨斗瓦（H145ー147・151）、平瓦（G111ー113）、鬼瓦（H200）、



遺構	層位	土色	土性	特徴	備考
控柱跡1	1	10YR6/6 灰黄褐色	砂質シルト	径5cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロック、黒褐色砂質シルトブロックを少量、円礫を含む	掘り方埋土
	2	10YR4/4 褐色	シルト	径1cm以内の褐灰色砂質シルトブロック、黒褐色砂質シルトブロックを少量含む	
	3	10YR4/4 褐色	シルト	径1cm以内の黒褐色砂質シルトブロックを多量含む	
控柱跡2	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	径5cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロックを少量含む	柱痕跡
	2	10YR5/6 黄褐色	シルト	径3cm以内の暗褐色シルトブロックを含む	掘り方埋土
控柱跡3	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	1cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトを微量含む	抜取痕
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	径3cm以内の灰黄褐色砂質シルトブロック、径1cm以内の炭化物を含む	
	3	10YR5/6 黄褐色	シルト	径3cm以内の暗褐色シルトブロックを含む	掘り方埋土
控柱跡4	1	10YR4/4 褐色	シルト	径3cm以内の灰黄褐色、にぶい黄橙色砂質シルトブロックを多量含む	抜取痕
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	径5cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロックを少量含む	
	3	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	径5cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロックを少量含む	
	4	10YR5/6 黄褐色	シルト	径5cm以内の浅黄橙色砂質シルトブロックを含む	掘り方埋土
	5	10YR4/4 褐色	シルト	径5cm以内の灰黄褐色砂質シルトブロックを含む	
	6	10YR4/4 褐色	シルト	径3cm以内の暗褐色砂質シルトブロックを多量、径3cmの円礫を微量含む	

第128図　2号塀跡控柱跡

土師器、鉄釘（N561・562・652）が出土している。

4号塀跡

配置と規模　Y48、X45－47で確認した南北方向の塀跡である。北端でSA2と接続し、南側は隣接する第2次調査ではこの塀跡の存在が不明であったが、今回、この調査区への延びを確認した。確認した長さは7.7mである。塀跡が南北方向に配置されることにより、西側に位置するSB11等とその東側を区画する施設とみられる。他遺構との重複関係は確認できず、SA2とSA5と同様の構造から、これらと組合う施設とみられる。掘込みは南端のP5部分に設定し行った。

構　造　掘り方幅は0.55－0.7mで、断面形はSA2同様に壁面がほぼ垂直に立ち、底面はほぼ平坦である。掘込み部分での深さは1.02m、底面標高は11.04mである。堆積土はブロック土による掘り方埋土と柱痕跡とみられるピットに分かれ、構造自体は基本的にSA2と同じである。

柱痕跡　SA2の南北辺と同様に、東壁際において径0.1－0.25mのピットが5基並ぶのを確認した。ピット内にはブロック土を含まず、炭化物が混入しており、また瓦の出土がみられないことから、これらは腐食した柱痕跡とみられる。掘り込んだP5は径0.18mで、東壁にほぼ接し直立するもので、下部は掘り方底面に達していない。

柱の配置　柱位置はSA2のP18から南のP5へ一列に並び、4間分を確認した。柱間はSA2のP18からSA4のP4までの3間分が概ね1.50mの5尺程度であるのに対し、P4とP5との間のみやや長くなっている。

出土遺物　掘り方埋土より丸瓦、輪違いが出土した。

5号塀跡

配置と規模　Y47・48、X46・47で確認した東西方向の塀跡である。規模は3.6mで、東端でSA4と接続し、西端はSD72の手前東側で止まっている。東西方向はN－75°－Wと城の東西軸やSA2とはややずれているが、基本的にはSA2と平行に構築されたものと考えられる。SA2との距離は掘り方中央部分で約5.8mであり、これによりSA2・4・5は東西3.5m、南北5.0m程度の狭い空間を囲う形となっている。この部分については撹乱が著しく、建物跡などは確認できなかった。掘込みは西端にある撹乱を利用し、掘り方形状等の状況を確認した。

構　造　掘り方幅は0.6－0.8mで、深さは概ねSA2・4と同様とみられるが、西端についてはSA2北端と異なり、P1より西側の底面が急に浅くなり、緩い傾斜となる。堆積土は掘り方埋土と柱痕跡に分けられ、柱の抜取痕跡は確認できなかった。

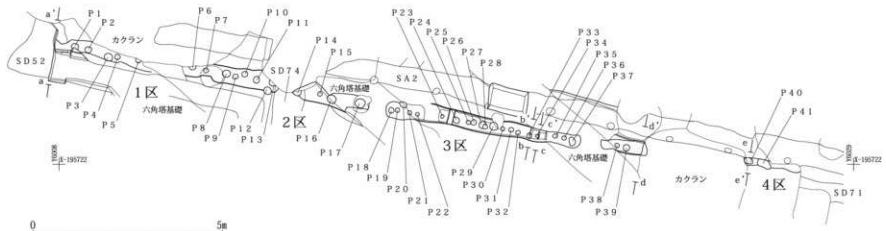
柱痕跡　SA2東西辺同様に、南壁際に沿い径0.1－0.15mの柱痕跡を2基確認した。柱痕跡は東側で接続するSA4のP4と東西の並びを同じくし、柱間はP1とP2間が1.55m、P2とSA4のP4間が1.65mと異なるが、概ねSA2と同様の間隔となっている。

出土遺物　掘り方埋土および柱痕跡から遺物は出土していない。

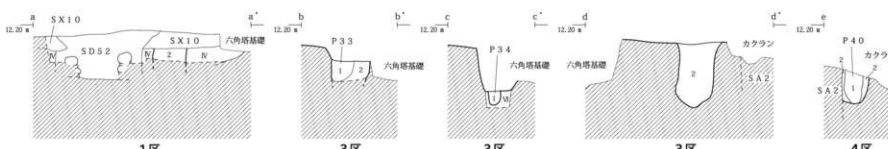
3号塀跡

配置と規模　Y42－46、X44－45で確認した東西19.95mの塀跡で、SD52とSA2の間に位置する。方向はN－80°－Wと若林城の東西軸とほぼ同じであるが、東側が緩やかに北に湾曲することでSA2と重複し、これに壊されている。この重複部分ではSA3は確認できず、途中で止まるのか或いはSA2と重複しながらさらに東へ延びるのかは不明である。西側についてはSD52が北へ折れる部分より西では確認できず、SX10の埋め戻し土の下で堆積土を確認したことから、SA3はSA2よりも古いと共に、SX10と同時に機能していたとみられる。SA3の大半はSA2とほぼ同位置に並びを同じくしており、SA3はSA2の古い段階の塀跡と考えられる。

断面の観察は掘込み1か所の他、撹乱壁面で行い、これらを西から1－4区とした。1区は西端でSD52やSX10との重複関係を確認するため、SD52の掘り方を一部断ち割った部分である。2区は六角堂の基礎でSA3のP16が壊されている部分である。3区は2区の東側で、検出した柱痕跡のうちSA3のP33・34を半割している。4



SA3（全体）



遺構	層位	土色	土性	特徴	備考
SA3	1	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	径10cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロック、径1cm以内の炭化物を微量含む	柱痕跡
	2	10YR7/4 にぶい黄橙色	砂質シルト	径3cm以内の褐灰色砂質シルトブロックを少量含む	掘り方埋土

第129図 3号掘跡

区はＳＡ２の７区東側でＳＡ３の残存する東端であり、撹乱によりＳＡ３のＰ40が壊されている部分である。

構　造　掘り方幅は0.35ー0.5mで、底面までの深さは確認した部分で0.27ー0.5m、標高は11.55ー11.68mで、ＳＡ２・４・５の一連の堀跡の基礎と比較し小規模である。壁面はほぼ垂直であるが、３・４区で確認した底面は平坦ではなく、中央がU字形に窪む形状である。堆積土は掘り方埋土とピット堆積土に分けられ、前者はブロック土主体であるのに対し、後者はほとんどブロック土を含まない砂質シルトである。

柱痕跡　ＳＡ２等と全く異なり、径0.1ー0.4mの柱痕跡が柱の抜取痕跡とみられる密集する大小のピットを41基確認した。掘り込んだピット断面をみると、Ｐ16やＰ34の下端は掘り方底面よりも下に窪んでいるのに対し、Ｐ33は掘り方底面まで達していないなど、差が認められる。ピット中にブロック土の混入が少ないことやピット形状が良好なことから、ピットは柱痕跡として残存したものである可能性があるが、掘り方自体が浅く、堀に伴う柱は解体時に地中部が残されること無く引き抜かれた可能性もあり、これらが抜取痕跡であることも考えられる。

柱の配置　柱痕跡はＳＡ２等に比べ狭い掘り方のほぼ中央に確認でき、直線的には並ばない。柱痕跡の間隔は0.05ー0.8mの不規則なものであり、近接した柱配置も予想されるが、詳細な構造は不明である。

出土遺物　掘り方埋土から土師器、土師質土器の皿が出土したが、柱痕跡からは遺物の出土は無かった。堀跡のみならず若林城跡遺構の掘り方内よりこの時期の遺物が出土した例は殆ど無く、土師質土器の出土は何かしら意味のある可能性もある。

（４）樋跡

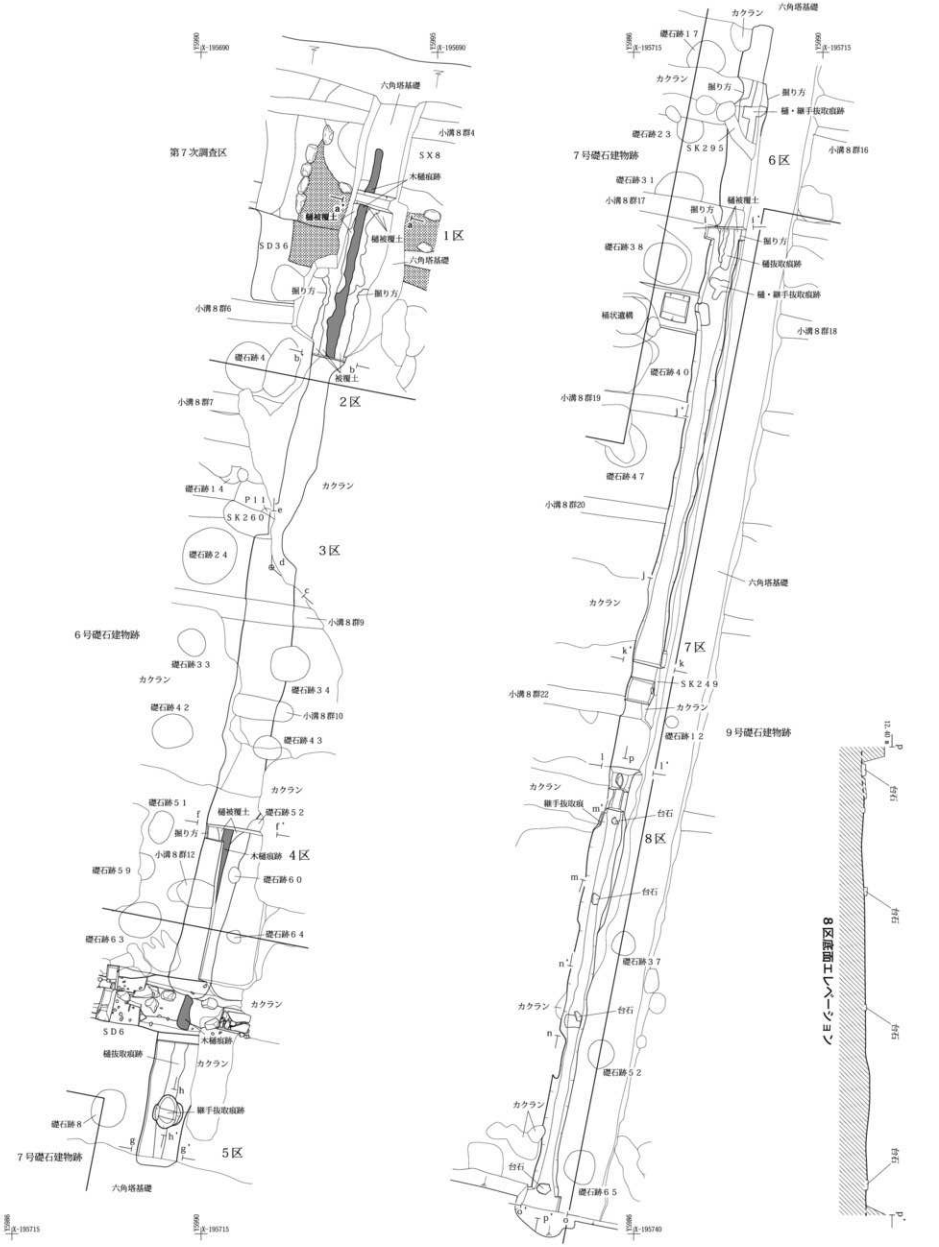
１号樋跡

位置と配置　Y37ー39、X39ー48で確認した南北48.4mの樋跡で、北端はＳＢ６の建物下やその雨落ち溝であるＳＤ36、ＳＤ６の下を通り、ＳＸ８にいたる。樋跡北端は六角塔基礎により壊されてはいるが、ＳＸ８の池部分の中ほどまで続いたところで途切れ、その北側では確認できないことから、池中において何らかの構造により水を供給していたことが推定される。南側は直線的に延び、南端はＳＢ９とＳＸ９の間に挟まれながら調査区外へ延びていく。ＳＢ６との重複をみると、樋跡はＳＢ６の西辺より４間目の礎石跡の間を南北に貫通しており、当初は両者に時期差があることも考えられたが、礎石跡との重複は掘り方埋土によるもので、木樋本体上には設置されず、またＳＤ６が樋跡との重複箇所を境に東西の構造が異なる等の理由から、両者は同時存在したと考えられる。また樋跡は中央部ではＳＢ７とＳＢ９の狭い間に配置され、さらに南側においては雨落ち溝とみられるＳＸ９とＳＢ９との間に配置されることで、これらの遺構群は全て城造営当初から綿密な配置の元で構築された施設と考えられる。

樋跡の掘込みは南半部で３か所、北半部で各２か所行った他、撹乱壁面での断面観察を各所の計９か所で観察した。

規模と構造　樋跡の基本的な構造は、溝状の掘り方の底面近くに導水するための木樋を埋設し、これを埋め戻したもので、木樋と共に、それらをつなぎ長く延ばすための継手の痕跡も確認している。また木樋はＳＢ６の建物範囲においては腐食し土壌化したものが当時の位置で残存していたが、それより南側では後に完全に抜取られている。このような状況の違いは、抜取りの時点でＳＢ６が建っていたことを示すもので、抜取りの時期は廃城時の可能性も皆無ではないが、城が機能している間のことと推察される。

掘り方幅は0.93ー1.05mでほぼ一定した規格性の高いもので、深さは0.32ー0.74m程度である。底面標高は北端側の１区が11.34m、南側の８区が11.76mと南側から北側に下がっており、１区での底面標高はＳＸ８池部の底面標高の11.80mより下位に位置する。掘り方壁面は木樋残存部分では垂直であるが、抜取り部分では上部がやや開くところもあり、これは木樋抜取りの際に掘り方壁面を壊したことによるものとみられる。底面は平坦で、断面形はほぼ方形である。


第７次調査区
六角塔基礎
小溝８群４
ＳＸ８
木樋痕跡
樋被覆土
ＳＤ３６
１区
小溝８群６
掘り方
礎石跡４
２区
小溝８群７
礎石跡１４
ＰＩＩ
ＳＫ２６０
カクラン
３区
礎石跡２４
小溝８群９
６号礎石建物跡
礎石跡３３
礎石跡３４
礎石跡４２
小溝８群１０
礎石跡４３
礎石跡５１
礎石跡５２
小溝８群１２
木樋痕跡
４区
礎石跡５９
礎石跡６０
礎石跡６３
礎石跡６４
ＳＤ６
樋抜取痕跡
礎手抜取痕跡
礎石跡８
７号礎石建物跡
５区
六角塔基礎
北半部掘込み状況
７号礎石建物跡
礎石跡１７
礎石跡２３
ＳＫ２９５
６区
小溝８群１６
礎石跡３１
小溝８群１７
礎石跡３８
樋抜取痕跡
礎・礎手抜取痕跡
桶状遺構
小溝８群１８
礎石跡４０
小溝８群１９
礎石跡４７
小溝８群２０
７区
ＳＫ２４９
小溝８群２２
９号礎石建物跡
礎石跡１２
礎手抜取痕
台石
８区
礎石跡３７
礎石跡５２
礎石跡６５
南半部掘込み状況
８区断面エレベーション
0
4m

第130図　１号樋跡（１）

堆積土は新しい順に、木樋や継手の抜取りに関わる堆積土（抜取痕跡）、掘り方の埋戻し土、木樋を設置するための埋設土、木樋痕跡や継手痕跡等に大別される。木樋等の抜取痕跡は下部が抜取時の埋戻し土崩落に関わるもので、抜取りの際生じた窪みに表土等が流入した上部に分かれるが、その区別は明瞭でない。抜取痕跡は５ー８区のＳＢ６より南側のみで確認しており、建物内部では確認できない。断面形状は上部が掘り方幅とほぼ同じかやや広い傾向があるのに対し、下部は木樋よりやや幅広い程度で、概ねＵ字形となる。抜き取りにあたっては、上面で掘り方幅程度の溝を掘り、木樋近くでは狭め、そのまま抜き上げたことがうかがえる。

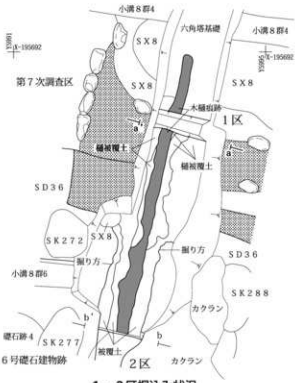
埋戻し土は主に木樋上部に入れたもので、基本的にⅣ層整地土同様に、地山Ⅵ・Ⅶ層と旧表土を混合したブロック土で、若林城期の遺物は一切含まない。残存の良好な７・８区では同じ土を一気に埋め戻すのではなく、ブロックの大きさや配合割合を変え、数度に分けて入れているのがわかる。ただし礎石跡にみられるような填圧することでブロック土が縞状となる様子はみられない。ＳＢ６礎石跡52はこの埋戻し土上部に築かれている。

木樋埋設土は木樋を固定或いは保護する目的で埋設した土で、木樋の上部、側部、下部にみられる。基本的には埋め戻し土同様のブロック土を用いるが、特に15層は黄褐色粘土質シルトで、木樋の上半部を包むように貼っており、確認した多くの断面で確認している。15層は他に比べ明色で、ブロックが少なく粘性が強いことから、木樋の固定のみならず、漏水や外部から雨水などの浸透を防ぐ目的があったことが想定される。埋設土状況の良好な４区では、底面に土を敷いた後、樋側面下半に土を入れ固定し、上部には15層を貼り、さらに14層を厚く掘り方幅いっぱいにドーム状に被せるなど、入念な造りが見てとれる。

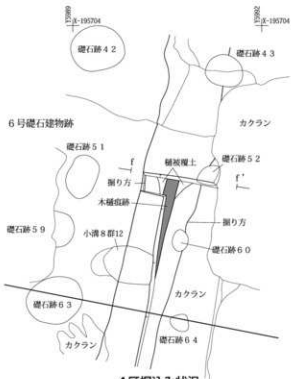
木樋痕跡は１ー４区で確認しているが、木樋は腐食により残存せず、木片も全く確認できず土壌化している。これより確認した木樋の断面形は１・３・４区の状況から0.2m四方のほぼ方形と推測される。本来なら木樋内部は中空であったとみられるが、腐食土と流入土との区別がつかない状況である。木樋痕跡の底面標高は北側の１区が11.62mなのに対し、４区は木樋痕跡上面標高が12.01mであり、木樋痕跡の断面形は0.2m四方の方形であることから、木樋底面は11.8m付近と推定できる。さらに抜取られた南端８区の推定底面標高が11.93mと、掘り方同様、明らかに南から北へ下る傾斜が確認できる。

以上の堆積土以外に、８区において木樋痕跡下部や掘り方底面に径20ー30cm以内の円礫や角礫が設置されているのを確認した。礫は扁平なもので、何れも平坦面を上にして設置されている。これらは木樋を直に掘り方底面に置かず、また高さ調整のための台石とみられる。８区で確認した礫は４石あり、礫間の距離は北から0.82m、1.7m、2.5m、3.74mと一定の間隔にはないが、概ね0.8ー0.9m程度の間隔で配置された可能性がある。各礫上面の標高は北から11.84m、11.84m、11.88m、11.88m、11.9mと木樋同様に南側が高くなることで、樋傾斜を示している。

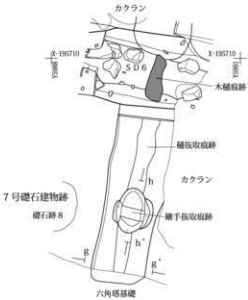
その他として、木樋痕跡がみられる北半部の２か所で、木樋をつなぐための継手の痕跡を確認した。継手は本来、木板を直方体に組み、木樋と直交させ、これを嵌め込むための穴が両面から開けられているものである。また木樋が抜取られた南半部で継手の抜取り痕跡を同時に確認した。継手痕跡プランにみられる土壌は木樋と同様にブロックを多く含まない暗色のもので、木樋プランと接続している。２区での断面から継手の長さは0.56m程度で、３区の断面からみて、幅は木樋同様0.2mで、断面形状は正方形である。継手の抜取痕跡は５区から６区にかけて３か所確認し、これらは全て南北方向の木樋と直交する東西方向のプランとして確認している。５区の抜取痕跡には瓦片が多量入る土坑状プランとなり、抜取り後に人為的に瓦を廃棄したものとみられる。継手間の間隔をみると、２区と３区の距離が3.8m、５区から６区の距離が北側2.96m、南側3.86mと一定ではないが、概ね柱間の１間半や２間分に相当することで、この間隔が木樋１本分の長さの目安となる可能性がある。この他、６区から７区の間の西壁で２か所、８区の西壁で２か所に土坑状プランを確認した。堆積土は樋跡の埋め戻し土に比べ混入するブロック土が小さく乱された状態で、木樋や継手の抜取りの状況と類似している。平面形状が不明瞭なため相互の間隔も曖昧であるが、その形状や掘込みの深さからみて、木樋と直交し掘り方西壁にかかる継手痕跡の可能性も考えられる。



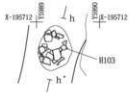
1・2区掘込み状況



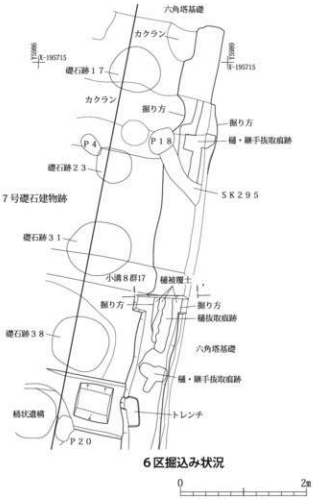
4区掘込み状況



5区掘込み状況

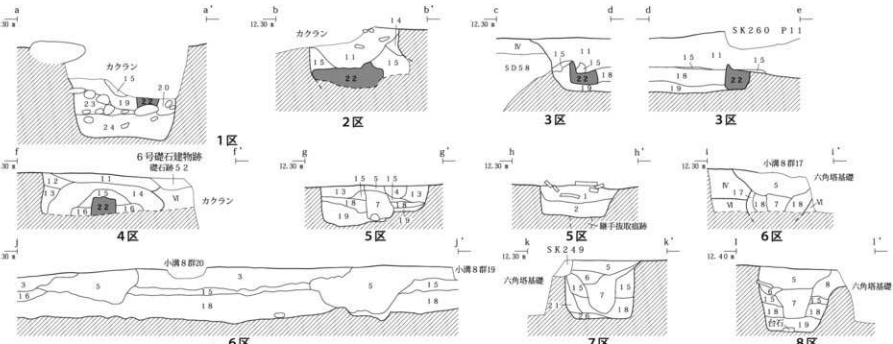


5区瓦検出状況



6区掘込み状況

第131図　1号樋跡（2）



第132図　1号樋跡（3）

遺構	層位	土色	土性	特徴	備考
1号樋跡	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径5cm以内のIV層ブロックを含む	鞭手抜取痕跡
	2	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	径1cm以内の黄褐色シルトブロックを少量含む	
	3	10YR4/4 褐色	シルト	径3cm以内のにぶい黄褐色・黒褐色シルトブロックを含む	
	4	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径1cm以内の炭化物・焼土を含む	抜取痕跡
	5	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径5cm以内の黄褐色・にぶい黄褐色・黒褐色シルトブロックを含む	
	6	10YR4/4 褐色	シルト		
	7	10YR3/4 暗褐色	シルト	径5cm以内のにぶい黄褐色シルトブロックを含む	
	8	10YR4/4 褐色	シルト	径5cm以内の黒褐色シルトブロックを含む	
	9	10YR4/4 褐色	シルト	径10cm以内の黒褐色シルトブロックを含む	鞭手抜取痕跡
	10	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径3cm以内の黄褐色・黒褐色シルトブロックを含む	
	11	2.5Y4/4 オリーブ褐色	砂質シルト	径1cm以内の明黄褐色砂質シルトブロックを含む	埋戻し土
	12	10YR4/4 褐色	シルト	径20cm以内の黒褐色・黄褐色シルトブロックを含む	
	13	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	径5cm以内の黒褐色粘土質シルトブロックを含む	
	14	10YR5/6 黄褐色	シルト	径5cm以内のオリーブ褐色・黒褐色粘土質シルトブロック・にぶい黄褐色・暗褐色シルトブロックを含む	上部埋設土
	15	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	灰黄褐色・黄褐色・黒褐色シルト・オリーブ褐色砂質シルトブロックを含む	
	16	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径3cm以内の黒褐色粘土質シルトブロックを含む	
	17	10YR5/6 黄褐色	シルト		
	18	10YR5/6 黄褐色	シルト	径5cm以内のにぶい黄褐色・暗褐色シルトブロックを含む	側部埋設土
	19	10YR4/4 褐色	シルト	径5cm以内のにぶい黄褐色粘土質シルト・黄褐色・暗褐色シルトブロックを含む	
	20	10YR3/4 暗褐色	シルト	径10cm以内の礫を含む	
	21	10YR3/3 暗褐色	シルト	径10cm以内の黄褐色シルトブロックを含む	
	22	10YR4/4 褐色	シルト	径5cm以内の黄褐色シルトブロックを含む	木樋痕跡・木樋鞭手痕跡
	23	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色シルトブロックを含む	
	24	10YR4/4 褐色	砂質土	径10cm以内の礫を多量含む	下部埋設土
	25	10YR4/6 褐色	砂質シルト	径5cm以内の黒褐色粘土質シルトブロックを含む	
	26	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	径5cm以内の黒褐色粘土質シルトブロックを含む	

出土遺物　遺物は6区から南側での出土が多く、全て木樋の抜取痕跡からの出土で、掘り方埋土からのものは無い。この他に5区の継手抜取痕跡で瓦片等を多量出土したが、これは抜取痕跡の窪みを利用して瓦片を廃棄したためと思われる。また、5区の継手抜取痕跡の北側で釘が直線的に並んで出土している。（写真図版86）これは抜き取られた木樋の一部が、その場所で腐食し釘のみが残存した状態と考えられる。遺物は丸瓦、平瓦、熨斗瓦（H40）、刻印熨斗瓦、輪違い（H72ー75）、面戸瓦（H103）、丸瓦か輪違い、土師器、陶器（I19ー21・23）、土師質土器の皿、焼塩壺、鉄釘（N294・295・298・301・302・314・316ー318・386・388・391）が出土した。出土した瓦は、平瓦、熨斗瓦、輪違いが多く、特に熨斗瓦と輪違の棟瓦が重量で半数以上を占める。

（5）性格不明遺構

今回の調査では、従来確認してきた遺構種別とは形状や構造等が異なり、調査段階でその性格が不明瞭なものについて性格不明遺構と呼称しており、8号から11号までの4基を確認した。中にはSX8のように、先の調査で確認され、その性格が判明したものもあるが、それぞれのSXにおいては遺構毎に性格や構築された背景が異なると考えられる。ここでの遺構名については正式な名称と共に、おおよそ考えられる性格を考慮した上で（　）内の名称を併記し使用している。

8号性格不明遺構（池跡）

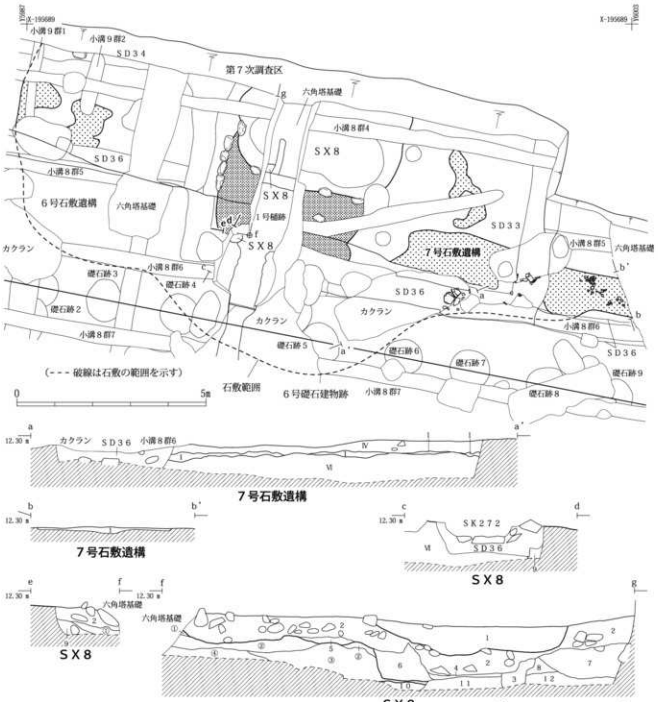
位置と配置　Y39・40、X39・40で確認した。第7次調査ではその大半を確認したが、SX8は特殊な遺構であることから、今回の調査では南側に展開すると推定される建物跡との関係を見る上で再調査することとなった。

SX8はSB6の中央北側に位置し、SX8南半部がSB6北辺の雨落ち溝跡のSD36と構造的に重複している。また、遺構下部にはこの遺構の基礎地業の可能性のある6号・7号石敷遺構を確認している。この遺構は第7次調査において大部分を確認しており、今回はSB6と接する南端部分を確認したものである。これまでの調査の結果、SX8は池部分とその南側に配置した表面の石敷部から構成される池跡と考えられており、石敷きの南側をSD36に壊される形で確認したが、両者の配置関係からみて同時に存在していた施設とみられる。

規模と構造　SX8の構造は北側の池本体となる窪み部分と、その南側の石敷部とに分かれ、両者は掘り方となる大きな土坑状プランに埋め土を入れ構築している。池本体の形状は東西に長い楕円形で、円礫を含む掘り方埋土上の窪みの壁面に、多くの円礫を無造作に積んだ構造であり、石組み等は伴っていない。縁石が取り外された状況も想定されたが、その狭さから本来円礫のみで積まれたものと考えられる。池底面の標高は11.80m℃、ほぼ平坦で、南壁はやや緩やかで、北壁は南壁に比べ急に立ち上がる構造である。これに対し石敷部は池部分とSD36との間の範囲において、円礫の少ない掘り方埋土の上部に径5cm程度の一定の大きさで揃えた円礫を敷き詰めたもので、石敷面は平坦で、標高は12.09ー12.12m℃で一定している。また池部と石敷部との間には、東西方向に飛び石状に配置された3石の円礫が境を形成し、さらに両者の西端に南北に並んだ石列を配置することでこの遺構の西側範囲を表している。

掘り方規模は東西5.3m、南北5.1m℃で、深さは最深部で0.6m℃である。池本体の東西長軸は3.65m、南北短軸は1.05ー1.50m℃で、深さは0.23m℃である。先の調査では池内部に若林城期の瓦がまとまって廃棄されているのを確認したが、これは廃城時の廃棄か、或いは後世の耕作作業によるものかは判然としない。石敷部は東西3.8m、南北1.6ー2.6mの広がりを持ち、表面の礫の厚さは5cm程度である。池と建物との間に位置することから、建物から池を臨むのに伴い配置された石敷きと考えられる。

さらに第7次調査では、この遺構の西側と東側にそれぞれ6号と7号石敷遺構を確認しており、今回の調査でも石敷部南側への延びを確認した。両石敷遺構についてはⅣ層整地土の下部に敷かれたものであり、SX8の表面に敷かれた石敷きとは異なるものであるが、SX8の基礎構造と考えられる。



※ 第７次調査区を含む

遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
7号石敷	1	10YR5/6　黄褐色	砂質シルト	径10cm以内の円礫を多量含む	一
SX8	1	2.5Y4/4　オリーブ褐色	砂質シルト	径20cm以内の円礫を含む	瓦溜り
	2	2.5Y4/4　オリーブ褐色	砂質シルト	径20cm以内の円礫を密に含む 南半分上面に径5cm以内の円礫による石敷きあり	掘り方埋土
	3	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径3cm以内の円礫を少量含む	
	4	2.5Y5/3　黄褐色	砂質シルト		
	5	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	黄褐色シルトブロックを含む	
	6	2.5Y4/4　オリーブ褐色	シルト	径10cm以内の黄褐色シルトブロックを含む	
	7	10YR4/4　褐色	砂質土	径10cm以内の円礫を密に含む	
	8	2.5Y6/3　にぶい黄色	粘土質シルト	オリーブ褐色シルトブロックを含む	
	9	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質土	径10cm以内の円礫を含む	
	10	10YR4/4　褐色	砂質土	径10cm以内の円礫を多量含む	
	11	10YR5/6　黄褐色	砂質土	径1cm以内の暗褐色シルトブロックを含む	
	12	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径1cm以内の黄褐色砂質土・暗褐色シルトブロックを含む	
1号樋跡	①	10YR3/4　暗褐色	シルト	径1cm以内のにぶい黄橙色シルトブロックを含む	植被覆土
	②	10YR5/6　黄褐色	シルト	径3cm以内のにぶい黄色粘土質シルトブロックを含む	
	③	10YR4/4　褐色	シルト	径5cm以内の黄褐色・暗褐色シルトブロックを含む	
	④	10YR4/4　褐色	砂質シルト	オリーブ褐色砂質シルトブロックを含む	

第133図　８号池跡　６・７号石敷遺構

1号樋跡との関係　ＳＸ８の中央部分には南北方向に六角塔基礎が溝状に入り、その掘り方底面において南側から延びる１号樋跡を確認した。１号樋跡の埋設土の上部にはＳＸ８の掘り方埋土である２層が積まれ、また１号樋跡の掘り方の下部にもＳＸ８の掘り方埋土９層が敷かれることから、ＳＸ８と１号樋跡は一体な構造で構築された施設と考えられる。断面観察の結果、ＳＸ８の２層下面の標高は11.66m程度であり、これは樋跡内で確認した木樋痕跡底面の標高である11.62mよりやや高いが、平面で確認した木樋幅から、その高さは0.2m程度とみられ、このことから木樋上端は上部に被せた２層中に出ていた可能性もある。これについては本来は樋跡の被覆土上に２層を敷設したものが、その際に一部で被覆土が削られたとみることができる。

断面観察で樋跡のプランは池部のやや北側の掘り方埋土３層の南側で終わっている。平面観察でも樋痕跡や掘り方プランはこれより北側には延びず、第７次調査でも確認されていない。３層はピット状に入る堆積層で、ＳＸ８にみられる埋め土とは明らかに異なっている。それは樋跡の南側で確認している継手の痕跡にも類似することから、樋は池内で方向等を上側に変化させる構造であったとみられる。

１号樋跡については、ＳＸ８内部での木樋の底面標高が11.62mであるのに対し、調査区南壁の木樋抜取痕の底面の標高が11.93mと高位置にある。このことから１号樋跡は、何らかの方法で南側の調査区外側から導水した水をこの池に流すための施設だったと考えられる。

出土遺物　ＳＸ８の池部分全体には多量の瓦が廃棄されており、その北半部については第７次調査時に採取したが、今回、南側については遺構保存の立場から採取しなかった。このため今回、池部分の１層から軒丸瓦（Ｆ14）１点を取り上げたのみであったが、陶磁器など他の遺物の出土も皆無であった。

９号性格不明遺構（敷石遺構）

位置と配置　Ｙ37・38、Ｘ45－48で確認した。ＳＢ９の西側に位置し、建物に沿って南北に長く配置されている。ＳＸ９は第８次調査で確認し、当初は幅の広い特殊な溝状遺構とみられたが、第９次調査によりこれがＳＢ９西辺の雨落ち溝を兼ねることが判明した。ＳＸ９の延びは南側が調査区外へ延びるが、北側はＳＢ９とＳＢ７の両建物の間に入り止る部分と、西に折れＳＢ７の南辺溝となる部分とに分岐している。

規模と構造　基本的な構造は、壁面に角礫による壁石を１段か２段立て並べ、底面に角礫や円礫を１石ごと丁寧に敷き並べたもので、一部で幅が狭い溝状になっている。ＳＸ９の西壁は全体に六角塔基礎により側石の多くが失われ、また東壁側の側石についても、かつて１号樋跡の木樋を抜き取る際や、後世の耕作により多くを失われている。遺構の規模は南北の確認長が17.53m、東西幅が概ね1.7mで、側石を含む東西の残存する掘り方幅は最大で2.1mである。

ＳＸ９は場所により構造が異なっており、北側からＳＢ９とＳＢ７の間に挟まれた北端の溝状となる部分、南北の長さが短い北側の敷石部分とその南側の溝状部分、ＳＸ９の南半部を占める南側の広い敷石部分とその南側の溝状部分に区別できる。遺構内部には全体にⅢ層に類似した均質な土のみが堆積しており、場所により下半部にブロック土を多く含む土壌もみられるが、これらは廃城後に畑耕作土が流入したものか、もしくは人為的に一部埋められた可能性がある土壌である。また堆積土中には集中して瓦が廃棄されたとみられる状況が確認でき、遺構内部に意図的に廃棄したものと考えられる。底面の敷石の標高は、北側敷石部分上面が12.11ー12.17m、南側敷石部分上面が12.17ー12.26mで、遺構底面は南から北へ僅かに傾斜しており、したがって水は北へ流れたものと考えられる。

遺構の掘込みは北及び南側の敷石部分と、それらをつなぐ溝状部分で行っており、北側敷石部分を１区、溝状部分を２区、南側敷石部分を北から３ー５区とした。

北端溝状部：長さは2.42m、幅は0.43mと細長く、側石は確認できず、北半部の底面には飛び石状に径40cm以内のやや大きな扁平な円礫や角礫が３つのまとまりをもち、平坦面を上に向けて埋設されている。掘り方範囲は底面礫に極めて近接しており、側石を伴う掘り方プランの在り方とは異なることから、本来この部分には側石は立てられな

遺構	層位	土色	土性	特徴	備考
SX9	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径10cm以内の円礫、砂粒を含む	堆積土
	2	10YR4/4　褐色	砂質シルト	にぶい黄橙色砂質シルトブロックを含む	
	3	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径5cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロックを含む	
	4	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径5cm以内の黒褐色シルトブロックを少量含む	
	5	2.5Y4/4　オリーブ褐色	シルト	上面に径50cm以内の円・角礫による石敷きあり	振り方埋土

第134図　９号敷石遺構

かったとみられる。底面礫の上面標高は、北端が12.24ー12.26mであるのに対し、南側は12.16ー12.22mとなり、ＳＸ９のこの部分に限り、底面は北から南に僅かに傾斜し下がっている。

北側敷石部：北側の南北にやや長くなる方形状の敷石部分の１区と、その南側に位置し、南側敷石部と接続する溝状部の２区に分けた。１区の掘り方規模は南北2.6ー2.7m、東西1.7ー1.85mで、敷石の範囲は南北2.1m、東西1.6m程度である。東壁側には径40cm程度の角礫が側石として残存しており、北および南壁の側石は残存しないが、礫と掘り方の間に0.2m程の隙間がみられることから、本来はこの区画全体が１段か２段の側石に囲まれていたと考えられる。敷石は北側が径15ー30cmの大型の円礫を中心に敷くのに対し、東側は径40cm以内の角礫を中心に敷いている。これにより囲まれた中央部分には径10ー20cmの小型の円礫が敷かれており、西側と想定される部分でも同様に小型の礫が敷かれている。また底面は中央から西側にかけて僅かに窪んでいる。

２区の南北の長さは掘り方幅や底面・壁面の礫の状況からみて３m程である。西壁は失われており明瞭ではないが、東西の掘り方幅は残存部分で1.2mあり、残存する東壁からの溝幅は0.5mと狭くなっている。東壁面は径20cm程度の角礫を使用しているが、他の場所と比べ掘り方の幅が広く、これが何に因るものかは不明である。敷石には径30cm以内の大型の円礫や角礫を混在させ使用しており、その割合は半々である。１区および南側敷石部分との境の側石と敷石が失われているが、隣接地の標高からそこに段差等の特徴は無いものとみられる。敷石の標高は１区周辺が12.15ー12.17m、中心部分が12.11ー12.15mなのに対し、２区は12.14ー12.16mで、１区中央部分が僅かに低くなっている。

南側敷石部：３区は北側敷石部２区につながる部分、４区は中央部分、５区は遺構全体を通して南端の部分で、それぞれの間にある撹乱を境とした。南部の全域もまた西辺の掘り方は六角塔基礎に壊され、東辺掘り方も１号樋跡の抜取りにより壊されている。南側敷石の残存範囲は、南北7.85m、東西の側石の間は1.47mであり、南端にみられる敷石の無い掘り方を含めた規模は、南北9.6m、東西1.32ー2.10mである。南端部で５区敷石よりも南側の長さ1.5mの部分には、本来、敷石があったとみられる。またこの南端部は掘り方幅が東西1.4mと狭くなっている。これは北側敷石部同様に、何らかの構造の変化部分と見られ、おそらくは敷石幅自体が狭くなる部分と考えられる。４区から５区にかけての東壁際には0.3mの幅で敷石がみられない帯状の部分があり、本来敷石があったものが、後世抜取られたものと見られる。この付近とその延長の３区からは瓦片が多く出土している。

壁面は北端と東西壁面の一部が残存しており、側石には径30cm以内の角礫を使用している。底面の敷石は径30cm以内の角礫を中心に敷いており、北側敷石２区との接続部には、径50cm程度の大型角礫が敷かれている以外、円礫は少なく、底面敷石には何らかの理由による円礫と角礫の使い分けがあったと考えられる。３区の底面標高は12.13ー12.16mと北側２区とほぼ同じ高さで、４区は12.14ー12.21mと３区より高く、５区は12.17ー12.26mとさらに高くなる。したがって南側敷石部においてもまた水は南から北へと流れる構造であったと考えられる。

南端溝状部：南側の敷石部分が溝状に延び、調査区外に続いている部分である。掘り方西側は六角塔基礎で壊されており、残存幅は0.55mである。掘込みを行っていないが、Ⅲ層類似の堆積土が残存することから、底面にあったであろう敷石は早い段階で失われたとみられる。側石も確認できず、ＳＸ９北端溝上部のような構造が南北敷石の間の溝状部分のような構造かは不明である。

ＳＸ９の性格については、東に位置するＳＢ９との配置関係から、建物西辺の雨落ち溝であったと考えられる。またＳＸ９は全体に幅広で、場所により構造が異なるという特殊性を持ち、雨落ち溝以外に何か別な目的をもって構築された施設と考えられる。ＳＸ９はＳＢ９とＳＢ８の間にあり、幅が他の溝よりも明らかに広く、底面には全体に丁寧に石を敷き詰め、さらに幅に比べて浅い構造である。以上のことからは鑑賞する目的で造られた印象を受けることから、建物間に配置された池的な性格を持った施設と考えられる。

出土遺物　遺物は全て堆積土から出土しており、特に南側敷石部分５区の底面に敷石が無い部分で集中して出土し

ている。遺物は丸瓦（F31）、平瓦、熨斗瓦（H27ー39）、輪違い（H58ー71）、面戸瓦、丸瓦か輪違い、桟瓦、土師質土器の皿（X106）、鉄釘（N287）など、瓦を中心に出土している。出土した瓦片は平瓦・熨斗瓦・輪違いが多く、残存の良いものには熨斗瓦や輪違いの棟瓦が多く、重量では熨斗瓦が半数以上を占める。

10号性格不明遺構（池跡）

位置と配置　ＳＸ10はY40ー43、X43ー45で確認した遺構で、ＳＢ６の南側、ＳＢ９・11の北側に位置し、建物周囲の雨落ち溝に囲まれた範囲に収まる形で確認した施設である。またＳＸ10を埋め戻した上にＳＢ10が造られている。

規模と構造　全体で見た平面形は東西に長い不整形で、北東部と南部を撹乱で壊され、また東への広がりは不明瞭である。規模は東西15.9m、南北4.6ー5m程度で、残存の良好な掘り方南西隅の東西辺方向はＮ－74°－Ｗであり、概ね周囲の建物跡他の遺構と同様である。撹乱による断面観察から、ＳＸ10は土坑状プランを人為的に埋め戻した西部、この埋めた西側プランと重複し、東側に新たに掘られた土坑状プランを埋め戻した中央部、中央部に埋めた土が薄く広く堆積している東部の３つに区別できる。

西部は東側が中央部プランと重複し詳細は不明であるが、東西長が４m程度の隅丸方形に近い形状と推定される。残存する深さは0.45m程度で、底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は８層に分層され、底面及び壁面に面する９・10層は粘土質が強く、それより上層は人為的埋め戻し土である。埋め戻し土は土の種類により明瞭に分層できる。

中央部は東西6.3m、南北３m以上で、西部同様、隅丸方形状のプランである。両者は東西の並びをほぼ同じくしている。深さは下半を掘り込んでいないため不明であるが、0.45m以上ある。断面によると窪み全体が厚く埋め戻されており、またその下部には西部のプラン同様に底面及び壁面に面し、より粘質の強い層が0.15m以上の厚さで貼られた状況が確認できる。これにより埋められる以前は粘質層である２層が露出していたものとみられ、この２層面は凹凸が著しいことから、乱され易い状況にあったものと考えられる。

東部は撹乱により掘込みプランは確認できないが、確認面での埋め戻し土の厚さが0.1m程度あったことから、当初はわりと広く浅い掘込みを掘った部分と考えられる。堆積土は中央部の１層がそのまま薄く埋められたものである。

以上のことから、ＳＸ10は一時期の遺構ではなく、当初の姿である西部と、それを埋め戻し新たに東側に造った中央部とそれに付属する東部への変遷が認められるものである。ＳＸ10の最大の特徴としては、西部と中央部の両プランの底面から壁面に貼られた粘質土であり、これは構造的に耐水性を高めた構造と理解できることから、プラン内部に入れた水が漏れることを防いだもので、その性格としては小規模な池が考えられる。

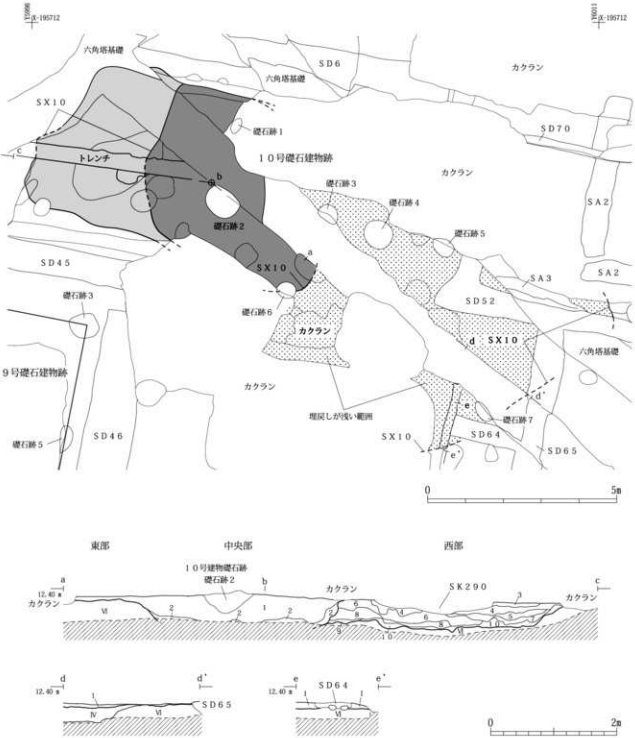
中央部と東部の埋め戻し後に形成された１層面には、ＳＢ10の礎石跡やＳＤ52・64・65が構築されている。またＳＤ52西端では、掘り方埋土上にＳＸ10の１層が敷かれることで、ＳＸ10当初が改修による池の何れかと同時に存在した溝の存在も確認できる。さらにＳＸ10の１層面にはＳＤ52の廃城後に掘り直された溝が確認できる。これらのことから、ＳＸ10を取り巻く遺構の重複関係は、池のみでの場所や構造の変遷に止まらず、建物を含む城内施設の大規模な造加や改修が存在したことを示すものといえる。

出土遺物　西部から中央部にかけての断ち割り調査を行った際に、西部の掘り方埋土から平瓦、熨斗瓦、輪違い、丸瓦か輪違いが出土しているが、いずれも小片である。

11号性格不明遺構（池状遺構）

位置と配置　ＳＸ11はY43・44、X47ー49で確認した遺構で、ＳＢ９の東側に位置する。掘り方プランの形状はほぼ正方形で、方向は建物群他と同様に城の軸線と全く一致している。プラン西辺とＳＢ９東辺柱筋との距離は2.4mで、北辺はＳＢ９主屋北辺の溝とほぼ並びが合っている。

遺構の東半部は刑務所の建物基礎により大規模に壊されており、遺構掘り方底面まで削平されるのに対し、西



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SX10	1	10YR5/6　黄褐色	砂質土	径10cm以内の黄褐色・黒褐色粘土質シルトブロックを含む	埋戻し土
	2	10YR5/2　灰黄褐色	粘質土	径10cm以内の浅黄色粘質土ブロックを含む	貼り底
	3	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径1cm以内の黄褐色シルトブロックを含む	埋戻し土？
	4	10YR3/4　暗褐色	シルト	黄灰色シルトブロックを含む	
	5	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	黄灰色シルトブロックを少量含む	
	6	2.5Y5/2　暗灰黄色	粘土質シルト	径1cm以内の炭化物を含む	
	7	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径5cmの黄褐色シルトブロックを含む	
	8	2.5Y4/3　オリーブ褐色	シルト	径20cm以内の黄褐色粘土質シルトブロックを含む	
	9	2.5Y4/2　暗灰黄色	粘土質シルト	径1cm以内の炭化物を微量含む	
	10	2.5Y5/3　黄褐色	粘土質シルト	暗灰黄色粘土質シルトブロックを含む	

第135図　１０号池跡

第136図　１１号池状遺構（１）

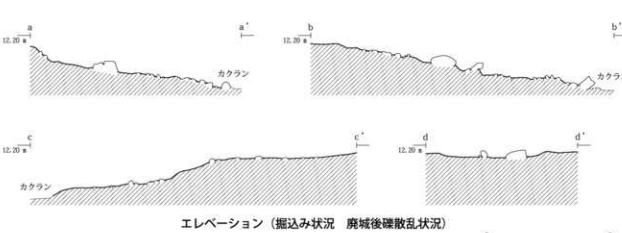
半部は残存が悪いながらも本来の構造が判別できる状況である。他遺構との重複は、ＳＸ11がＳＢ９東辺溝のＳＤ62を壊す形で確認したが、これはＳＸ11が廃城後に形状を変えられるなどの大きな改変を受けたことに伴うもので、ＳＸ11はその配置状況からみて、本来は若林城の一施設としてＳＢ９東側に構築されたものと考えられる。

規模と構造　ＳＸ11の構築当初の構造は、掘り方内に側石を組み、底面に玉石が敷かれた特殊な遺構である。当初に確認した掘り方規模は東西8.72m、南北7.32mの不整形であったが、これは廃城後に改修されたことによるもので、当初は正方形の均整な形状であることが判明した。ＳＸ11の西側においては石組みや裏込め状況、掘り方形状など、若林城期の施設の姿をうかがい知ることが出来るが、廃城後に何らかの別な目的で掘られた大型の土坑状プランによりその様相が一変している。

西半部の堆積土は最上位にみられるブロック層の１ー３層、礫や瓦片を多く含む４ー９層、Ⅵ層を深く掘込み、礫や瓦片をほとんど含まない10・11層、そして石組み背面に入れられた礫を中心とした12層の４つに大きく分層される。このうち１ー11層については、改修後に掘られた土坑状プラン内に入れられたもので、当初の構造にかかわる層は裏込め石等を除き、ほとんど残存しない。掘込みは堆積土の多く残存する西半部の４層以下において、東西と南北方向の十字ベルトを設定し行なった。以下では遺構の変遷に従い記述する。

若林城期の施設　ＳＸ11の構築当初の構造は、南東部が未確認ではあるが東西6.9m、南北6.95mの方形の掘り方の壁面際に角礫を積んだものである。南北ベルトより東側は掘り方自体がほとんど失われ、一部では掘り方底面も削平されていたが、掘り方埋土が僅かに残存することでその形状が判明した。掘り方各辺は直線的で、各隅部は角張り、壁面はほぼ直立しているものとみられる。

掘り方内側に組まれた石組みは、南西隅部でのみ確認した。側石は西壁側に３石の幅0.6m程度、南壁側に３石の幅１m程度の長さで残存するのみであったが、その他の大部分は後世の土坑構築の際に外されたと考えられ、本来は四面全体に石組みが組まれていたと考えられる。残存する石組みから推定した遺構内側の規模は、東西5.7m、南北5.75mの正方形となり、規格性がかなり高い形状といえる。石組みの石材は雨落ち溝同様に角礫を使用し、２段分の高さの0.5ー0.6m程度を確認したが、隣接する建物跡と標高差や後世の改変状況を考慮すると、当初は３段ないし４段分が組まれたとみられ、これにより構築当初の深さは１ー1.2m程度と推定される。角礫の大きさは20cmから大きなもので45cm程度で、石材にノミ加工の痕跡等は特に確認できない。南西隅の側石の下端標高は11.35ー11.42mである。また石組み背面と掘り方の間には、径20cm以内の円礫を多数入れた裏込め層である12層が幅0.4m程度で帯状に巡るのを平面的に確認した。裏込め石は掘り方際に近い部分が密に入れられるのに対し、内側ではやや乱れており、この部分については後世の土坑構築に伴い、原位置を保っていないものと考えられる。石組み背面の



エレベーション（掘込み状況　廃城後礫散乱状況）

第137図　１１号池状遺構（２）

裏込めは、これまでの調査で一部の溝跡にのみみられる構造である。

底面は西側を大型の土坑状プラン、東側を後世の撹乱により大部分が壊されているが、北西隅部と南東隅部でのみ僅かに残存していた。また東西ベルト東端部分の８層下にもやや乱されて入るが石敷きとみられる円礫を一定範囲で確認した。残存部分には径５cm以内の裏込め石に比べ小さく粒の揃った小円礫を薄く敷いており、本来は底面全体に円礫を密に敷き詰めた構造と考えられる。石敷きは掘り方底面となるⅥ層面に直接敷かれ、その間に整地土は入れられていない。北西隅石敷きの標高は11.42ー11.48mなのに対し、南東隅は11.55ー11.60mと高く、底面は全体に東側が高い傾向がある。また残存する両隅部の石敷き部分には、掘り方壁との間にこれと並行し円礫が少ない溝状の部分があるが、本来この位置には側石が組まれ、それを抜取った痕跡とみられる。

撹乱が著しい東半部での掘り方底面の状況は、北壁全体と東壁北半部の壁際が幅0.2ー0.6mの溝状となっている。この位置は掘り方壁よりやや内側にある壁石の抜取り位置とは異なっており、掘り方底面の何らかの特徴とみられる。中央の楕円形状で中に角礫片を含むプランについては、同様に掘り方底面の形状である以外、撹乱によるものの可能性もある。

ＳＸ11は溝跡同様に周囲に石壁を組み、底面には径の揃った円礫を敷くなど、その構造は雨水などを流し、或いは溜める溝と非常に類似している。池の可能性のある他とは構造や規模的に全く相違したものではあるが、城造営当初に構築されたこの施設の性格としては、ＳＢ９の東側に配置され、貯水など実利目的のものか、或いは鑑賞のための池と考えられる。

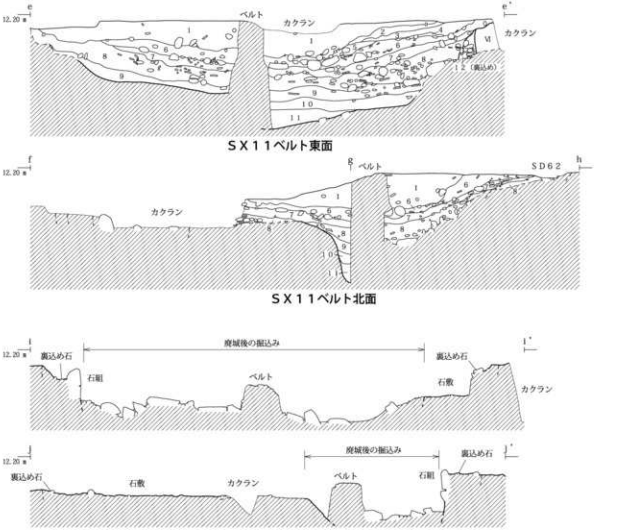
廃城後の状況　ＳＸ11は廃城後にその性格を変えながら幾つかの段階を経て機能し、最終的には明治に入り完全に埋められている。廃城後、ＳＸ11内部には残存規模で東西2.55m、南北5.9mの南北に長い楕円形の大型土坑が掘られる。土坑下半部はかつての方形プランの内側にほぼ納まり位置し、構築に際しては池の堆積土がほとんど存在しない状況で、底面の石敷きを壊し掘り込んだとみられる。また池の石組みが隅部しか残存しない状況から、土坑はあくまでも方形の形状を意識し、その内部に納まるように構築したもので、上半部では浅くなりながら西側で池の外へ広がる構造であったと推定される。土坑の深さは最深部で1.75m、標高10.4mと他の遺構に比べ深くなるのに対し、東西ベルト東端では底面が平坦となり、標高11.30ー11.35mと浅く一定している。これにより土坑西壁は池の裏込め石を壁面とするが、東側での土坑の広がりは不明である。

土坑中の堆積土は下半部の10・11層中には礫や瓦片があまり含まれず、その上部に大型の角礫や池の石組みに伴う裏込め石、そして瓦片を多く含む５ー９層が堆積している。さらに上部には北側を中心に主に円礫を少量含む層が限定的に堆積している。５ー９層に含まれる角礫は径が20ー50cmあり、池の残存状況から推察すると、角礫は石組みによる壁材であり、その状況から人為的に廃棄されたものと考えられる。また角礫には同じく壊されたＳＤ62の構築材も含まれている可能性がある。このような状況から土坑は最終的には礫等を廃棄するため利用された状況がうかがえるが、土坑下部の礫を含まない10・11層の存在から、当初から廃棄を目的とし土坑が掘られたかは不明である。土坑上部の４ー６層は主に大型の角礫が廃棄された後の堆積層であるが、層西側の範囲は、池プランから大きくはみ出し、ＳＢ９近くまで広がる不整形なもので、池の石組みより西側に2.5mほど広がっている。これらの層上面は、方形プランの中心側に向かい全体に傾斜し下っており、南西側を中心に径20ー50cm程度の数個の角礫や裏込め石よりやや大きめの円礫が密集する状況を確認した。調査当初はＳＸ11のある段階で土坑上部に窪む面を作り、円礫を敷くことにより何らかの機能を持たせた可能性を考えたが、周辺に散乱する礫を処理したことを示すものと考えられる。

ＳＸ11の最上部を占める１ー３層はブロック土を主体とした人為堆積土である。これらの層は基本層Ⅱ層とみられ、特に１層は一部で60cmの厚さがある。この状況からＳＸ11は明治初期には僅かに残存する窪みとなり、その後、宮城集治監建設に伴う造成の際に完全に埋められたと考えられる。

第138図　１１号池状遺構（３）

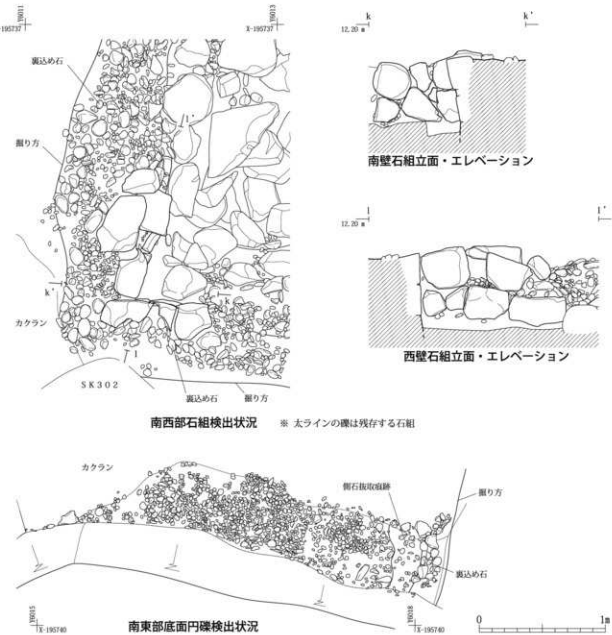
出土遺物　遺物の大半は西側の堆積土中から出土している。1－3層からは瓦片の他にガラス製品の破片が出土し、4－9層では瓦片が多量出土している。これらの層は廃城後の堆積土であり、前者は明治期の整地土に混入したもので、後者は近世中の自然流入と人為的廃棄と考えられる。隣接するSD76は廃城後に掘削された溝で、内部には多量の瓦が廃棄されていた。SX11とSD76の遺物は小片ではあるが接合しており、同時期の廃棄の可能性もある。また出土した瓦片には小片が多い。このことは廃城後直後の廃棄では無く、近世の耕作を経た結果とみることも可能である。



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SX11（廃城後）	1	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径3cm以内の黒褐色粘土ブロックを微量、径20cm以内の円・角礫を含む	埋戻し土
	2	10YR6/4　にぶい黄褐色	砂質シルト	暗褐色砂質土を多量、径3cm以内の円礫を微量、径1cm以内の炭化物を少量含む	
	3	10YR4/2　灰黄褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色砂質シルトブロックを少量、径1cm以内の炭化物を少量含む	
	4	10YR6/4　にぶい黄橙色	砂質土	径3cm以内の黄褐色・灰黄褐色砂質ブロックを少量含む　層位が水平に堆積する	
	5	10YR3/2　黒褐色	砂質シルト	径30cm以内の角礫を最大とし径20cm以内の礫を多量、径1cm以内の炭化物を少量含む	
	6	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	径30cm以内の円礫を多量含む	
	7	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	径10cm以内の円礫を多量含む	
	8	10YR4/2　灰黄褐色	砂質シルト	径10cm以内の円礫を多量含む	
	9	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト	径3cm以内の明黄褐色砂質シルトブロックを少量、径10cm以内の円礫を少量含む	
	10	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト		
	11	10YR6/4　にぶい黄橙色	シルト		
SX11	12	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	径3cm以内の明黄褐色砂質シルトブロックを少量、径20cm以内の円礫を多量含む	裏込め

第139図　１１号池状遺構（４）

遺物は軒丸瓦（Ｆ54・55）、丸瓦（Ｆ71・72）、軒平瓦（Ｇ103－105）、平瓦（Ｇ114）、刻印平瓦、伏間瓦（Ｈ135）、熨斗瓦（Ｈ149）、刻印熨斗瓦、輪違い（Ｈ179）、面戸瓦、丸瓦か輪違い、鬼瓦（Ｈ197・201－203）、その他の瓦、桟瓦、縄文土器（Ａ２）、土師器（Ｃ８・９）、須恵器（Ｅ28・29）、陶器（Ｉ117－120）、土師質土器の皿（Ｘ127－132）、焼塩壷、鉄釘（Ｎ586・588）、その他の鉄製品（Ｎ567）、ガラス製品が出土している。出土した瓦は丸瓦、平瓦、熨斗瓦が多く、中でも丸瓦、平瓦が重量で７割近くを占める。



第140図　１１号池状遺構（５）

（6）石敷遺構

石敷遺構には第5次調査の1号石敷遺構のようにⅣ層整地土上面に敷かれたものと、Ⅳ層と地山土であるⅥ層との間に敷かれたものの二種類に分かれる。Ⅳ層上面の石敷きは整地土を盛った上に直に円礫を敷設し、礫径や敷いた厚さが多様である表面遺構である一方、Ⅳ層下面のものは旧表土と共に一部地山土を削平し、地山上に直に礫を敷設した整地作業に伴う基礎地業で、礫径はほぼ同様で、厚みも無くまばらに敷かれているものである。今回確認した石敷遺構のうち、Ⅳ層上面のものには8号石敷遺構があり、Ⅳ層下面のものには6・7・9号石敷遺構がある。石敷遺構の層順の扱いとしては、その構築過程から前者がⅣ層の最上部、後者がⅣ層の最下部に位置付けられる。また今回の調査では、第5次調査において礎石建物跡群の周囲を取囲んで広範囲に及ぶ1ー3号石敷遺構は確認できず、表面に敷かれる石敷遺構の構築場所を考える上で興味あるものとなった。

6・7号石敷遺構（第133図）

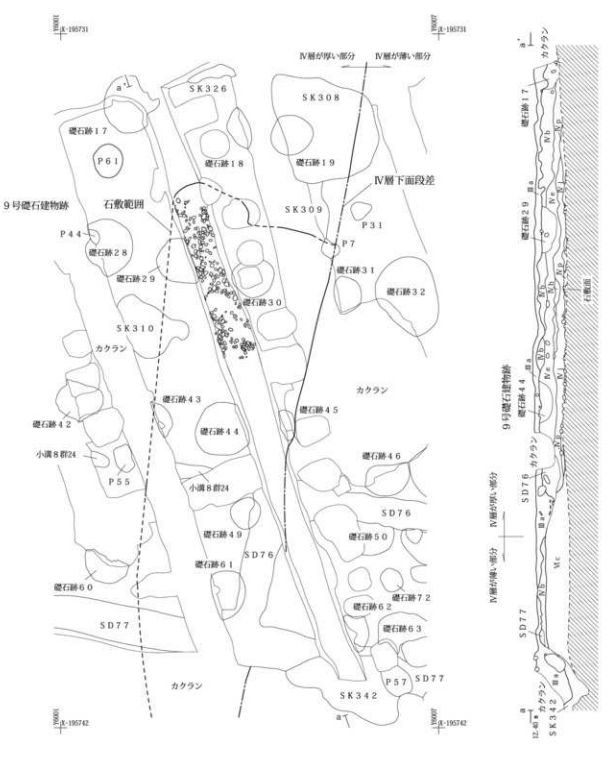
6号石敷遺構はY38・39、X38・39で確認し、7号石敷遺構はY40・41、X39・40において、主に撹乱等の断面で確認した。第7次調査では6号石敷遺構は池跡であるＳＸ8の西側、7号石敷遺構は東側で検出しており、今回の調査ではそれらの南側への広がりを確認した。石敷きは北がＳＸ8周辺から南側に位置するＳＢ6北辺溝のＳＤ36を経て、ＳＢ6の内部へ広がっている。両石敷遺構南側の撹乱壁面を観察したところ、石敷きの状況はⅣ層とⅥ層の間に径10cm以内の円礫をまばらに含んだものであるが、範囲内においても礫が確認できない場所もあり、礫は範囲全体に均一に敷設されたものでは無いことがわかる。石敷遺構はＳＢ6の北側下部にも展開するが、石敷きの中心はＳＸ8の掘り方範囲全域とその南側であることから、両石敷遺構はＳＸ8の構築に伴い何らかの目的で事前に敷かれた基礎地業の可能性がある。

8号石敷遺構（第71図）

Y35、X44・45で確認したⅣ層上面の石敷遺構である。敷設範囲はＳＢ7南西側の入隅部で、西辺溝のＳＤ44bとそれを埋め戻し造り替えたＳＤ44aの間部分の南北2.1m、東西1.4mの狭い範囲である。この周辺の建物内外のⅣ層中には円礫はほとんど含まれず、確認範囲が新旧溝に挟まれた限定的なものであることから石敷遺構とした。石敷きは径5ー20cmの円礫がⅣ層上面にまばらに敷かれたもので、礫が密に敷かれ厚さのあるものでは無い。8号石敷遺構は東・南側をＳＤ44a、西側をＳＤ44bに北側をＳＤ48bに囲まれた範囲であるが、これらの溝は2段階の変遷を確認しており、その古い段階の溝の埋め戻し土上面に円礫はほとんど無いため、8号石敷遺構はＳＤ44bやＳＤ48bの古い段階に伴う遺構と考えられる。

9号石敷遺構

Y41・42、X47ー49で確認した遺構で、ＳＢ9の東側下部に位置している。敷設範囲は撹乱の壁面等で確認したため明瞭ではなく、建物から外れた北側の撹乱断面では確認できないが、南側は建物南側にある大規模な撹乱を挟んだ調査区南壁断面でも確認していることから、南北範囲についてはＳＢ9主屋の南北の範囲とほぼ一致するものとみられる。石敷きの状況は径5cmの円礫を一定レベルにまばらに敷いたものである。またＳＢ9の東側の整地土下面には深さ0.3mの段差が存在し、それを境に西側のⅣ層は厚く、東側では薄くするという地業を行っている。石敷きはその段差際の深い部分に沿って南北に長く敷かれており、確認できる東西幅は1.75ー2.63m程度と南北の長さに比べ狭いものである。Ⅳ層下面の段差はこの地区にのみみられる構造で、段差と石敷きは一体的に構築されたものであるが、その位置はＳＢ9の東辺ラインと合致していない。



※ 破線はⅣ層下石敷遺構の推定範囲

遺　構	層　位	土　色	土　性	特　徴	備　考
Ⅳ層	Ⅳb	10YR4/4　褐色	シルト	径10cm以内の黄褐色シルト・黒褐色シルト・暗褐色シルトブロックを含む	整地土
	Ⅳc	10YR7/4　にぶい黄橙色	シルト	径5cm以内のにぶい黄褐色砂質シルト・褐色砂質シルトブロックを少量含む	
	Ⅳh	10YR5/1　褐灰色	シルト		
	Ⅳj	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径3cm以内のにぶい黄褐色砂質シルトブロックを含む	
	Ⅳp	10YR6/4　にぶい黄橙色	シルト	径5cm以内の褐灰色砂質シルトブロックを少量含む　径10cm以内の円礫を含む	9号石敷遺構

第141図　９号石敷遺構

（7）土坑

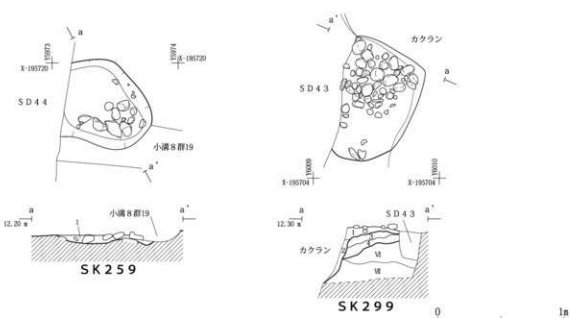
Ⅳ層面検出の土坑は廃城後のものが殆どである一方、出土遺物の少なさや礎石建物跡との配置関係のみから若林城に伴うものと断定できるものは殆ど無い。しかし一部には整地土上面で確認された上で、建物に伴う溝跡に切られることでこれより古いとしたものがあるが、溝跡の中には若林城廃城後も機能したものが認められることから、これらは整地後から建物建設までの短い期間に造られたものであるほか、廃城後のものである可能性もある。

259号土坑

Y35、X44・45グリッドで検出し、8号石敷遺構より新しく、ＳＤ44と小溝群８－19より古い。本来の形状は不明で、残存規模は長軸0.81m、短軸0.72m、深さ0.07mである。堆積土は径15cm以内の円礫を含む褐色シルトの単一層である。底面は平坦で、南側に径20cm以内の円礫を多く確認した。ＳＫ259は８号石敷遺構を掘込み構築されていることから、これらの円礫は石敷遺構に由来するものの可能性もある。遺物は出土していない。

299号土坑

Y42、X41グリッドで検出し、形状は隅丸方形状であるが、東側と北側を撹乱、西側をＳＤ43に壊されており、本来の形状は不明である。撹乱壁面での観察では、残存規模は長軸0.96m、短軸0.66m、深さ0.45mである。堆積土は４層に分層できるが、堆積状況からみて当初のものか或いは別の土坑に堆積した３・４層と、これを掘り込んだ土坑内に堆積した１・２層に大別できる。最終的に堆積した新しい土坑の１層上面には径20cm以内の多量の円礫がまとまって入れられている。遺物は出土していない。



遺　構	層　位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SK259	1	10YR4/4　褐色	シルト	径20cm以内の円礫を含む	—
SK299	1	10YR4/4　褐色	シルト	径20cm以内の円礫を多量含む	—
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径5cm以内の円礫を少量含む	—
	3	10YR3/3　暗褐色	シルト	径1cm以内の褐色シルトブロックを含む	—
	4	10YR3/4　暗褐色	シルト	径5cm以内の褐色シルトブロックを少量含む	—

第142図　２５９・２９９号土坑

（8）Ⅳ層整地土

基本層のⅣ層としたものは、寛永４年（1627）に若林城を造営する際に敷き均された整地土である。整地土は主に調査区中央部や西部で確認しているが、東部では廃城後に行われた耕作による整地土の作土化や撹乱により多く

が改変・変質したとみられ、中には確認できない部分もあった。調査区全域に確認した建物等の城の施設は全て整地土上面で確認しており、削平を受けた部分での観察では整地土中や下面では一切確認できない。これにより整地は城の造営時に建物等の建設に先立ち、大規模かつ一時期に行われたことがわかる。

整地土は調査区西側の第５次調査や北側の第７次調査で確認できる一方、東側の第２次調査や南東側の第６次調査では確認されていない。また第５・７次調査区側では今回の調査同様、建物をはじめとする多くの遺構が確認されたのに対し、第２・６次調査区では殆ど無い状況である。第２次調査区での若林城期遺構の在り方は不明瞭な点が多いが、第６次調査での下層遺構の残存状況からみて、本来城の南東部にあたるこの地区には整地が殆ど成されなかったと想定されており、現時点で考えられる整地の範囲は、概ね城施設の建築場所とほぼ一致する傾向がうかがえる。本調査区東側においては整地土が全く確認できない部分があるが、この地区では遺構数が少なく、残存状況が極めて悪いながらも建物等の存在が確認できることで、整地土は本来、調査区内全域に敷かれ、第２次調査区にまで及んでいた可能性がある。

整地土の基本的な構造は、若林城造営前にこの地にあった表土（Ⅴ層）上に、他所から持ち込んだ土を盛るのではなく、表土とその下層の自然堆積層（Ⅵ層）上部までをすき取り、それを整地土として改めて敷き均すという手の込んだものである。それを証明するように、Ⅳ層とⅥ層面との層理面は明瞭で、凹凸が無く直線的であり、また旧表土Ⅴ層は全く確認できず、かつて第５次調査では窪み部分にすき取りを免れ僅かに残存する状況であった。また整地土中にはⅥ層起源の黄褐色ブロックが主体を占めるのに加え、暗褐色ブロックが含まれており、これは表土が同時に敷き込まれたものとみられる。整地土は殆どの部分ではやや粗めのブロック土を無造作に敷いた状況をみせるが、ＳＢ９付近などにおいては、ブロックの配合割合が異なる層が重層となる部分もみられる。ブロック土の大きさは概して礎石跡や溝跡の掘り方埋土に入るものより明らかに大きく、礎石跡にみられる叩き締めによりブロックが縞状となる変形等は確認できない。このことから整地土は一部では回数を分けて敷くにも関わらず、入念に突き固められたものではなく、建物の安定は主に礎石基礎部分の構造に拠るところが大きいとみられる。

建物周囲に敷かれた表面遺構である石敷遺構は、石敷き自体の構造の違いに関わらず、礎は整地土上に直接敷かれている。またⅥ層を掘り込んだ際の工具痕等は確認されていない。

整地土の削平状況は、本来の厚さが残存する部分が無いことから不明と言わざるを得ないが、礎石跡や溝跡の残存状況からみて上部の10ー20cm程度が後世に作土などに改変したものと推定され、これには整地土上に新たに形成された表土層や石敷き等が含まれている。

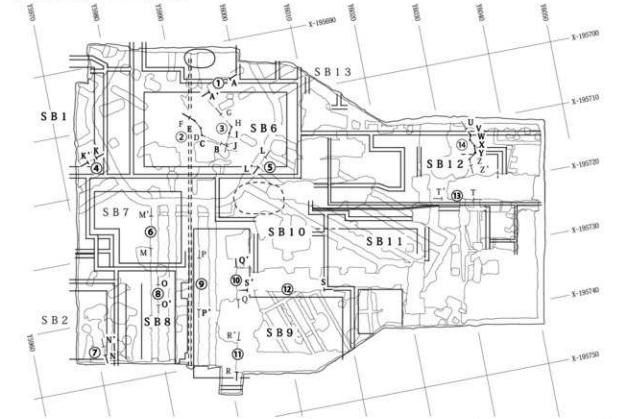
第４表は整地土の上面・下面の標高と厚さを示したものである。上面の標高は12.11ー12.35mと差がみられるが、これは本来の整地土上面の高低差を示すものではなく、後世の耕作や撹乱の深度の違いによる残存状況の違いと考えられる。これに対し下面の標高は11.69ー12.17mとなり、上面同様一定ではないが、これはＳＢ９付近の整地に伴う掘込みが全体に11.95m以下と深く行われたことによるものである。特に主屋部東側の整地土下面の段差を境にその西側部分の低さが際立っており、この地区が何らかの理由でより厚い整地をしていることがわかる。ＳＢ９付

地点名	標高(m) 整地土上面	標高(m) 整地土下面	厚さ(m)
①SB6北辺付近	12.27	12.09	0.14
②SB6中央	12.16	12.03	0.12
③SB6中央	12.35	12.03	0.25
④SB1南東角付近	12.21	12.03	0.18
⑤SB9南東角付近	12.31	11.93	0.34
⑥SB7中央	12.26	12.00	0.18
⑦SB2南東付近	12.16	12.00	0.15
⑧SB8東側付近	12.18	11.85	0.30
⑨SB9西辺付近	12.26	11.80	0.41
⑩SB9張出部付近	12.25	11.85	0.35

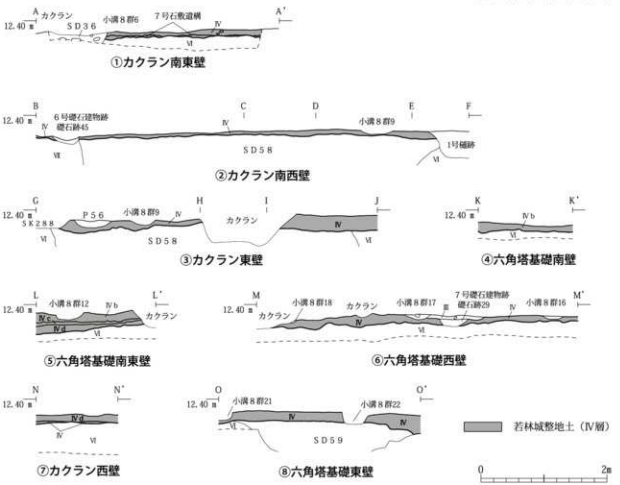
地点名	標高(m) 整地土上面	標高(m) 整地土下面	厚さ(m)
⑪SB9主屋西半	12.20	11.86	0.29
⑫SB9主屋北辺付近	12.12	11.69	0.28
⑬SA2付近	12.16	12.02	0.09
⑭SB12北側付近	12.22	12.08	0.11
⑮調査区北西角付近	12.11	12.01	0.10
⑯調査区南壁（1号礎跡付近）	12.22	11.94	0.27
⑰調査区南壁（SB9南辺付近）	12.26	11.80	0.44
⑱9号石敷遺構付近	12.25	11.86	0.45
⑲調査区南壁（Ⅳ層下面段差付近）	12.25	12.17	0.05
⑳SA3付近	12.19	12.02	0.14

※ ○数字は第143図での位置

第４表　整地土の標高と厚さ

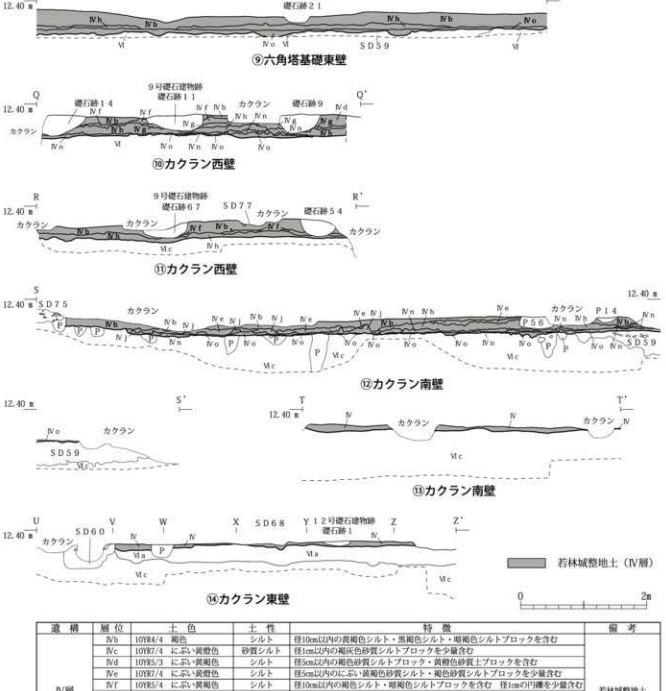


断面位置図



第143図　Ⅳ層整地土（1）

近での整地土は黄褐色と褐色のシルトブロック土が主体で、ブロックの大きさや混入量により15層以上に細分している。これは調査区西側で３層程度に分層される部分を含め、特に分層できない他の整地土と比較しては異質なものであり、その特殊性がみて取れる。以上のことから、当初の整地土の厚さについてはＳＢ９付近の最も厚い場所で60cmほどであるが、その他の地区では場所により20ー50cm程度と幅があったとみられる。しかしながら、下面状況からも本来の整地土面に標高差が存在したのかや、本地区の微地形をうかがうことは難しいといえる。



遺　構	層　位	土　色	土　性	特　徴	備　考
Ⅳ層	Ⅳb	10YR4/4　褐色	シルト	径10cm以内の黄褐色シルト・黒褐色シルト・暗褐色シルトブロックを含む	若林城整地土
	Ⅳc	10YR7/4　にぶい黄橙色	砂質シルト	径1cm以内の褐灰色砂質シルトブロックを少量含む	
	Ⅳd	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	径5cm以内の褐色砂質シルトブロック・黄褐色砂質土ブロックを含む	
	Ⅳe	10YR7/4　にぶい黄橙色	シルト	径5cm以内のにぶい黄褐色砂質シルト・褐色砂質シルトブロックを少量含む	
	Ⅳf	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト	径10cm以内の褐色シルト・暗褐色シルトブロックを含む　径1cmの円礫を少量含む	
	Ⅳg	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	径5cm以内の褐灰色砂質シルトブロックを含む	
	Ⅳh	10YR5/1　褐灰色	シルト		
	Ⅳj	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径3cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロックを含む	
	Ⅳn	10YR5/6　黄褐色	シルト	径5cm以内の明黄褐色砂質シルトブロックを少量含む	
	Ⅳo	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	径1cm以内の明黄褐色砂質シルトブロックを微量含む	

第144図　Ⅳ層整地土（２）

2　若林城廃城後の遺構

若林城の廃城後に構築され機能したとみられる遺構には、畑の痕跡である小溝状遺構群、畝状遺構、溝跡、土坑、集石遺構、ピットがあり、畝状遺構を除いたものに関してはⅣ層面での確認であった。その性格としては、Ⅲ層土壌による近世の畑耕作に関わるものがほとんどとみられ、畑遺構の特質から土壌下面に現われたものであるが、中にはⅢ層の途中から掘り込まれたものが含まれている可能性も否定できない。

（1）小溝状遺構群

小溝状遺構群は畑などに伴う耕作土の底面痕跡であり、幅が狭く浅い複数の小溝が平行して並んで検出される。ほとんどの場合、上部には耕作土であるⅢ層を伴い、溝跡は耕作土の上面にみられる畝とは異なり、耕作土直下層であるⅣ層面で確認される。これらは個々の溝幅や間隔などから耕作土上面にみられる畝間の窪みとは異なり、耕作土下のⅣ層を溝状に掘削することで、土壌の撹拌が目的と推定される。

小溝群はこれまでの若林城跡の調査においては、城内南東部の第６次調査区を除きほぼ全域で確認されていることから、廃城後には城内のかなりの範囲が畑作地となっていたことが判明している。この畑跡については、文献にみられる御薬園に関わる遺構の可能性が高いと考えられている。

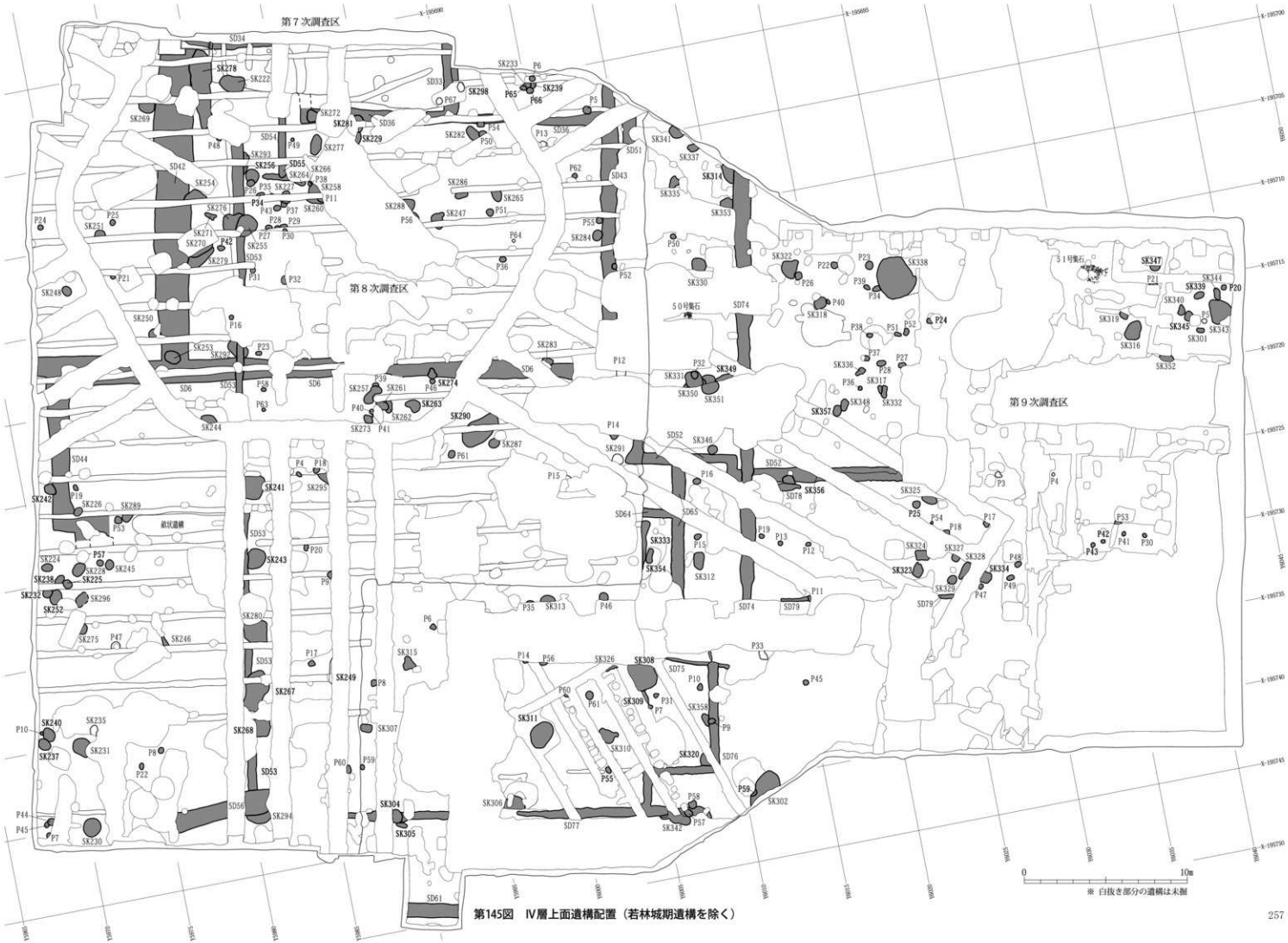
今回の調査では、調査区の西側を中心に東西方向の８群と南北方向の９群の２つのまとまりを確認した。これらの群を構成する個々の小溝は、小溝と重複する大半の遺構より新しいものである。各小溝は平行して並んでおり、軸方向は８群がＮ－81－82°－Ｗ、９群がＮ－８°－Ｅとほぼ直交する配置関係であるが、双方とも建物跡など若林城期の遺構方向とはわずかに異なっている。

小溝状遺構群８群

調査区の西側全域で東西方向の小溝を22条検出した。９群と重複する小溝は全てが新しく、またＳＫ225・226、Ｐ４－６・９よりは古いものである。今回検出した小溝群については、北側において再度第７次調査で検出した小溝を確認したことにより、その南側への広がりと理解し、同じ８群とした。西側は調査区外へ続いており、その方向や溝間の幅からみて、隣接する第５次調査で検出した２群の東側への延びとみられる。また東側の第９次調査部分ではほとんど確認できなかったが、これは耕作土であるⅢ層の残存自体が悪いことから、近代に何らかの理由で表土が削平されたと考えられる以外に、小溝の掘削深度が浅く、Ⅳ層面まで十分に達していないことも理由としてあげられる。また第８次調査の南端においても小溝の残存が悪い地区がある。

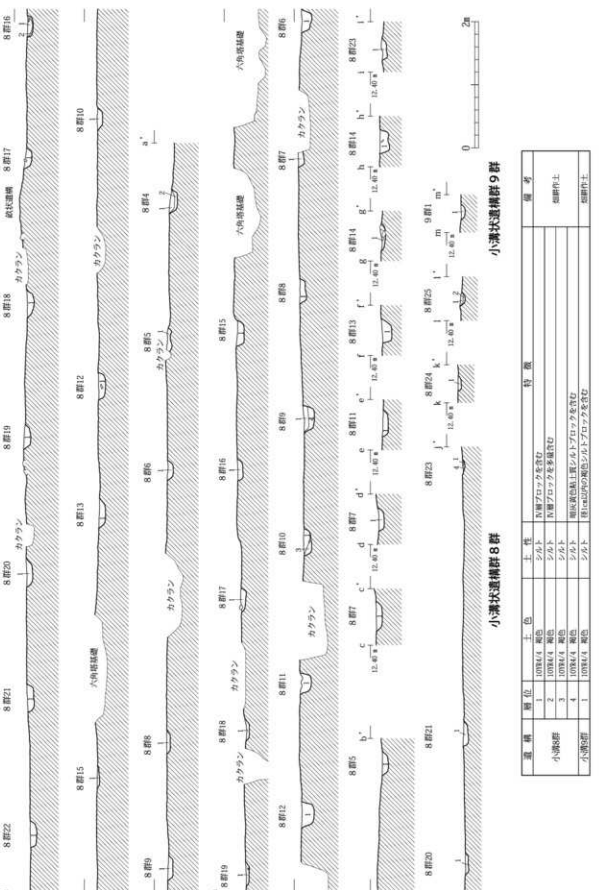
小溝の壁面は概ね急角度で立ち上がり、底面は平坦なものが多い。堆積土は全体で４層に分層できるが、これは混入ブロックの差によるもので、大半のものはⅢ層に類似した層の単一層である。また掘削深度が深いものほど母材となるⅣ層が混入する量が多い。小溝は全てが直線的に延び、残存範囲内での長さは4.2－37mである。小溝の幅は狭いところで0.18mであるが、平均して0.4m程度の幅があり、広い箇所では0.50mもある。深さは0.20－0.60mと差があり、これにより底面標高も12.00－12.28mとばらつきがある。これに対し相互の間隔は1.50－1.80mでほぼ一定し、近接する場所や間を空ける場所が無く、以上のことから掘削は計画的に一時期に行われたと推定される。

第５次および第７次調査分を合わせた一連の小溝群の範囲は、東西68m、南北59m程度と広範囲にわたっており、耕作自体はこれより広範囲に行われていたと考えられる。底面標高を見た場合、西側が低くなる小溝は８群－７・８・10で、調査区の中央部よりやや北側に多く、反対に東側が低いものは13－15・17－19で、中央部に多いことがわかる。底面標高の差は0.04－0.20mあり、これが何の理由によるものかは不明である。また小溝群には８群－８・24などのように、溝が途中で途切れるものがある。これに関しては単に掘削深度が浅いことからみられるものか、あるいはその部分だけを意図的に掘削していない可能性もある。今回の調査では複数の小溝の端部が揃うような状況は確認できず、そこに畑の区画を想定することは出来なかった。



第145図　Ⅳ層上面遺構配置（若林城期遺構を除く）

第146図　小溝状遺構群　８・９群（１）



遺構	層位	土色	土性	特徴	備考
小溝8群	1	10YR4/4 褐色	シルト	h層ブロックを含む	8群内土
	2	10YR4/4 褐色	シルト	h層ブロックを多く含む	
	3	10YR4/4 褐色	シルト		
	4	10YR4/4 褐色	シルト	暗褐色粘土質シルトブロックを含む	
小溝9群	1	10YR4/4 褐色	シルト	明るいシルト質ブロックを含む	8群内土

第147図　小溝状遺構群 8・9群（2）

遺物は調査区の北側から中央部で多く出土しており、軒丸瓦（F20・58）、丸瓦、軒平瓦、平瓦（G39）・刻印平瓦、熨斗瓦、輪違い、面戸瓦、丸瓦か輪違い、軒桟瓦（H118）、陶器（I 33ー39）、磁器、土師質土器の皿（X107ー110）、焼塩壺、土師器（C 1ー3）、須恵器（E 5）、鉄釘（N421・424・425・427・429）、その他の鉄製品、その他の金属製品（N434）がある。N434は一分判金であり、8群ー16の堆積土中から出土した。瓦は出土遺物の大半を占め、特に8群ー6からの出土点数が多く、これは瓦が多く入ったSD36・42を掘削したことによるものとみられる。また同じように8群ー8・9からは土師質土器皿の出土が多く、下部には皿を多く含んだSD42、SK255・276・297が位置している。これらの出土遺物は本来Ⅲ層中には多く含まれず、下位の遺構を撹拌し壊すことで混入したものと考えられる。

小溝状遺構群9群

Y38、X40・41グリッドにおいて、第7次調査で確認した9群ー1・2のうち、1の南側への延びを検出した。SD53、SK293より新しく、SK255・276、小溝群8より古く、北側と南側は撹乱に壊されている。小溝は同じく廃城後の遺構とみられるSD53とほぼ同方向で、北側で重複している。延びは直線的であり、今回の調査区内での確認長は8.40m、幅0.20ー0.40m、深さ0.08mで、底面標高は12.24mである。1と2の小溝の間隔は8群より狭い。壁面は急角度で立ち上がり、底面は平坦である。堆積土はⅢ層に類似した層の単一層である。

9群については第7次調査とあわせてもわずかに2条のみの確認であり、数の少なさから単独の溝跡の可能性もあるが、溝の形状や幅が8群のものと類似するのに加え、この配置が若林城期のものではないとの理由から、小溝群の一部と判断した。南北方向の小溝群については第5次調査でもわずかに確認しているが、いずれも範囲が狭く、東西方向のものと比較して明らかに異なるものである。9群については本来、広範囲なものの一部とみられる一方、局所的に行われた畑耕作によるものの可能性もある。

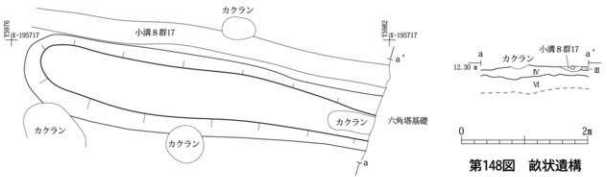
遺物は軒丸瓦、丸瓦・刻印丸瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違い、丸瓦か輪違い、磁器、土師質土器の皿、焼塩壺、土師器、鉄釘（N445）が出土しており、土師質土器の皿を多く含むSD53、SK276の上面に位置することで、その出土点数が多い。

（2）畝状遺構

調査区の西側において、Ⅲ層上面が平坦である中、Ⅳ層が帯状に確認され、後に周囲のⅢ層を除去したところ畝状に高まるのを確認した。Ⅳ層整地土を厚く盛った可能性も考えられたが、この部分が7号礎石建物跡の範囲と完全に重複することから、高まりは廃城後のⅢ層に関わる畑耕作により形成されたもので、この部分は耕作をあまり深く受けていないことがわかった。また、このことは高まる部分のⅣ層が本来の整地土の厚さに近いことを示すものとなった。

高まりはY36・37、X44グリッド付近で東西方向に延び、東西方向の小溝群8に挟まれ、東側の六角堂基礎より東側には確認できない。高まりは直線的に延び、残存長は5.60m、上端幅は0.40ー0.80m、下端幅は0.90ー1.35m、高さはわずかに0.10m程度である。東側から西側にかけて徐々に幅が狭くなっている。方向はN－81°－Wと小溝群8と同じである。高まりの上面ではSB7の礎石跡32ー35・50・51を確認しており、これらは他の礎石跡と比べ耕作をあまり受けないことで残存状態が良好とみられる。

今回の調査で畝状遺構として平面プランを明確に確認したのはこの部分のみであるが、他に調査区南壁面の1号樋跡とSX9の間や、Y44、X45グリッドのSD78付近においてⅣ層が高まる部分を断面観察により確認している。これら畝状となる高まりは、Ⅳ層を人為的に積み上げたものではなく、ほぼ平坦であったⅣ層面での耕作を避けることにより形成されたものであり、この高まり部分がかつての畑の境目や畑以外の耕作されない場所であったことを示すものと言える。



第148図　畝状遺構

（３）溝跡

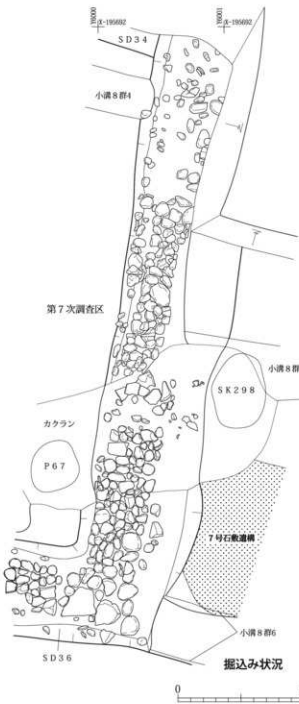
若林城廃城後の近世に使用されたとみられる溝跡は、調査区西側から中央部にかけて計22条を確認した。溝跡には廃城後に新たに造られた溝跡12条に加え、かつての雨落ち溝跡など、若林城に関わる溝跡で、廃城後にそのプランを利用し、掘り直した溝跡が10条ある。後者については先にみたことから、ここでは廃城後に新たに造られた溝跡をみることとする。ＳＤ33については廃城後の溝跡とみられるが、構築にあたっては同時に南側で接続する若林城期のＳＤ36の底面石敷を改修している。

溝跡には重複するものもあり、全て同時期に機能したものではなく、数度の変遷があったとみられる。また同じくⅣ層面で確認した小溝状遺構群はこれら全ての溝跡より新しいものであり、溝跡が埋まった後か、小溝群に伴う耕作の開始時に埋められたと推定される。

廃城後に構築された溝跡のほとんどの方向もまた城の遺構群の軸方向と同じである。方向が異なる溝跡はＳＤ55・56・75の素掘りの３条と、石敷の底面をもつＳＤ33と側石を伴うＳＤ76の２条があるが、他のほとんどの溝においては、数多く残存した若林城期の溝跡を基準に配置した結果、当初から同様の方向を持つこととなったとみられる。

33号溝跡

Y40・41、X39・40グリッドで検出した南北方向の溝跡で、第７次調査で確認している。同じく確認したＳＤ34より新しく、北端は調査区外へ続き、南端はＳＤ36に接続している。形状は直線状であり、軸方向はＮ－10°－Ｅである。残存長は4.06mで、平面確認では掘り方埋土部分や木板や角礫等の構築材は全く確認できない。このことから溝跡は素掘りの構造とみられ



第149図　３３号溝跡

る。溝幅0.80ー0.94m、深さ0.10m、底面標高12.12ー12.25mである。壁面は急角度で立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は単一層で、第７次調査部分の層中には多量の瓦片が廃棄されていた。底面には径20cm以内の円礫や角礫を0.42m程度の幅で敷き詰めており、この石敷幅が本来の溝幅に近いとみられる。ＳＤ33は第７次調査での北端で西側に屈曲している。またＳＤ33とＳＤ36の接続部付近は一連の円礫による石敷が敷かれ、ＳＤ36の他所には角礫を敷き詰めている。両溝の堆積土も共通のものであったことから、ＳＤ33を構築した際に既に存在していたＳＤ36の一部を改修したと考えられる。さらにＳＤ33の底面東側では円礫がみられず、掘り方と石敷との幅があることから、溝跡の東側は後に掘り直し、拡幅している可能性もある。今回遺物は出土していない。

34号溝跡

Y37ー39、X38・39グリッドで検出した東西方向の溝跡で、第７次調査で確認しており、ＳＤ36・42より新しく、東西両端は調査区外へ続いている。形状は直線状で、今回の調査区内での残存長は1.72m、第７次調査でみた軸方向はN－80°－Wと城方向と同様である。素掘りの溝跡とみられ、壁面は垂直に近く立ち上がり、底面状況や深さは不明である。堆積土は２層に分かれ、いずれも砂質である。

遺物は平瓦・刻印平瓦、熨斗瓦、面戸瓦、丸瓦か輪違い、土師器、土師質土器の皿（X25）が出土している。

遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD34	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径5cm以内の円礫を含む	堆積土
	2	2.5Y4/4　オリーブ褐色	砂質土	径5cm以内の黄褐色粘土質シルトブロックを含む	

第150図　３４号溝跡

53号溝跡

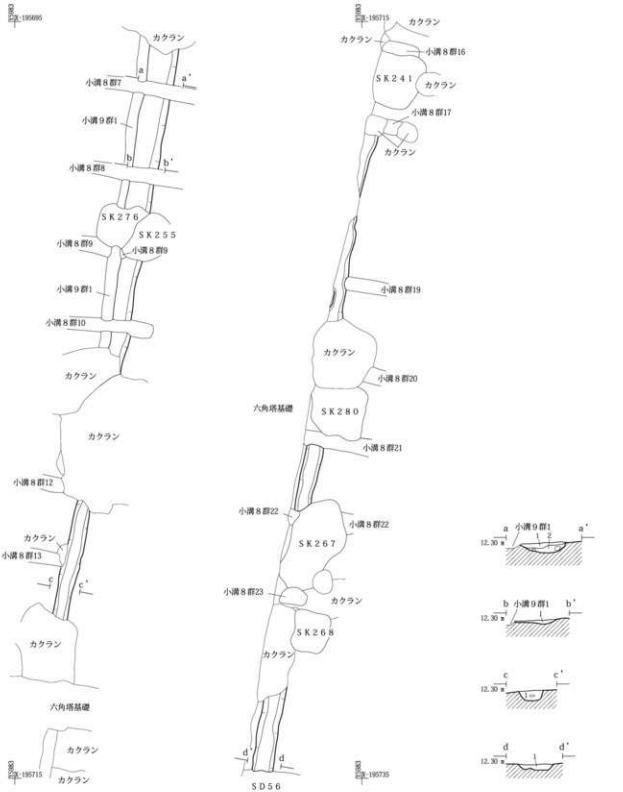
Y37・38、X40ー47グリッドで検出した南北方向に長く延びる溝跡で、ＳＢ７礎石跡36、ＳＤ６などより新しく、ＳＤ56、ＳＫ255、小溝群８、小溝群９－１などより古い。北端を撹乱、南端をＳＤ56に壊されているため延びを確認できなかった。形状は直線状で、残存長37.80m、幅0.17ー0.45m、深さ0.05ー0.15m、軸方向はN－10°－Eである。底面標高は12.05mー12.10mでほぼ水平である。ＳＤ53は廃城後の溝跡の中で最も長い溝跡であり、畑地等を東西に分ける区画を示す溝であったと推測される。壁面は急角度や緩やかな部分など様々で、底面は平坦である。堆積土は２層に分かれる部分もあるが、大半はⅢ層類似層による単一層である。

遺物は平瓦、輪違い、土師質土器の皿、焼塩壺（X28）、土師器が出土している。

54号溝跡

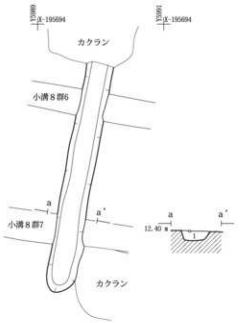
Y38・39、X39・40グリッドで検出した南北方向の溝跡で、ＳＢ６礎石跡３、ＳＤ55より新しく、小溝群８－６・７より古く、北端は撹乱に壊され続きを確認できなかった。形状は直線状で、残存長3.70m、幅0.40ー0.50m、深さ0.15m、軸方向はN－10°－Eである。底面標高は12.15mである。壁面はやや急角度で立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は炭化物を含む単一層である。

遺物は磁器（Ｊ４）、土師質土器の皿（X30ー34）、焼塩壺（X29）、土師器、鉄釘（N276）が出土しており、土師質土器の出土点数が多い。他の溝跡では瓦が多く出土するのに対し、ＳＤ54からは出土していない。

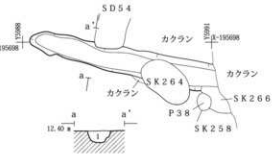


遺　構	層　位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD53	1	10YR4/4　褐色	シルト	Ⅳ層ブロックを含む	堆積土
	2	10YR3/4　暗褐色	シルト	径5cm以内のⅣ層ブロックを多量含む	

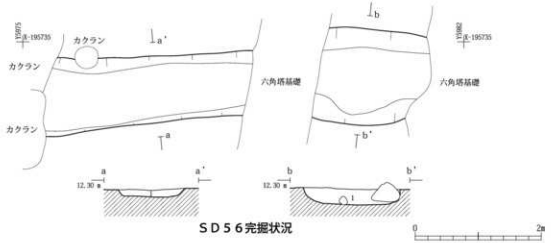
第151図　５３号溝跡



SD54完掘状況



SD55完掘状況



SD56完掘状況

遺　構	層　位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD54	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径10cm以内の円礫を少量含む	堆積土
SD55	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	径5cm以内のⅣ層ブロックを含む	堆積土
SD56	1	10YR4/4　褐色	シルト	径5cm以内のⅣ層ブロックを含む	堆積土

第152図　54・55・56号溝跡

55号溝跡

Y38、X40グリッドで検出した東西方向の溝跡で、ＳＢ６礎石跡13・14より新しく、ＳＤ54、ＳＫ264、ＳＫ266より古く、東端は撹乱に壊され続きを確認できなかった。形状は直線状で、残存長3.10ｍ、幅0.30ー0.45ｍ、深さ0.20ｍ、軸方向はＮ－77°－Ｗで若林城期の軸方向とはわずかに異なっている。底面標高は12.05ｍである。壁面は垂直に近く、底面は平坦である。堆積土はブロック土の単一層である。遺物は出土していない。

56号溝跡

Y36・37、X47・48グリッドで検出した東西方向の溝跡で、ＳＢ８礎石跡11、ＳＤ53、ＳＫ294より新しく、東端は六角塔基礎、西端は撹乱に壊され続きを確認できなかった。形状は直線状で、残存長6.10ｍ、幅1.00ー1.55ｍ、深さ0.10ー0.25ｍ、軸方向はＮ－87°－Ｅで若林城期遺構の軸方向とは大きく異なっている。底面標高は11.90ー

12.00mで、底面はほぼ水平である。壁面はやや急角度で立ち上がり、底面は幅があり平坦である。堆積土はブロック土の単一層である。東側で径50cm以内の円礫を確認した。

遺物は平瓦、熨斗瓦、輪違い、丸瓦か輪違いが出土している。

74号溝跡

Y43・44 、X41－46グリッドで検出した南北方向の溝跡で、ＳＡ３、ＳＤ52・60・69、ＳＫ314・353より新しく、北端は調査区外へ続き、南端は撹乱に壊され続きを確認できない。ＳＤ74は第４次調査のＳＤ２に対応し、今回の調査ではⅣ層上面で確認しているが、本来はⅢ層上面で確認される遺構と考えられる。形状は直線状で、残存長26.35m、幅0.52－1.13m、深さ0.26－0.32m、軸方向はＮ－10°－Ｅである。底面標高は11.82－11.86mで、底面はほぼ水平である。溝跡の幅は北部で幅があり、壁面は緩やかに立ち上がり、底面は北部から中央部では平坦だが、南部では中央部が深くなっている。堆積土は２層に分かれ、上層はⅢ層類似層で、下層はグライ化している。北部から中央部では下層が底面付近のみに堆積している部分もあり、溝跡は掘り直されている可能性もある。

遺物は丸瓦（Ｆ63）、平瓦、熨斗瓦、丸瓦か輪違い、磁器（Ｊ40）、土師器、鉄釘が出土している。

75号溝跡

Y42・43、X47グリッドで検出した東西方向の溝跡で、ＳＤ63より古く、ＳＤ76より新しい。東端と西端のみならず、北壁側全体が撹乱で壊され全体を確認できなかった。形状は直線状で、残存長は3.96mである。壁面はやや急角度で立ち上がり、底面は残存していない。南壁面での軸方向はＮ－71°－Ｗで、城方向とは大きく異なっている。堆積土はブロック土の単一層である。

遺物は丸瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違い、面戸瓦が出土している。

76号溝跡

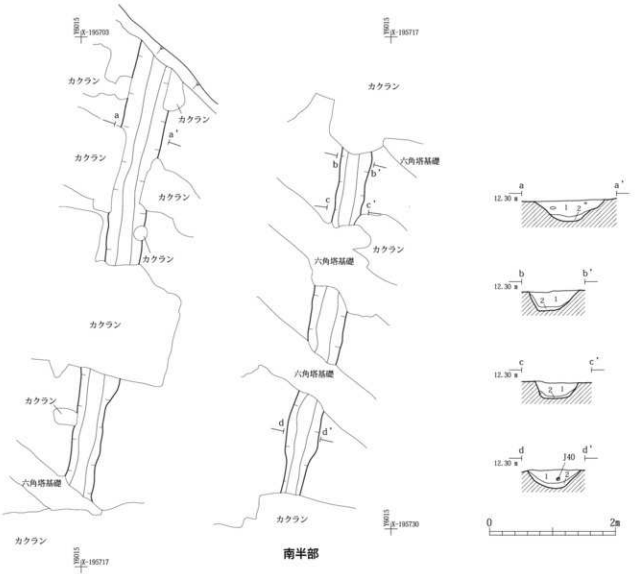
Y41・42、X47－49グリッドで検出した溝跡で、ＳＢ９礎石跡22・23、ＳＤ63・75、ＳＫ358などより新しく、ＳＫ320、Ｐ９より古い。南端はＳＤ77に接続し、北端は撹乱に壊され続きを確認できなかったが、その北側には同様の構造を持つ溝跡は確認できず、ＳＤ75や東側のＳＸ11と関係し、これらと接続する可能性もある。形状は２か所で鉤型に屈曲し、残存長は北側南北辺が7.4m、東西辺が4.1m、南側南北辺が2.1mで全体長は13.7mある。軸方向は南北方向がＮ－10－11°－Ｅである。

溝自体はＳＢ９と完全に重複することから廃城後に構築されたことは明らかであるが、他の溝跡にはあまり無い構造が確認できる。溝構築時の下部の状況をみると、各南北辺の壁面側には径40cm以内の円礫や角礫が１段立て並べられている。円礫は北側南北辺では礫の隙間が多く、やや疎らな印象を受けるが、南側では密着し列状に並んでいる。ただし北側の状況については後に改変されている可能性もある。この円礫は側石とみられ、１段目は横目地が通り、掘り方の深さの半分程度の高さに止まる部分もあるが、当初は数段積まれていた可能性もある。これに対し中央の東西辺部分の壁面に円礫は確認できず、掘り方埋土も確認できなかった。東西辺部分についても後に改変を受けている可能性が高い。

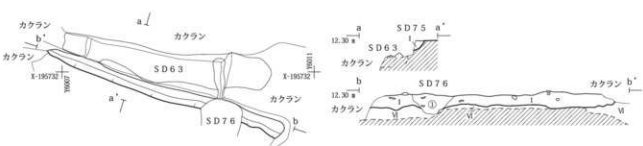
底面は掘り方埋土を入れたのみのもので、石敷きは見られない。掘り方埋土には若林城期の瓦片を含んでおり、特に北側の南北辺部分には側石の並びの一部に丸瓦の破片を立てた状態で埋設している。またこの近くの底面中央でも丸瓦を立てて埋設しており、何らかの意図を持ち設置した溝内の構造とみられる。

当初の溝跡の掘り方幅は0.45－0.62mで、東西側石間の距離が0.1m程度であることから、溝幅は同程度とみられ、深さは0.08－0.22mである。底面標高は12.00－12.10mで、底面はほぼ水平である。

その後、溝内の上部全体には他の溝跡には見られないほど、廃棄された多量の瓦片を詰め、埋められている。北側の南北辺北端部には円礫や角礫を多く詰めているが瓦片は少ない。また東西辺には平瓦や熨斗瓦片を多く入れ、特に西半部の南壁側に集中している。南側の南北辺では上部に平瓦や熨斗瓦片が多いのに対し、下部には丸瓦を多



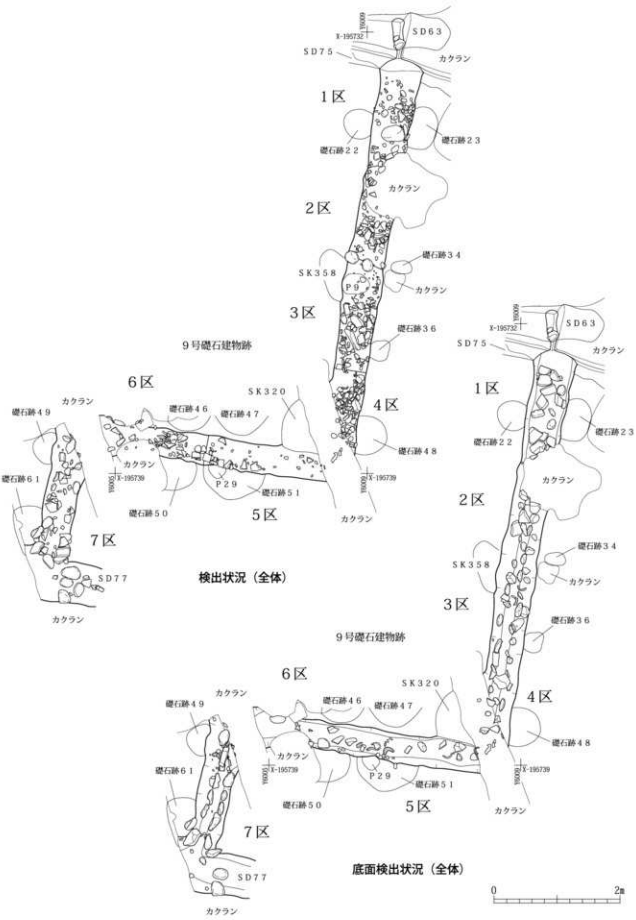
SD74完掘状況



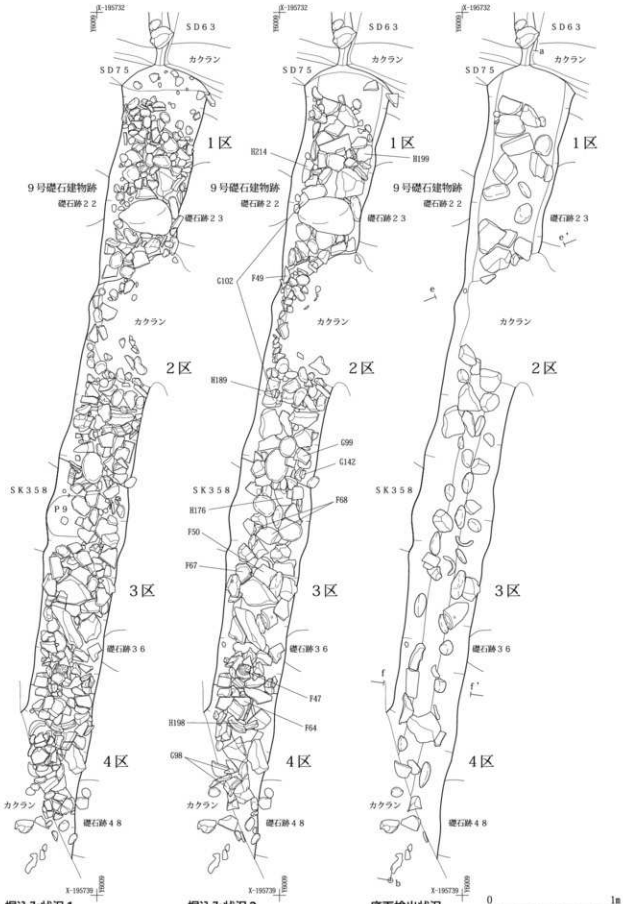
SD75掘込み状況

遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD74	1	10YR4/4　褐色	シルト	明黄橙色シルトブロック、径10cm以内の円礫を微量含む	堆積土
	2	10YR4/6　褐色	シルト	黒褐色シルトブロックを微量含む	
SD75	1	10YR5/6　黄褐色	砂質シルト	径1cm以内の褐色砂質シルト・黒褐色砂質土ブロック、径5cm以内の円礫を少量含む	堆積土
SD76	①	10YR4/4　褐色	シルト	径40cm以内の円礫を含む（SD76の１層）	堆積土

第153図　74・75号溝跡

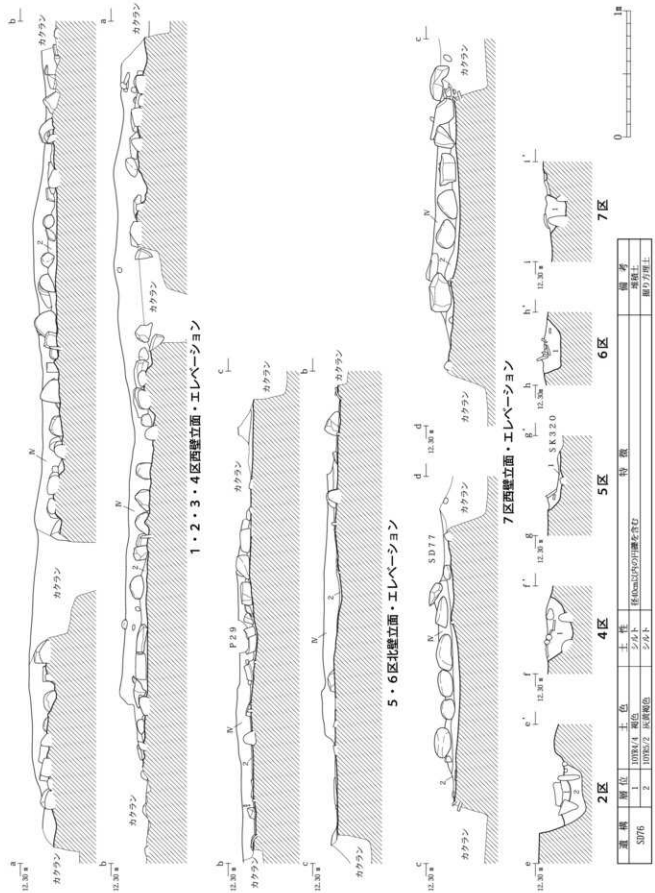


第154図　７６号溝跡（１）

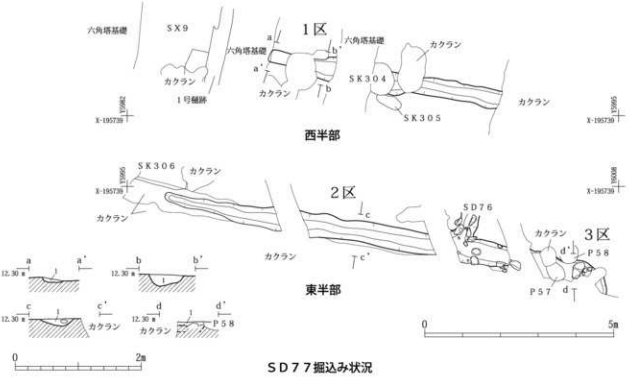


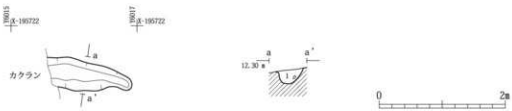
第155図　７６号溝跡（２）

第156図　７６号溝跡（３）



第157図　７６号溝跡（４）





遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD77	1	10YR4/4　褐色	シルト	径40cm以内の円礫を含む	堆積土
SD78	1	10YR4/4　褐色	シルト		堆積土
SD79	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト		堆積土

第158図　７７・７８・７９号溝跡

く詰めている状況がうかがえる。これら詰められた瓦片は、形状が残るものは無く、ほとんどが大きさの揃った破片であることから、溝内に単に廃棄したものでは無く、瓦を打ち欠き、大きさを揃えたものを入れることで溝全体を暗渠状とした可能性がある。

溝跡は途中で改修された可能性が高いが、他にあまり見られない円礫による側石や掘り方底面に埋められた丸瓦、そして瓦片の充填等を考慮した場合、これが溝本来の一体的な構造と理解することもできる。またＳＤ76は廃城後に構築された他の簡易な溝跡とは構造のみならず、鉤型に屈曲する特徴的な配置を持ち、それは耕作に伴うものではなく、あたかも建物に沿い配置された溝を連想させる。溝跡の立地は大型建物であるＳＢ９の東部にあたる。この場所は建物を建設するにあたり事前の整地作業を入念に行った場所であり、痕跡は確認できなかったが、廃城に伴いＳＢ９が移築された後、この溝跡の西側に何らかの建築物が造られたことも十分考えられる。

遺物は軒丸瓦（Ｆ46－50）、丸瓦（Ｆ64－69・刻印丸瓦）、軒平瓦（Ｇ97－102）、平瓦（刻印平瓦）、熨斗瓦（Ｈ141－144）・刻印熨斗瓦、輪違い、丸瓦か輪違い、面戸瓦（Ｈ187－190）、鬼瓦（Ｈ198・199）、瓦質土器（Ｉ116）、土師質土器の皿（Ｘ126）、鉄釘（Ｎ559）、銅製品（Ｎ560）等が出土しており、中でも平瓦、丸瓦、熨斗瓦の出土点数が多い。

77号溝跡

Ｙ38－42、Ｘ48・49グリッドで検出した東西方向の溝跡で、ＳＫ342より新しく、ＳＫ304、Ｐ57、Ｐ58より古い。東部でＳＤ76が北側から接続し、東端と西端は撹乱や穴角塔基礎に壊され続きを確認できなかった。ＳＤ76との接続部分より東側の確認面では瓦片や円礫、角礫が含まれるのを確認した。形状は東端が南側へ屈曲するとみられるが全体に直線状で、残存長22.35m、軸方向はＮ－80°－Ｗである。構造は掘り方埋土や構築材を伴わない素掘りによるものとみられ、壁面はやや緩やかに立ち上がり、底面は中央部が深くほぼ水平である。堆積土中には径40cm以内の円礫をわずかに含むが基本的に単一層である。溝幅0.25－0.65m、深さ0.15－0.35m、底面標高11.75－11.95mである。溝跡は西側でＳＤ53と接続する可能性もあるが定かではない。

遺物は丸瓦、平瓦、熨斗瓦、丸瓦か輪違いが出土している。

78号溝跡

Ｙ44、Ｘ45グリッドで検出した東西方向の溝跡とみられ、ＳＫ356より新しく、西端は撹乱で壊され続きを確認できなかった。残存部分での形状は直線状で、残存長1.32m、幅0.20－0.50m、深さ0.26m、底面標高11.94m、軸方向はＮ－79°－Ｗである。壁面はやや急角度で立ち上がり、底面は平坦ではない。堆積土はブロック土の単一層である。北側にはＳＤ52が並行し近接するが、同時期に存在したものではないとみられる。遺物は土師器が出土している。

79号溝跡

Ｙ43－45、Ｘ46・47グリッドで検出した東西方向の溝跡で、Ｐ11より古く、中央と東端は撹乱を受けて続きを確認できなかった。形状は直線状で、残存長10.64m、幅0.16－0.28m、深さ0.06－0.18m、底面標高11.94－12.00m、軸方向はＮ－79°－Ｗである。壁面は直立気味に立ち上がり、底面は平坦でほぼ水平である。堆積土はブロック土の単一層である。溝跡が位置する調査区東側は後世の削平が著しく、廃城後に造られた溝跡は他に確認できない。遺物は出土していない。

（4）土坑

Ⅳ層上面では調査区のほぼ全域で土坑を127基検出したが、東側は撹乱によりⅣ層面が残存しない部分が多く、この地区での土坑の確認は少ない反面、Ｙ38・39、Ｘ40・41グリッド付近やＹ49、Ｘ44グリッド付近のように集中している場所がみられる。土坑の形状は大半が不整楕円形や楕円形であり、大きなものではＳＫ278の長軸4.86m、深い

ものではＳＫ302の1.59mというものがあり、平均して長軸0.60m前後、深さ0.20m以内程度のものが多い。土坑中には礫や瓦が多量に含まれるものがあり、その出土状況からこれらの土坑は、耕作の障害となる礫や瓦を穴を掘り廃棄した痕跡と考えられるほか、礫などが混入しないものについては耕作土底面の窪みが残ったものとみられる。ただし、中には廃城時に不要となった瓦を溜めたものが存在する可能性もあるとみられる。またこれらの土坑に入る礫や瓦はあまり混在しないことから、双方が個別に廃棄されていた可能性も考えられる。礫を廃棄したとみられる土坑は５基、瓦を廃棄したとみられる土坑は７基あり、いずれも調査区西半部で多く確認している。この他には土師質土器を多く含んだ土坑を２基確認しているが、そのうち1基は何らかの意図を持って埋設したものである。

224号土坑

Y35、X44グリッドで検出し、ＳＤ48ａより新しい。形状は楕円形で、規模は長軸0.68m、短軸0.50m、深さ0.15mで、主軸方向はＮ－79°－Ｗである。壁面は垂直に近く、底面は平坦である。堆積土は２層に分かれ、１層の上部に多量の瓦を含んでいる。遺物は丸瓦、平瓦（G35）、熨斗瓦、輪違い、丸瓦か輪違いが出土している。瓦片は大型のものがあり、瓦を廃棄するために掘られた土坑と考えられる。

225号土坑

Y35、X44・45グリッドで検出し、小溝群８－19、ＳＫ238より新しい。形状は不整楕円形で、規模は長軸0.61m、短軸0.55m、深さ0.22mで、主軸方向はＮ－21°－Ｗである。壁面は急角度で立ち上がり、底面は南側が擂鉢状に深くなる。堆積土は２層に分かれ、２層はブロック土を多量に含んでいる。遺物は平瓦、丸瓦か輪違い、瓦質土器（I26）、土師質土器皿、鉄釘が出土している。

226号土坑

Y35、X44グリッドで検出し、小溝群８－17、ＳＢ７礎石跡48、ＳＤ44より新しい。形状は楕円形で、規模は長軸0.61m、短軸0.45m、深さ0.11mで、主軸方向はＮ－55°－Ｅである。壁面は急角度で立ち上がり、底面は東側が一部深くなる。堆積土は単一層で、上部に径10cm以内の円礫が多く含まれている。遺物は丸瓦、平瓦、熨斗瓦、土師質土器皿、鉄釘が出土している。

227号土坑

Y38、X40グリッドで検出し、Ｐ37より新しく、小溝群８－８より古い。形状は不整楕円形とみられ、残存規模は長軸0.77m、短軸0.65m、深さ0.21mである。壁面は急角度で立ち上がり、底面には凹凸がある。堆積土はブロック土の単一層である。遺物は出土していない。

228号土坑

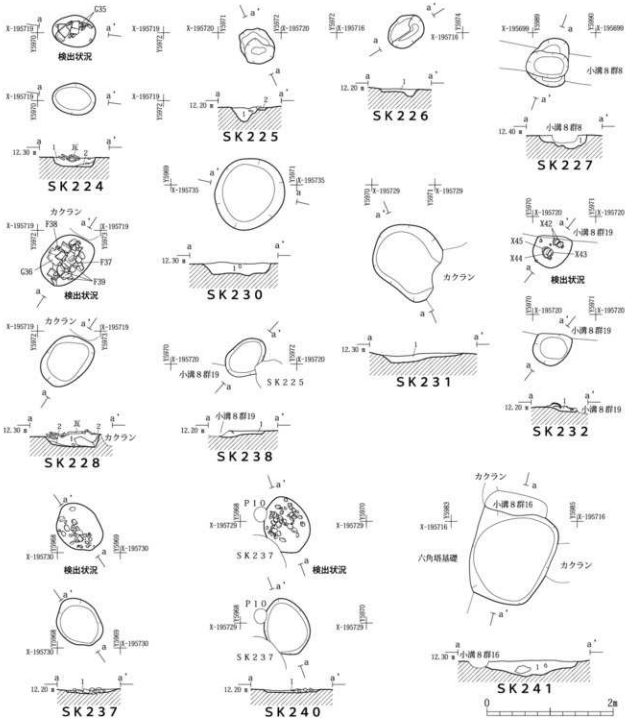
Y35、X44グリッドで検出し、ＳＤ44、ＳＤ48aより新しい。形状は不整楕円形で、規模は長軸0.90m、短軸0.66m、深さ0.23mで、主軸方向はＮ－44°－Ｅである。壁面は北側が急角度で立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は２層に分かれ、１層の上部に多量の瓦片を含んでいる。遺物は丸瓦（F37－39）、平瓦（G36）、熨斗瓦、輪違い、丸瓦か輪違いが出土しており、残存が比較的良好で丸瓦が多い。瓦を廃棄するために掘られた土坑と考えられる。

230号土坑

Y34・35、X47・48グリッドで検出し、他遺構との重複関係はない。形状は円形で、規模は径1.16m、深さ0.20mである。壁面は急角度で立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は単一層である。遺物は平瓦、丸瓦か輪違いが出土している。

231号土坑

Y35、X46・47グリッドで検出し、ＳＢ２礎石跡66より新しく、東側を撹乱に壊されているが、形状は楕円形とみられる。残存規模は長軸1.28m、短軸1.10m、深さ0.14mで、主軸方向はＮ－55°－Ｗである。壁面は緩やかに立ち



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SK224	1	10YR4/4　褐色	シルト	径1cm以内の炭化物を少量含む	—
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	径1cm以内の炭化物を少量含む	—
SK225	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径1cm以内のIV層ブロックを含む	—
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径3cm以内の褐色シルトブロックを多量含む	—
SK226	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径10cm以内のIV層を含む	—
SK227	1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	径1cm以内のIV層ブロックを多量含む	—
SK228	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径1cm以内の炭化物を少量含む	—
	2	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	径1cm以内のオリーブ褐色シルトブロック含む	—
SK230	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	径1cm以内のIV層ブロックを多量含む	—
SK231	1	10YR4/4　褐色	シルト	径5cm以内のIV層ブロックを少量含む	—
SK232	1	10YR4/4　褐色	シルト	径3cm以内の黄灰色シルトブロック含む	—
SK237	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	径5cm以内の褐色シルトブロックを含む	—
SK238	1	10YR4/4　褐色	シルト	径5cm以内のにぶい黄褐色シルトブロックを多量含む	—
SK240	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	径10cm以内の褐色シルトブロックを含む	—
SK241	1	10YR4/4　褐色	シルト	径10cm以内のIV層ブロックを多量含む	—

第159図　土坑（1）

上がり、底面は南側に傾斜している。堆積土はⅢ層類似層の単一層である。遺物は出土していない。

232号土坑

Y35、X45グリッドで検出し、ＳＫ252より新しく、小溝群８－19より古い。小溝群８－19に壊されているが、形状は円径か楕円形とみられる。残存規模は長軸0.64m、短軸0.53m、深さ0.08mと浅い。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は炭化物を多量に含む単一層である。遺物は土師質土器皿（Ｘ42－45）が出土している。皿は残存状態がよく、北側では１点が正立した状態で出土し、南側では口縁部を下に向け３点が重なった状態で出土している。これらの口縁部には煤が付着することから灯明皿とみられ、何らかの意図を持って埋められたとみられる。

237号土坑

Y34、X46グリッドで検出し、ＳＫ240より新しい。形状は楕円形で、規模は長軸0.82m、短軸0.65m、深さは0.07mと浅く、主軸方向はＮ－38°－Ｗである。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は単一層で、南西側の上部に径10cm程度の円礫を多く含むことから、礎を廃棄した土坑とみられる。遺物は出土していない。

238号土坑

Y35、X44・45グリッドで検出し、小溝群８－19、ＳＫ225より古い。形状は楕円形で、残存規模は長軸0.72m、短軸0.54m、深さ0.10mで、主軸方向はＮ－51°－Ｅである。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は南西側が深い。堆積土は炭化物を含む単一層である。遺物は煤が付着した土師質土器皿（Ｘ46）が出土している。

240号土坑

Y34、X46グリッドで検出し、ＳＫ237、Ｐ10より古い。形状は楕円形で、規模は長軸0.92m、短軸0.71m、深さは0.06mと浅く、主軸方向はＮ－18°－Ｗである。残存が悪く立ち上がりは不明で、底面は平坦である。堆積土はブロック土による単一層で、上部で径10cm以内の円礫を多量に確認しており、礎を廃棄した土坑とみられる。遺物は出土していない。

241号土坑

Y37、X44グリッドで検出し、小溝群８－16より古く、西側を六角塔基礎に、東側を撹乱に壊されているため形状は不明である。残存規模は長軸1.48m、短軸1.26m、深さ0.25mである。壁面の立ち上がりは不明で、底面は中央部が深くなっている。堆積土は単一層で、中央下部に径30cm程度の角礫が１点混入している。遺物は丸瓦か輪違いが出土している。

242号土坑

Y35、X43グリッドで検出し、ＳＤ44より新しい。形状は不整楕円形で、規模は長軸0.81m、短軸0.62m、深さ0.39mである。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は北側に偏り狭い。堆積土は単一層である。遺物は平瓦・刻印平瓦、熨斗瓦、丸瓦か輪違いがあるが、破片が多く、他に鉄釘が出土している。瓦を廃棄した土坑とみられる。

243号土坑

Y37、X45グリッドで検出し、ＳＤ53より古い。形状は不整形で、残存規模は長軸1.40m、短軸1.10m、深さ0.29mである。壁面は北側が緩やかなのに対し、南側は急角度で立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は２層に分かれ、いずれもブロック土である。遺物は平瓦、熨斗瓦、輪違い（H81）、丸瓦か輪違い、土師質土器皿、土師器のほか、鉄釘（N364・378）が多量に出土している。

244号土坑

Y37、X43グリッドで検出し、南側を六角塔基礎に壊され形状は不明である。残存規模は長軸1.02m、短軸0.76m、深さ0.14mである。壁面は直立気味に立ち上がり、底面は平坦である。堆積土はⅢ層類似層の単一層である。遺物は平瓦、鉄釘（N381）が出土している。

245号土坑

Y35、X44グリッドで検出し、ＳＤ48b、８号石敷遺構より新しい。形状は楕円形で、規模は長軸0.63m、短軸0.51m、深さは0.07mと浅く、主軸方向はＮ－16°－Ｅである。残存が悪く壁面の立ち上がりは不明で、底面はほぼ平坦である。堆積土は径10cm以内の円礫を含む単一層である。遺物は出土していない。

246号土坑

Y36、X45・46グリッドで検出し、ＳＢ８礎石跡１より新しく、小溝群８－21より古く、北側と南側を撹乱で壊されているため形状は不明である。残存規模は長軸0.68m、短軸0.30m、深さは0.10mと浅く、主軸方向はＮ－14°－Ｗである。壁面の立ち上がりは不明で、底面は中央部がやや深くなっている。堆積土は２層に分かれ、いずれも砂質シルトである。遺物は平瓦、丸瓦か輪違いが出土している。

247号土坑

Y40、X41グリッドで検出し、ＳＢ６礎石跡25より新しく、小溝群８－９より古い。形状は不整形で、規模は長軸0.99m、短軸0.70m、深さ0.26mである。底面は平坦で、南側と北東側が一部ピット状に深くなっている。壁面は平坦部分では不明であるが、ピット状部分は緩やかである。堆積土は３層に分かれ、その状況から２層は柱痕跡の可能性もある。遺物は土師器が出土している。

248号土坑

Y35・36、X41グリッドで検出した。他遺構との重複関係はない。形状は円形に近い楕円形で、規模は長軸0.64m、短軸0.52m、深さ0.22mで、主軸方向はＮ－30°－Ｗである。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は狭い。堆積土は２層に分かれ、１層は薄く、２層が堆積土の大半を占める。遺物は出土していない。

249号土坑

Y38、X46グリッドで検出し、１号樋跡より新しく、東側を六角塔基礎で壊されているため、形状や壁面、底面の状況は不明である。残存規模は長軸1.56m、短軸0.10m、深さ0.13mである。堆積土はブロック土の単一層である。掘込んでいないことから、遺物は出土していない。

250号土坑

Y36・37、X42グリッドで検出し、ＳＤ42より新しく、小溝群８－12より古く、東側を撹乱に壊されている。形状は不整楕円形とみられ、残存規模は長軸0.93m、短軸0.64m、深さ0.17mで、主軸方向はＮ－35°－Ｗである。壁面は急角度で立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は２層に分かれ、２層はブロック土を多く含む。遺物は平瓦、熨斗瓦、面戸瓦（H104）が出土している。

251号土坑

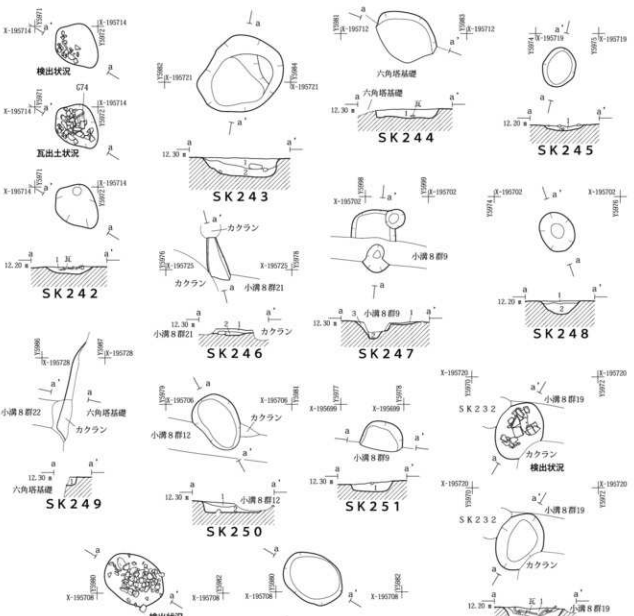
Y36、X40グリッドで検出し、ＳＤ40より新しく、小溝群８－９より古く、形状は不明である。残存規模は長軸0.68m、短軸0.45m、深さ0.16mである。壁面は急角度で立ち上がり、底面は平坦である。堆積土はⅢ層類似層の単一層である。遺物は出土していない。

252号土坑

Y35、X45グリッドで検出し、ＳＫ232より古く、東側を撹乱で壊されている。形状は楕円形で、残存規模は長軸0.95m、短軸0.73m、深さ0.25mで、主軸方向はＮ－31°－Ｅである。壁面は急角度で立ち上がり、底面は平坦で壁面との境は明瞭である。堆積土は２層に分かれ、１層の底面からは瓦が多く出土している。遺物は丸瓦（F40）、平瓦、熨斗瓦、輪違い、丸瓦か輪違い、土師質土器皿が出土している。瓦が多量に出土しており、瓦を廃棄した土坑とみられる。

253号土坑

Y37、X42 グリッドで検出し、ＳＤ42より新しい。形状は楕円形で、規模は長軸1.00m、短軸0.74m、深さ0.08mで、



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SK242	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	径1cm以内の黄褐色シルトブロックを含む	—
SK243	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径10cm以内の褐色粘土質シルトブロックを含む	—
	2	10YR4/2　灰黄褐色	砂質シルト	径5cm以内の褐色粘土質シルトブロックを含む	—
SK244	1	10YR4/4　褐色	シルト	径1cm以内の炭化物を含む	—
SK245	1	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	径10cm以内の円礫を含む	—
SK246	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径5cm以内の円礫を含む	—
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	褐色砂質シルトブロックを含む	—
SK247	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト		—
	2	10YR3/3　暗褐色	シルト		—
	3	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径1cm以内のにぶい黄褐色粘土質シルトブロックを含む	—
SK248	1	10YR4/4　褐色	シルト	径1cm以内のオリーブ褐色シルトブロックを多量含む	—
	2	10YR4/4　褐色	シルト	径10cm以内のⅣ層ブロックを含む	—
SK249	1	10YR4/4　褐色	シルト	径10cm以内の黒褐色シルトブロックを含む	—
SK250	1	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	径1cm以内の炭化物を微量含む	—
	2	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	径10cm以内の黄褐色粘土質シルトブロックを含む	—
SK251	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径3cm以内の円礫を含む	—
SK252	1	10YR4/4　褐色	シルト	径1cm以内のにぶい黄褐色ブロックを多量含む	—
	2	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	径1cm以内のにぶい黄褐色シルトブロックを含む	—
SK253	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径10cm以内の円礫を多量含む	—

第160図　土坑（２）

主軸方向はN－60°－Wである。残存が悪く壁面の立ち上がりは不明で、底面は平坦である。堆積土は単一層で、上部には径10cm程度の円礫が多く、中には径20cm以内の円礫や角礫も少量含まれ、礫をまとめて廃棄した土坑とみられる。遺物は軒丸瓦（F18）、丸瓦、平瓦、熨斗瓦・刻印熨斗瓦、輪違い、丸瓦か輪違い、面戸瓦、鉄釘が出土している。

254号土坑

Y37、X40グリッドで検出し、SD42より新しく、小溝群8－8より古く、南側を壊されているため形状は不明である。残存規模は長軸1.41m、短軸0.63m、深さは0.05mと浅い。残存が悪く壁面の立ち上がりは不明で、底面は平坦である。堆積土はブロック土の単一層である。遺物は出土していない。

255号土坑

Y38、X41グリッドで検出し、SD53 、SK276より新しく、小溝群8－9より古く、南側を撹乱に壊されているため形状は不明である。残存規模は長軸1.45m、短軸1.26m、深さ0.22mで、主軸方向はN－50°－Eである。壁面は北側では緩やかで、南側では急角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は単一層で、他の遺構に比べ黒色気味である。土師質土器の小破片を多量に含み、これらを廃棄した土坑とみられる。遺物は丸瓦、平瓦、丸瓦か輪違い、陶器（I27）、土師質土器皿（X47－54）、焼塩壷（X55・56）、土師器、鉄釘、その他鉄製品（N399）が出土している。SK255の近くでは若林城期の遺構とみられるSK297から土師質土器が多量に出土している。これらは残存状況が良好で、重なった状態で出土しているが、SK255では小片のみである。

256号土坑

Y38,X40グリッドで検出し、P26より古い。形状はほぼ円形で、残存規模は長軸0.91m,短軸0.82m,深さ0.20mである。壁面は比較的急角度で立ち上がり、底面は北側が一段下がっている。堆積土は2層に分かれる。遺物は土師質土器皿が出土している。

260号土坑

Y39、X40・41グリッドで検出し、1号樋跡より新しく、SK258、P11、小溝群8－8より古く、東側を撹乱で壊され形状は不明である。残存規模は長軸1.07m、短軸0.55m、深さ0.16mである。残存が悪く壁面の立ち上がりは不明で、底面はほぼ平坦である。堆積土は単一層である。遺物は出土していない。

261号土坑

Y39、X43グリッドで検出し、SK262 より新しく、小溝群8－14より古く、西側を撹乱で壊されている。形状は不整楕円形とみられ、残存規模は長軸0.83m、短軸0.51m、深さ0.07mで浅く、主軸方向はN－54°－Wである。壁面は急角度で立ち上がるとみられ、底面は平坦である。堆積土は単一層である。遺物は出土していない。

262号土坑

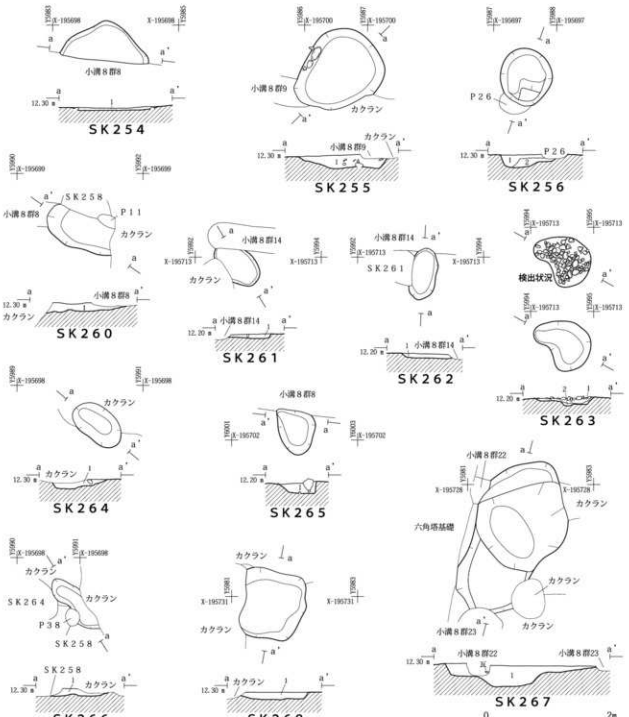
Y39、X43グリッドで検出し、小溝群8－14、SK261より古い。形状は楕円形で、残存規模は長軸0.83m、短軸0.39m、深さは0.06mと浅く、主軸方向はN－10°－Eある。残存が悪く立ち上がりは不明で、底面は平坦である。堆積土はブロック土の単一層で、大型のブロックを含んでいる。遺物は出土していない。

263号土坑

Y39、X43グリッドで検出し、他遺構との重複関係はない。形状は不整形で、規模は長軸0.94m、短軸0.74m、深さ0.12mである。残存が悪く壁面の立ち上がりは不明で、底面は南東側が深くなっている。堆積土は2層に分かれ、1層の上部には径20cm以内の円礫を多量に含み、礫を廃棄した土坑とみられる。遺物は平瓦、熨斗瓦が出土している。

264号土坑

Y38、X40グリッドで検出し、SB6礎石跡14、SD55、SK266より新しく、撹乱に壊されている。形状は不整



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SK254	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径1cm以内の褐色シルトブロックを含む	—
SK255	1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	径5cm以内のⅣ層ブロックを含む	—
SK256	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径3cm以内の円礫を含む	—
	2	10YR5/4　暗褐色	シルト	にぶい黄褐色シルトブロックを多量含む	—
SK260	1	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	径1cm以内のにぶい黄褐色シルトを含む	—
SK261	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径5cm以内の灰黄褐色シルトブロックを含む	—
SK262	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径20cm以内の暗褐色シルトブロックを含む	—
SK263	1	10YR4/4　褐色	シルト	径20cm以内の円礫を多量含む	—
	2	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト	暗褐色シルトブロックを含む	—
SK264	1	10YR4/2　灰黄褐色	砂質シルト	径10cm以内のⅣ層ブロックを含む	—
SK265	1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	径5cm以内のⅣ層ブロックを含む	—
SK266	1	10YR4/2　灰黄褐色	砂質シルト	径1cm以内の炭化物を多量含む	—
SK267	1	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	径1cm以内の暗褐色シルトブロックを少量含む	—
SK268	1	10YR4/4　褐色	シルト	径1cm以内の暗褐色シルトブロックを少量含む	—

第161図　土坑（３）

楕円形とみられ、残存規模は長軸0.87m、短軸0.51m、深さは0.09mと浅く、主軸方向はN－48°－Wである。壁面は北側では急角度、南側では緩やかに立ち上がるとみられ、底面は北西側に傾いている。堆積土はブロック土の単一層である。遺物は土師質土器皿が出土している。

265号土坑

Y41、X41グリッドで検出し、小溝群８－８より古く、北側を壊され形状は不明である。残存規模は長軸0.70m、短軸0.59m、深さ0.18mで、主軸方向はN－4°－Wである。壁面は東側では緩やか、西側ではほぼ垂直気味に立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は単一層である。遺物は出土していない。

266号土坑

Y39、X40グリッドで検出し、ＳＢ６礎石跡14より新しく、ＳＫ264、P38より古く、北側を撹乱に壊され形状は不明である。残存規模は長軸1.07m、短軸0.26m、深さは0.11mと浅い。残存が悪く壁面の立ち上がりは不明で、底面には凹凸がある。堆積土は炭化物を含む単一層である。遺物は陶器（Ｉ29）、土師質土器皿が出土している。

267号土坑

Y37、X46・47グリッドで検出し、ＳＤ53より新しく、小溝群８－22・23より古く、東側を六角塔基礎、東側を撹乱で壊されている。形状は南北に長い不整形とみられ、残存規模は長軸2.52m、短軸1.46m、深さ0.34mで、主軸方向はN－24°－Eである。壁面は北側では急角度なのに対し、南側は緩やかに立ち上がり、底面は中央部が土坑状に下がっている。堆積土はⅢ層類似層の単一層である。遺物は平瓦、輪違い、丸瓦か輪違い、菊丸瓦、面戸瓦が出土している。

268号土坑

Y37、X47グリッドで検出し、北側と西側を撹乱で壊され形状は不明である。残存規模は長軸1.06m、短軸0.96m、深さは0.12mと浅い。壁面は南側では急角度で立ち上がり、北側は不明で、底面は平坦である。堆積土はⅢ層類似層の単一層である。遺物は出土していない。

269号土坑

Y37、X39グリッドで検出し、小溝群８－５より古く、北側を壊され形状は不明である。残存規模は長軸0.96m、短軸0.65m、深さは0.12mと浅い。残存が悪く、壁面の立ち上がりは不明で、底面は中央部がやや深くなっている。堆積土は単一層で、径10cm以内の円礫を多量に含み、礫を廃棄した土坑の可能性がある。遺物は出土していない。

270号土坑

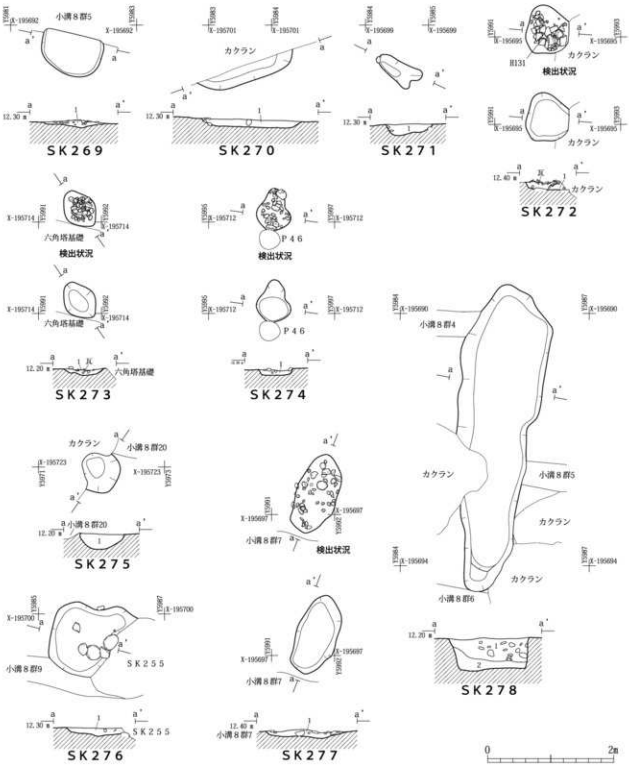
Y37、X41グリッドで検出し、ＳＢ６礎石跡31、ＳＫ279より新しく、北側を撹乱に壊され形状は不明である。残存規模は長軸1.59m、短軸0.27m、深さは0.11mと浅い。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。堆積土はブロック土の単一層である。遺物は輪違い、土師質土器皿、土師器が出土している。

271号土坑

Y37、X40・41グリッドで検出し、ＳＢ６礎石跡22より新しい。形状は不整形で、規模は長軸0.73m、短軸0.36m、深さ0.17mで、主軸方向はN－62°－Wである。壁面は比較的急角度で立ち上がり、底面は北西側に傾いている。堆積土はブロック土の単一層であるが、木根の痕跡の可能性がある。遺物は出土していない。

272号土坑

Y39、X39・40グリッドで検出し、ＳＤ36より新しく、東側を撹乱に壊され形状は不明である。残存規模は長軸0.77m、短軸0.66m、深さは0.10mと浅い。壁面は急角度で立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は単一層で、上部に瓦片を多量に含んでいる。遺物は丸瓦、平瓦・刻印平瓦、熨斗瓦・刻印熨斗瓦、丸瓦か輪違い、面戸瓦（H105）などの小破片のほか、土師器、陶器（Ｉ30）、土師質土器皿が出土している。瓦の出土状況から瓦を廃棄した土坑とみられる。



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SK269	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径10cm以内の円礫を多量含む	—
SK270	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径3cm以内の灰層ブロックを含む	—
SK271	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径5cm以内のにぶい黄褐色シルトブロックを含む	—
SK272	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径5cm以内の円礫を含む	—
SK273	1	10YR4/4　褐色	シルト	径10cm以内の円礫を多量含む	—
SK274	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径10cm以内の円礫を含む	—
SK275	1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	径1cm以内の炭化物を微量含む	—
SK276	1	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	径5cm以内のにぶい黄褐色シルトブロックを含む	—
SK277	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	径20cm以内の円礫を含む	—
SK278	1	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質シルト	径20cm以内の円礫を多量含む	—
	2	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質シルト		—

第162図　土坑（４）

273号土坑

Y39、X43グリッドで検出し、他遺構との重複関係はない。形状は不整楕円形で、規模は長軸0.65m、短軸0.49m、深さは0.09mと浅い。壁面は緩やかに立ち上がるとみられ、底面には凹凸がある。堆積土はⅢ層類似層の単一層で、径10cm以内の円礫を上部に多量含むことから、礫を廃棄した土坑とみられる。遺物は平瓦、輪違いが出土している。

274号土坑

Y40、X43グリッドで検出し、ＳＤ６より新しく、Ｐ46より古い。形状は不整形で、残存規模は長軸0.65m、短軸0.55m、深さは0.09mと浅い。壁面は急角度で立ち上がり、底面は平坦である。堆積土はⅢ層類似層の単一層で、堆積土上部に径10cm以内の円礫を多く含むことから、礫を廃棄した土坑の可能性もある。遺物は出土していない。

275号土坑

Y35、X45グリッドで検出し、ＳＤ７より新しく、西側を撹乱に壊され形状は不明である。残存規模は長軸0.70m、短軸0.65m、深さ0.24mである。壁面は底部から境目無く緩やかに立ち上がり、底面は碗状となっている。堆積土はⅢ層類似の単一層である。遺物は出土していない。

276号土坑

Y38、X40・41グリッドで検出し、ＳＤ53、小溝群９－１より新しく、ＳＫ255、小溝群８－９より古く、東側を壊され形状は不明である。残存規模は長軸1.54m、短軸1.16m、深さは0.12mと浅い。壁面は緩やかな角度で立ち上がるとみられ、底面には凹凸がある。堆積土は炭化物を含む単一層である。東側の底面で径30cm以内の円礫と径20cm以内の角礫がみられた。遺物は平瓦、丸瓦か輪違い、面戸瓦、陶器（Ｉ31）、土師質土器皿（Ｘ58）、焼塩壷（Ｘ59）、鉄製品が出土している。

277号土坑

Y39、X40グリッドで検出し、ＳＢ６礎石跡４より新しい。形状は不整楕円形で、規模は長軸1.27m、短軸0.66m、深さは0.10mと浅く、主軸方向はＮ－22°－Ｅである。壁面は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は径20cm以内の円礫を含む単一層である。遺物は磁器、土師質土器皿、焼塩壷（Ｘ60）、土師器が出土している。

278号土坑

Y37・38、X38・39グリッドで検出し、ＳＤ36、42より新しく、小溝群８－４－６より古い。形状は溝状となる不整楕円形で、規模は長軸4.86m、短軸1.40m、深さ0.50mで、主軸方向はＮ－９°－Ｅである。今回の調査で確認した若林城廃城後の土坑の中で最も規模が大きい土坑である。壁面は垂直に近く、底面は平坦であり、他の土坑と比べ特徴的なものである。堆積土は２層に分かれ、１層は径20cm以内の円礫を多量に含んでいる。遺物は軒丸瓦（Ｆ19）、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違いが出土している。

279号土坑

Y37、X41グリッドで検出し、ＳＢ６礎石跡31より新しく、ＳＫ270より古く、北側を撹乱で壊されているため形状は不明である。残存規模は長軸1.92m、短軸0.83m、深さ0.19mで、主軸方向はＮ－56°－Ｅである。壁面は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土はブロック土の２層に分かれる。遺物は丸瓦、平瓦、熨斗瓦、土師質土器皿、土師器が出土している。

280号土坑

Y37、X45グリッドで検出し、ＳＤ53より新しく、小溝群８－21より古く、北側を撹乱で壊され、西側を六角塔基礎で壊され形状は不明である。残存規模は長軸1.53m、短軸1.41m、深さ0.30mである。壁面は東側が急角度で立ち上がり、底面は概ね平坦である。堆積土はブロック土の単一層で、南西側に径40cmほどの大型の円礫を確認した。遺物は丸瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違い、丸瓦か輪違い、土師質土器皿、土師器、鉄釘（Ｎ407）、その他の鉄製品（Ｎ404）が出土している。

281号土坑

Y39、X40グリッドで検出し、ＳＫ229より古く、西側と東側を撹乱に壊され形状は不明である。残存規模は長軸1.07m、短軸0.55m、深さ0.34mで、主軸方向はＮ－１°－Ｅである。壁面は全体に垂直に近く立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は硬く締まった砂質土の単一層である。遺物は丸瓦が出土している。

282号土坑

Y41、X40グリッドで検出し、Ｐ50より古く、西側を撹乱で壊されている。形状は不整楕円形で、残存規模は長軸0.93m、短軸0.65m、深さは0.12mと浅く、主軸方向はＮ－23°－Ｗである。残存が悪く壁面の立ち上がりは不明で、底面はほぼ平坦である。堆積土はⅢ層類似層の単一層である。遺物は出土していない。

283号土坑

Y41、X43グリッドで検出し、ＳＤ６より新しく、小溝群８－13より古く、南側を撹乱に壊されている。形状は楕円形で、残存規模は長軸0.68m、短軸0.40m、深さは0.06mと浅く、主軸方向はＮ－59°－Ｗである。残存が悪く壁面の立ち上がりは不明で、底面には凹凸がある。堆積土は単一層である。遺物は出土していない。

284号土坑

Y42、X42グリッドで検出し、ＳＤ43より新しい。形状は楕円形で、規模は長軸0.68m、短軸0.57m、深さは0.12mと浅く、主軸方向はＮ－44°－Ｅである。壁面は緩やかに立ち上がるとみられ、底面は平坦である。堆積土はⅢ層類似層の単一層である。遺物は出土していない。

286号土坑

Y40・41、X41グリッドで検出し、小溝群８－８より古く、北側が壊され形状は不明である。残存規模は長軸0.83m、短軸0.44m、深さは0.06mと浅い。残存が悪く壁面の立ち上がりは不明で、底面は平坦である。堆積土はブロック土の単一層である。遺物は土師質土器皿、焼塩壺が出土している。

287号土坑

Y40、X44グリッドで検出し、北東側を撹乱で壊されている。形状は楕円形で、残存規模は長軸0.67m、短軸0.57m、深さは0.08mと浅い。残存が悪く壁面の立ち上がりは不明で、底面は平坦である。堆積土は単一層である。遺物は出土していない。

288号土坑

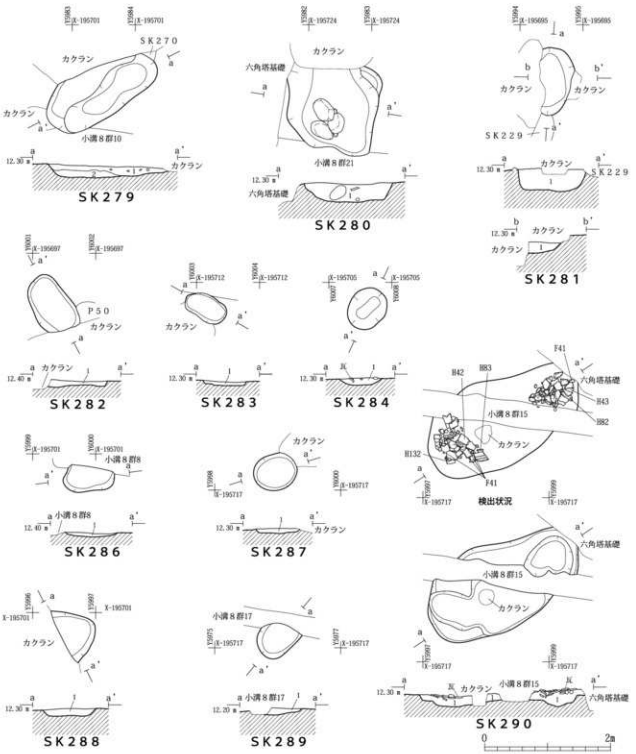
Y40、X41グリッドで検出し、東側を撹乱に壊され形状は不明である。残存規模は長軸0.92m、短軸0.53m、深さは0.12mと浅い。壁面は緩やかに立ち上がるとみられ、底面は平坦である。堆積土はブロック土の単一層である。遺物は焼塩壺が出土している。

289号土坑

Y36、X44グリッドで検出し、ＳＤ44bより新しく、小溝群８－17より古く、北側が壊され形状は不明である。残存規模は長軸0.60m、短軸0.55m、深さは0.11mと浅い。残存が悪く、壁面の立ち上がりは不明で、底面は平坦である。堆積土は単一層である。遺物は平瓦、その他の瓦、土師器、鉄釘が出土している。

290号土坑

Y40、X43・44グリッドで検出し、小溝群８－15より古く、中央部を撹乱で、北側を六角塔基礎で壊されている。形状は不整楕円形で、残存規模は長軸2.56m、短軸1.42m、深さ0.26mで、主軸方向はＮ－62°－Ｅである。規模のわりに残存が悪く、壁面の立ち上がりは不明で、底面には凹凸がある。堆積土は単一層である。遺物は丸瓦（Ｆ41）、平瓦、熨斗瓦（Ｈ44）・刻印熨斗瓦（Ｈ42・43）、輪違い（Ｈ82・83）、面戸瓦（Ｈ106・107）、丸瓦か輪違い、土師器、須恵器が出土しており、中でも熨斗瓦が目立っている。瓦片は北東側と南西側の２か所に集中して出土しており、瓦を廃棄した土坑とみられる。



遺　構	層位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SK279	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	径1cm以内の褐色シルトブロックを含む	—
	2	10YR3/4　暗褐色	シルト	径3cm以内の褐色シルトブロックを多量含む	—
SK280	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径3cm以内の白層ブロックを少量含む	—
SK281	1	10YR4/4　褐色	砂質土	径3cm以内の暗褐色シルトブロックを含む	—
SK282	1	10YR4/4　褐色	シルト	径10cm以内の円礫を含む	—
SK283	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径1cm以内の炭化物を少量含む	—
SK284	1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	径10cm以内の円礫を含む	—
SK286	1	10YR4/4　褐色	シルト	径5cm以内の白層ブロックを含む	—
SK287	1	10YR4/4　褐色	シルト	径1cm以内の灰黄褐色粘質土ブロックを含む	—
SK288	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径5cm以内の白層ブロックを含む	—
SK289	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	上部に径1cm以内の灰黄褐色シルトブロックを多量含む	—
SK290	1	10YR4/4　褐色	シルト	径20cm以内の円礫を含む	—

第163図　土坑（5）

292号土坑

Y37・38、X42グリッドで検出し、ＳＤ６より新しく、ＳＤ53より古く、北側を撹乱に壊されているが、形状は楕円形とみられる。残存規模は長軸1.37m、短軸0.95m、深さ0.22mで、主軸方向はＮ－34°－Ｗである。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は平坦であるが南東側に傾いている。堆積土はブロック土の単一層である。遺物は丸瓦、平瓦、熨斗瓦・刻印熨斗瓦、輪違い、丸瓦か輪違い、土師質土器皿、土師器、鉄釘（Ｎ413）が出土している。

293号土坑

Y38、X40グリッドで検出し、ＳＢ６礎石跡２より新しく、小溝群８－７・９－１、ＳＤ53より古く、周囲全体を壊されているが、形状は不整楕円形とみられる。残存規模は長軸2.19m、短軸1.02m、深さ0.16mである。残存が悪く、壁面の立ち上がりは不明で、底面には凹凸がある。堆積土は単一層で、円礫や瓦片を南西側に多く含んでいる。遺物は丸瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違い、丸瓦か輪違い、陶器（Ｉ32）、土師質土器皿、土師器が出土している。

294号土坑

Y36・37、X48グリッドで検出し、ＳＤ56より古く、東側は六角塔基礎で壊され形状は不明である。残存規模は長軸1.52m、短軸0.60m、深さ0.18mである。壁面は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土はブロック土の単一層である。遺物は平瓦が出土している。

295号土坑

Y38、X44グリッドで検出し、１号樋跡より新しく、Ｐ18、小溝群８－16より古く、東側を六角塔基礎、北側を撹乱で壊され形状は不明である。残存規模は長軸1.10m、短軸0.70m、深さ0.38mである。壁面は底面近くが緩やかで、上部は急角度で立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は２層に分かれ、１層には瓦と径40cm以内の円礫を含んでいる。遺物は丸瓦、平瓦（Ｇ37）、熨斗瓦、丸瓦か輪違いが出土している。

296号土坑

Y35、X45グリッドで検出し、ＳＤ44の掘り方より新しく、西側を撹乱に壊されるが、形状は楕円形とみられる。残存規模は長軸0.85m、短軸0.63m、深さ0.20mで、主軸方向はＮ－62°－Ｅである。壁面はほとんど残存しておらず、底面は北東側に傾いている。堆積土はⅢ層類似層の単一層である。遺物は出土していない。

301号土坑

Y49、X44グリッドで検出し、他の遺構との重複関係はない。形状は不整楕円形で、規模は長軸0.49m、短軸0.28m、深さ0.13mと小型で、主軸方向はＮ－76°－Ｗである。壁面は急角度で立ち上がり、底面には凹凸がある。堆積土は単一層であり、中央部の南側でわずかな角礫を確認している。遺物は土師質土器皿が出土している。

302号土坑

Y43、X48・49グリッドで検出し、ＳＤ62、ＳＸ11より新しく、Ｐ59より古く、北側は撹乱に壊され、南側は調査区外のため全体形状は不明である。残存規模は長軸2.50m、短軸1.25m、深さ1.59mであり、Ⅳ層上面で確認しているが、断面観察からⅢ層上面から掘り込まれた遺構である。壁面は急角度で立ち上がり、底面は狭く平坦であるが、南西側に傾いている。堆積土は大きく４層に分かれ、１、２層は大型の礫や瓦片を含み、３、４層は隣接するＳＸ11を掘り込んでおり、この裏込石とみられる円礫を含んでいる。５、６層は円礫を他の層よりも多く含み、下部の７、８層は礫を含まないシルト層である。３層の在り方から途中で掘り直されているものとみられる。この土坑は他の多くのものとは異なり、深く、堆積層も複数あり、何かしらの意図を持って掘られたものとみられる。遺物は丸瓦（Ｆ73・74）、軒平瓦、平瓦（Ｇ115）、熨斗瓦（Ｈ150）、丸瓦か輪違い、鬼瓦（Ｈ204）、鉄釘（Ｎ636・637・649－651）、鉄製品が出土しており、今回の調査で確認した土坑では鉄釘の出土点数が最も多い。

304号土坑

Y38、X48グリッドで検出し、ＳＤ77、ＳＫ305より新しく、西側を六角塔基礎で壊され形状は不明である。残存